

新建築

SHINKENCHIKU:2014

6



妥協することなく、イメージをそのままカタチに。



J.MayerH architects / photo@davidfrank.de

木材利用推進セミナー 2014

木造耐火 × 曲線・曲面 × CLT ― 最先端の木造技術 ―

今、日本の木造建築が大きな変革期にあります。

“燃えやすい” “弱い”、そんな従来の木造建築へのイメージは技術革新によって覆され、

防火地域での木造ビルや、木造ならではの曲線美が可能となりました。

本セミナーは、皆様のご要望にお応えし、今年で4年目を迎えます。

木造建築における耐火技術、曲線・曲面による構造、CLTの最新情報を事例に基づいてご紹介いたします。

また、地域産木材を公共建築物へ有効に活用するための様々な問題を解決し、具体策を提示いたします。

ぜひこの機会に、木造建築の新たなステージを創り出した、先端木造建築技術と具体的取組みをお確かめください。

主 催：次世代木質建築協議会 (NEWCA)

後 援：林野庁、各都道府県 (予定)、(公社)日本建築家協会、(公社)日本建築士会連合会、(一社)日本建築士事務所協会連合会

(一社)日本木造住宅産業協会、(一社)日本CLT協会、日本木造耐火建築協会

共 催：美しい山形・最上川フォーラム、美しい多摩川フォーラム、おかやま緑のネットワーク

参加費：無料

参加申込み ▶▶▶ www.newca.jp

このセミナーに関するお問い合わせは 03-5418-7788 まで

重要なのは「今」の試験の合格実績

平成25年度も 合格者数No.1

総合資格学院

試験内容の見直しや新傾向問題の増加等、常に試験は進化しています。

総合資格学院の合格実績は、常に「今」の試験の結果。

この実績こそ、「今」の試験に総合資格学院が、完全対応していることの証明です。

平成25年度 1級建築士 設計製図試験

全国
No.1
合格者占有率

37都道府県での開講にもかかわらず 全国 合格者 占有率

全国の合格者の
2人に1人以上が
当学院現役受講生!

55.8%

全国合格者合計4,014名中、当学院現役受講生2,238名

※全国合格者数は、(公財)建築技術教育普及センター発表による、<平成25年12月19日 現在>

他講習
利用者
+
他学者

当学院
現役
受講生

平成25年度 2級建築士 設計製図試験

当学院教室開講都道府県 (平成25年度 学科+製図合格)
学科・製図ストレート合格者 占有率

当学院教室開講都道府県
ストレート合格者の
およそ2人に1人は
当学院の現役受講生!!

45.4%

2級建築士を1年で取得するなら総合資格学院

当学院教室開講都道府県ストレート合格者2,999名中 / 1,363名
※学科+製図ストレート合格者は、平成25年度2級建築士学科試験に合格し、平成25年度2級
建築士設計製図試験にストレートで合格した方です。 < 平成25年12月5日現在 >

平成25年度 宅建本試験

当学院基準達成
現役受講生 合格率

82.9%

8期出席・8割希望提出・
公開統一模試得点率8割以上
現役受講生 252名中 / 合格者 209名
< 平成25年12月4日現在 >

平成25年度 1級建築施工管理技術検定 学科試験

当学院基準達成
現役受講生 合格率

8期出席・8割希望提出
現役受講生230名中、合格者219名
< 平成25年7月19日現在 >

95.2%

平成24年度 1級建築施工管理技術検定 実地試験

当学院現役受講生
合格者数

< 平成25年2月7日現在 >

956名

1級建築士 卒業学校別実績

[平成25年度 1 級建築士設計製図試験 卒業生合格者20名以上の全学校一覧]

日本大学	卒業合格者212	総合資格学院 利用者数	128	九州大学	卒業合格者	40	総合資格学院 利用者数	24	東北大学	卒業合格者	29	総合資格学院 利用者数	16	
東京理科大学	卒業合格者130	総合資格学院 利用者数	91	京都大学	卒業合格者	39	総合資格学院 利用者数	22	大阪大学	卒業合格者	29	総合資格学院 利用者数	18	
工学院大学	卒業合格者102	総合資格学院 利用者数	58	東京大学	卒業合格者	38	総合資格学院 利用者数	18	首都大学東京	卒業合格者	28	総合資格学院 利用者数	15	
愛媛工業大学	卒業合格者	96	総合資格学院 利用者数	67	東京電機大学	卒業合格者	37	総合資格学院 利用者数	27	大阪市立大学	卒業合格者	27	総合資格学院 利用者数	18
近畿大学	卒業合格者	90	総合資格学院 利用者数	47	東京工業大学	卒業合格者	36	総合資格学院 利用者数	23	群馬大学	卒業合格者	27	総合資格学院 利用者数	14
早稲田大学	卒業合格者	62	総合資格学院 利用者数	41	慶応川大学	卒業合格者	36	総合資格学院 利用者数	24	立命館大学	卒業合格者	27	総合資格学院 利用者数	19
東海大学	卒業合格者	60	総合資格学院 利用者数	33	東京都市大学	卒業合格者	36	総合資格学院 利用者数	23	日本工業大学	卒業合格者	26	総合資格学院 利用者数	16
明治大学	卒業合格者	57	総合資格学院 利用者数	41	金沢工業大学	卒業合格者	35	総合資格学院 利用者数	19	鹿児島大学	卒業合格者	25	総合資格学院 利用者数	15
法政大学	卒業合格者	55	総合資格学院 利用者数	34	横浜国立大学	卒業合格者	35	総合資格学院 利用者数	20	関東学院大学	卒業合格者	24	総合資格学院 利用者数	14
中央工学校	卒業合格者	53	総合資格学院 利用者数	29	名古屋工業大学	卒業合格者	33	総合資格学院 利用者数	24	名古屋大学	卒業合格者	23	総合資格学院 利用者数	13
京都工芸繊維大学	卒業合格者	49	総合資格学院 利用者数	35	千葉工業大学	卒業合格者	33	総合資格学院 利用者数	24	宇都宮大学	卒業合格者	23	総合資格学院 利用者数	17
大阪工業大学	卒業合格者	48	総合資格学院 利用者数	23	熊本大学	卒業合格者	33	総合資格学院 利用者数	20	前橋工科大学	卒業合格者	23	総合資格学院 利用者数	16
神戸大学	卒業合格者	47	総合資格学院 利用者数	32	立教工業大学	卒業合格者	33	総合資格学院 利用者数	27	日本女子大学	卒業合格者	21	総合資格学院 利用者数	15
千葉大学	卒業合格者	45	総合資格学院 利用者数	24	名城大学	卒業合格者	32	総合資格学院 利用者数	22	香川県立大学	卒業合格者	21	総合資格学院 利用者数	16
関西大学	卒業合格者	45	総合資格学院 利用者数	31	東洋大学	卒業合格者	30	総合資格学院 利用者数	24	福井大学	卒業合格者	20	総合資格学院 利用者数	8
広島大学	卒業合格者	44	総合資格学院 利用者数	27	愛知工業大学	卒業合格者	29	総合資格学院 利用者数	22	室蘭工業大学	卒業合格者	20	総合資格学院 利用者数	13

※卒業学校別合格者数は、試験元である(公財)建築技術教育普及センターの発表によるものです。

○総合資格学院の合格実績には、模試試験のみの受験生、教材購入者、無料の授業提供者、過去受講生は一切含まれておりません。



グレージング

Q-railing

自立ガラスフェンスシステム

ステンレス鋼で耐久性が良く、施工性にも優れています。
グレージングの他、バラストレイドやクランプなどもラインアップ。
ガラスの開放感を生かした、広がりある空間を演出できます。

施工例や詳細はWEBサイトで [スガツネ](#)



SUGATSUNE

スガツネ工業
LAMP 照明&デザイン金物メーカー

スガツネ工業は Q-railing 社の日本総代理店です。
アーキテチア事業部 TEL (03)3864-1122(代) FAX (03)3863-6875 〒101-0032 東京都千代田区若本町2-5-10
ISO9001(JSA2384) ISO14001(JSAE597) 環境登録 ※ ISO8001:国内各拠点 ISO14001:千葉事業部 千葉工場および物流事業部 物流センター



日新工業建築設計競技 40周年記念作品集

水コン/ その時代と デザイン

40TH ANNIVERSARY BOOK OF
NISSHIN KOGYO ARCHITECTURAL
DESIGN COMPETITION

40年分の入賞作品を
すべて収録！
コンペ攻略のヒント
が満載！

定価：1,620円(税込)

※書店での販売はしていません。

版型：A4横姿形版 頁数：104頁

WEBにて好評発売中！
<http://www.japan-architect.co.jp/>

※FAXでもお申し込みいただけます。

FAX 注文書

下記必要事項をご記入の上、FAXにてお申し込みください。

■お支払い方法 — 前払い

FAX送信後、右記の振込先へご入金下さい。ご入金の確認ができ次第、1週間前後で商品を発送いたします。
振り込み手数料はご負担願います。

※送料は別途発生いたします。(1冊：160円/メール便 2冊以上：473円/宅急便)

〈お振込み金額〉

円(書籍代) + 円(送料) = 合計金額 円

申込者氏名

送付先住所 〒

電話番号

購入部数

FAX 送付先：03-6205-4386

■振込先

・みずほ銀行 本郷支店
当座預金 口座番号0103219
・郵便振替
口座番号 00150-6-30658
名義：(株)新建築社

発行 株式会社 新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号霞が関ビルディング17階
〒100-6017 tel. 03-6205-4380 fax. 03-6205-4386

Singapore,

Capital City for the Vertical Green

シンガポール、ヴァーティカル・グリーン・シティ



Now REPRINTED !!
再版しました!!



キンベル美術館 ピアノバビリオン



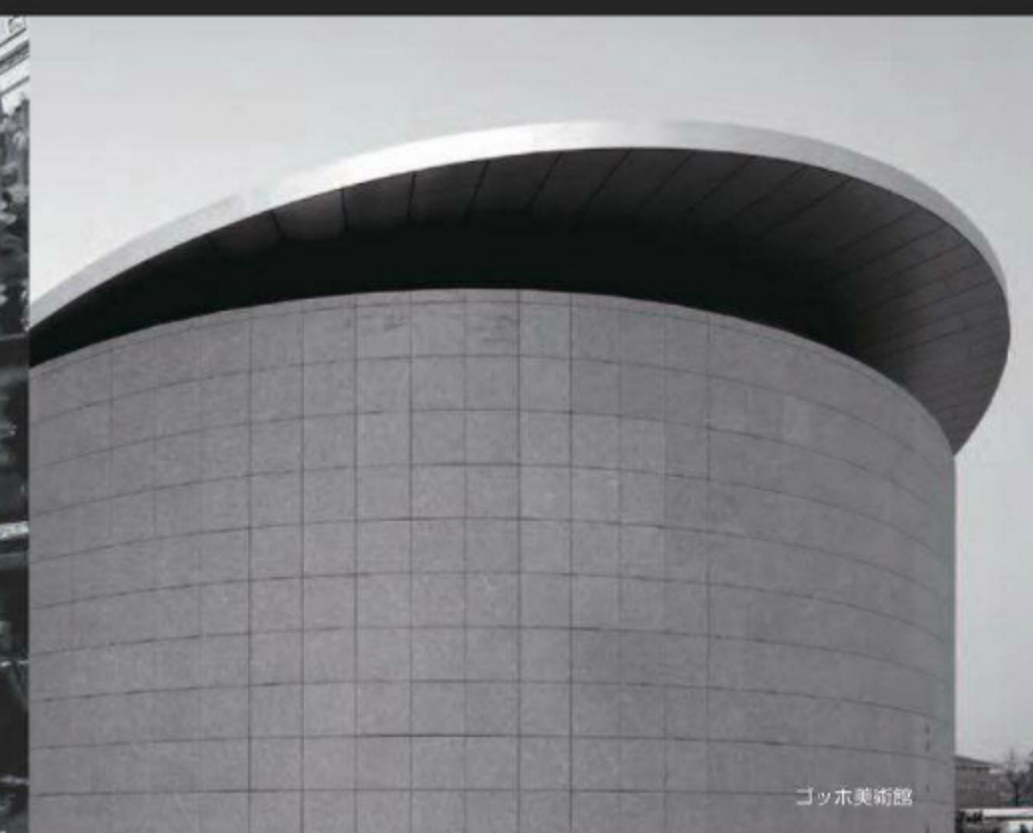
アムステルダム国立美術館

世界が認めた タキヤのピクチャーレール

タキヤのピクチャーレール・展示用具は、美術館・博物館の展示、運搬・収納作業、環境づくりの全てにおいて、優れた操作性と安全性が評価され、2014年現在、海外13カ国、国内1000カ所以上の美術館や博物館で使用され、多くの文化遺産や美術品を美しく展示しています。



ロシア国立エルミタージュ美術館



グッゲン美術館

海外の主な納入館

キンベル美術館 ピアノバビリオン
アムステルダム国立美術館
ゴッホ美術館
ウィーン・リヒテンシュタイン美術館
スペイン国立プラド美術館
ビルバオ・グッゲンハイム美術館
ベルギー王立美術館
ボストン美術館
メトロポリタン美術館
ワシントン・ナショナルギャラリー
セントルイス美術館
クリーブランド美術館
ロシア国立エルミタージュ美術館
ロシア国立トレチャコフ美術館
中国国家博物館
韓国国立中央博物館
韓国国立現代美術館

国公立の主な納入館

国立新美術館
東京国立博物館
東京国立近代美術館
東京国立西洋美術館
東京国立近代美術館
国立科学博物館
東京国立近代美術館
国立西洋美術館
国立歴史民俗博物館
京都国立近代美術館
京都国立博物館
奈良国立博物館
国立国際美術館
九州国立博物館
北海道国立近代美術館
青森県立美術館
岩手県立美術館
秋田県立近代美術館
山形県立美術館

福島県立美術館
茨城県立近代美術館
群馬県立近代美術館
埼玉県立近代美術館
千葉県立美術館
上野の森美術館
東京都現代美術館
神奈川県立近代美術館
新潟県立近代美術館
富山県立近代美術館
石川県立美術館
福井県立美術館
長野県信濃美術館
岐阜県博物館
静岡県立美術館
愛知県美術館
三重県立博物館
滋賀県立近代美術館
京都市美術館

京都府京都市文化博物館
大阪市立美術館
兵庫県立美術館
奈良県立美術館
和歌山県立近代美術館
岡山県立美術館
山口県立美術館
徳島県立近代美術館
高松市美術館
愛媛県歴史文化博物館
高知県立美術館
沖縄県立博物館新館・美術館
長崎県美術館
熊本県立美術館
大分県立歴史博物館
宮崎県立美術館
福岡県立美術館
佐賀県立博物館・美術館

タキヤ株式会社

大阪本社
〒542-0082
大阪市中央区島之内 1-10-12
TEL:06-6253-0331 FAX:06-6253-0339

東京営業所
〒107-0062
東京都港区南青山 1-4-2 八並ビル 2F
TEL:03-5410-0992 FAX:03-5410-0998

アメリカ事務所
OHIO: takiya.us@takiya.com
ヨーロッパ事務所
AMSTERDAM: koji.eu@takiya.com

自然な呼吸をする塗膜……卓越した耐候性能を誇る。

超耐候性水性無機質塗料 ランデックスコート



P-5000・5000NT

通気性塗膜で超疎水性な塗膜が得られ、塩害に強い無機・高分子複合塗料でコンクリートの風化防止保護塗料として最適です。

WS疎水剤

打放しコンクリート構造物の老朽化現象の防止や、雨水の浸入を防ぎ中性化を防止し、耐久性を維持します。半透明疎水剤で下地の打放しをそのまま生かしカラークリアのように着色もできます。

R800

道路、スポーツ施設を彩る、通気性耐久性水性無機質塗料です。ノンスリップで耐磨耗性抜群、テニスコート・ローラースケート場・プールサイド・歩道用と、使用範囲も広いのが特長です。

超耐久性無機塗料のバイオニア

大日技研工業株式会社
http://www.dainichi-g.co.jp

本社 〆103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-14-14 〆03(3639)5131代 FAX03(3639)5129
大阪 〆530-0054 大阪府大阪市北区南森町2-2-9 〆06(6316)8021代 FAX06(6316)8022
工場 〆339-0047 埼玉県さいたま市岩槻区原町2-6 〆048(758)0568代 FAX048(756)3151

水性無機高分子ハイブリット熱エネルギー変換塗料 スーパーエコ・体感

<特許申請中>

対象物の蓄熱を抑制、防止する熱反射機能に加え、塗膜中で熱を消費する機能、断熱機能を併せ持っています。この為、四季を通じて快適な居住環境を体感することが出来ます。付加された消熱機能は、従来の「遮熱塗料」の問題点を解決する塗料として、その耐久力機能性効果を肌で実感することが出来ます。

- 傷や摩耗に強く超耐久性塗膜形成
- 独自の遮断熱原理（塗膜が熱を消費）

バイタル・デッキ

従来デッキ約1/2の驚きのコスト。 定価 6,800円/㎡

高性能で優れた安全性。 JIS A5741 準拠

最寄の倉庫から短納期で納品。 国内在庫【東京・大阪・福岡】

カラー: 標準4色	定価:
ライト、ブラウン、ダーク	6,800円/㎡ (送料・消費税別途)
ホワイト	7,500円/㎡ (送料・消費税別途)

規格: 25×145

※上記価格は、専用品・下地材・送料・消費税は含まれておりません。
※バイタル・デッキはリサイクルされた木材と再生プラスチックを原料としたエコ素材です。
※指定特注色・特注規格などオプション対応致します。(要別途協議)

再生材料使用 85%
木材・プラスチック
エコマーク認定番号
第13137001号

フラット面 ▶ リブ面 ▼

カットサンプルお届けします。
お申し込みは 電話・HPからどうぞ。

Tel.03-5225-4080

東京工営

検索

www.tokyokoei.com

株式会社東京工営 〆162-0804 東京都新宿区中里町27番地 神楽坂ファーストビル2F TEL.03-5225-4080 FAX.03-5225-4081

WALL IN

ウォールイン傘立て/ウォールイン消火器ボックス

PROFIT

プロ・フィット インテリア 傘立て/消火器ボックス



根津美術館 (東京都)

あいちリハビリテーション病院 (愛知県)

ヒガノ株式会社
HIGANO

●プロ・フィット インテリア/消火器ボックス、カタログをご請求ください。 ●ホームページでプロ・フィット電子カタログをご覧ください。

お問い合わせはプロ・フィット事業部
Tel 048-931-3321 Fax 048-931-7332
〒340-0002 埼玉県草加市青柳3-24-7
E-mail: info@higano.co.jp

プロ・フィット製品がオンラインナップ <http://www.higano.co.jp>

空間を活かす アラカワグリップ

従来機能を保持しつつワイヤー手すり金具が大幅に小さくなりました。

1スパン間が最大8mまで可能。

公共施設の建築空間から住宅・商業施設まで幅広いニーズに対応できます。



ARAKAWA

取扱商品

- ワイヤーディスプレイ
- ピクチャーレール
- ワイヤー手すり
- ホームインテリア

アラカワ
2003077

荒川技研工業株式会社

本社・表参道オフィス&ショールーム
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-7-12 TEL.03-5774-8190 FAX.03-5774-8191
大阪オフィス&ショールーム
〒542-0081 大阪府中央区南船場2-2-28-215 TEL.06-6262-1891 FAX.06-6262-1892

<http://www.arakawagrip.co.jp/>

類似品にご注意ください。

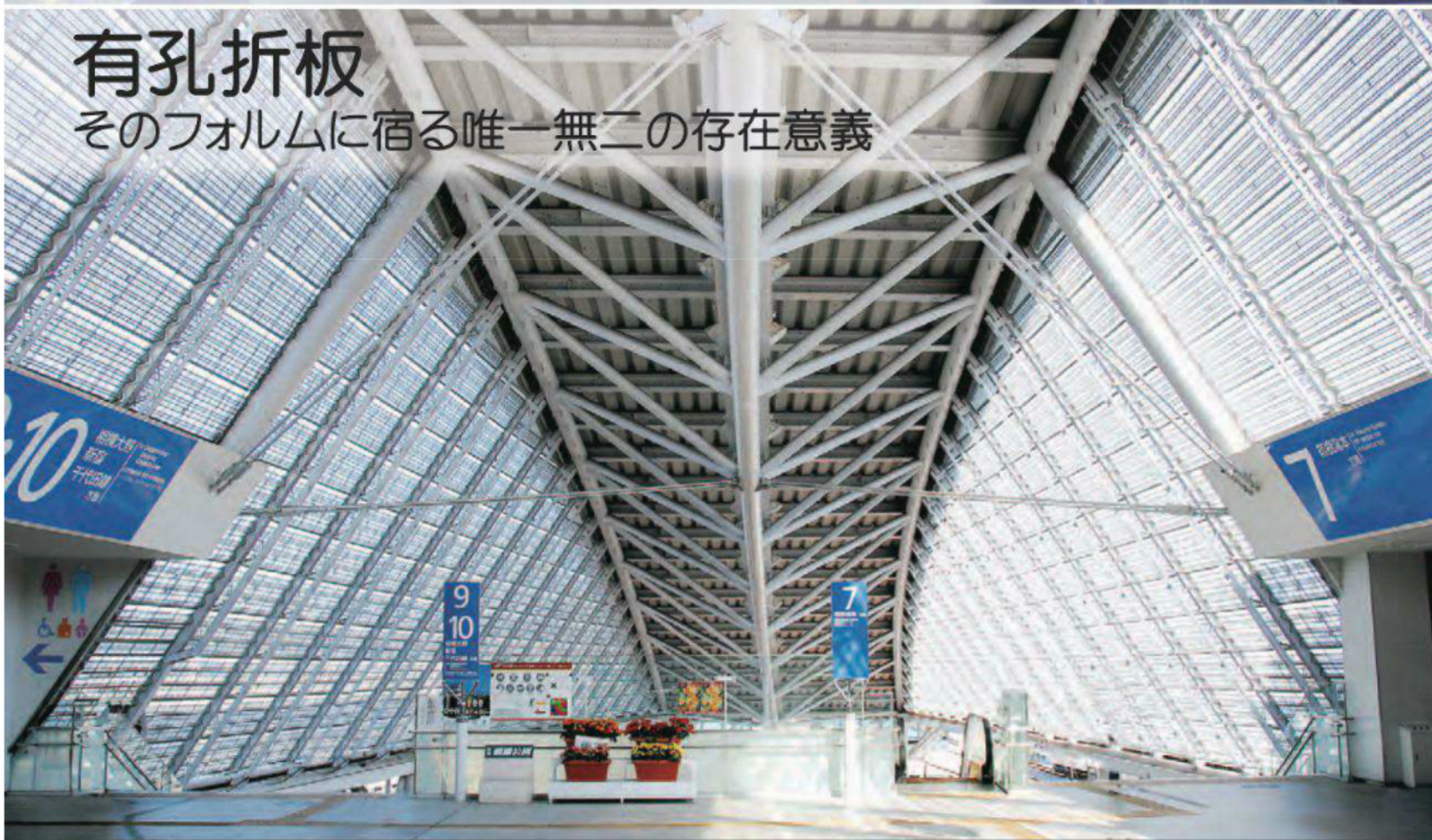
当社は特許製品であり、「安心の証」マークが刻印されています。安全のため、ご使用の際は、マークをお確かめください。マーク中小企業庁長官賞(ロングライフデザイン賞含む)受賞製品多数。

改良のためやむを得ず仕様・形状が変更になることがあります。 © ARAKAWA 2014 AF 1406



新製品 内外装用木目調不燃ルーバー
フレーベル

自然のぬくもりで空間を包み込む。 **不燃認定取得**



有孔折板
そのフォルムに宿る唯一無二の存在意義

日本パツセンター

URL <http://www.n-parts.jp>

有孔折板

検索

建築事業部 〒144-0052 東京都大田区蒲田5-24-2 (損保ジャパン蒲田ビル3F)
TEL03-5710-7107 (代) FAX 03-5710-6140 E-mail npc-tk@onyx.dti.ne.jp

《北海道地区》札幌支店 TEL011-251-0241 (代) 《東北・関東・山梨・静岡地区》東京支店 TEL03-5710-7105 (代)
《中部地区》名古屋営業所 TEL052-241-2820 (代) 《北陸地区》本社営業部 TEL076-238-6111 (代)
《関西・中国・四国地区》大阪営業所 TEL06-6303-8401 (代) 《九州・沖縄地区》九州営業所 TEL092-473-5552 (代)



記事

038 **子ども主体でつくる建築** 京都市立洛央小学校ブックワールドデザインプロジェクト 門内輝行

作品 18 題

044 **北里大学病院** 日建設計 (設計) 竹中工務店 東洋熱工業 きんでん (実施設計協力)

054 **埼玉県立がんセンター** 山下設計 (基本設計・監理) 戸田建設一級建築士事務所 (実施設計)

062 **順天堂医院B棟高層棟** 日本設計 (基本設計) 清水建設 (実施設計)

061 記事: **医療・建築の連携** 順天堂大学・早稲田大学の共同による、次世代型医療建築を目指した研究開発

068 記事: **2025年の医療建築と制度** 超高齢社会における病院計画 中山茂樹

070 特集: **地域ごとの保育の場**

—保育施設(幼稚園・保育所・子ども園他)として求められる空間とは—

072 特集記事: **少子化に応える保育建築への期待** 佐藤将之

074 **美濃保育園 子育て支援棟** 象設計集団

084 **美田園わかば幼稚園** 石原健也／千葉工業大学＋石森建築設計事務所

094 **気仙沼小学校区留守家庭児童センター** 薩田英男／薩田建築スタジオ

100 **亘理町児童福祉施設** 薩田英男／薩田建築スタジオ

108 **京橋こども園** 清水建設

116 **アミューあつぎ8階 屋内広場・託児室・子育て支援センター** 石上純也建築設計事務所

122 **ぐるりん** DesignBuildFUKUOKA

128 **聖愛幼稚園 第2園舎** SUDA設計室

134 **港区立伊皿子坂保育園** 遠藤政樹／EDH遠藤設計室

142 **たがわこどもセンター「まいまい」** 塩塚隆生アトリエ

150 **東京ゆりかご幼稚園** 渡辺治建築都市設計事務所

156 **うれしの東保育園 カンガルーのおうち** 大建met 大建設計 なわけんジム

162 **かなや幼稚園** 石嶋設計室＋小松豪一級建築士事務所

168 **東村山むさしの認定こども園**

ジャクエツ環境事業＋アトリエ9建築研究所＋村松基安＋松村デザイン事務所

174 **NNビル／君津の保育所** kwas／渡邊健介建築設計事務所

CONTENTS

新建築 2014 年 6 月号 目次

新建築

SHINKENCHIKU:2014

6

NEWS

- 011 台湾金門港旅客ターミナル設計コンペ, House of Peace 設計指名コンペで石上純也氏を選出／佐藤総合計画＋SUEP が「山元町立山下第二小学校新築復旧工事基本設計・実施設計業務」プロポーザルの最優秀者に選出／上越市新水族博物館基本設計プロポーザルで篠崎淳/日本設計が最優秀者に選出／2014 年東京建築士会住宅建築賞発表——金賞該当なし, 入賞作品4点を選出／IAA Annual Prize2013 横文彦氏設計の4 WTC に／大阪府建築士会と日本建築家協会近畿支部が各建築賞を発表——「日本圧着端子製造株式会社」他が第59回大阪建築コンクール知事賞, 「六甲道の家」が関西建築新人賞審査委員奨励賞／第13回KAJIMA彫刻コンクール入賞作品決定／世界遺産への登録勧告を受け富岡製糸場の修繕・保存検討へ／改正都市再生特別法が成立 病院など都市機能の集約後押し／保育所増設に国有地活用 51カ所売却・貸付へ

MESSAGE

- 014 伝統と革新 竹中工務店が目指すグローバルな組織 宮下正裕

EXHIBITION

- 017 建築家 篠原一男展＋篠原一男展シンポジウム 伊東豊雄×長谷川逸子×坂本一成 編集部
乾久美子＋東京藝術大学 乾久美子研究室 展 小さな風景からの学び 北山恒
ミラノサローネ 2014

BOOKS

- 027 新建築 2014 年 5 月臨時増刊
『家』と何か——アルヴァロ・シザの原点』書評 戸室太一

連載

- 024 これからの建築照明
第2回「LEDペンダント 上下配光 導光パネルタイプ」
——進化したミニマルデザインで空間を効率的に照らす

180 DATA SHEET / PROFILE

209 DESIGN PRODUCTS

210 TOPICS

218 月評 トム・ヘネガン 大内政男 青井哲人 西倉美祝(富永美保＋中島弘貴)

222 編集後記

031 第4回LIXIL国際大学建築コンペ結果発表

194 SMOKERS' STYLE COMPETITION 2013 結果発表

表紙の作品：美濃保育園 子育て支援棟。
2階遊戯室。
撮影：新建築社写真部

新建築 第89 巻 7 号
2014 年 6 月 1 日発行 毎月 1 回 1 日発行
定価 2,057 円 本体 1,905 円
振替 00150-6-30658
編集発行人 吉田信之
編集長 四方裕
副編集長 中村光恵 横山圭
事業企画部長 吉田賢次
写真部長 山森誠
eBook 編集長 橋本純
発行所 株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目 2 番 5 号
霞が関ビルディング 17 階 〒100-6017
tel: (03)6205-4380 代表／総務部・出版部
(03)6205-4381 編集部
(03)6205-4382 広告部
(03)3811-9132 写真部
fax: (03)6205-4386 総務部・出版部
(03)6205-4387 編集部・広告部
(03)3816-2589 写真部
e-mail: shinkenchiku@japan-architect.co.jp
URL: http://www.japan-architect.co.jp/
印刷所 大日本印刷株式会社
取次店 トーハン／日版／大阪屋／中央社／
栗田／鎌谷／協和／大洋社／西村
©SHINKENCHIKU-SHA 2014 ISSN1342-5447
禁無断転載複写

NISSHIN



足下から
見直して
いること

人に優しく快適な都市環境を
確かな防水テクノロジーで支える。
この使命を開発の原動力に、
NISSHINが提案する
新たなソリューション。
自然と共生するすべての人のために

アスファルト防水の
近未来標準

[常温積層アスファルト防水工法]

プレストシステム

プレストシステムは、新開発の改質アスファルト「プレストコート」と改質アスファルトルーフィングのマッチングによる、常温で施工できるアスファルト積層防水工法です。安全でクリーン、そして信頼の革新的防水工法が誕生しました。



総合防水材料メーカー

日新工業株式会社

営業統括部 東京都足立区千住東2-23-4 TEL.03(3882)2571

URL <http://www.nisshinkogyo.co.jp>

札幌・仙台・東京・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

台湾金門港旅客ターミナル設計コンペ、House of Peace設計指名コンペで石上純也氏を選出

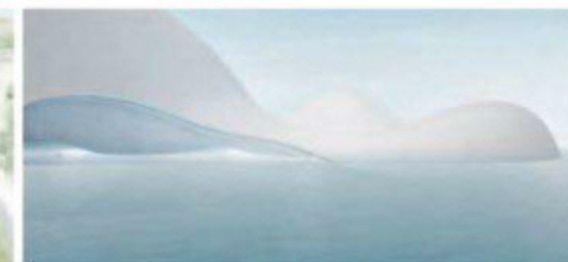
台湾金門県は、「金門港旅客ターミナル新築工事」コンペを開催し、一次審査を通過した5者によりプレゼンテーションが行われ石上純也建築設計事務所を最優秀者に選定。また、デンマークのホープ基金はHouse of Peace設計指名コンペを開催、マッシミリアーノ・フクサスら全4者による審査の結果、同設計事務所を最優秀者に選定した。金門港旅客ターミナルは中国本土にほど近い金門島の埋立地に計画される。今後の観光客の増加を見据え、520×100mの敷地に駐車場を含めて約65,000m²の旅客ターミナルが構想された。石上案は、島の特徴的な自然と文化をとらえた上で、自然の山脈のような構造物をつくるというもの。地域の伝統的な家屋の断面形状を、少しずつ形を変えながら反復してつくる長さ500mの歪んだ勾配屋根を三層に重ねて構成されている。内部は深い底を持つ洞

窟のような快適な空間となり、屋根面上は複雑な形状に応じて現地の植生をほどこし、自然の山のように場所ごとにさまざまな環境を生み出す。島の人びとが日常的にも訪れるような新たなランドスケープとなることを目指す。2017年末の竣工予定。House of Peaceは、コペンハーゲン郊外の港湾再開発地区の海上に計画される。「平和」をテーマとした礼拝施設である。非営利団体によって運営され、今回要

求されたプログラムは、礼拝をするための多目的の大きな空間とエントランスホール、事務室など。石上案は、ホワイトコンクリートによるシェル構造によって、雲のような建築を海の上に計画した。来場者は海底のトンネルを通過してエントランスに入り、水面レベルにあるメインの礼拝室へといたる。2階部分にはオフィス等があり、海面とシェルに囲われた空間が礼拝室となっている。延べ床面積は約1,400m²。竣工時期は未定。



台湾金門港フェリーターミナル外観パース



デンマークHouse of Peace外観パース

佐藤総合計画+SUEPが「山元町立山下第二小学校新築復旧工事基本設計・実施設計業務」プロポーザルの最優秀者に選出

宮城県亘理郡山元町で4月23日、「山元町立山下第二小学校新築復旧工事基本設計・実施設計業務」公募型プロポーザルの2次審査が行われ、最優秀者に佐藤総合計画東北支社（協力事務所：SUEP）を特定した。次点は久米設計東北支社。今回のプロポーザルでは協力事務所を加えることが認められた。（協力事務所には規定の競争入札参加資格の有無は問われなかった。）山元町立第二小学校は東日本大震災で被災し、同町の山下小学校と併設の状態となっている。今回のプロポーザルは、この早期解消と震災前の学校

運営・生活に戻すことを目的に行われた。新たな市街地として造成を進めている同町の新山下駅周辺地区に移転し、新築復旧する計画。最優秀の佐藤総合計画+SUEP案は、中庭を持つコンパクトな木造校舎を敷地南側のメインストリート沿いに配置し、地域の顔となるように計画されている。太陽熱を利用する屋根と一体化した教室ユニットで構成され、昨今の建設費高騰や職人不足による不安定な状況に配慮した。在来木造を使った構造によるコスト工期の短縮や、組織事務所とアトリエ事務所の協働という点も高く評価された。

敷地面積は約16,470m²、延べ床面積は約4,950m²を予定。2015年第一四半期に着工し、2016年度の完成を目指す。



外観パース

上越市新水族博物館基本設計プロポーザルで篠崎淳/日本設計が最優秀者に選出

新潟県上越市は4月27日、「上越市新水族博物館基本設計プロポーザル」の公開ヒアリングによる第2次審査を実施し、最優秀者に篠崎淳/日本設計を選定した。次点の優秀者は千葉学建築計画事務所。2次審査に進出していたのは両者の他、香山壽夫建築研究所、藤本杜介建築設計事務所・長建設計事務所設計共同体、松田平田設計・大建設計・ハート設計共同体、小泉アトリエの4者。新水族博物館は「五感で学ぶ日本海」を基本コンセプトに基本計画を策定し、現在の水族博物館の老朽化や、近年の主流に即した展示コンセプトへの

見直しの必要性、北陸新幹線開業で関東圏からの集客が期待できることなどから、検討が進められてきた。予定される規模は延べ面積約8,500m²、展示水量は約3,000tとしている。最優秀の日本設計案は「日本海の雄大なドラマを体験する、遊び・感じ・学ぶ環境水族博物館」をコンセプトに、水中と陸上の世界を階層別に表現。日本海をテーマとして強くアピールしていることと、水族館としての新しさ、さらに技術と経験を備えていることが高く評価された。今後市民の声を反映し、基本設計を11月までにま

とめ、実施設計を2014年12月から2015年4月に行う予定。同年10月から建設工事にとりかかり2017年夏のオープンを目指す。施設整備費は67億4,205万円（税込）の予定。



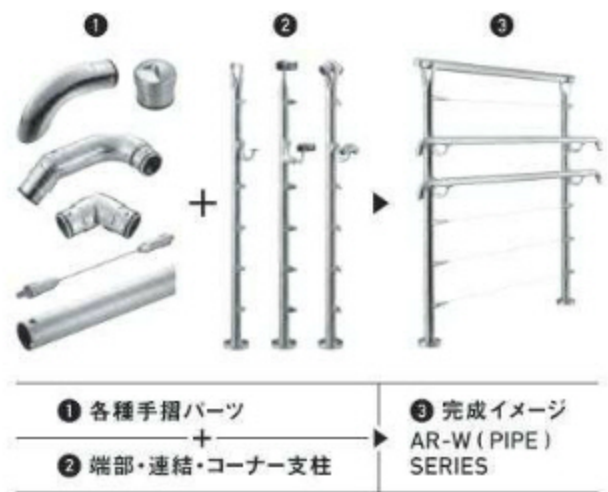
外観パース

ステンレス 手摺

手にした時に伝わる安心感、
洗練されたイメージに満ちた
美しさ。

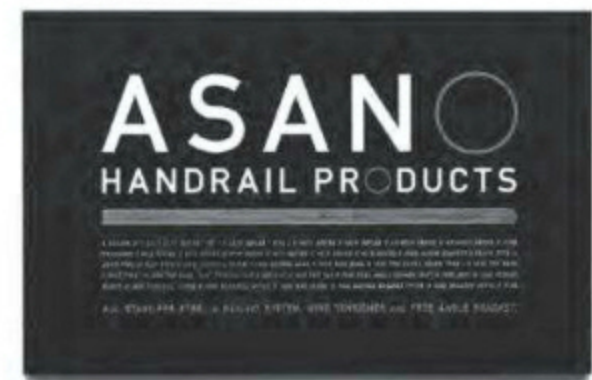
パーツで納品、現場で組立施工。

設置個所に合わせて、手摺本数や、支柱の種類、必要なパーツを選定して積算が可能です。ご注文後はパーツ単位で納品され、設置現場での組立が可能です。



「ワイヤー仕様」「ガラス仕様」など、
ラインナップは全6タイプ。
詳しくはカタログをご請求ください。

資料請求された方全員に、ASANOステンレス手摺製品を網羅した、最新ブランドブックを無料プレゼント。AR-SYSTEM、ワイヤー・テンショナー、壁付手摺ブラケット、V400手摺パーツ、各製品サイズ寸法表、価格など数多く掲載。ASANO独自のステンレス手摺の機能美を追求した、お客様のニーズにお応えするカタログに仕上がりました。この機会に、ぜひ手にとってご覧ください。



ステンレス製品総合メーカー
浅野金属工業株式会社
955-0803 新潟県三条市月岡2866番地
Tel: 0256-33-0101 Fax: 0256-33-0096
E-mail: sales@asano-metal.co.jp

●資料のご請求・お問合せはこちらから

[HTTP://WWW.ASANO-METAL.CO.JP](http://www.asano-metal.co.jp)



2014年東京建築士会住宅建築賞発表——金賞該当なし、入賞作品4点を選出

東京建築士会が主催する2014年住宅建築賞の入賞作品が発表された。今回は金賞は該当なし、2次審査に進出の5作品を住宅建築賞入賞とした。同賞は東京圏に建設された住宅が対象。今回は「新しい時代の住宅」をテーマに実施され、審査委員



左：西麻布の集合住宅。（本誌1402）
右：Amadillo／アルマジロ。（住宅特集1310）

長は西沢立衛氏が務めた。応募総数は69点。入賞作品は以下のとおり。
〔住宅建築賞〕（作品名＝設計者名）
▷「西麻布の集合住宅」＝安原幹＋日野雅司＋柄澤麻利／SALHAUS（本誌1402）▷「Amadillo／アルマジロ」＝田辺雄之／田辺雄之建築設計事務所（新建築住宅特集1310）▷「森をよけた住まい」＝西久保毅人／ニコ設計室▷「重ねの家」＝木島千嘉＋上原純子／木島千嘉建築設計事務所（新建築住宅特集1211）▷「House-H」＝岸本和彦／acaa

大阪府建築士会と日本建築家協会近畿支部が各建築賞を発表——「日本圧着端子製造株式会社」他が第59回大阪建築コンクール知事賞、「六甲道の家」が関西建築新人賞審査委員奨励賞

第59回大阪建築コンクール（主催：大阪府建築士会）の入賞作品が発表され、大阪府知事賞に「日本圧着端子製造株式会社」（設計：岸下真理・岸下和代／Atelier KISHISHITA＋都倉泰信・稲垣誠／Man＊go design、本誌1311）、「楡の木テラス」（設計：石井良平／石井良平建築研究所）、「中之島フェスティバルタワー」（設計：江副敏史／日建設計、本誌1301）の3作品が選出された。39歳以下の若手建築士を対象とする渡辺節賞は、「斑鳩の家」（設計：中山大介／中山建築設計事務所）と「東大谷高等学校泉ヶ丘キャンパス」（設計：國本晩彦／竹中工務店）の2作品、

59回目となる今回は、近畿2府4県の建築物で、2009年1月から13年末までに竣工、竣工検査済証の発行を受けたが対象で、審査委員は本多友常氏（審査委員長）、長坂大、濱田徹、平田真、松隈洋、萬田隆の6氏が務めた。また、日本建築家協会（JIA）近畿支部所属の45歳以下の建築家が対象となる、第9回関西建築新人賞も発表。今回は審査員奨励賞に「六甲道の家」（設計：榊原節子／榊原節子建築研究所、新建築住宅特集1406）が選出された。同賞の審査員は大谷弘明（審査委員長）、岸下真理、長濱伸貴の3氏。

世界遺産への登録勧告を受け 富岡製糸場の修繕・保存検討へ

ICOMOS（イコモス・国際記念物遺跡会議）が、群馬県富岡市の「富岡製糸場と絹産業遺跡群」の世界遺産への登録を勧告、6月のUNESCO（ユネスコ・国連教育科学文化機関）世界遺産委員会で遺産登録される見通しになったことを受け、管理者の富岡市は、施設群の修繕・保存工事に関する検討に取り組む。富岡製糸場は1872年に日本初の官営の製糸工場として誕生。後に民間に払い下げられ、1987年まで操業。2005年から富岡市の管理となっている。富岡市は2008年に旧富岡製糸場整備活用計画をまとめているが、製糸場を構成する施設群の老朽化が進み、整備費用等が課題となる。市では今後詳細な調査を行い、順次整備を進めるとしている。

改正都市再生特別法が成立 病院など都市機能の集約後押し

国土交通省が提出していた「改正都市再生特別措置法」が、5月14日の参院本会議で可決成立した。同法は地方都市における人口減少と財政難を踏まえ、コンパクトで持続可能なまちづくりを推進することを目的とした改正案。自治体がまちの中心部に「都市機能誘導区域」ならびに「居住誘導区域」を指定。前者により病院や商業施設などの郊外からの移転・立地を促すことで、生活サービス機能の計画的配置を図り、後者によってまとまった居住の推進を図る。同法と合わせ、自治体主導でバスや鉄道など公共交通網の再編を進めやすくする「改正地域公共交通活性化・再生法」も成立した。

IAA Annual Prize2013 横文彦氏設計の4 WTCに

ブルガリアのソフィアに本部を置く国際建築アカデミー（IAA, International Academy of Architecture）は、毎年国際的に注目すべきプロジェクトを完成させた建築家1名にIAA Annual Prizeを授与する。2013年度は、横総合計画事務所による4ワールド・トレード・センター（4WTC、本誌1401）が選ばれた。受賞式は2015年5月ソフィアで行われる予定。当プロジェクトは今秋までにニューヨーク港湾局が管理する北側低層部が完成する予定。尚、2003年には伊東豊雄氏によるサーペントイン・ギャラリーで受賞している。

第13回KAJIMA彫刻コンクール 入賞作品決定

第13回KAJIMA彫刻コンクール（主催：鹿島建設）の結果が発表され、金賞に「SPACE」（制作：ウォルフガング・バットレス、英国）が選出された。同コンクールは「彫刻・建築・空間」をテーマに開催され、審査員は、酒井忠康（美術評論家）、澄川喜一（彫刻家）、安田侃（彫刻家）、横文彦（建築家）、谷口吉生（建築家）、鹿島昭一（鹿島取締役相談役）の各氏。その他の受賞者は以下の通り。
▽銀賞：「chrysalis」（制作：四方謙一）、▽銅賞：「キノポリウオと空見てる」（制作：櫻井かえで）、奨励賞：「星見鳥」（制作：水田有紀）。

保育所増設に国有地活用 51カ所売却・貸付へ

昨年政府が発表した「待機児童解消加速化プラン」を受け、財務省は保育所を開設する社会福祉法人などに国有地の売却や貸し付けを行う。公務員宿舍跡地や未利用の国有地51カ所を活用。厚生労働省とも連携を計り、自治体のニーズも踏まえ利用可能な国有地の情報を積極的に発信。保育所や認定こども園の開設を計画する社会福祉法人や事業者に、保育所整備用地として国有地を優先的に処分する。貸し付けは定期借地契約を利用し、国が自治体と契約する手法と、国と事業者が直接契約する手法を用意する。対象地すべてに保育所が開設されれば5,600人分の受け皿が創出される見込み。

伝統と革新 竹中工務店が目指すグローバルな組織

第7回：宮下正裕（竹中工務店取締役執行役員社長 COO）



宮下正裕氏。撮影：新建築社写真部

グローバル化とグループの連携

——2014年4月1日より社章、社名ロゴデザインを刷新されました。その根底には竹中グループの一貫性、グループ・グローバル経営の推進があると思います。まず、今回の刷新のきっかけや目的を教えてくださいませんか？

当社は1610年初代竹中藤兵衛正高が名古屋で創業し、1899年には、14代目竹中藤右衛門が近代化が進んでいた神戸に進出し、その年を会社創立1年目としています。今のものに繋がる丸い竹中の最初の社章は1918年に社員からの公募によって決めたものでした。人の和をデザインモチーフとしており、品質を高いレベルで実現する象徴として、当社が丸となっていくということを意味しています。1979年、創立80周年の節目に社章の規格を変更した時にも、当社の棟梁精神でもある「伝統と革新」に繋がるイメージを大きく変えることなく受け継いでいこうと考え、今日までおよそ100年にわたって使用してきました。しかし近年、社会のニーズが多様化し、われわれに求められているソリューションも徐々に高度化してきています。

2014年1月1日に、サステナブル社会の実現に向けてグループの力を結集しようと「私たち竹中グループは、ステークホルダーとの対話を深め、その想いを「まちづくり」を通してかたちにし、未来のサステナブル社会へつないでいきます」というCSRビジョンを制定しました。また、企業理念、品質経営の基本方針の考え方を「想いをかたちに 未来へつなぐ」というグループメッセージとして表現しました。棟梁精神を踏襲しつつ、新たなCSRビジョンの実現へ向け、社会の状況変化に対してグループが連携して対応していくために、今回社章と社名ロゴを改訂しました。コーポレートカラーは竹中ワインレッドという色名で、これを引き立てるサブカラーを2色使用しています。4月からは作業所の仮囲いや広告、名刺、封筒など各種アイテムにも導入し、ステ

社章、社名ロゴを刷新・統一した竹中工務店。その背後に込められた変化する社会での戦略とは何か。グループのあり方、国際戦略など、今後の建築界、建設業の姿について、2013年より同社取締役社長に就任された宮下正裕氏にお話を伺いました。（編）

みやした・まさひろ

1946年長野県生まれ／1971年東京大学工学部都市工学科卒業／1971年竹中工務店入社／2013年～同社取締役執行役員社長 COO

クホルダーに訴求していきます。また、グループ・グローバル経営の推進には、従業員個々の意識も大切です。今回のビジュアル・アイデンティティの整備が意識づけのきっかけになればと考えたのです。

——では、今の状況の変化をどのようにお考えでしょうか。

現在日本では、「少子高齢化」「エネルギー問題」「社会インフラの老朽化」など、さまざまな課題が顕在化し、社会やお客様のニーズも多様化・高度化・グローバル化しています。これらに的確に対応していくために先に述べたCSRビジョンやメッセージを制定しましたが、中長期的には、2025年をターゲットとし、ビジョンの実現に向けた成長戦略を描いています。そこでは、まちづくりのすべてのステージでグループ各社が緊密に連携して課題やニーズに対応していくべきと考えています。最近ではプロジェクトの周辺領域も含めて、建設技術とサービスを融合したソリューションを連携して提供するようにしています。具体的には、運用中の建物、建物群のエネルギー供給の最適化に向け、グループ企業と共同研究や実証実験を進めています。また東日本大震災からの復興についても、グループ各社と連携して対応しています。具体的な事例を挙げると、現在UR都市機構発注の石巻市新門臨地区震災復興整備事業において、CM方式のプロジェクトに取り組んでいます。ここではグループ企業と連携し、発注者の代行者CMR（コンストラクション・マネージャー）として、技術的な中立性を保ち、発注者の側に立って、設計、工事発注、工程管理、コスト管理などのマネジメント業務を行います。このように建物やまちのライフサイクルで捉えれば、さまざまなソリューションを提供でき、プロジェクトの推進にもさまざまな手法が採用され、担い手の関わり方も変わってきますよね。

——グローバルに伴う社会の変化や展望をお聞かせ下さい。

今回ブランドロゴとして英文の「TAKENAKA」をメインとしたのですが、それはグループ企業や海外現地法人もグループとしての認知度を高めると共にグローバル経営を加速させたいという考えを基にしています。当社が建設した海外のプロジェクトは、日系企業の進出に伴うものが多いのですが、今後はグローバルな企業や現地の政府系やローカル企業のプロジェクトにも広げていきたいと考えています。海外では、高度経済成長期にあるASEANを中心とした東南アジア諸国がいちばんのマーケットとなっていくでしょう。2014年1月には、シンガポールのチャンギ空港第4ターミナル新築工事を受注しました。チャンギ空港は1981年に第1ターミナルを当社が施工して以来、改修工事を含め、多くの実績を積み重ねてきました。チャンギ空港を含めた海外での多くの空港工事の実績に基づく技術力が評価され今回の受注に繋がったのだと思います。もちろん東南アジアをはじめ海外では多くの有力なライバル会社があります。しかし、その中でも日本の建設会社は、総じて技術力を高く評価されていると思います。東南アジアでは、タイ、インドネシアの現地法人が今年で設立40年を迎え、2013年にはタイ竹中の支店としてミャンマーのヤンゴンに事務所を開設しました。東南アジアを見渡せば、インフラ整備や街づくりが進んでいく都市も多く、今後は、各社との連携を一層重視し、グループとしての強みを発揮できるプロジェクトに取り組み、都市の発展に貢献していきます。

一方、アメリカやヨーロッパでは建設事業に加え、不動産事業も行っています。アメリカでは、サンフランシスコに25年以上所有しているホテルがあり、昨年は、ロンドンでオフィスビルを取得しました。海外プロジェクトの比率は、個々のプロジェクトの受注額次第で、年により変動はありますが、当面は、連結の受注高に占める割合は15～20%で推移していくと思います。今後のマーケットやリスク等を分析し、新た

なエリアでの事業も継続して検討していきます。

2020年へ向けた日本の都市とその展望

——東京では、2020年にオリンピック・パラリンピック開催が決まり、インフラも含めたプロジェクトが進んでいます。国内に対しては、どのようなことをお考えでしょうか。

アベノミクスの成果もあって、建設業も回復基調になってきています。さらに、東京オリンピック・パラリンピック開催が決まったことで直接的な需要や、関連するインフラの整備なども2020年をターゲットイヤーとして動き出しています。また、政府が観光立国を目指している中、2013年には訪日外国人数が1,000万人を超えました。これを機に、東京のみならず、独自性と多様性を持った各地域の魅力が見直されていくべきではないでしょうか。街の魅力と地方の活性化を関連付けて考えていく必要がありますね。

国土強靱化も重要です。大地震や台風などの自然災害のリスクと常に対峙している中、インフラや建物の老朽化をはじめ多くの課題がある一方、国や地方の財源は逼迫しています。その中でインフラの維持更新、ファシリティマネジメント、施設の新設・建替、運営等において、PFI（Private Finance Initiative）やPPP（Public Private Partnership）など民間の力を生かしたプロジェクトのスキームが今後広がっていくのではないのでしょうか。また、環境も重要な分野です。世界の共通目標であるカーボンニュートラルな都市実現のために、建物単体では、省エネを徹底し、建物自身でエネルギーをつくり、消費を全てまかない自給する「ネット・ゼロエネルギービル」の実現。地域全体においては、スマートコミュニティやコンパクトシティにより、地域全体の省エネルギーや低炭素化、地域の豊かな環境や生活利便性の向上などを目指しています。

——竹中工務店設計施工のあべのハルカス（本誌1404）は21年ぶりに日本一の高さを更新した超高層ビルです。大阪についてはどうお考えでしょうか。

あべのハルカスは、ビルとして高さ日本一、百貨店の売り場面積も日本一を誇り、大阪のランドマークになっています。地域の中核となり、周辺も活性化してきています。建築的にも、ひとつの都市をつくったという意識

です。敷地一杯の建築で、設計施工で工夫し、バイオガス発電などさまざまな都市機能を内蔵した省エネ立体都市を形成しています。大阪は、中之島、梅田周辺でも開発が進み、今後の計画もあります。また関西圏は2014年3月に国家戦略特区に指定され、高度医療都市を形成しようとしています。国家戦略特区や観光立国に伴う政策が推進されれば、大阪だけでなく各地域の中核都市は、BCPの観点からも、東京のバックアップを担っていくなど、さまざまな役割が生まれ、位置付けも変わっていくことでしょう。そうすると東京への一局集中にも変化が生まれるのではないかと考えています。

——日本の成長戦略について、どのようなことをお考えですか？

これからの日本の成長には、今まで以上に国際競争力を兼ね備えた都市や地域の活性化が必要だと思います。そこで、ICT（Information and Communication Technology）が果たす役割が大きくなっていくと思います。当社は、今年に入り、グループ・グローバル経営を支えるICT基盤の最適化・効率化の促進等を担う「グループICT推進室」を、まちづくりへの対応として、都市、環境、建築、設備、ICT等の専門技術者を有するメンバーで構成される「スマートコミュニティ推進室」、多様な企業との連携によるコンソーシアムの組成などの推進を図る「PPP/PFI推進室」を立ち上げました。また、全社的にタブレット・スマートフォン約3,200台の導入を進め、必要な情報を必要な時に、どこからでもアクセスして取得することが可能になりました。それによりクライアントのニーズへ素早くかつ的確に対応し、生産性の向上へと繋げることができます。BIMIについても、設計部門・施工部門が連携を図って推進しています。北里大学病院（44画）でも設計事務所と一体となって当社の最先端技術を駆使しています。これからは、ものづくりにおいては、スピードが非常に重要になってきています。今までのやり方ではなく、ICTをはじめとした新しい技術を駆使した基盤の確立が必要なのです。

想いをかたちに 未来へつなぐ

——では、そうしたグループ力を活かすことの強みとは何でしょうか。

建物は長い年月にわたって世に遺り、環境、文化、時

代を形成していくものなので、お客様のニーズに加えて、社会的な価値という視点も強く意識しなければなりません。当社設計段階で、「地球環境」「社会性」「論理性」「造形性」「身体性」という5つの評価基準でレビューを行っており、技術研究所やエンジニアリング本部など、社内の技術的な意見・ノウハウ等も取り入れながら、お客様のご要望と社会からの要請、われわれの提案を擦り合わせ、トータルでの価値向上を追求しています。

昨今は自然環境との共生や地域との持続的な関係性を考慮したサステナブルな提案が求められているので、建築における社会的価値を最大化していくためにも、「地球環境」「地域社会」「お客様」「従業員・協力会社」などのステークホルダーの期待に応えるとともに、その人びとが集い、作用し合う「まち」が、今も未来も豊かで安全で優しいものでなければならないと考えています。そのためには、ステークホルダーとの対話をより一層深め、さまざまな想いをしっかりと受けとめると共に、建築、土木、不動産、開発、FM、リニューアルといった当社グループの総合力によって、まちづくりに取り組むことにより、社会的な課題を解決し得る新たな価値を創出し、未来へと繋いでいきたいと考えています。

時代と共に建築に求められる社会のニーズは多様化・複雑化していますが、根底には、変わることのない経営理念「最良の作品を世に遺し、社会に貢献する」と「想いをかたちに 未来へつなぐ」というグループメッセージがあります。400年の歴史を受け継いでこられたのは、こうした経営理念という軸を持ちながら、絶えず挑戦心を持って社会やお客様と向き合ってきたからに他なりません。建築や都市に対するニーズが今まで以上に高度化していく中で、安全で安心できる環境を整備し、人びとが豊かに暮らすことのできる「まち」を実現し、グループとして社会にとって最良のパートナーとなっていきたいと考えています。私たちはこれからも「伝統」と「革新」の姿勢を堅持し、グループの総力により新たな歴史を築いていきます。

（2014年5月2日、竹中工務店東京本店にて 文責：本誌編集部）

想いをかたちに 未来へつなぐ
TAKENAKA

ブランドロゴ（竹中グループメッセージ付き）。



チャンギ空港第4ターミナル。



あべのハルカス。（本誌1404）

第16回 シェルター インターナショナル 学生設計競技 2014

Shelter International
Architectural Design
Competition for Students

シェルターというものを再考してください。

シェルターといわれてまず思い浮かべるのは、テント、山小屋、防空壕、核シェルターなどでしょうか。厳しい自然環境や外敵から身を守るという、とてもシンプルな目的のためにつくられる建築。そのなかには、自分たちは雨風や敵やミサイルから守られているから、ひとまず心を休めることができる。シェルターはそうした安心・安全のための空間だといえそうです。でも私たちはそうした安心・安全の空間にずっといると、窮屈さや退屈さを感じ始めるものです。自然はときに厳しく不安定なものだし、他者との交流はなにかと煩わしいものですが、それでも自然や他者との関わりを、人間は本能的に求めているのでしょう。

では、自然環境や外敵から身を守るための空間がこれまでのシェルターだとすると、そこから派生して、これからの時代のための新たなシェルターとは一体どのようなものでしょうか。それはこれまでのシェルターとなりが同じで、なにが違うのでしょうか。場所は都市部でも大自然でも構いません。規模や構造も自由です。ただしどのような場所に建ち、どのように使われる空間なのか、具体的に設定してください。シェルターの目的そのものから捉え直してください。

私たちのシェルターのイメージを塗り替える、鮮やかな提案を期待しています。

- ◆ 賞 〈最優秀賞〉原則 1 作品 賞状・200万円 〈優秀賞〉原則 2 作品 賞状・50万円
〈入賞〉原則 3 作品 賞状・10万円 〈奨励賞〉若干名 賞状・賞品
- ◆ 応募資格 ・大学等教育機関の学生。(最終審査の時点で在学中)
・最終審査の公開プレゼンテーションに参加できること。
- ◆ 募集作品 〈用紙〉A2用紙 1 枚(594mm×420mm 縦横開かない)に下記の内容をまとめること。紙質は自由。パネル化しないもの。
〈内容〉提案の意図を表現する図面及び説明文。縮尺、表現方法は自由。未発表の作品に限ります。
※エントリー・提出方法の詳細はHPをご覧ください。

◆ 提出先・お問合わせ
株式会社シェルター デザインセンター
「シェルターインターナショナル学生設計競技」事務局
〒990-2473 山形市松栄1-5-13 TEL. 023-647-5300 FAX. 023-647-5150 E-mail shelter@slac.jp

提出締切

2014.9.5 Fri 必着

一次審査 2014.10.4 ㊥ 株式会社シェルター本社(山形)

最終審査 2014.11.15 ㊥ 代官山ヒルサイドテラス

TRY! www.shelter.jp/compe/

審査委員長 長谷川 豪 (建築家/スイス・メンドリジオ建築アカデミー客員教授)
審査委員 トム ヘネガン (建築家/東京藝術大学教授) / 中田 千彦 (建築家/宮城大学准教授) / 古谷 誠章 (建築家/早稲田大学教授) ※50音順
ゲスト審査委員 阿部 仁史 (建築家/UCLA建築・都市デザイン学科長)

《主 催》株式会社シェルター
《本 社》〒990-2473 山形市松栄1-5-13 Tel.023-647-5000 / Fax.023-647-5150
《KES営業本部》〒108-0014 港区芝5-3-15 芝三田森ビル Tel.03-5418-8800 / Fax.03-5418-8801

www.shelter.jp

長谷川 豪

シェルター再考

課題

建築家 篠原一男展 + 篠原一男展シンポジウム 伊東豊雄 x 長谷川逸子 x 坂本一成

開催中

㊥ 上海当代芸術博物館3階/中国・上海
2014.4.20 ~ 6.22

篠原一男展が上海で開催されている。会場の上海当代芸術博物館は、上海万博跡地の発電所をリノベーションして2012年に開館した現代美術館で、本展覧会は同博物館での初の建築家展。延べ740m²の最も大きな会場に、「白の家」(本誌6707)、「ハウス・イン・ヨコハマ」(『新建築住宅特集』8605)の原寸平面が床に記述され、篠原が自ら表明した4つの様式を写真や模型、篠原の言説と共に順に見て行く。最後には「未完の家」(本誌7101)の原寸大のホールが再現され、篠原の空間を追体験できる。4月19日には伊東豊雄氏、長谷川逸子氏、坂本一成氏によるシンポジウムが行われた。タイトルは「The Being to be Learned and Gone Beyond」。篠原スクール出身の3氏が篠原一男の存在と、氏に学んだその後について語った。

まず、司会の奥山信一氏が篠原と弟子の関係の特殊性に触れ、強力な引力で接近した弟子たちが一時は寄り添いながらも、しばらくすると磁石の同極のようにばらばらに離れていくことが紹介された。そして、東京工業大学篠原研究室に長年在籍した坂本氏(同展覧会準備委員長)から、伊東氏、長谷川氏の順に、スライドを使ったレクチャーを行いその後座談会となった。

3氏による座談会

伊東 私は1976年に篠原一男に最接近した。篠原の『上原通りの住宅』(本誌7701)ができた時で、その年に私は『中野本町の家』(本誌7611)をつくり、坂本さんは『代田の町家』(本誌7611)をつくった。

坂本 篠原一男の美しい空間への憧れを一方で持ちながら、その中に埋没する自分をどうにか批評しながら建築をつくらざるを得なかった。自分の感性をそこに完璧に重ねることができなかった。

長谷川 篠原研究室に11年在籍し、近くで自分の仕事もしてきたが、見つけたのは「新しい自然としての建築」というテーマだった。1985年に多木浩二さんと対談し、ロジカルな建築の反対にあるものを「フェミニンな建築」と多木さんが名付けた。その対談によって建築をつくるのがとても楽になったのを思い出す。

伊東 (今の自分のポジションについて) 篠原のつくり上げた美学は、自然環境からも社会環境からも自立した作品をつくること、そこに抽象的な作品を確立することに成立した。私はそこに共感して、社会の外側に立って社会を批判するかたちで自分の建築を考え始めた。私たち以後の世代もそうした抽象性を継承してつくっている。しかし現代社会の中で



左：再現された「未完の家」の原寸大のホールは実際に階段を上り空間を体験できる。右：「ハウス・イン・ヨコハマ」原寸の平面の上に、篠原がデザインしたオリジナル家具が置かれた。右奥は遺作となった「夢科山地の初等幾何」の縮尺1/5模型。

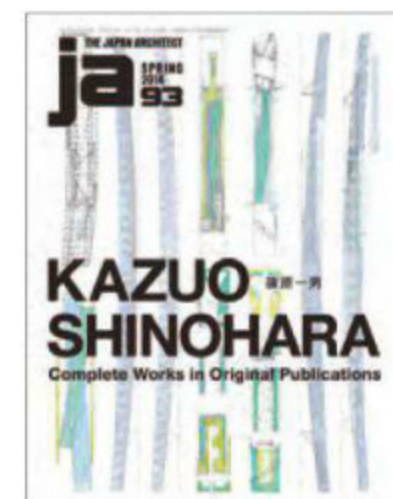
篠原がつくり上げた批評性は有効だろうか。社会とどのように距離を取り、批評性という言葉はどう考えていったらよいのか。

(今考えるべき批評性について) 篠原一男は伝統的な民家を愛していた。「土間の家」(本誌6404)は民家に最も近いと思う。しかし「白の家」で彼は抽象の美学を確立すると同時に民家の世界から遠ざかってしまった。その間にあるギャップこそ今問われるべきだ。

坂本 (形式性から生命感へ) 篠原一男を評価するかなりの部分が、私が距離を取ったと言った形式性あるいは幾何学性についてである。実はそれがいちばんないのは「土間の家」だと思う。「白の家」はかなり形式性を持っている。「地の家」(本誌6707)は、「白の家」と対比的に語られたとしても構成の形式性という意味では「白の家」と同列にある。そして多くの現在の建築家は、「土間の家」を含む第一の様式を評価し始めていると思う。かつて篠原一男への評価は形式性を強く持った。それによって建築空間の持つ力への評価だった。しかし建築がもっている形式による力というのは、現代の社会の中でどういう意味を持つのだろうか。それよりも生の生々しさ、バネキュラー的な生命感のようなものが重要になっている。篠原一男の考えていた批評性とわれわれが考える批評性は少し変わってきている。

長谷川 篠原は、まだ見ぬ建築を描こうとし続けていたと思う。今回の展示にもある最後の作品(遺作となった住宅プロジェクト「夢科山地の初等幾何」)を見た時はショックを受けた。伊東さんが言われる生きた家をつくりたいということと同時に、篠原も同様にそうした力を持ちたいと思ってつくった住宅に思えた。

(文責：本誌編集部)



新建築社では今年3月に『JA93』篠原一男特集を刊行した。全ての作品とプロジェクトを、篠原との綿密な打合せの上に初出となった発表当時の掲載写真、図面、作品解説をできる限りそのまま再録し振り返る。定価：¥2,571(本体¥2,381)



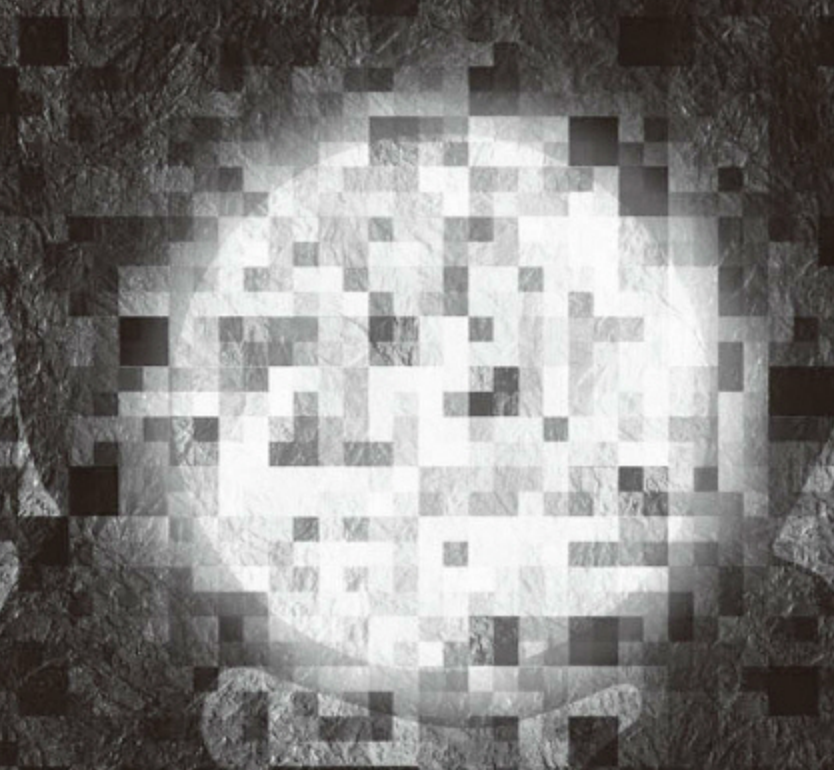
シンポジウム風景。

第8回 建築家の あかりコンペ 2014

応募作品募集

募集作品テーマ

「身体にちかいあかり」



主催
公益社団法人日本建築家協会 / 大光電機株式会社

後援
一般社団法人日本建築学会
公益社団法人日本建築士会連合会
一般社団法人日本建築士事務所協会連合会
株式会社新建築社
株式会社日刊建設通信新聞社
株式会社電材流通新聞社

応募方法の詳細に関しては、WEBでご確認ください。
建築家のあかりコンペ | で検索

公益社団法人日本建築家協会
「建築家のあかりコンペ2014」運営事務局
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館
TEL:03-3408-7125



松明に始まり、燭台・行灯・提灯へと進化してきた可搬のひかりは人とともに移動し、常に人間の身体にとっても近いものとして存在してきました。しかし、白熱電球の登場以来、ひかりは火傷や感電の心配のない安全な場所へとすこしづつ離れていったのだと思います。
近年つくづく災害などでろうそくや懐中電灯、携帯電話のあかりに助けられた人は多いことでしょう。LEDの登場は照明器具の小型化、ポータブル化など、改めてひかりが身体に近づくきっかけになるかもしれません。そんな思いで、今回のコンペでは現代の照明技術を駆使しながら、量産を目的とした「身体にちかいあかり」をつくれる照明器具の提案を求めます。
斬新なアイデアを期待しています。

最優秀賞 / 1点 (副賞30万円)

優秀賞 / 1点 (副賞20万円)

佳作賞 / 3点 (副賞5万円)

特別審査員賞 / 1点 (副賞10万円)

DAIKO賞 / 1点 (副賞10万円)

※一次審査で7点を選出し入選とします。

□ エントリー締切日 2014年7月31日(木)

□ 作品提出締切日 2014年8月18日(月) 必着

審査委員長	妹島 和世 (建築家)
審査員	渡邊 顕彦 (建築家) 戸恒 浩人 (ライティングデザイナー)
	岡安 泉 (ライティングデザイナー) 前芝 辰二 (公共空間施設代表建築家)
特別審査員	芦原 太郎 (公益社団法人日本建築家協会 会長)
審査日	■ 一次審査 8月下旬実施 ■ 二次審査 9月27日(土)

※一次審査は、審査委員による非公開審査(JIA本部)
※一次審査通過者には、9月初旬頃に審判にて通知いたします。
※一次審査通過者より公開プレゼンテーションを受けて審査します。
※二次審査は、JIA建築家大会2014岡山にて実施します。
※会場までの交通費は、自己負担ください。

表彰式 9月27日(土)
JIA建築家大会2014岡山

作品展示 9月23日(火)～9月27日(土)
大会期間に本コンペの全応募作品を展示します。

応募資格 □ 設計業務に携わる建築士
□ 日本建築家協会正会員または準会員 (スタッフ・学生 可)
※上記のいずれかの要件を満たしている者、もしくはJIA準会員入会予定者。
入会申込及び準会員については、運営事務局までお問い合わせください。

応募点数 お一人 1作品のみ 参加費用 無料

第7回 建築家のあかりコンペ 2013

募集作品テーマ 「闇を魅せるあかり」

最優秀賞



作品名 明暗境界線

西 毅徳 Nishi Takatoku

多摩美術大学 環境デザイン学科



乾久美子+東京藝術大学 乾久美子研究室展 小さな風景からの学び

生きられた日常生活に向かう「アーキテクチャー」
会場で大量の写真をぼんやりと1枚ずつ眺めていく、
どの写真も日常生活の中で出会うようなもので、特
別な事件性を持っているものではない。あたりまえ
の風景写真である。展覧会カタログの巻頭文に紹
介される1枚の写真「被災地で出会ったベンチのある
風景」は、十分に事件性を持ち、豊かな物語性を
背景にする写真なのだが、その写真は展示列には
選ばれない。ここではさらに日常的であたりまえの
日本の風景の中に意識が向けられる。
オープニングの会場で展示を見た時は、1970年の
大阪万博の会場で展示されたクリストファー・アレ
グザンダーの「A HUMAN CITY」を思った。それ
は200枚近い手描きのポスターを並べたもので、
大量の写真、ダイアグラム、テキストが盛り込まれ
ていた。そのポスターはタイトルを手掛かりに写真、
ダイアグラム、テキストのサブセットによって言語的
メッセージを伝達するというものである。後に「パタ
ン・ランゲージ」としてまとめられ、私たちの生活
環境そのものをデザインする道具の開発というアイ
デアの萌芽であった。

しかし、このギャラリー・間での展示「小さな風景
からの学び」では、そのような伝達するための作業
は行われない。写真は加工されず、その配列だけ
が意図されたものである。そこには言語のような明
快な構造性は与えられない。この大量の写真を会
場で上書きされた風景として眺め、かすかなイメ
ージの重なりを受け取る。現象としての風景素材を配
列することで、読み取りの補助線を与え、読み手
のアタマの中に構造を浮き上がらせることが意図さ
れているように思える。さて、この展示は何を意味
しているのだろうか。

感受性を共有するプラットフォーム

会場では「気になる風景」の写真のまとまりを眺めな
がら、それに付された文字を読み、それに共感でき
る感受性を確認する、という個人的な楽しみがある。
提示されている日常的な風景は私たち日本人にとっ
てはあたりまえに見えるものだが、このように所有
があいまいな空間の風景は、私たちが感じることが
できる固有の文化コードであるのかもしれない。
同じように風景を扱う、ゴードン・カレンの『TOWN
SCAPE』(1961年)では、いくつかの風景の写真を
例示しながら、建物群によって切り出される外部空
間こそが人びとが日常で経験する風景であるとして、



上：会場風景。「気になる」風景の写真約2,000枚を176のユニットに分類し展示。左下：撮影対象は自然の光景から土木構築物、建築空間、室内空間まで幅広い。撮影の際の共通ルールとして対象に対して正対かつ中心に納めることが定められた。右下：展示会場内にも「取り囲む」、「織々」、「積み上げる」など、いくつかのユニットの再現がなされている。

外部空間そのものを物的環境として抽出し、言語
のように読み書きのできるものとして示していた。
伊藤ていじ、磯崎新たちによってまとめられた『日
本の都市空間』(1963年)は、この『TOWN
SCAPE』の日本版として構想されたものと思われる
が、公的領域の外部空間という空間構造が明確
ではない日本では、空間を記号化できないために
その分析は情緒的であった。

本展覧会のカタログのあとがきには、「ここに風景
として撮影された対象は多くは私有地にあるもので
あるが、公道から見える範囲であれば、特段、許
可を得ずに撮影している。」と付記されている。この
展示は、公的領域のランドスケープを対象にしてい
るのではない。それは「公道から見える」「私有地」
である。日本の街には公的領域と私的領域の間に
「隙間」のような興行のある空地が存在する。それ
は私たちの生活する空間にある大量の余白のよう
な外部空間なのだが、それをノリが描く白黒の地図
では表せないグレーの空間とすれば、西欧の概念
であるパブリックとプライベートという二項関係を乗
り越える第三項の空間(コモンズ)が見えてくる。こ
れを意識化することによって、新しい対象が見えて
くる。それは、これまで建築としては扱わなかった

もの、または建築に付随する空間であたり土木領
域の一部としていたものである。そこは「誰のもの
でもない」しかし「誰でも参加できる」日常生活に深
く関与する空間である。そこを主題として正面から
正対し、作品の「建築」ではない、生きられた日常
生活に向かう「アーキテクチャー」として、これから
私たちが対象とするものであると宣言しているよう
に思えた。その手付かずの領野の拡がりを提示し
ているのではないか。

『小さな風景からの学び』では、あえて風景を記号
化しようとはしない。粘性のあるそれぞれの風景
を「サービス」という概念によってすくい上げる。そ
こで発見されるものは人間の行為によってさまざま
に色付く場所である。ここでは普遍性を持った空間
構造を抽出することではなく、場所が生産する人
間の行為に注意が向けられていることに気付く。普
遍言語としてのモダニズムを批評し、生きられた場
所の想像力を止揚しているのだ。そして、同時に
モダニズムの基底にある人間の行為に対する愛情
=ヒューマニズムへの信頼が背景にある。新しい
時代の建築(アーキテクチャー)の感性を示している、
と思った。(北山恒)

MILANO SALONE 2014
ミラノサローネ2014

編集部

サローネ国際家具見本市の
メイン会場であるフィエラ。

イタリアのミラノで4月8日から13日まで世界最大のデザイン見本市、ミラノサローネが開催された。53回を迎える今回は、メイン会場のフィエラだけでも前年比10%増となる35万人以上が訪れた。一方、ミラノ市内でもさまざまなブランドが新作発表や実験的な展示を行い、デザイン関係者らの注目を集めた。その中から、日本人建築家・日本企業の活躍を中心に紹介する。（編）

上写真撮影：セゾレーディング

YKK AP × アトリエ・ワン

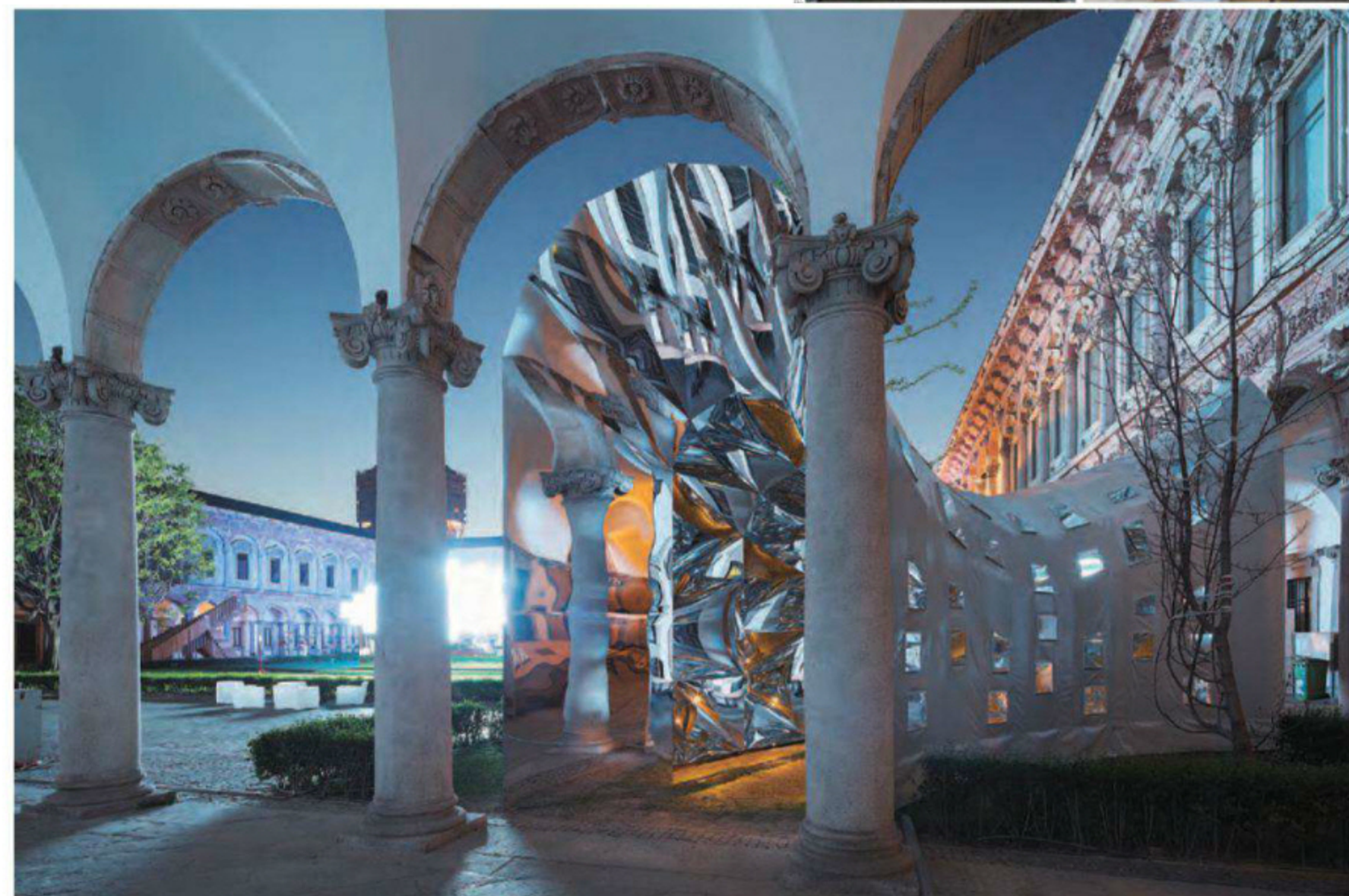
窓を通じて内外の景色が混じり合う万華鏡のような空間

YKK APは複数の有識者と共に2007年より「窓学」という窓の研究活動を行っており、東京工業大学塚本由晴研究室も参加している。今回はアトリエ・ワンとミラノ大学を会場に、イタリアのインテルニ誌が主催するグループ展「FEEDING NEW IDEAS FOR THE CITY」の中で、「WINDOWSCAPE」展と題した窓をテーマとした展示を行った。メインインスタレーション「Kaleido-window」の中は、壁から天井まで全体が鏡面になっており、数多くの窓からはミラノ大学の庭や回廊が見える。中へ進むと、内外の風景が混じり合って刻々と変化し、万華鏡 (kaleidoscope) に入ったような体験ができる。「Kaleido-window」外側の回廊には「窓学」研究成果から、世界の窓の写真と図面資料をポスターとして展示し、持ち帰れるようにした。なお、6月15日まで六本木の東京ミッドタウン・デザインハブを会場に、帰国展も兼ねた「窓学“WINDOWSCAPE”展」が開催される。



写真（左）：Shawn Ota

写真（右）：Hiroshi & Partners Inc.

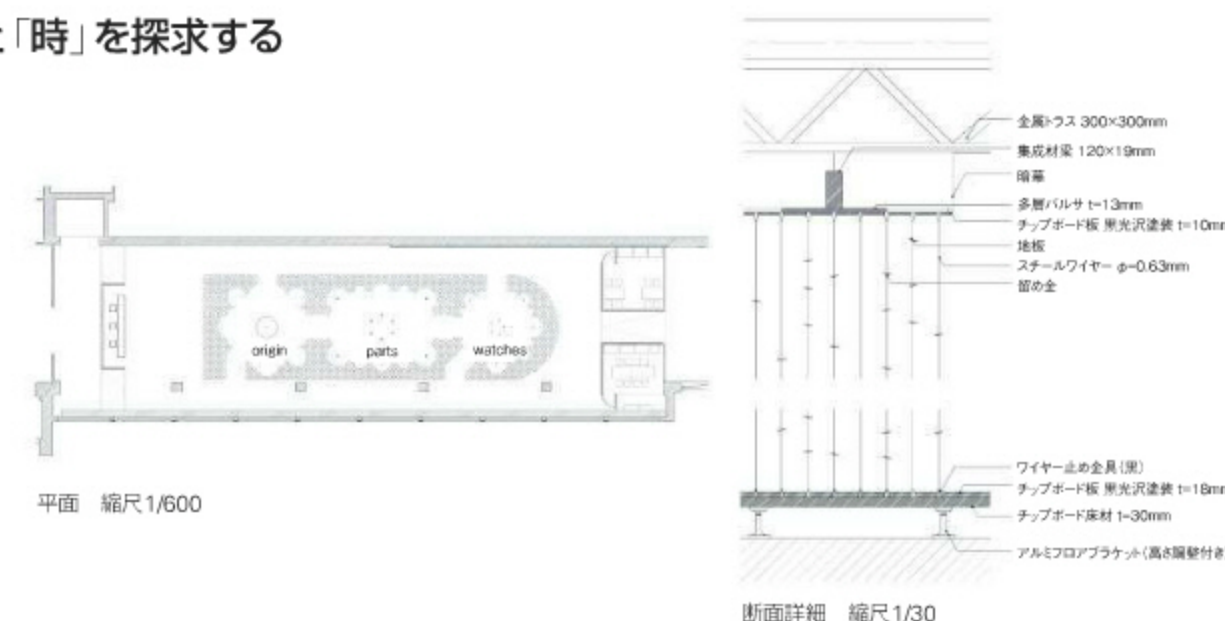


左上：「Kaleido-window」の中、内外の風景や光が乱反射する。右上：回廊に展示された、持ち帰ることができる「窓学」研究成果のポスター。用意した4万枚が早々になくなったという。
下：「Kaleido-window」入口。多数の窓が設けられているのが外側から分かる。

CITIZEN × 田根剛

8万枚の地板のゆらめきで「光」と「時」を探索する

ウォッチブランドのシチズンもミラノサローネに初めて参加。BASELWORLD 2013、2014に続きコラボレーションアーティストに建築家の田根剛氏を迎え、ミラノ・トリエンナーレ美術館でインスタレーション「LIGHT is TIME」を行った。シチズンの時計づくりから発想した「時間は光であり、光は時間である」というシンプルなコンセプトを元に、時計の全ての部品を支える基盤装置「地板」を8万個使い、時が止まったかのような非日常的な空間をつくった。会場にはシチズンの原点となる懐中時計から最新のサテライト時計（衛星電波時計）まで展示し、光と時間との関係や、時間の起源を改めて考えさせる構成となっていた。

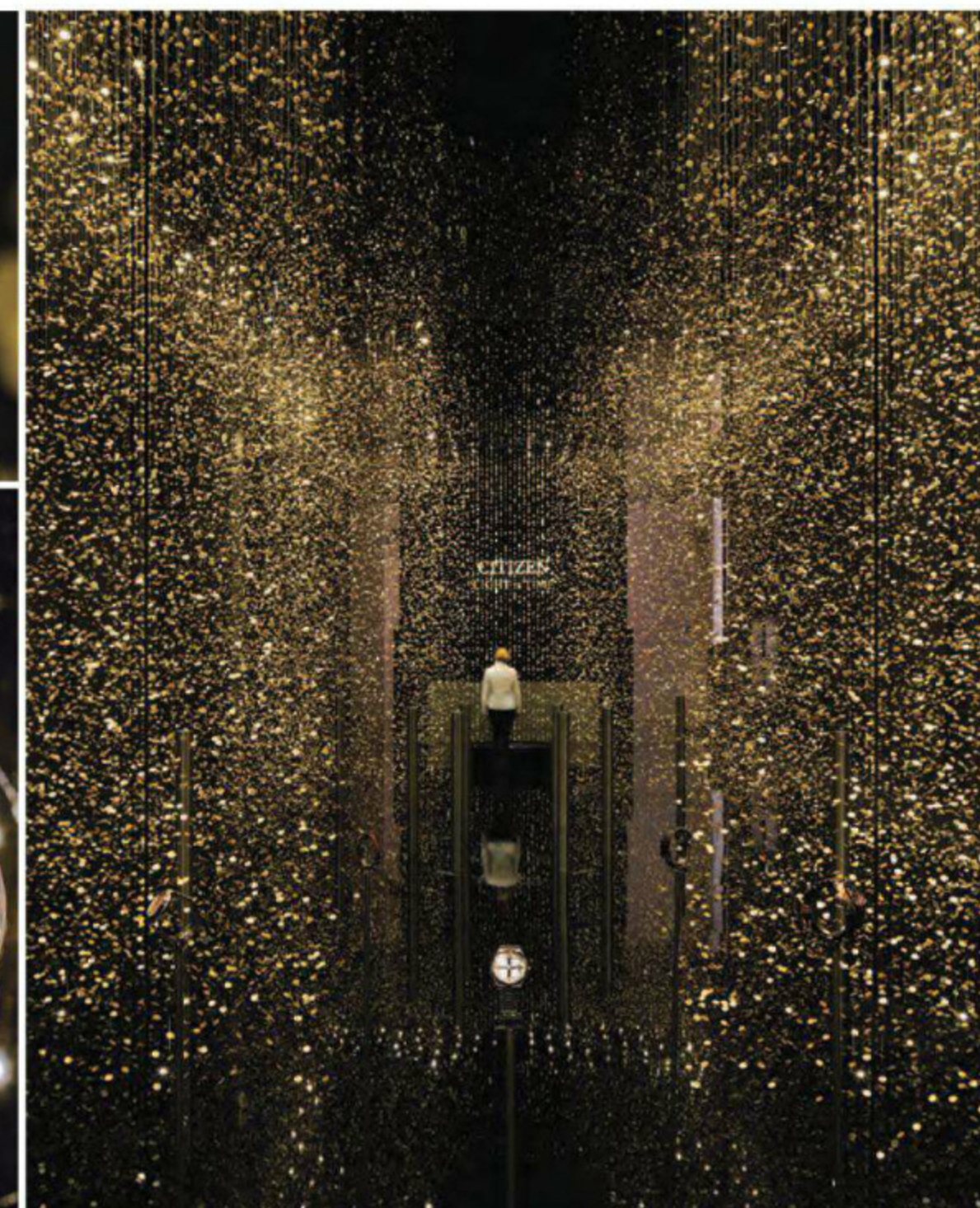


平面 縮尺 1/600

断面詳細 縮尺 1/30



上：ワイヤーで吊られた地板。
下：時計を構成する各部品を見せる。



地板8万枚が舞う展示空間。照明・音響演出はルフトゾークの遠藤豊氏。

写真：Shawn Ota

Panasonic × トラフ建築設計事務所

引戸と照明によって形を変えながら生き物のように動く家

3年連続でミラノ大学での展示となるパナソニックは、今回、トラフ建築設計事務所の鈴野浩一氏と禿真哉氏をデザイナーに迎えた。「SLIDING NATURE」をコンセプトとしたインスタレーション展示で、空間を間仕切る大型引戸とLED照明の組み合わせによる、自然と住環境が融合した新たな空間価値を提案した。引戸の動きにシンクロする音楽や、照明が明滅する様子を見ると、生き物が動いているようにも感じられる。鈴野氏、禿氏によると、引戸を「動く壁」と捉えたことで、従来の概念に縛られない構成が可能になったという。会場入口には面発光LED照明「パネルミナ」50台が展示され、来場者はスマートフォンの操作感のような新しいタイプの配線器具（スイッチ）で、インタラクティブな調光を楽しんでいた。



写真：Tommi Ota

Cassina × 藤本壮介

家具を引き立たせる「浮遊する森」



写真：Cassina

カッシーナはミラノ市内のショールームと家具見本市メイン会場であるフィエラで新作コレクションを発表し、フィエラのブースでは藤本壮介氏がインスタレーション「Floating Forest」を展開した。細部までデザインされた家具とは対極にある、全くデザインされていない「木」を立体的に配置し、家具を引き立てることが意図されている。藤本氏は今後、外部の要素や自然のものが室内に入ってくると考え、近未来のライフスタイルの提案として、今回のインスタレーションを手がけた。その木に満たされた空間はジャン・ヌーヴェル氏、ピエロ・リッソーニ氏、ハイメ・アジソン氏らの新作家具コレクションとも違和感なく調和していた。

LEXUS × ファビオ・ノヴェンブレ／田村奈穂／MITメディアラボ

ブランドのテーマを多様な展示で表現



写真：LEXUS

レクサスはミラノ中心部のチルコロ・フィロロジコ・ミラネーゼで「LEXUS DESIGN AMAZING 2014 MILAN」を開催。ファビオ・ノヴェンブレ氏、田村奈穂氏、MITメディアラボの石井裕氏が率いるタンジブル・メディア・グループの3組のデザイナーが同ブランドのスローガンである「AMAZING IN MOTION」をテーマに作品を制作した。田村奈穂氏の「Interconnection」（写真右）は、わずかな力や空気の流れに反応して全体が揺れるオブジェによって、互いに関係しつつ一定の平衡を保つ自然の絶妙なバランスを表現した。また、「第2回 LEXUS DESIGN AWARD」展示会場では入賞作品10点のパネルと共に、メンターの助言を受けて制作されたプロトタイプ2点が展示された。

KARIMOKU NEW STANDARD, 燕三条 工場の祭典, Minotti, Salvatori, IMIB, 伊千呂, TOKYO DESIGNERS WEEK, COS
多数の家具メーカーや日本人デザイナーが新作やインスタレーションを発表

写真：Tommi Ota

KARIMOKU NEW STANDARD

昨年に続き、「食」を切り口にしたイタリアのデザインユニット、アラベスキ・ディ・ラッテとのコラボレーションで「Kitchen Library vol.2」と題した展示を行った。本や食などと家具が共にあるくつろげる日常的な空間にはビッグゲーム、ショルデン&バーイングスによる新作も展示された。



写真：Minotti

Minotti

フィエラにおいて「Cosmopolitan Spirit」をテーマに新作を発表。品質やスタイル、掛け心地といった普遍的な価値は追究しつつ、今シーズンはブランドのアイデンティティをはっきりと表したデザインや装飾のテイストを表現した。写真の新作「Collar」は、独自の技術によって、アームレストやバックレストを後ろに倒すことができ、シーンに応じた使い方ができる。



写真：Tommi Ota

IMIB × 吉岡徳仁

イスタンブール鉱物輸出協会（IMIB）が主催する展覧会「MARBLE ACROSS TIME」でトルコ大理石を使った浮遊する石のテーブル「Agravic」を発表した。石は重いという固定概念を覆すような作品として、1枚の大きな石板が透明なアクリルの塊によって床と天井で支えられ、重力から解放されたような姿を見せる。



写真：TOKYO DESIGNERS WEEK

TOKYO DESIGNERS WEEK

7年ぶり3回目の参加となるTDWは「日本のクリエイティブ&文化輸出」をテーマとして、トルソー地区に出展。多くの企業やデザイナーが参加し、会場内でさまざまなイベントや展覧会を行った。写真の大風呂敷展は、日本独自の「包む」文化やものを大切に文化だけでなく、風呂敷を通して日本のグラフィック力を表現する企画展。喜多俊之氏、佐藤可士和氏、太刀川英輔氏ら多数のクリエイターが参加した。



写真：Tommi Ota

燕三条 工場の祭典

高い技術力を誇る新潟県燕三条地域の工場を開放して、訪れた人々に工場でのものづくりを体験してもらうイベント（2013年に燕三条地域で開催）が今回ミラノへ出張。燕三条地域の13工場が参加し、ミラノ市が保有する元機関車工場跡地で開催されたイベント「SHARING DESIGN」で日本のハイレベルなものづくりをアピールした。



写真：Salvatori

Salvatori × 隈研吾

隈研吾氏はイタリアの石材メーカー、Salvatoriとのコラボレーションで、ミラノ大学の中庭を舞台にインスタレーション「Stone Forest」を展開した。近年同氏が試みている木を使った新しい構造技術をカラーラ産の大理石に応用し、重い素材によって軽快な造形を生んでいる。



写真：Tommi Ota

伊千呂 × 長坂常

化粧板メーカーの伊千呂は、長坂氏が決定した伊千呂の新たなコンセプトに沿ってつくったコンセプトモデルをロッサナ・オルランディで発表した。写真の「TAKE KAGO」は伝統素材である竹に工業素材を組み合わせたもの。スツールにはラバー、テーブルにはエポキシ樹脂が使われている。



写真：nendo

COS × nendo

スウェーデン、H&Mグループのファッションブランド、COSのためにnendo（代表：佐藤オオキ氏）がインスタレーション「space dipped shirts」を行った。COSの代表商品とされる白いシャツを、展示フレーム内側のみフレームと同じ色に染めることで、まるで空間によってシャツが染められているように見える。

これからの建築照明

《第2回》「LED ペンダント 上下配光 導光パネルタイプ」

— 進化したミニマルデザインで空間を効率的に照らす



「LED ペンダント 上下配光 導光パネルタイプ」。導光パネルを利用して天井面へ光を大幅に広げることで、空間の明るさ感を向上させる。本体は全高37mmと薄く、空間の広さに合わせて複数台の連結も可能。



本体と導光パネルが段差なく繋がって見えるように、本体の曲線と導光パネルの角度が計算されている。本体色にはこれまでのスマートアーキに多かったシルバーではなく、空間に溶け込むホワイトを採用した。



左右：パナソニックのシミュレーション技術「リアルCG」を用いたイメージ。天井面に光が広がっている。取り付け間隔が広い（25頁、図2参照）。設置器具台数の削減が可能。

照明器具の光源が白熱灯や蛍光灯からLEDへと変わったことで、照明器具の形や機能も変化の途上にあります。本連載ではパナソニックの建築照明器具、SmartArchi（スマートアーキ）を手がかりに、新しい照明とそれによって生み出される新しい空間を探ります。第2回はLEDと導光パネルを組み合わせた「LEDペンダント 上下配光 導光パネルタイプ」を取り上げます。（編）

最小限のデザイン要素で理想の明るさと配光を

今年2月にスマートアーキシリーズから発売された「LEDペンダント 上下配光 導光パネルタイプ」はその名の通り、光源にLEDを採用し、導光パネルを使うことで天井面にも光が広がる照明器具だ。開発を担当したパナソニック エコソリューションズ社デザインセンターの田中稔氏にお話を伺った。LEDは光源が小さい上に光の指向性が高く、無駄なく端部から光を入射できるため導光パネルとの相性がよい。開発に当たっては「単なるデザイン商品ではなく、空間で理想的な明るさと配光を実現するものでなければなりません。マイクロレンズ方式の導光板を採用することで、これまでにない理想的な配光を得るとともに、最小限のデザイン要素で構成することを目指しました」（田中氏）。

新しいアイコンをつくる

開発初期のデザイン案（25頁、比較表参照）は直線的、面的なデザインで、導光パネルも水平だった。これはエッジを強調するなどシャープで建築部材のようなデザインが特徴だった従来のスマートアーキのテイストを踏襲するものだが、これまでとは大きく異なる照明器具をつくるのに、デザインは従来通りでよいのかという疑問があったという。「建築空間はより柔らかく、軽くというトレンドがある中で、これまでのスマートアーキよりもさらに存在感を抑え、光だけが感じられるようにしたかったのです。そして、従来のペンダント照明から進化した新しいアイコンとなることを目指しました」（田中氏）。

シンプルさを追究

断面形状は長方形や台形などいくつも候補が挙がったが、シンプルさを追究した結果、曲線的なデザインに行き着いた。これはできるだけ器具本体が小さく見え、導光パネルだけが存在しているように見えることをねらったためだ。そのためには導光パネルの端部を水平よりも上に向け、パネル幅を広くすることで、横方向から見た時に導光パネル

	基本（初期案）	面取り	円弧	V 型	U 型
姿					
特徴	シンプル	導光パネルとの段差を緩和できる	ボリューム感を抑える効果がある	横から見て灯具の側面が目立たなくなる	横から見て灯具の側面が目立たなくなる
課題	導光パネルとの段差大 底面が大きく見える	シンプルさに欠ける	今までのスマートアーキにない造形	底面にボリューム感が出て 薄さ感が損なわれる	光学性能に影響する恐れ 設計が困難になる

初期デザイン案比較表。円弧案をベースに開発が進んだ。

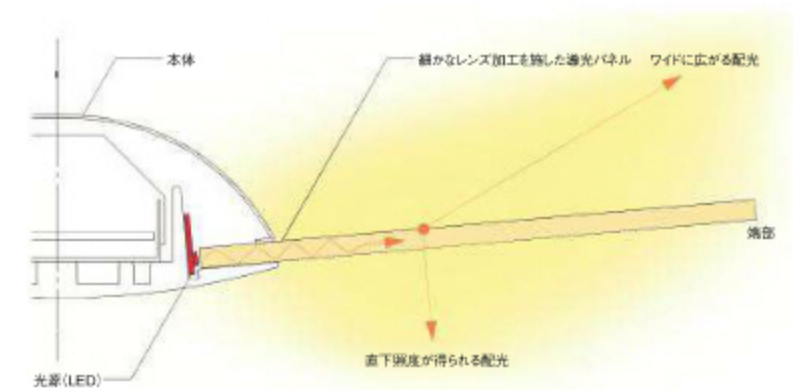


図1. 導光技術の概念図。光源（LED）からの入射光が導光パネルで反射・拡散して上下への配光が得られる。



図3. 導光パネルの角度と幅の検討。標準的な視点と器具設置高さの場合に、どのくらいの距離で本体が見え出するかをシミュレーションした。

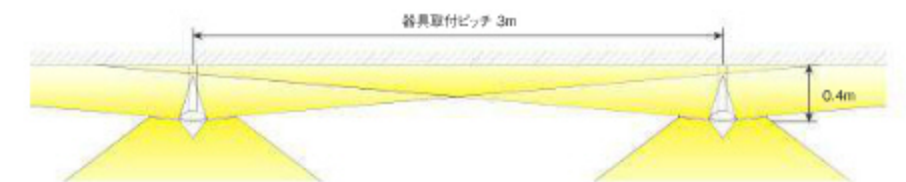
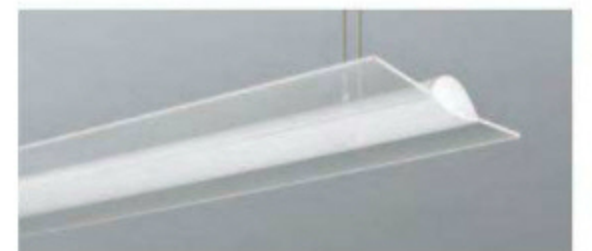


図2. 導光技術の効果。天井面へ光を大幅に広げる配光設計により、照明器具の取り付け間隔が3mでも均斉度の高い光を実現し、照度ムラを抑える。



点灯時はパネル全体が発光し、消灯時（上）にはパネルが透明になる。昼光が射し室内の点灯が不要な場合、器具の存在感がなく、空間に広がり感を与える。

に隠れて器具本体が見えにくくしたい。しかし、角度が大きく、幅が広すぎると装飾的に見える恐れがあるため、どの角度にすべきか、どのくらいの距離で本体上部が見え出するか、シミュレーションを行った（本頁、図3参照）。また、できるだけ軽快に見えるプロポーションを探り、導光パネルと本体のサイズバランスも検証を重ねた。

3つの目的を満たすレンズ設計

試作品ができ上がると解決すべき問題が出てきた。特に問題だったのは導光パネル端部のまぶしさである。LEDから出た光は端部に向かうため、どうしても端部がまぶしくなる。しかし、スマートアーキのクオリティを守るためグレア（不快なまぶしさ）は抑えなければならない。最初はテープなど別の素材を端部に付けてみたが、それでは軽快感が削がれて見た目がよくない。そこで、導光パネルから上下への配光と、端部に出る光の量を調整した。導光パネルの表面には微細なレンズが無数に施されており、そのレンズの大きさや密度を変えることで配光を調整している。上下への配光を増やすためには、レンズ密度を高めなければならないが、する

と今度は導光パネルの透明感が損なわれる。この商品は消灯時に導光パネルが透けて空間に広がり感を与えることも特徴のため、透明感は保ちたい。さらに、導光パネルのパネル面の発光をできるだけ均一に見せたいという意図もあった。「端部のまぶしさを防ぐ、透明感を保つ、パネル面が均一に発光するという3つの目的を満たすため、試作品やシミュレーションによって最適な配光を導き出しました」（田中氏）。

新技術が生む新たな製品

「LEDペンダント 上下配光 導光パネルタイプ」は、床面だけでなく天井面にも光を広げることから、効率的に空間の明るさ感を確保できるため、同社の指標、Feuを高めるのに効果的である。現行の上下配光LED照明器具の場合、光が直上だけを照らしてあまり広がらないため、天井面の輝度ムラが出やすい空間になる（本頁図4、A参照）。一方、今回の器具の場合、天井面の輝度ムラが少なく、しかも明るさ感の高い空間になる（本頁図4、B参照）。LEDの進化に加え、導光技術の発展により今回の照明が生まれたように、これからも新たな器具の

誕生が予想される。今までになかったペンダント照明と言える今回の製品は、プロトタイプを見た建築家からの期待も高かったという。本連載ではこの製品の採用事例も紹介する。（編）

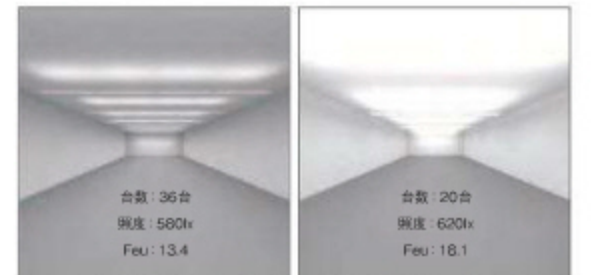


図4. 左が現行の上下配光LED照明器具（A）。右がLEDペンダント 上下配光 導光パネルタイプ（B）。Bの方が少ない灯具数で輝度ムラが少なく明るさ感が高い。

SmartArchiのWebサイトでは、各空間のFeuを使った設計モデルプランなど、照明設計に役立つさまざまなコンテンツを用意している。

<http://www2.panasonic.biz/es/lighting/smartarchi/>

スマートアーキ 検索

「家」とは何か

—アルヴァロ・シザの原点

アルヴァロ・シザが若き日から半世紀にわたり、父親をはじめ家族とともに思索し、つくり
継いだ住宅がここにある。1950年代から60年代にかけて、近代建築の原理が確立し、
やがてそれへの異議申し立てがなされる時代に建築を学び始め、ひとつの住宅を実践の
場として展開された記録である。建築の原点ともいえる「家とは何か」という普遍的な
問題構成に対するシザの応答が記され、私たちに多様な示唆を与えてくれるだろう。

WEBにて

好評発売中!

www.japan-architect.co.jp

版型：A5変型版 頁数：80頁 定価：972円(本体900円)

※FAXでもご注文頂けます。

FAX. 注文書

記入後このまま送信してください。着払いにて発送いたします。
別途手数料500円を申し受けます。

申込者氏名

送付先住所 〒

電話番号

FAX. 番号

発行 株式会社 新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
電が関ビルディング17階 〒100-6017
tel. 03-6205-4380 fax. 03-6205-4386

購入部数

部

FAX. 送信先 03-6205-4386

『新建築』2014年5月臨時増刊

「家」とは何か—アルヴァロ・シザの原点

『「家」とは何か—アルヴァロ・シザの原点』という冊子が届けられた。文章だけであれば、ほんの30分もあれば読めてしまうような小さな冊子である。この冊子は、『A CASA em Roberto Ivens』(CASA DA ARQUITECTURA, 2011)の翻訳本であり、装丁も版型もほぼ原著のままとなっている。

この極小さくて薄い冊子には、アルヴァロ・シザが少年期を過ごし、建築を学ぶようになってやがて改修を施し、さらには近年アルヴァロ・シザ資料センターとして全面改築を行ったマトズィニョシュにある実家のことが、シザへのインタビュー形式で語られている。少年期から青年時代、そして建築家として大成した現代に至る長い期間、この家を見続けてきたシザは、今度は見せるための家として資料センターというかたちを与えた。ひとつの家とひとりの建築家が長い時間を掛けて往還しながら体験的「建築」がつくられたその経緯の中に、「家」というものが何であるか、透かして見えてこないだろうが、1933年生まれのシザが、この家の改築を行ったのは1961年ということである。シザの作品系列を見返すと、この1961年にはレサのスイミングプールの設計も行っている。シザにとって60年代はちょうど建築的飛躍があった時期にあたり、初期のポルトガル伝統建築に根ざした瓦屋根は取り去られ、幾何学が大胆に導入されている。その一方で設計に対するスタンスはやや異なっているように思える。単純な幾何学だけでは割り切れない側面があるのか、低い瓦屋根の下、白いスタッコの壁に天窓から落ちかかる光によって、よりねっとりとした空間を感じさせる。

この冊子では文章と共に、図面と写真、そしてシザのスケッチが時間を越えて錯綜している。それは好ましい錯綜であり、その錯綜の全体がこの「家」を語っている。大概の「家」にあって、錯綜するものはありふれたもの、取るに足りないものがあることが多い。しかし、それらには意味がある。決して他には変えられない特別な意味があるのだ。そういったものの総体が「家」を成していて、屋根や壁、窓は、そういった総体を支えているだけなのである。

本書の中でパビリオンのことが語られているが、それは裏庭の先にある「離れ」のことである。これが、シザ16歳の時の最初のプロジェクトであり原点とも言えるのだが、後のシザのひとつの手法ともなるパビリオン形式(ひとつまたは複数の建物を独立して建てる形式)の萌芽もここに見る思いがする。また、シザは住宅の体験論と共にモダニズムとの関わりについても触れており、モダニズムの多様な展開とその地域的な受容についての貴重なドキュメントともなっている。



戸室太一(とむろ・たいち)

1961東京都生まれ/1985
早稲田大学理工学部建築学
科卒業/1985~89年早川
邦彦建築研究室/1989~
94年レンゾ・ピアノ・ビルディ
ングワークショップ・ジャパン/1995~98年
アルヴァロ・シザ・アルキテクト/1998~99
年岡部寛明アーキテクチャーネットワーク/
1999~2006年谷口建築設計研究所/2006
年戸室太一建築設計室設立/2008~11年法
政大学デザイン工学部建築学科兼任講師

近居 少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか
大月敏雄+住総研 編著

タイトルにもなっている「近居」とは、ひとつの家族が近所の別々の住宅に住み、互いに行き来しながら生活を成り立たせている現象のこと。ごく一般的な現象であり、身の回りに思い当たる読者も多いだろう。本書では都心部、農村部および海外(主に東南アジア)における近居の実態やそのメリット・デメリットを丁寧に読み解くことにより、曖昧に捉えられていたこの現象を定義しようとする。また、少子高齢社会においては近居が世代を流動させ、多世代居住の鍵となるという視点から、近居を促す自治体の取り組みも紹介する。(kn)



A5判/184頁
1,900円+税/学芸出版社

日本の都市から学ぶこと 西洋から見た日本の都市デザイン
バリー・シェルトン 著 片木篤 訳

本書は、『Learning from the Japanese City』(ROUTLEDGE CHAPMAN HALL, 2012年第2版)に第7章を描き加えた全訳本で、都市デザイナー兼シドニー大学名誉教授の著者が、日本と西洋を比較しながら都市の形態とパターンについて読み解いていく。日本では都市の構成要素が「面」的に、西洋では「線」的にデザインされており、そのデザイン手法が都市だけでなく、地図の表記や文字の筆記法にも見られることなどが言及されるなど、非常に興味深い。他にも伝統、文化や宗教などさまざまな観点から都市についての考察がなされている。(nob)



B5判/176頁
3,200円+税/鹿島出版社

au

Architecture and Urbanism
June, 2014 / No. 525
建築と都市 2014年6月号

エー・アンド・ユー
2014年6月号
定価：2,571円(税込み)
発行：(株)エー・アンド・ユー

〒100-6017 東京都千代田区麹町三丁目
2番5号 霞が関ビルディング17階
TEL：03-6205-4384
FAX：03-6205-4387
振替：00130-5-98119

Feature: Vienna – Transition of Theory and Expression

特集：ウィーン — 思想と表現の変遷

ウィーンは、19世紀から20世紀初頭にかけて、継続的に建築運動の先駆けであり続けた。ゴットフリート・ゼムパーに代表される新古典主義、過去の様式からの分離を標榜したゼセッションによるユーゲントシュタイル、そして近代建築の思想を言説と空間で表現し、国家事業にまつわる建築を数多く都市に残したオットー・ワグナー、さらに装飾の排除による近代建築を明快に宣言したアドルフ・ロース。彼らが提示した思想と表現は、現代建築の基盤ともいえる。

ではこれらはいまウィーンの建築にどのように受け継がれているのだろうか。本号では、約60作品の撮り下ろし写真とともに、ブレ近代から近代を経て現代へとつながる思想、そしてそれぞれの時代の建築に反映されてきた表現を総覧する。

In Stores Now
好評発売中

THE JAPAN ARCHITECT
ja SUMMER
2014
94

Order online at
www.japan-architect.co.jp

6月10日発売

定価：2,571円(本体2,381円)

発行 株式会社 新建築社
東京都千代田区麹町三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階 〒100-6017
tel. 03-6205-4380 fax. 03-6205-4386

LEARNING FROM THE NEIGHBORHOOD

住宅地から学ぶこと

JA94号では「住宅地から学ぶこと」と題した特集をお送りします。

昨今では、住宅を設計する際に、周辺環境に対して自らのデザインを調停させていく事例が多く見られるようになりました。つまり、既存の環境から何かを学び、建物というかたちで解答をまちに返していくわけです。

では、何を学び何を返しているのか。それを、2001年以降の『新建築』および『新建築住宅特集』に掲載された全住宅の外観写真から検証し、52の事例を選び出しています。

学びから新しいデザインボキャブラリーが成長し、今度はそれがまちを豊かにしていく、まちと建物の関係の可能性を考察した特集です。ぜひ手に取ってご覧下さい。

住宅特集

新建築

338

2014
SHINKENCHIKU
JUTAKUTOKUSHU

6

好評
発売中

定価 2,057円(本体 1,905円)

特集／密集市街地の住まい

連載
家をつくる図面

光嶋裕介

小島重晴

神家昭雄

塩崎太伸 二題

竹口健太郎・高木麻子

永山祐子

作品／七題

北山恒

特集／調考

現代都市の日常生活の解体と住宅のつくり方

西久保毅人

竹原義三・小池志保子

森田一弥

栖沢祐輔

神原節子

三浦慎

特集作品／七題



発行・発売：株式会社新建築社
〒100-6017 東京都千代田区霞が関
3-2-5 霞が関ビル 17 階

第4回LIXIL国際大学建築コンペ 結果発表

テーマ：プロダクティブ・ガーデン—大樹町を五感で味わう空間



最優秀賞を受賞したカリフォルニア大学バークレー校の「NEST WE GROW」。冬のイメージパース。

LIXIL
国際大学
建築コンペ

次世代サステナブル住宅の技術を模索、検証する「LIXIL国際大学建築コンペ」。LIXIL住生活財団が主催する世界の建築系大学を対象にした実施コンペです。4回目となる今年のテーマは「プロダクティブ・ガーデン—大樹町を五感で味わう空間」。北海道大樹町にある研究施設「メム・メドウズ」*の敷地内に世界9カ国12校から提案を募り、最優秀案に選ばれた大学はその建設までを行います。一次審査では12の参加大学から、オスロ建築デザイン大学（ノルウェー）、カリフォルニア大学バークレー校（アメリカ）、東京農業大学（日本）の3校が選ばれ、4月25日に東京で開催された公開審査会にて、3校によるプレゼンテーションが行われました。公開審査会では、大樹町産の豊富な食材、周辺に広がる広大な自然に対する提案にも重きを置いた審査が行われ、カリフォルニア大学による「NEST WE GROW」が最優秀案として選出されました。最優秀案は、隈研吾建築都市設計事務所によるサポートのもと実施設計を行い、2014年11月に竣工予定です。建設過程は公式facebookにて更新していきます。

■公式サイト：www.lixiljsfound.or.jp/category/1835715.html

■公式facebook：www.facebook.com/LIXIL.IUAC

■審査委員



審査委員長
隈研吾
建築家／東京大学教授



審査委員
野城智也
工学博士／東京大学副学長
東京大学生産技術研究所教授



審査委員
進士五十八
造園家／農学博士
東京農業大学名誉教授



審査委員
小山薫堂
放送作家／脚本家
東北芸術工科大学教授

*環境技術研究機構「メム・メドウズ」について

北海道広尾郡大樹町にある、LIXIL住生活財団が設立した研究施設。競走馬の牧場であった場所に、隈研吾氏の設計による実験住宅や、厩舎を改修した宿泊研修棟などが並び、厳しい気象条件の下、サステナブルな建築・都市の追求を目的とした多様な実験に取り組んでおり、コンペの開催などを通じて、若手研究者らを招いて地域を活性化することも目的としている。

(編)

主催：公益財団法人LIXIL住生活財団 共催：株式会社LIXIL（総合研究所） 北海道大樹町

後援：北海道開発局帯広開発建設部 北海道十勝総合振興局 一般社団法人日本建築学会
公益社団法人日本建築家協会 公益社団法人日本建築士会連合会 株式会社新建築社

■最優秀賞

カリフォルニア大学
バークレー校（アメリカ）
「NEST WE GROW」

■優秀賞（2点）

オスロ建築デザイン大学（ノルウェー）
「An endless path for five senses」

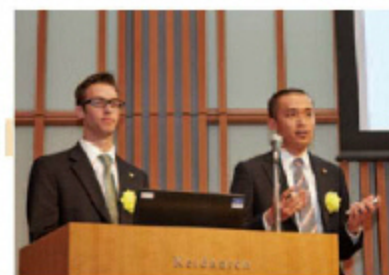
東京農業大学（日本）
「Smoke Garden」

■参加校

デルフト工科大学（オランダ）
ミラノ工科大学（イタリア）
ライプニッツ大学ハノーファー（ドイツ）
ユタ大学（アメリカ）
同済大学（中国）
シンガポール国立大学（シンガポール）
バンドン工科大学（インドネシア）
東京大学（日本）
北海道大学（日本）



表彰式。LIXIL財団理事長 潮田氏（左から3番目）、大樹町副町長 酒森氏（左から4番目）、審査員4名とファイナリスト3校の指導教官および学生たち。



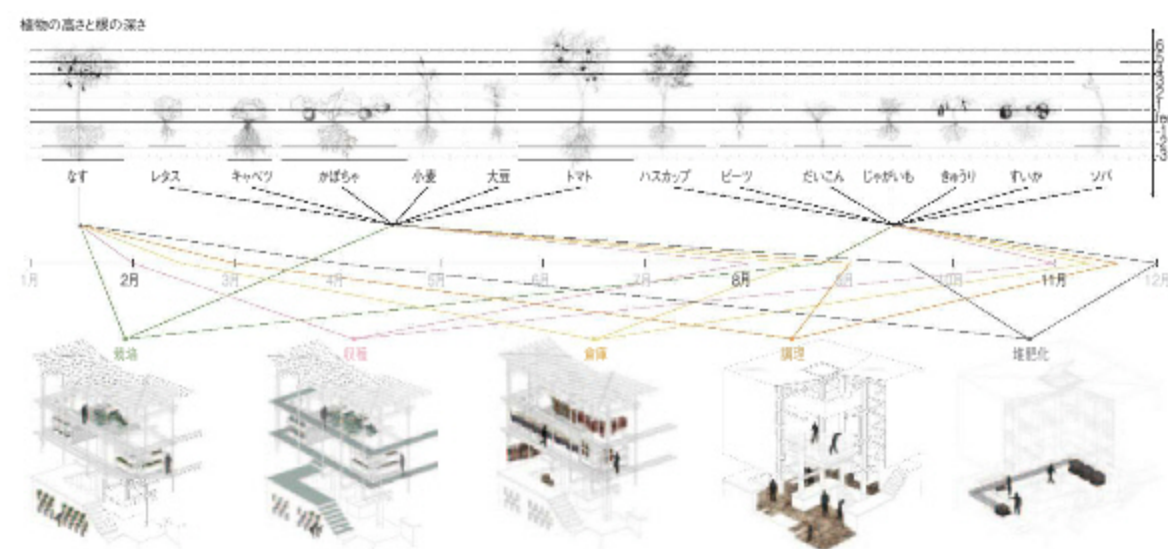
Baxter Smith (左).
Hsiu Wei Chang (右).

カリフォルニア大学バークレー校 (アメリカ) 「NEST WE GROW」

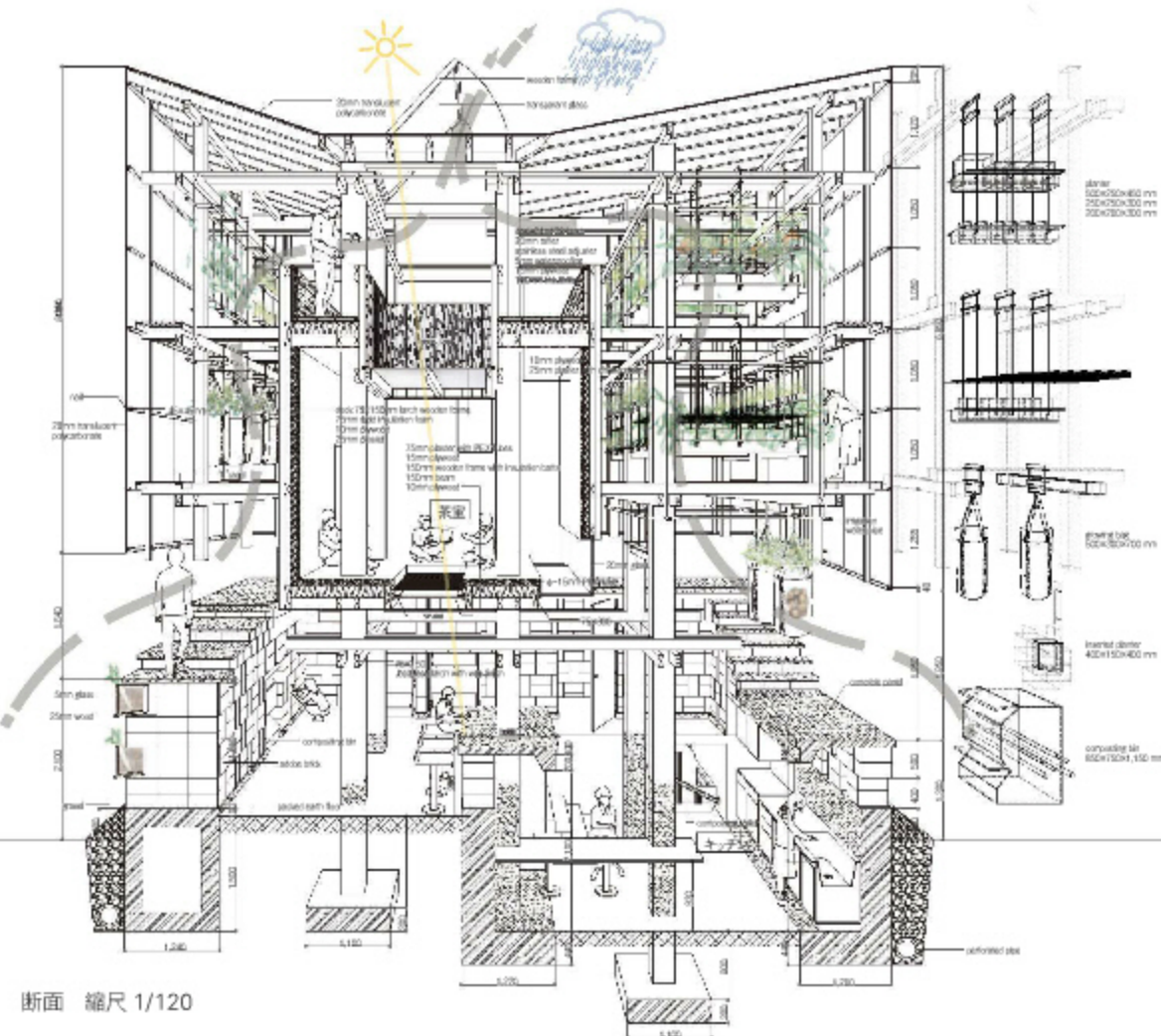
指導教官: Dana Buntrock
学生: Hsiu Wei Chang Baxter Smith
Max Robert Edwards Yan Xin Huang
Hsin Yu Chen Fanzheng Dong



夏のイメージパース



植物栽培と空間利用の概念図



断面 縮尺 1/120

構成ダイアグラム

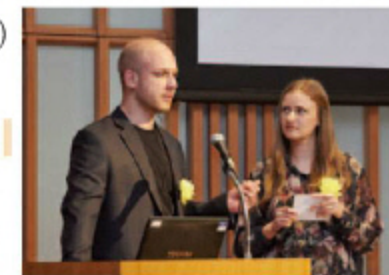
私たちは資源豊富な大樹町に、大地が食物だけではなく、家全体を育てる提案を行う。地上に築かれた分厚い壁は周囲の土から掘りだされた日干し煉瓦でできており、レタスや大豆のような土中の浅い場所に根を張る野菜は、壁に穿たれた穴の中で育てることができる。掘削されていない土で覆われたままの土地は、植えつけ用の畑となる。上部には、日本製のラーター材により立体的なフレームをつくり、キュウリ、カボチャ、ナスなどの中程度、もしくは深く根を張る野菜のためのプランターを横に並べて垂直方向に積み重ね、また袋やネットをフレームに吊り下げ、大樹町

の庭に生命力を与えるよう促す。この家のプログラムは、成育、収穫、貯蔵、調理/食事/団樂、堆肥化という地元産の食材のライフサイクルで決定される。建物が、ここでの年間を通じた活動のためのプラットフォームになる。地元住民も旅行客も、そうしたサイクルに応じて変化するプログラムに参加することで、大樹町の四季折々の自然を体験する。収穫物は、日干し煉瓦の壁体内に貯蔵され、また乾燥用の木製フレームに吊るされる。地上階にはキッチンがあり、人が集まり、料理をし、食事をする。上層階に設けられた部屋は

茶室として利用するが、冬場には少人数用のシェルターとしても機能する。ポリカーボネートの煙突型の覆いにより、茶室の上部にある木製のタンクに雨水を貯蓄し利用する。また食物を堆肥化するため日干し煉瓦の壁にコンポスト設置する。冬の間は堆肥の山に水道管を通し、茶室の床まで温水を運び、住宅を暖める。こうしたプロセスを通じて、食物は土壌となり、土壌は食物となる。「NEST WE GROW」は両者を実現するための足場を提供する。(応募案より抜粋)

オスロ建築デザイン大学 (ノルウェー) 「An endless path for five senses」

指導教官: Neven Fuchs-Mikac Raphael Zuber
Thomas McQuillan Torunn Stensheim
学生: Pedro Sjöblom Tavares Juliane Mari Myking Eide
Mercè Lorente Gras David Kennedy
Niklas Lenander Young Eun Choi



Pedro Sjöblom Tavares (左).
Juliane Mari Myking Eide (右).



イメージパース

私たちは、大樹町の美しさを味わうための移動空間を提案する。来訪者によって植えられた野菜や花、植物が広がるランドスケープを巡るように、600mにわたる小道が設置されている。途中にある3本の小道の結節点は、人びとが集える場所となる。北西風を遮るシェードが夏場は日陰となり、立ちどまり、休憩をとり、食事し、瞑想する空間となる。また少し高い位置にある展望台からは、より広い環境、湿原、川、海、森、平野、山が見え、これらと一体化する経験を可能にする。小道にはいくつかのポイントがあり、小道を散歩することで五感

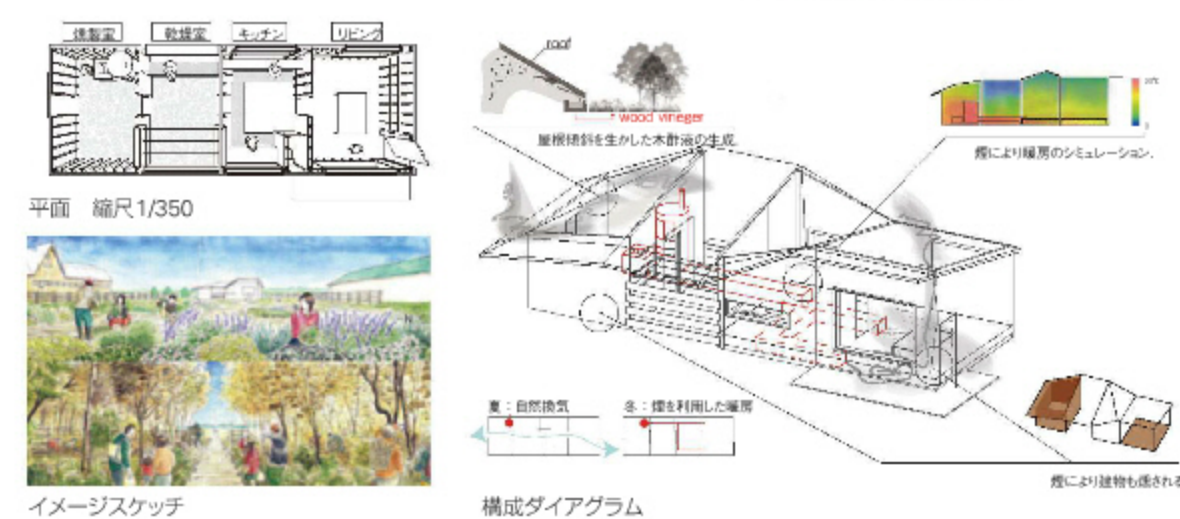
で大樹町の自然を体験する。構造体には105mm角の入手容易な規格木材を使用し、日本やノルウェーの伝統建築に見られる、単純な木材を重ねる技法で組み立てられる。単純なスクリー杭基礎により設置を簡易化し、既存の自然に与える負荷を軽減する。時間に関連する儀式的なプロセスがこの場所を土地に根付かせる。結婚祝いのリンゴの木や、子どもの誕生記念のサクラの木の植樹など、この地を訪れ木々の成長を見守ることで、長期にわたって誰もが楽しめる空間となる。(応募案より抜粋)

東京農業大学 (日本) 「Smoke Garden」

指導教官: 阿部伸太
学生: 崎裕起人 金子大成 坂口翔 野上隆史



金子大成 (左). 崎裕起人 (右).



イメージスケッチ

構成ダイアグラム

私たちは、大樹町をひとつの大きな庭としてとらえ、地域資源を最大限に生かすことができる調理法である「煙製」に着目した空間を提案する。煙製をつくる際の「煙す」、「乾かす」、「調理する(スパイスにつける)」、「食す」の4つのプロセスを空間に落とし込み、それぞれの行為に適した部屋により建築を構成した。人びとは大樹町の四季折々の素材を煙製にして楽しむことができる。屋根も煙製に基づいた傾斜を持つデザインとしている。冬場には煙製をつくる際に生じる煙を、建物全体に設置したパイプに通し、暖房として利用する。

また周辺には、煙製の味付けに用いるハーブを育てる庭(スパイスガーデン)や、煙す際に使用するウッドチップの枝を収穫する森(プレイバーフォレスト)を配置しており、ハーブやウッドチップを収穫することで、煙製を通して記憶の中の味覚や嗅覚を、また薪を燃やす音により聴覚を刺激する。私たちが提案する「Smoke Garden」では、「煙製」が人びと、資源、ランドスケープを結びつけるツールとなり、人びとは「煙製」を通して大樹町の自然・素材を五感で体験することができる。(応募案より抜粋)

隈 今回残った3校はそれぞれが異なるキャラクターを持ち、そのキャラクターとして飛び抜けていました。オスロ建築デザイン大学(以下、オスロ)は、ノルウェーと日本の木造文化、さらに軸を探り入れたランドスケープデザインが組み合わせ、力を発揮しています。ただ単純に軸線を通すだけでなく、小道や屋根にもっと変化があれば、さまざまな場面が生まれ、より面白い提案となったのではないのでしょうか。東京農業大学(以下、東農大)は、機能ごとに屋根のかたちが変わるデザインが庭園のデザインに繋がると、庭にも変化が与えられたと思います。カリフォルニア大学バークレー校(以下、バークレー)は提案にある乳白色のポリカーボネート板でできた覆いでは内部が見えず、ランドマークとしての役割が果たせないのではないのでしょうか。ただ垂直に展開する庭という提案が現代的で、面白さを感じました。

野城 オスロは非常に限られた要素で、これまでに「MEMO」に建てられた作品で構成されたランドスケープに新たな意味を与えています。バークレーは、さまざまな要素をこの単純なかたちに重層的に組み合わせ、調和の取れた非常に力量のある提案でした。東農大の提案は、図面を見ていて食事がしたくなるおいしい提案ですね。提案されている活動や地面に根付いたかたちには可能性を感じます。

進士 バークレーは高度の科学技術を詰め込んだ緻密なモデルですが、植物工場とも言え、人工的過ぎると感じました。実用レベルでは、あの限られたスペースのコンテナで野菜を栽培し続けると数年でダメになるでしょう。庭の基本要素である大地、風土、気候をこの提案はどう受け止めているのでしょうか。大樹町で必要とされるのでしょうか。岐阜神社や尾瀬の木道をイメージさせるオスロは大自然と対峙する建築の原型で面白いですが、東農大の提案は、今後の運用を考えると最も現実的ですが、庭と建物の使い方への提案がほしいですね。

小山 今回のテーマでは「大樹町」に建てるのが非常に重要です。町の人々を考えると、東農大の提案は魅力的ですが、かたちとしての説得力に乏しいのではないのでしょうか。オスロの提案は、例えばベースだけを小道沿いにつくり、夏は人が集まる場所、冬はその上に雪を積みアイスホテルにするなど想像が膨らみます。ただシンプルだからこそ、使いこなすための企画力が必須となりますね。あの風景をつくる担い手までシナリオが描けるとよかったです。中途半端に人びとを考えるよりも、コンペが繰り返され、この場所が世界の建築の先端、面白い建築が集結した場となること、大樹町にとって必要なのではないのでしょうか。そのため、バークレーを推したいと思います。

隈 このコンペが積み上げてきた風景に建築によって応えているのはバークレーですね。これからの設計で植物や人びととの関係を補強することを前提に、バークレーの提案を最優秀案としたいと思います。

参加9大学の作品&審査講評

デルフト工科大学 (オランダ)



「THE KITCHEN GARDEN」
段差に沿ってタイヤを利用したコンポストによる壁を設置し、エリアごとに光環境や熱環境の違いを生み出す。

ミラノ工科大学 (イタリア)



「s-Ensō house」
アイヌ民族の住まいであった壁穴式住居に由来したかたち、アルミによるカーテンの開閉で室内環境を調整する。

ライプニッツ大学ハノーファー (ドイツ)



「HERBARIUM」
メモ、メドワズに生息するハーブの「標本室」、いまある無数のハーブを採集して、敷地のことを学ぶ。

ユタ大学 (アメリカ)



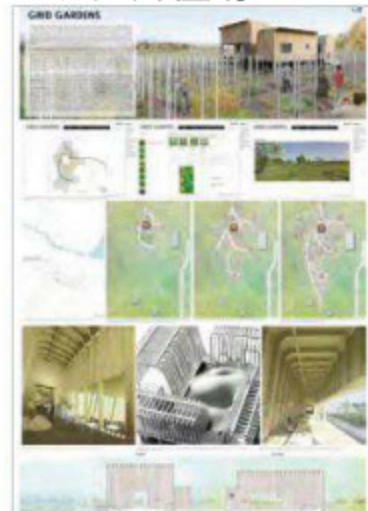
「GARDEN HOUSE」
建物脇に設けたコンポストが熱源となり、室内環境を調節する。大きな屋根は夏の直射を遮る。

同済大学 (中国)



「Fence Garden」
既存の木柵を再配置し、それに沿ってつる性植物を育てる。夏は半屋外空間、冬は屋根に付けたカーテンで室内化。

シンガポール国立大学 (シンガポール)



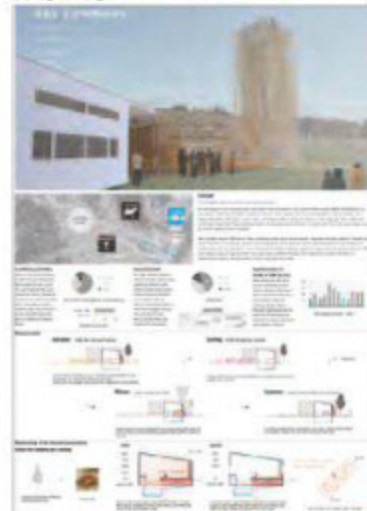
「GRID GARDENS」
2m角のグリッドで区切りられた土地をネット上に公開し、場所と植物を選択して植物を育てる。

バンドン工科大学 (インドネシア)



「TERRACE & BRIDGE HOUSE」
庭と繋がるテラスと2階の高さのブリッジが建物内部を通過し、建物と植物の世話をする行為とを繋げる。

東京大学 (日本)



「HAL Commons」
大樹町に根付く漁業を活かし、春秋には収穫祭を企画。木製の格子状建物のタワー頂部からは海が見える。

北海道大学 (日本)



「Utaripe」-gastronomic party-
“食のインターフェース”となる燻製タワーと回廊。泥炭、木、雪などを用いて自然エネルギーを発生させる。

今回、最終講評会に残った3校も含め、世界9カ国12校の大学の参加がありました。ファイナリスト3校以外の9大学について審査員4名にコメントをいただきました。

隈 ミラノ工科大学は、アルミの箔を同心円上に使用して人が過ごすための空間をつくり、その中心に置かれたキッチンで「食べる」行為を添える提案で興味深かったのですが、「食べる」ことはもっと多面的で重層的な行為であり、ただキッチンを中心に置くというのではなく、もっと踏み込んだ提案が感じられないのが残念でした。同済大学は、壁で閉じるのではなく、既存のフェンスで空間を囲い込むことに挑戦しています。全体として遊牧民のパオのような提案で、馬との関係も面白く、建築のかたちとしてはとても好きな提案でした。ただ、北海道という地で吹きさらしであることには疑問が残ります。また食べる行為が具体的にどうデザインされているかが見えづらいのも残念でした。

野城 バンドン工科大学(以下、バンドン)の提案は、自然の中での活動と建築の関係に重点を置き、その両方がデザインできていたと思います。バンドンという距離も遠く、気候も異なる地から、この北海道の風景を想像されており、とても印象的でした。東京大学はランドスケープを解析し、ランドマークとなるタワーをつくり、そこから見える海の景色を注意深く検討しています。さらにそこが燻製をする施設となることが魅力的で、また非常に論理的に解析した点が印象に残っています。

進士 ライプニッツ大学ハノーファーは、植物の標本という昔ながらのヨーロッパ貴族の文化が背後に感じられて印象深かったのですが、建物と庭との関係が分かりにくいと感じました。シンガポール国立大学は、人びとの参加により庭が発展することを前提にグリッドシステムを緻密に計画しています。多種類を混ぜると害虫の発生を防ぐという実際の農業でも行われている栽培方法が検討されており、生態学的に面白いと思いました。バンドンは、俯瞰的視点から植物を見るという体験がユニークで感心しました。デルフト工科大学は中国黄土地域の伝統的住居「ヤオトン」のようなつくりで、実用化は難しい思いながらも、実験住宅としてはとても面白いものです。ユタ大学の馬も含めた自然のサイクルに着目する点は、この土地ならではの、もっと楽しい庭のイメージを抱けるとよかったですね。北海道大学は、横に燻製システムを展開する東京農業大学に対し、縦に展開した提案でした。明快な燻製文化が表れていましたが、提案があっさりしすぎていたように思います。

小山 私が一番推していたのは東京大学です。燻製により大樹町を結び付け、土地ならではの新しい商品のつくり方に軸が置かれていました。建築としても、また体験してみたいくなるようなかたちが提案されており、かつ遠くまで見渡せる展望台があるならば、隈さんの建築に似ており、ならば隈さんが設計すればよいのではという疑問が残りました。

JA81

SPRING,
2011 季刊

三分一博志 特集号

再版決定!!

掲載作品

三輪窯II (不走庵)
自然体感展望台六甲枝垂れ
Miyajima Office 船倉税理士事務所
Energy Penthouse
Wood Egg お好み焼館
ののやま矯正歯科医院
犬島アートプロジェクト「精錬所」
Base Valley
プロジェクトウェスト
太陽の家
Brood
ストーン・ハウス
民家再生計画
角田歯科医院
北向傾斜住宅
三輪窯
Ancora
クリニック
テラス・ハウス
Less
エアー・ハウス
ケース・スタディ・ハウス
Running Green Project

JA81 特別定価:2,880円(本体2,667円)
判型:A4変形版(297×226mm) 頁数:208頁
編集・発行:株式会社新建築社
〒100-6017 東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階
tel:03-6205-4380 fax:03-6205-4386
<http://www.japan-architect.co.jp>



公開審査会の模様は下記URLからご覧いただけます。

英語: <http://www.ustream.tv/channel/lixil-iuac140425-en>

日本語: <http://www.ustream.tv/channel/lixil-iuac140425>

Hospital Architecture

ホスピタルアーキテクチャー

クリスティン・ニクル・ウェーラー ハンス・ニクル 編

100を超える世界各国のチャレンジングな最新病院事例を、
美しいビジュアルで一挙紹介。



数量限定にて好評発売中!!

医療建築設計者のマストアイテム!!

定価：本体 **7,500** 円＋税 **完全日本語翻訳版**
サイズ：22.5 × 29.5 cm 424頁 ハードカバー

お問い合わせは下記まで

<http://www.japan-architect.co.jp/>
03-6205-4380 (新建築社出版部)

facebookページ開設しました!

ホスピタルアーキテクチャー
[facebook.com/HospitalArchitecture](https://www.facebook.com/HospitalArchitecture)

FAX. 注文書

記入後このまま送信してください。着払いにて発送いたします。
別途手数料200円を申し受けます。

申込者氏名 _____

送付先住所 〒 _____

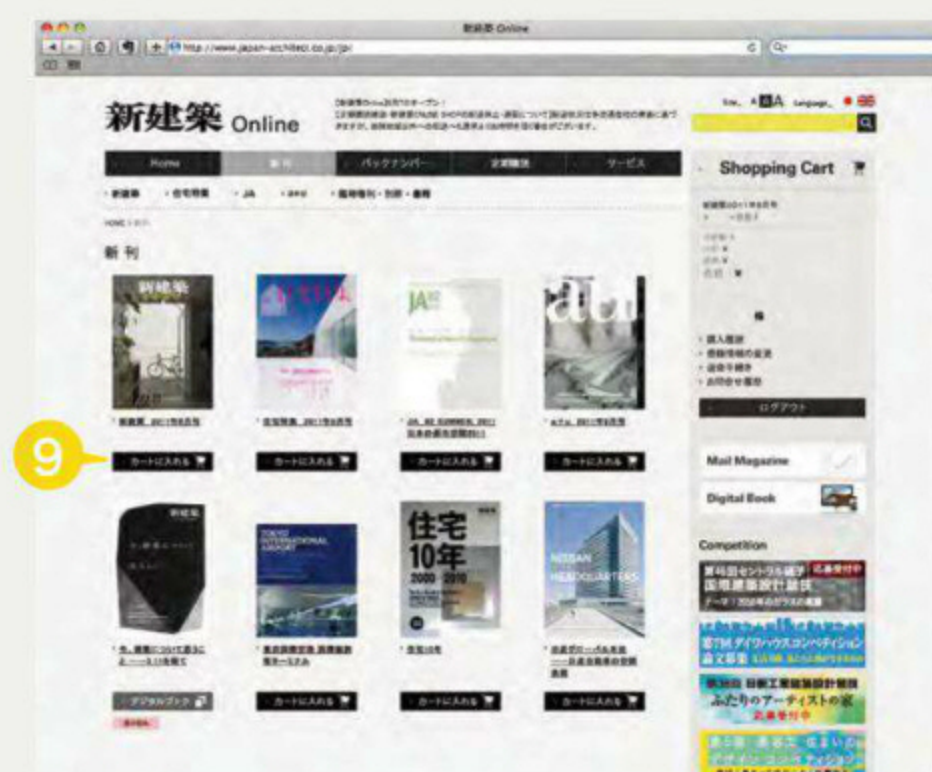
電話番号 _____ FAX. 番号 _____

発行 株式会社 新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階 〒100-6017
tel. 03-6205-4380 fax. 03-6205-4386

購入部数 _____ 部

FAX. 送信先 **03-6205-4386**

新建築社WEBサイト 新建築 Online



- * 見やすいサイト
最新号がひとめでわかるTOPページ ... ①
- * googleサイト内検索が便利 ... ②
- * 登録が簡単に ... ③
- * WEBコンテンツが充実
MOVIE ... ④
100以上の建築動画コンテンツを公開
- SPECIAL ... ⑤
新建築社の関わるイベント情報やWEB
オリジナル企画を紹介
- TV ... ⑥
イベントのUSTREAMアーカイブ
- Photo Gallery ... ⑦
雑誌未公開写真のアーカイブ
- Download ... ⑧
月刊誌の総目次、informationのPDF
など、無料コンテンツをストック

- * Online shop が便利
カートに入れるをクリック! ... ⑨
会員登録なしでも購入可能
- 詳細は、下記URLをご覧ください。

<http://www.japan-architect.co.jp>

子ども主体でつくる建築

京都市立洛央小学校ブックワールドデザインプロジェクト

門内輝行（京都大学教授）

今日、社会的状況は大きく変化し、建築・都市の設計者には多岐にわたる問題への対応が求められている。地球環境問題の深刻化、コミュニティの脆弱化、災害リスクの増大や災害からの復興、先進国における人口減少や途上国における爆発的な人口増加による社会の変容、情報化による政治・経済・文化のグローバル化への対応などがそれである。

こうした変化が「デザイン（設計）」の概念に質的転換をもたらしていることは、かつて筆者が「人間－環境系のデザインの展望－21世紀のデザインビジョン」（本誌0301）と題する論考で指摘した通りであるが、その後、複雑な（意地悪な）問題に取り組む「デザイン思考」や「イノベーション」の理論・スキルが大きな注目を集めてきたことは周知の事実であろう。たとえば、2004年にスタンフォード大学デザインスクール、2010年にアアルト大学（ヘルシンキの工科大学、経済大学、芸術デザイン大学をデザインの視点から統合）、2013年に京都大学デザインスクール（博士課程教育リーディングプログラム「デザイン学大学院連携プログラム」、筆者も創設に参画、<http://www.design.kyoto-u.ac.jp/>）など、新たな概念に基づく教育機関・プログラムが次々に創設されてきたことは、この世界が大きく拡大してきたことの現れと言えよう。

現在、人工物の生産能力の増大に伴い、身の回りには人工物が溢れ、人びとの関心は機能・性能から意味・価値に向かっている。また、安全性・健康・利便性に加えて、快適性・持続可能性の条件を充足することが求められている。さらに、個々の人工物の条件を充足するだけでは解決しない問題も少なくない。自然の空気や光を取り入れない建物、都市景観の調和を乱す建物など、多くの問題が人工物と人間・環境との関係や人工物相互の関係が設計されていないところから生じているからである。このように人工物をめぐるデザインの世界が大きく拡大していることを明確に認識しておく必要がある。

ここで少し違った角度から設計の世界の変化を描き出した経済価値モデルにも言及しておきたい（バインII, B.J., ギルモア, J.H. 『[新訳] 経験経済－脱コモディティ化のマーケティング戦略－』, ダイアモンド社, 2005年）。このモデルによると、経済価値は、コモディティ（自然界から得られた産物）から、製品（原材料であるコモディティを組み合わせで生み出された物品）、サービス（個々の顧客の要求に応じてカスタマイズされた付加価値）、そして経験「エクスペリエンス」（顧客を魅了し、サービスを思い

出に残る出来事に変えることで生じるもの）へと進化する。最近の「サービスデザイン」や「エクスペリエンスデザイン」に対する関心の高まりは、このモデルから見るとよく理解できる（Wright, P., McCarthy, J. “*Experience-Centered Design*”, Morgan & Claypool, 2010）。たとえば、携帯電話の所有者は、今や製品よりもその付加価値であったサービスに多くの対価を支払うであろうし、今注目されているMICE（Meeting, Incentive tour, Convention またはConference, Exhibition）戦略を推進しているエリアでは、会議・展示場を訪れた人びとに、周辺の庭園、美術館、レストランなどを組み合わせた特別の経験を提供する試みが進められているが、彼らはそれに十分な対価を支払うはずである。デザインの世界は、製品からサービス、エクスペリエンスへと広がっているのである。

人間－環境系のデザイン

こうしたデザインの世界の拡大を背景として、広い意味でのデザインは、単体としての人工物をつくるだけではなく、人工物相互の関係や人工物と人間・環境との関係に変化をもたらす営みとして理解しなければならなくなっている。このように拡張されたデザインを「人間－環境系のデザイン」と呼ぶのである（松岡由幸編、門内輝行他著『もうひとつのデザインーその方法論を生命に学ぶー』共立出版、2008）。

人間－環境系のデザインでは、人工物を単体として眺めることをしない。人工物はいつも周辺の自然環境、社会－文化環境、他の人工物を含む人工環境（構築環境）、情報環境と関連付けられており、決して孤立しては存在し得ない。人間の生命と暮らしは、多層に及ぶ環境の広がりの中で、歴史的な連続性を持って展開されるからである。現代社会における多くの課題は、要素としての人工物をデザインするだけでなく、その人工物を取り巻くさまざまな関係をデザインすることにより、豊かな生命と暮らしを育む環境・社会システムを創造することで対応できると考えられる。また、与条件から解を導き出すミクロなプロセスだけでなく、与条件を問い直すところから始めて、つくられたものが実際に使用され、その結果がデザインにフィードバックされていくマクロなプロセスとしてデザインを理解する必要がある。実際、町家や集落の機能的で美しい造形は、

長い時間をかけて多くの人びとに使用され、環境に適応するように少しずつ進化をとげた結果である。そのように、時の経過と共に魅力的になるデザインは、デザイン行為の帰結を踏まえた維持・更新・保存・再生・創造という「つくること」と「使うこと」とが融合した持続的なプロセスから生み出されるものである。

こうしたデザインの営みが定着していた伝統社会では、幾世代もかけて醸成されたプロトタイプとなる人工物が共有されていて、特定のコンテキストに応じてそれを少し変形すればデザインの解が得られる仕組みが成立しており、共同体に固有の景観や文化が形成されてきたのである。それに対して、デザインの主体が設計（生産）者とユーザーに分離し、次々に新しいものを生産し消費していく現代社会では、人工物が生活世界にいかなる帰結をもたらしているか、デザインにフィードバックする回路が基本的に欠落している。「つくること」と「使うこと」を結び付けるこのフィードバックの回路を回復することが、優れた建築をデザインする鍵を握るのである。今日、ユーザー参加のデザインが注目される理由は、このフィードバック回路が担保されるからである。

このような考えに基づいて、今回、京都市立洛央小学校ブックワールドのデザインプロジェクトを実施する機会に恵まれたので、長年構想を温めてきた子どもを主体とした建築デザインの実践を展開することにした。すなわち、個性豊かな子どもたちとブックワールドをめぐる多層に及ぶ関係を丁寧に解釈し、それらを重ね合わせたシステムとして建築をデザインすること、そしてそのプロセスを子ども主体で展開することによって、子どもの夢や経験を踏まえた魅力的なブックワールドをデザインすることを目指すことにしたのである。なお、これは実現するリアルなプロジェクトであり、そこに子どもが主体として登場するところに大きな特徴がある。以下本稿では、人間－環境系のデザインの視点から、①子どもを主体として建築をデザインすることの意味について考察し、②そこで生成される子どものための建築のポテンシャルを問い、③子どもの創造力を育む建築のデザインの可能性を探索してみたいと思う。

子どもを主体としたデザインプロセスの展開

一般に参加のデザインにも種々の相がある。たとえば、①人びとは決定権を持たず、意見のみを言う、②どの案が選択されるかを決定する、③選択すべき案を自らの手でつくり出す、といった参加の型が区別される（Becker, F.D.: “*Housing Messages*”, Dowden Hutchinson & Ross,1977）。単なる問題解決の道具としての側面から、主体の能力を発展させるものまで、参加にはいくつかの段階がある。C. アレグザンダーは、参加の意義として、人びとは誰よりも自分の要求を熟知していること、そして、参加が人びとの連帯を強め、彼らをその世界の中に包み込むことの2点を挙げている（『オレゴン大学の実験』, 鹿島出版会, 1977年）。

子どもがデザインに参加する場合も、同様にさまざまな参加の段階を想定することができるが、筆者が関心を抱いているのは、子どもたちが自由な発想で多くのアイデアを出し、お互いに協働しながら、それらを基にデザインを統合していく深いレベルの参加である（当然のことながら、参加のレベルは子どもの発達段階にも依存する）。デザインの主体は子どもであり、大人が主体となって進められる通常のプロセスとは主体が反転したプロセスが展開される。とはいえ、すべてが子どもによってデザインされるわけではなく、子どものほか、デザインを支援する専門家、先生、父兄、地域住民、さらには施工業者、行政の担当者など、デザインに関わる多種多様な主体が参加した社会的プロセスとして展開される。

こうした子どもを主体としたデザインプロセスを展開するには、多くの手間と労力がかかり、加えて子どもの主体性を損なわないように細心の注意を払う必要があるが、それ以上にそのような試みを実践しようという発想自体が浮かんでこないことが多いのではないかと思う。子どもがデザインの主体となる創造的な能力を有しているとは思わない固定観念を抱いている人が多いことがその理由である。小学生でも1年生と6年生ではその能力やスキルには大きな差異があり、発達段階に応じてデザインの主体となるレベルを考慮しなければならないが、その辺りの蓄積が理論的にも実践的にも不足しているのである。

ドイツの小学校では「学び・建築・遊び」（Lehrbauspiele）と題して、建築・都市の模型を用いた子どもの教育が行われているのを知っていたので（Beck, P., et al.: Lehrbauspiele – Architektur als politisches Medium, “*ARCH+*”, Nr.30, 1976, pp. 2-22）、洛央小学校の依頼があった時に、子どもを主体としたデザインプロセスを提案し、6年生の児童全員93名と、正規の総合学習の時間を使ってプロジェクトを展開することになったのである。このようなプロセスを実現するには、小学校の先生方や地域住民など、多くの関係主体の全面的な理解と支援が必要であることは言うまでもない。

子どもを主体とした建築・都市デザインの試みは、最近少しずつ増えてきている。ドイツのギルゼンキルヘン・ビスマルク統合学校では、新しい教育ビジョンに基づく学校建築づくりを子どもが主体となって進めており、児童と専門家が1/10の巨大模型を囲んで議論するワークショップや、子どもが施工にも関与する画期的な取り組みを展開している（P. ヒューブナー, 『こどもたちが学校をつくる－ドイツ発・未来の学校』, 鹿島出版会, 2008年）。また、フィンランドのNPO「子どもと若者のための建築学校Arkki」では、建築を学ぶことが「子どもが自分を取り巻く環境を受け止め、考え、理解し、概念化し、評価する能力を育てることに繋がる」という考えの下、実際に手を使って自分のアイデアを形にするさまざまな3次元的な手法を用いたデザイン教育が実践されている（<http://www.archisearch.gr/article/1357/-arkki-school-of-architecture-for-children-and-youth-launches-its-international-programme-in-greece-.htm>）。こうした子どもが自分の経験を通じて学ぶ手法をプロダク

ティブ・プレイ・メソッドと呼び、さまざまな授業に取り入れている。たとえば、美術館のワークショップ「スイート・シティ」プロジェクトでは、ビスケットやチーズ、パスタなどの身近な食材を使って都市の模型をつくり、遊びのような雰囲気の中で自分たちの街を理解する試みを展開している。日本でも伊東豊雄氏が実践している「子ども建築塾」がよく知られている（<http://tojuku.or.jp/course/children/>）。

洛央小学校ブックワールドプロジェクトでの実践においても、後述するように、1/50、1/30、1/10の模型、スケッチ、言葉などを多用し、子どもたちの自由な発想を促し、「考える・つくる・振り返る」といったプロトタイプینگと振り返りを繰り返すことにより、子どもの主体性を生かしたプロセスの展開を図っている。

子どもが紡ぎ出す建築のポテンシャル

子どものための建築のあり方を考える上で、子どもを主体としたデザインプロセスを通じて、彼らがどのような建築を紡ぎ出しているかを眺めてみるとたいへん参考になる。たとえば、ワークショップを通じて浮かび上がった言葉や絵を眺めていると、「カラフル、明るい、ハンモック、ふわふわのクッション、ふかふかのソファ、やわらかめの立方体のスポンジ、寝るところ、てんとう虫の椅子、個室のような場所、洞窟、隠れ部屋、大きなホワイトボード、落書きボード、芝生のような場所、全体が本棚で囲まれている、本棚に挟まれて寝転がって読める場所、ステージ、トンネル、高低差をつくる、橋、2階をつくる、はしごで上に昇ることができる場所、見渡せる……」などの多くのアイデアが、子どもたちから提示されている。これらを解読していくと、人間と環境との関係をめぐる研究の中で発見されてきた子どものための建築・空間に関する知見が驚くほど数多く含まれていることが分かる。

ところで、人間が意味を解読する現象（プロセス）は「記号論」（semiotics）によって研究されているが、アメリカの記号学者C.S.パースは、その現象に一次性、二次性、三次性という3つのカテゴリーがあることを明らかにしている（米盛裕二『パースの記号学』勁草書房、1981年）。一次性は「イメージ・感覚」、二次性は「事実・行動」、三次性は「論理・思考」に関わる現象と言えるが、パースはこれらのカテゴリーを相互に関連付けており、イメージ・感覚が事実・行動、さらに論理・思考へと発展すると考えている。このモデルによって、具体的に子どもたちが紡ぎ出した建築の意味をいくつか解読してみよう。

まず、子どもたちは「ふわふわ、柔らかい、カラフル、明るい」といった形容詞で表現される空間のイメージに強い関心を抱いている。また、「森、野原、芝生、川、海、池、花、土、島、空、魚、てんとう虫」などの自然のメタファーを挙げていることも大きな特徴である。子どもたちは、イメージやメタファーといった曖昧で多義的な一次性の現象に関心を抱

いており、詩的・芸術的な世界に憧れていることが分かる。次に、行動に関わる二次性の現象との関連でも、興味深い空間を紡ぎ出している。「人間はなわばりを持つ動物である」と述べたのは、人類学者のE.T.ホールであるが（『かくれた次元』みすず書房、1970年）、個室のような場所、囲まれた場所、洞窟、あるいは秘密基地などのように、子どもも「なわばり（テリトリー）」を形成することに重要な意味を見出している。また、多くの子どもがふわふわのソファやクッションなどの持ち運びできる家具を挙げているが、それらの家具を好きな場所に配置するは、個人の領域や友だちと過ごす領域を形成することに関心を払っているからに他ならない。子どもの行動を詳細に観察したR.パーカーらは、子どもの行動は「行動が生起する社会的／物理的状況」を見ることによってよりよく理解できることを指摘し、それを「行動セッティング（行動場面）」と名付けたが（A.W.ウィッカー『生態学的心理学入門』九州大学出版会、1994年）、ふかふかのカーペットや少し高としたステージに子どもたちが集まる姿は、行動セッティングをデザインする重要性を端的に教えてくれる。

さらに興味深い点は、子どもたちが「見晴らし、ステージ」と同時に「隠れ部屋、秘密基地」などをつくりたい空間として提示していることである。これは「人間は眺望と隠れ場を同時に満足する場所を好む」ことを指摘した地理学者J.アップルトンの「眺望－隠れ場理論」に対応している（『風景の経験－景観の美について』法政大学出版局、2005年）。子どもがリストアップした言葉の中に、そのような人間の生物的法則性が見事に捉えられていることは大きな驚きである。実際、両者を兼ね備えた要素としてデザインした「ステージ・トンネル」は、子どもたちの大のお気に入りの場所で、いつも子どもたちが群れる場所となっている。

こうして見てくると、子ども主体の建築デザインを通して、「静かに本を読む場所」という「論理・思考」の層（三次性）のみを重視した従来の図書室では見落とされていた子どもの「イメージ・感覚」の層（一次性）や「事実・行動」の層（二次性）に対応する建築のポテンシャルを鮮明に浮かび上がらせることができ（「論理・思考」の層が大切であることに変わりはない）、そのことが多くの子どもが集まる新しいブックワールドを創造することに繋がったのではないかと考えている。

子どもを主体としたデザインプロセスが、子どものための建築の質に大きな影響を及ぼし、それが子どもたちの新たな経験（エクスペリエンス）を誘発するという重層的な関係が生み出されていく。

子どもの創造力を育む建築のデザイン

人間－環境系のデザインとして実践するために、子どもを主体としたデザインプロセスを展開したのだが、実際に子どもたちは予想以上に豊かなアイデアを生成してくれたのである。この時、子どものワークショップが、建築をつくるだけでなく、子どもたち自身の創造力を育む上で大き

な役割を果たしていることについても注目する必要があると思う。ここでは、子どもを主体とした建築デザインのプロセスがどのようなプロセスであったのか、そして、子どもたちにどのような影響をもたらしたのかについて、少し踏み込んで考察しておきたい。

子どもを主体とした建築デザインでは、考えたことを言葉・スケッチ・模型などを用いてプロトタイプとしてつくり出し、それを皆の前で語り合い、共同体で共有し振り返る。この「考える・つくる・振り返る」プロセスを通じて、子どもたちの中に深い気付きが起こり、学びが生まれるのである（美馬のゆり、山内祐平『「未来の学び」をデザインする－空間・活動・共同体－』東京大学出版会、2005年）。ここには、アイデアを外在化した言葉・スケッチ・模型などとの対話や他者との対話を通じて、プロトタイプینگと振り返りが同時に進行する「行為の中の省察（reflection-in-action）」と呼ばれるプロセスが含まれていることに留意したい（D.A.ショーン『省察的实践とは何か－プロフェッショナルの行為と思考－』鳳書房、2007年）。人間は自らの行為を振り返る反省的思考を通して学びを深めていくのである。子どもが他者との協働で得られる学びは、個人を超えて、集団の学びを発展させることであり、それは建築をつくる能力にとどまらず、21世紀を生き抜く能力、すなわち、つくる力、課題を発見し解決する力、他を尊重して協調する力、未知のことに柔軟に対応していく力を育むことになるはずである（伊奈々子『子どもの創造力スイッチ！－遊びと学びのひみつ基地－CANVASの実践－』フィルムアート社、2014年）。さらに、子どもを主体としたデザインプロセスで留意しておくべき点は、子どもの多様性を尊重し、異なる背景や多様な能力を持つ子どもたちがコミュニケーションを通じて協働し、新たな価値を生み出すようにすることである。そのためには、プロセスにおいても、そこで生成されたアイデアにおいても、多様性を確保することが肝要であり、その多様性を統合していくところに、創造的な価値が生成される可能性が拓かれていくことを心にとどめておく必要がある。

洛央小学校ブックワールドプロジェクトの実践

洛央小学校は1992年に京都市都心部の5つの小学校を統合して発足した学校であり、2013年6月に校舎1階に設置されたブックワールドと名付けられた図書室の改修プロジェクトを依頼された。プロジェクトには、6年生の児童93名、先生方、京都大学教員・学生、保護者や地域の方々、有隣教育財団（寄付者）、京都市教育委員会・公共建築部、実施設計者、施工業者、報道関係者などを含む多くの関係主体が参加した。2013年8月から11月にかけてワークショップを行い、2014年1月には実物大モックアップを用いたワークショップも実施し、2014年3月に実現したリアルなプロジェクトである（42-43頁参照）。

ブックワールドを「静かに本を読む場所」から「～ができる場所」へと発展させていくために、子どものワークショップを4回開催した。最初の2回

のワークショップでは、93人の児童は9つのグループに分かれて作業し9つの案を作成した。3回目ではその9案をもとに生成された3つの物語世界に基づく案を検討し、4回目では3案をひとつに統合した案の検討を行った。ここでの案を統合するプロセスは京都大学門内研究室が担当した。この段階を推進する上での重要な方法論は、「多層構造」（multi-layer）の採用であった。多様なアイデアや物語世界を取捨選択するよりも、重ね合わせていくことにより、デザインの統合を実現するのである。

子ども主体の建築デザインでは、通常よりもはるかに多くの層に関わるアイデアが生成されたが、それらを可能な限り残すことにより、多様性を内包した建築を実現する可能性が高くなるからである。一次性から三次性に及ぶ意味の多層性を認めるところにこそ、より高い次元での統合を実現するブックワールドが生まれると考えている（ブックワールドが竣工した時、子どもたちはそれぞれに自分のアイデアを発見し、“自分たちがデザインした”ことを喜んでくれたのである）。だからブックワールドには、さまざまなレイヤーが組み込まれている。緑のゾーンは野原、青い円は湖、てんとう虫形のテーブル、象形の椅子、台形（角形）のテーブルが配置され、「自然・原っぱ」の世界が姿を現す。図書カウンターや柱間に設けられたステージ・トンネルなどは、温もりのある木材で構成され、点在する軽い布製の椅子・クッションと共に「暮らし・住まい」の世界を演出している。40度のグリッドが導入され、そこに宇宙船のような本棚が並び、惑星を想起させる円形カーペットが浮かぶ空間は「未来・宇宙」の世界である。子どもたちは、時どきの状況に応じて、これらの可能世界を実感することになる。

子どもたちはこのプロジェクトを通じて、夢を描き、一本の線を引くところから、世界を変えることができることを実感できたのではないかと思う。最後のアンケートに記された「自分たちがデザインしたブックワールドが残るのでうれしいです」、「夢はかなうことが分かりました」という児童の言葉は、子どもを主体とした建築デザインプロジェクトに取り組んできた筆者らにとって、誠に心に響くものである。

ブックワールドのデザインは完成したのではなく、実は始まったばかりだと考えている。デザインに参加していない子どもたちが建築をどのように利用してくれるのか、先生方が新しい建築を活用してどんな授業や発表会を展開して下さるのか、といった使う世界での出来事を観察し、そこに潜む問題点を発見したり、新しい使い方を一緒に考えたり、場合によっては新たな環境整備を行ったりする必要があるからである。その時、ブックワールドのデザインは「つくるプロセスから育てるプロセス」へと展開していくことになる。

京都市立洛央小学校ブックワールドデザインプロジェクト

洛央小学校での作業

先生方のワークショップ

2013年8月26日



新しいブックワールドに向けて先生同士での話し合い、既存のブックワールドの改善点、新しいブックワールドへの要望など、本当に使いやすいブックワールドを実現するために、さまざまなアイデアが話合われた。

第1回ワークショップ

2013年9月5日



まずはじめに世界中のブックワールドについて勉強。その後10人程度の9グループに分かれて自由にブックワールドのスケッチや図面を描いたり、ねんどや画用紙を使って模型をつくり全体像について考えた。

第2回ワークショップ

2013年9月8日



前回制作した模型を元に大学生生によってつくられた建築模型を見ながら、9つの案を振り返りながらアイデアを話合う。日曜参観日であったこの日は、たくさんの保護者も参加し最後にはそれぞれの案について発表を行った。

第3回ワークショップ

2013年10月9日



前回の意見を受けて、9つの案を3つの案に統合、よりイメージしやすいように、それぞれ物語に沿っての空間づくり。また、1/10でつくられた模型の中に入り、家具を動かしたりすることで、具体的によいところ、悪いところについての意見を出し合った。最後には付箋で床が見えないほどに、

第4回ワークショップ

2013年11月5日



さらに3つの案を1つに統合、9つのアイデアが重なった統合案の1/10模型や、CGによるシミュレーションを見ながら空間イメージを固めていく。それらを踏まえて再度それぞれが実現したいと思う空間のスケッチを描き、第1回と同じグループに分かれて再び話し合いを行った。

モックアップによる検討

2014年1月7～8日



椅子や机など、ブックワールドで使用する家具のサイズや種類をモックアップにより検討。全学年の生徒が参加し、どんな高さや大きさの家具が必要かを考えた。自分たちだけでなく他の学年の生徒にも配慮しながら検討を進めた。

京都大学門内研究室での作業

先生方に出していただいた意見の整理・分析
第1回ワークショップの手法・道具の準備

スケッチに描かれた要素の抽出
9つの(ラフな)プロトタイプから建築模型を制作
第2回ワークショップの手法・道具の準備

9案から要素を抽出、大きく3つの物語世界を設定
3つの物語世界を実現する3つの案を設計
それぞれの案について1/10の巨大模型を制作
第3回ワークショップの手法・道具の準備

3案に出された意見・提案を踏まえて1案へ統合
統合案の1/10の巨大模型を制作
床や壁の色等のシミュレーション用のCG制作
第4回ワークショップの手法・道具の準備

統合案についての意見・提案の整理・分析
それらを元に案のブラッシュアップを行う
実施設計をパワープレイス、内田洋行と遂行

完成!



初期(2013年9月5日)の9案



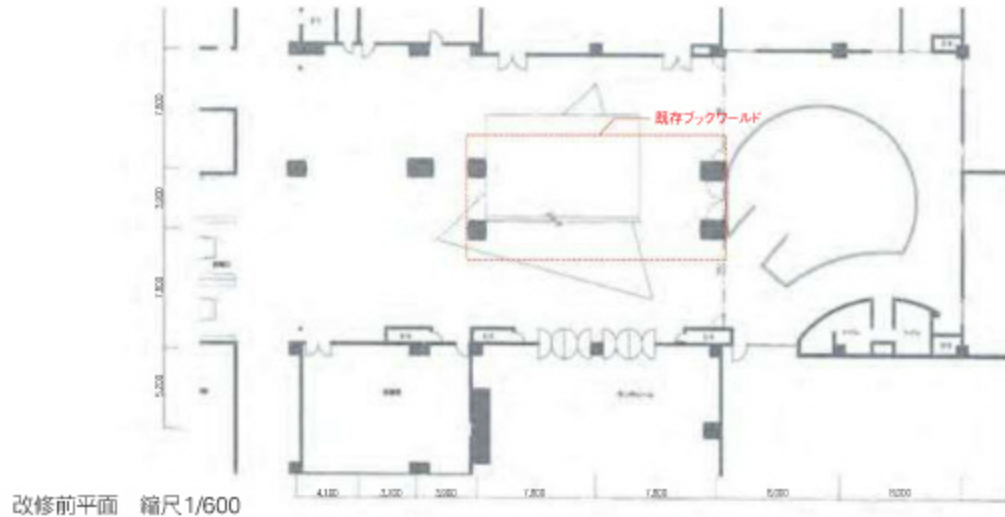
9案→3案へ統合



3案→1案へ統合



平面 縮尺1/250



改修前平面 縮尺1/600

先生・生徒らが抱いていた問題・要望

- ・机椅子の数が少ない
- ・本を手にとってすぐに読む場所が少ない
- ・机とイスのサイズが低学年には大きい
- ・フリースペースが少ない
- ・本の貸し出しがスムーズにいかないことが多い
- ・いろいろなパターンで読める空間がほしい
- ・動かせる机・椅子
- ・コンピュータで調べたり、学習も近くでやりたい
- ・読み聞かせできるスペース
- ・机の形(台形・丸・組み合わせられるなど)

設計 洛央小学校6年生+京都大学門内研究室
設計協力 パワープレイス
施工 内田洋行
延床面積 800㎡
設計期間 2013年8月～2014年1月
工期 2014年2月～3月
写真提供 門内輝行

①てんとう虫しテーブル



②ステージ・トンネル



③台形テーブル



北里大学病院

設計 日建設計

実施設計協力 竹中工務店 東洋熱工業 きんでん

施工 竹中工務店

所在地 神奈川県相模原市

KITASATO UNIVERSITY HOSPITAL

architects: NIKKEN SEKKEI



東側1号館より見る。神奈川県相模原市の大学病院の建て替え計画。延床面積約10万2,000㎡。免震構造。地下1階地上14階建て。病床数757床（1号館を含め1,033床）の巨大で複雑な機能を持つ。設計・施工を効率的に進めるツールとしてBIMが本格的に用いられ、施主・設計者・施工者相互のスムーズな協働を可能にした。



医療の進歩をリードし続ける先進的な病院

新病院建設にあたっての最重要要望は医療技術の著しい進歩などに対応し建設後半世紀にわたり、大学病院としての機能を維持することであった。病院建築は、一般のオフィスと異なり、内部機能のための水・空気・医療ガスなどの付帯設備の密度がきわめて高い。外壁側設備シャフト、中間階・免震層でのISS設置、逆梁構造により広範な範囲の二重床、超極細間柱の架構計画などは、機器・間仕切変更などの医療機能更新・拡充に、医療活動を継続しながら柔軟に対応するための取り組みである。

施設は、約100m四方の低層部とその上部の病棟から構成される。外壁側設備シャフトに並ぶ碍子ルーバーは、新病院の先進性と医療施設としての爽やかさを表現し、雁行する病棟は従来と異なる病棟空間

を内包するものとして、病院の新たな外観・顔として特徴付けている。

一方、医療連携の進展や入院患者の重篤化・高齢化により、患者・看護師間距離はこれまで以上の短縮化が求められている。スタッフステーションから長く伸びた廊下に病室が並び病棟計画は、その求めに応じることに限界がある。本計画では、雁行する外壁に沿って病床を配列し患者アメニティを高めながら、その中央の三角状部分を看護のサテライト（ナースピット）とし、より機動力あるベッドサイドナーシング実現を目指した。

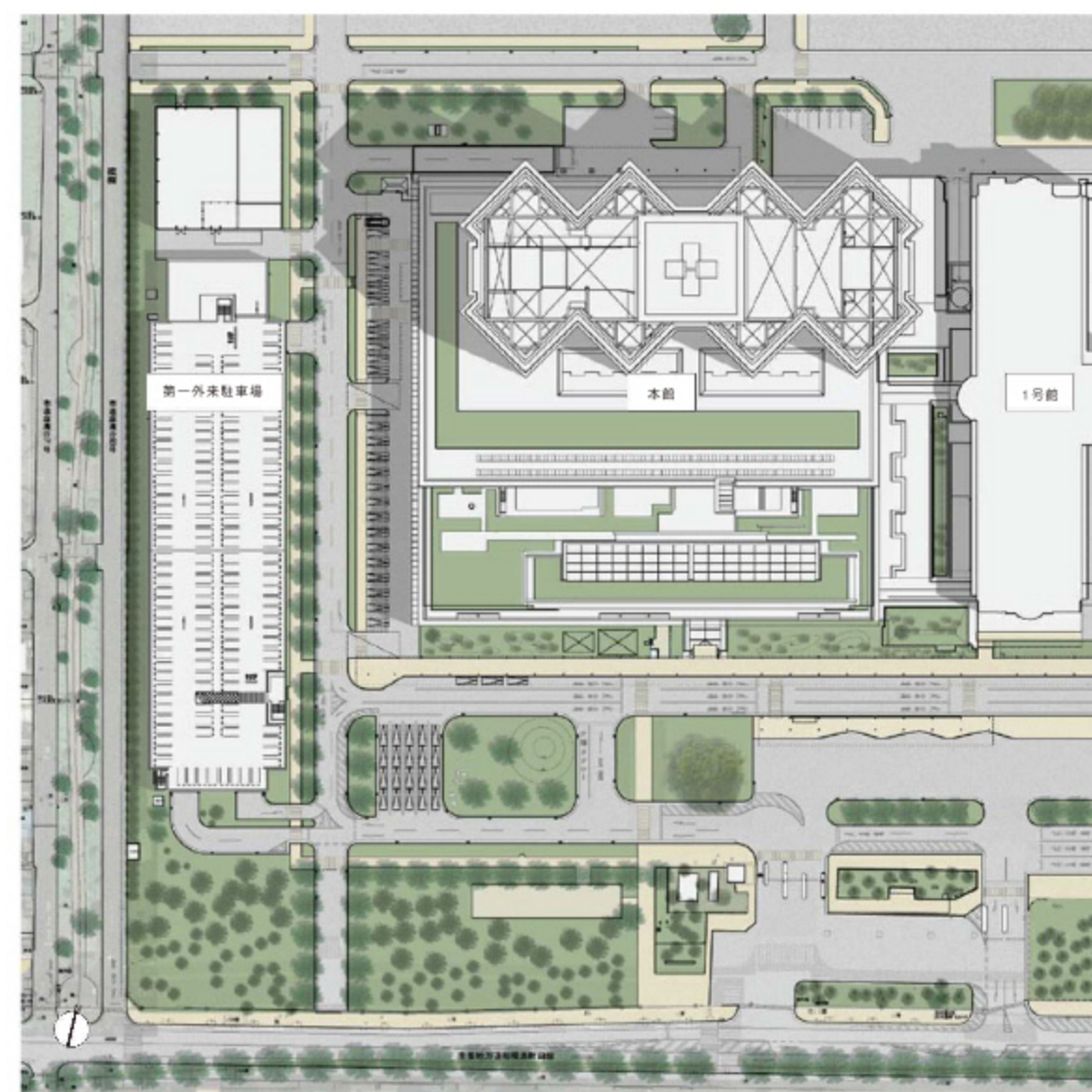
さらに、国交省の省CO₂先導事業への採択や、災害時のBCP対策など、大学病院として継続するための、長期的観点からのさまざまな取り組みを行っている。

（藤田建設設計）

北側より見る。診察、手術などの医療行為を行う諸室を低層部に、病室を高層部に配置した。ロングライフ、パッシブ、センシング、高効率システムによる省CO₂技術の構築・運用に向けた仕組みづくりをした。高層棟の横ルーバー後ろには配管の追加、更新が容易なエコシャフトを配置した。



東側空撮。キャンパス南西の建物が現在の病院。今後、隣りの旧病院を取り壊して駐車場を建設する予定。



配置 縮尺1/2,000



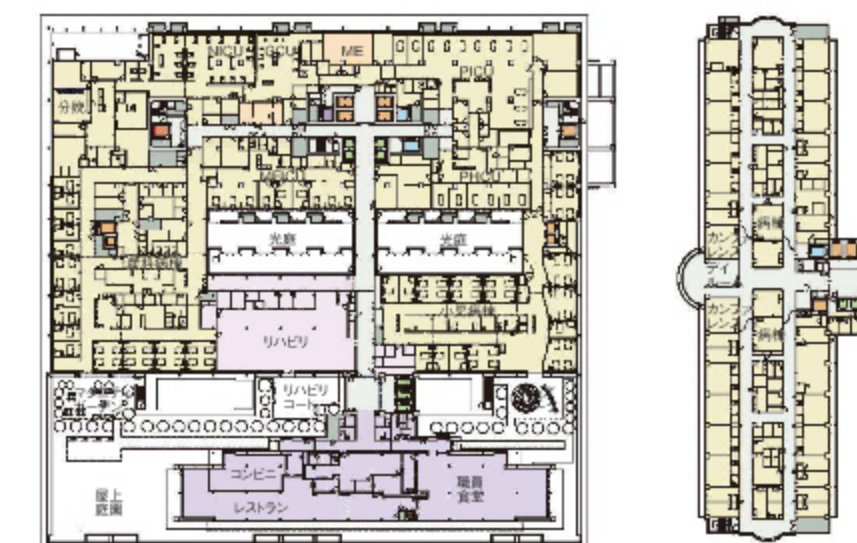
11階平面



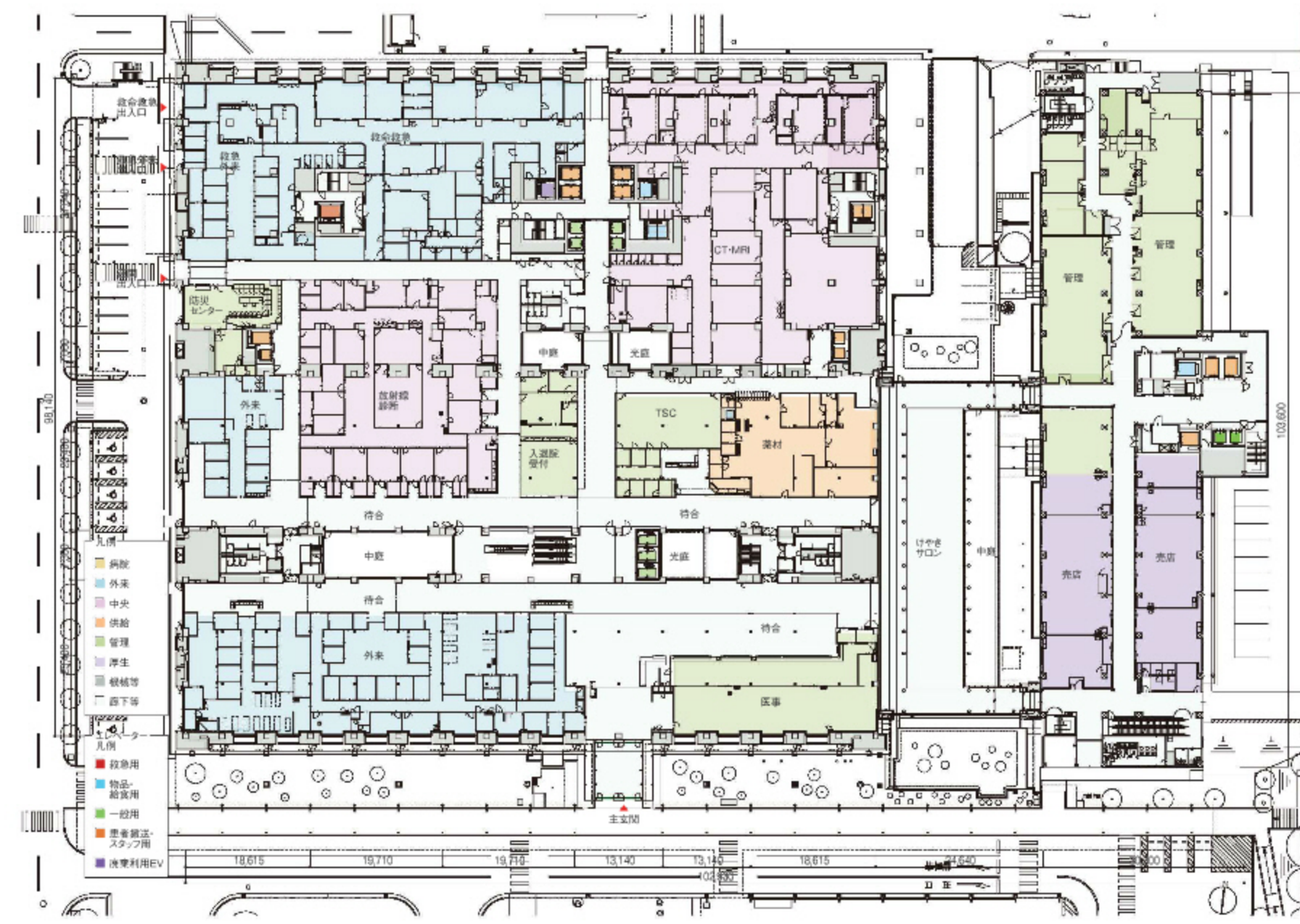
1階待合。左には中庭。低層部は約100m四方のため、中庭から採光を確保した。



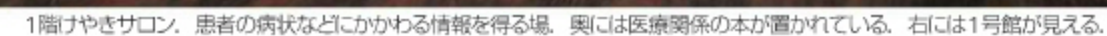
-2階平面 縮尺1/1,800



6階平面



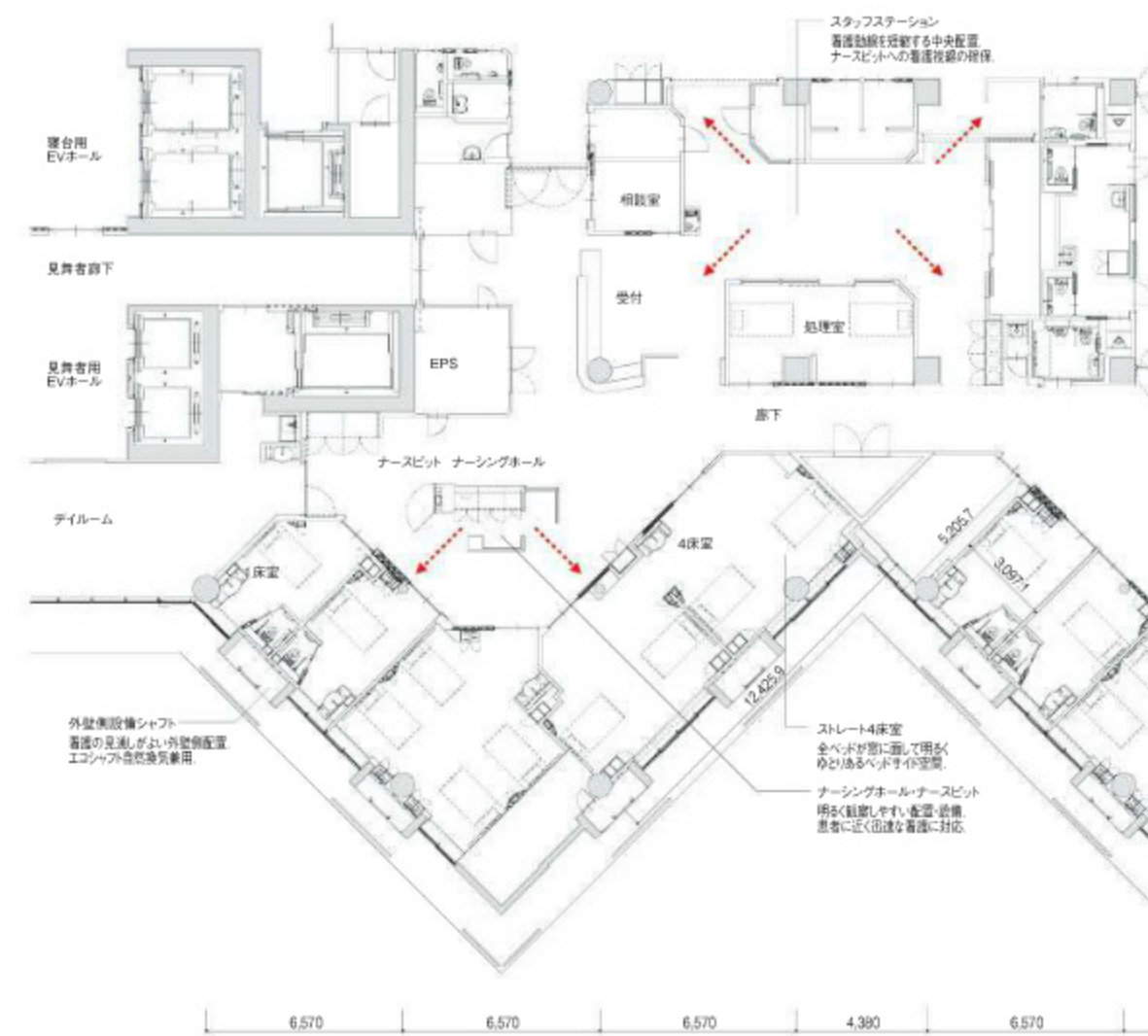
1階平面兼配置 縮尺1/1,000 エレベータや設備の縦配管など建物の上下に繋がるものを中央部のコアと外周部に集約し、その他の部分はフレキシブルに間仕切り変更などをできる空間とする計画。



設計 日建設計
設計協力 建築・構造 竹中工務店
機械 東洋熱工業
電気 きんでん
施工 総合：竹中工務店
コストオン：東洋熱工業 きんでん
三菱電機ビルテクノサービス
日立ビルシステム
敷地面積 199,807.96m²
建築面積 18,421.98m²
延床面積 102,402.91m² (病院本館)
125,016.42m² (病院本館＋1号館)
階数 地下2階 地上14階 塔屋3階
構造 鉄筋コンクリート造 震源造
工期 2011年9月～2013年12月(病院本館完成まで)
撮影 新建築社写真部(特記を除く)
＊撮影 ミヤガワ
(データシート180頁)



スレート4床室。4床すべて同じ環境を確保するように縦に長い病室を計画した。ベッドサイド端末等の導入やアメニティの向上、自然換気・節電などの省エネに取り組んだ。



11階部分平面 縮尺1/300



基本設計段階では、建物の変わらない部分であるシェル&コアを中心にBIM入力を行った。その初期段階から3Dの協力を得て、作業を進捗、発注図書は、そのデータと2次元の平面データを一体化して出力して対応。このデータの、施工者が参照するフェーズへの円滑な移行に、今後の工夫・ルール作りが必要と考える。

施主の意向もあり、基本設計がまとまった段階で施工者の選定が行われた。施工を受注した竹中工務店・きんでん・東洋熱工業各社には実施設計への協力が要請され、日建設計とともにBIMによる実施設計に携わることになった。

施工・実施設計協力：竹中工務店・東洋熱工業・きんでん

●躯体BIMモデル
早期の躯体図の基になる躯体フレームを作成。初期段階で複雑な躯体形状の理解に役立った。しかし、設計変更などの対応は2次元対応となった。



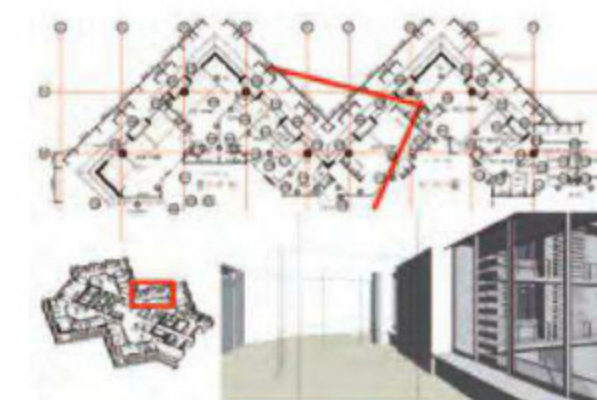
●躯体構造数量算出
躯体の構造数量確認に利用。躯体工事の工区割に役立った。躯体工事作業員・労務量などの把握まではできていない。

設計段階での変化

建物の3次元モデルにデータベース機能を持たせたシステム。単に図面を3次元化するのではなく、設計・施工・維持管理に至る建築の各フェーズを一元化し、目的に応じた活用を目指す。



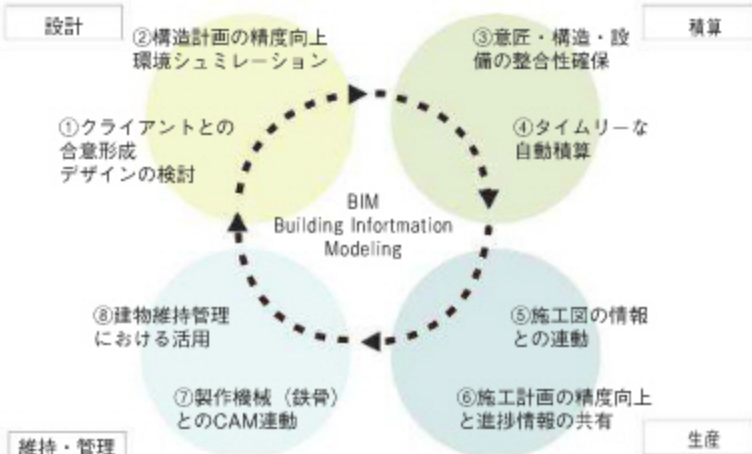
意匠・構造・設備に係る情報をひとつのデータで管理。例えばモデル内に新規に壁を入力すると、すべての図面に自動的に反映される。平面図・立面図・断面図・平面詳細図等の図面不整合の回避が図れた。



平面図のどの点からも3Dで空間を確認できる。平面図の赤い線の視点が右下のバース。

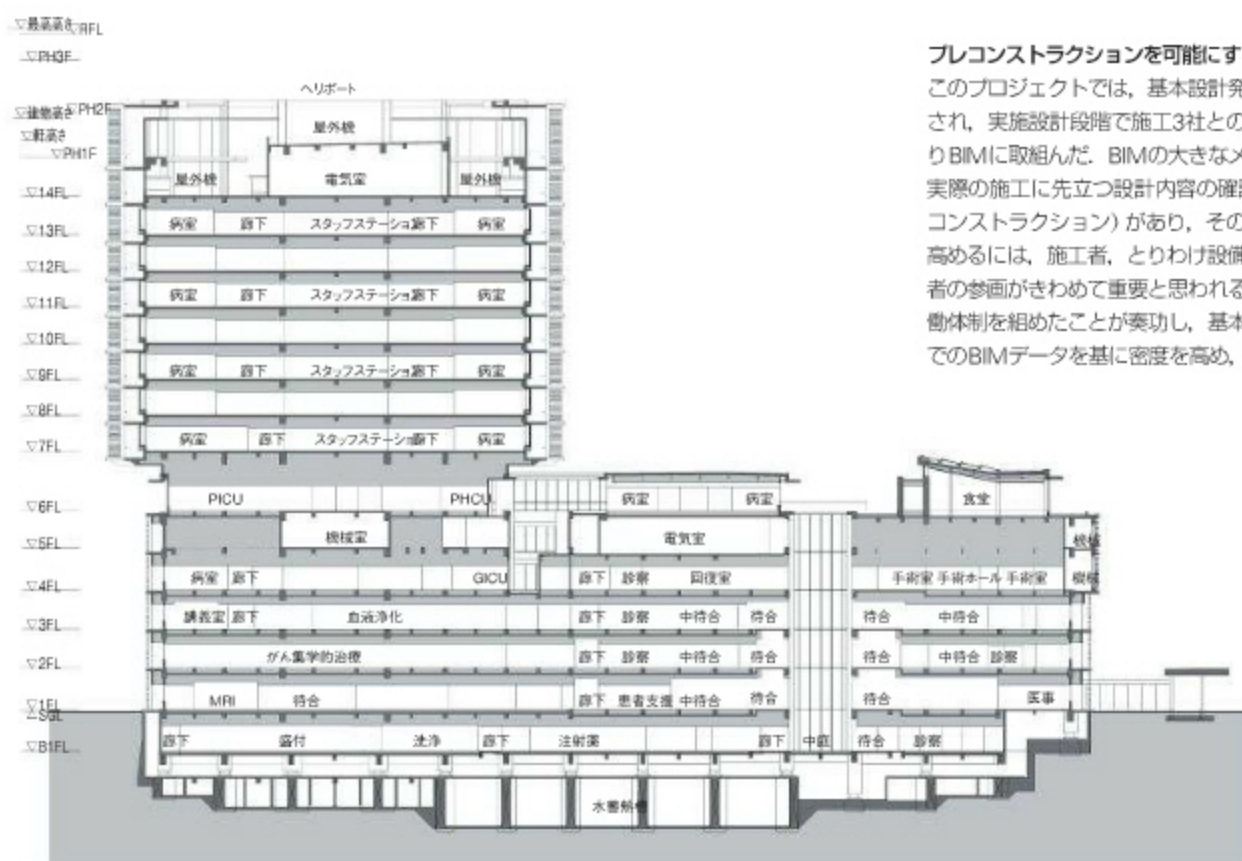
BIMとは

BIM(Building Information Modeling)とは建物の3次元モデルにデータベース機能を持たせたシステム。2次元の図面を3次元化するのではなく、設計・施工・維持管理にいたる建築の各フェーズを一元化し、目的に応じて活用できるように加工できる。



従来との違い

BIMの3Dモデルによってそれらの情報を統合・一元化することで、意匠・構造・設備の設計情報を相互参照でき、効率的に設計を進め工期短縮に繋がる。



断面 縮尺1/1,000

プレコンストラクションを可能にする

このプロジェクトでは、基本設計発注が採用され、実施設計段階で施工3社との協働によりBIMに取組んだ。BIMの大きなメリットに、実際の施工に先立つ設計内容の確認(プレ・コンストラクション)があり、その現実性を高めるには、施工者、とりわけ設備工事施工者の参画がきわめて重要と思われる。この協働体制を組めたことが成功し、基本設計段階でのBIMデータを基に密度を高め、病院特有

の複雑な設備配管や免震層内での揺動時を含めた干渉チェックなど、概ねフルBIMに近い検討を行った。この体制づくりが、ひとつ目の要点といえる。

次に、BIM化の範囲を明確化した。病院建築は頻繁な設計変更が求められる。医療行為を行う場所を変わる部位、エレベータなどの縦動線を変えない部位(シェル&コア)として厳別。後者を中心にBIM化を推進、手戻りを最小限とした円滑なデータ構築が行えた。このシェル&コアの概念が、ふたつ目の要点である。

さらに、BIM作業のデータ構成、互換方法、役割分担、スケジュール調整などの、適切な管理が必須。今回は3D Innovationsに協力を依頼、プレ・コンストラクションにおけるBIMマネージャを明快地位置づけたことが、3つ目の要点と考える。

今回の作業は専ら設計段階を主とし、施工段階では、施設内主要箇所の内観イメージの施主説明や外装モックアップ決定などに利用された。今後、施工・制作現場へのさらなる活用と、そのための体制整備や関係者間でのやり取りが、今後の課題のひとつと言える。

(藤記真/日建設計)

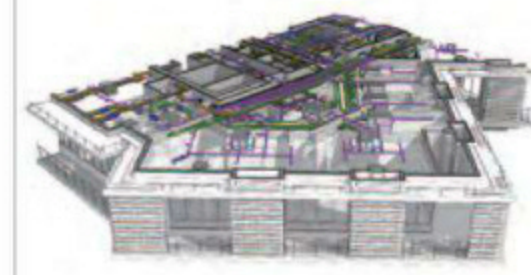


●施工計画BIMモデル
仮面・外部足場・タワークレーンなどの仮設計画は従来手法で立案、その後3D入力での確認にとどまった。施工段階で必要となる工程計画・施工手順検討や仮設材数量把握など、設計面だけでなく施工面での活用が、今後期待される。



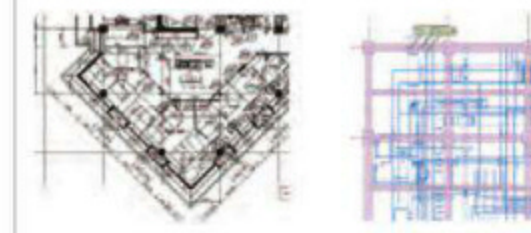
●施工設備BIMモデル
施工図をつくる副産物として3Dでの確認が可能となった。衛生・空調・電気と同じCADWell-Tiasのバージョンを使うことで取り合いの検討ができた。

干渉チェック



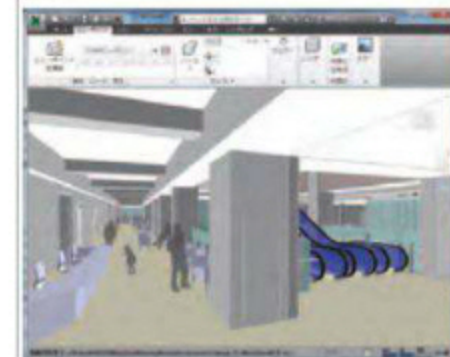
統合した意匠図・構造図・設備図を3Dで確認。

同時に、干渉のあるところをチェックできる。クラッシュと書いてある箇所が駆動と設備が干渉している。



意匠図・構造図・設備図を一元化することで、3Dで総合的に干渉チェックができる。その変更も一度行えばそれぞれの図面に反映され、データの重複入力やデータ間の整合確認が回避され生産性向上や、多数の関係者間でリアルタイムで情報を共有できる。

施主説明イメージの共有



3Dウォークを利用して疑似空間を体験できる。空間の広さなど施主との打ち合わせに活用した。



3Dモデルに、仕上材・色調などの表現を加え、より現実性を高めて内観イメージを確認。

施工手順の確認

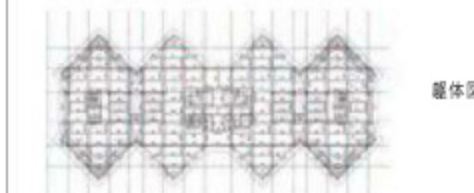


躯体の施工手順を3Dでチェック。3Dであることで職人もイメージが付きやすい。

BIMの可能性



出力



躯体専用3D CAD (J-BIM 施工図 CAD) で作成した躯体モデル。このデータから躯体図を出力する。今回のプロジェクトでは行っていないが、躯体モデルからコンクリート、型枠、鉄筋を簡易積算することも可能。

共通のコミュニケーションツール

今回のBIM対応において、施工者側でも、変更の多い病院でかつ10万㎡を超える規模でのフルBIM対応の初挑戦になった。2011年の3月から着工8月まで約半年間、協働でモデル構築を行った。設計者と施工者が協働でBIMモデルを作成することで、実施レベルの精度の高いBIMモデルを構築することが可能となった。事前に入力スケジュールを調整することで、施工に利用する躯体BIMモデルに梁を入力することし、設計BIMモデルでは梁の入力をやめるなど、二重入力を避けながら、効率よく実施レベルのモデル作成ができた。着工後も、BIMモデルを利用し、外装のデジタルモックアップを作成。BIMを使って早いもの決めに利用した。デジタルモックアップを作成することで、設計者は全体のイメージの把握や、複数案を検討することができ、施工者は実際に作るモックアップの数を減らすことができるなどというメリットがある。設計者、施工者ともにBIMを活用したデジタルモックアップの作成にはメリットがあった。

また、設計BIMモデルを利用して作成した

仮設計画BIMモデルは、工事計画の決定や職人さんたちの説明に大変有効であった。施工者側がBIMを使うメリットは、プレ・コンストラクションを行う事で、手戻りを防ぐこと。もうひとつは、コミュニケーションツールとして共通の認識を持つ道具として使える事にある。今回も、建築主・設計者への説明や、仮設工事の職人さんなどとの打合せの中で納まりの確認などに変役立った。今後の課題として、モデルの作成や更新の作業ピーク時に建築とBIMの両方に精通した担当者をどのようにして確保するかが挙げられる。今回もこうした担当者の不足が、モデルの更新を妨げたひとつの要因であった。今回、結果として、図面の不整合での不備での作業所の手戻りは、ほとんどなかった。規模の大きい建物や、変更の多い建物ほど、整合性を保ちながら作成できるBIMの効果は大きいと思う。BIMは、建築主、設計者、施工者、職人さんたちの共通のコミュニケーションツール、手戻りを防ぐツールとして今後期待したい。

(森元一/竹中工務店)



高層部部分断面 縮尺1/150

上：高層部外装デジタルモックアップ。
下：高層部南側外観。デジタルモックアップと実線のモックアップでルーバーがつくる影のシミュレーションを行った。



埼玉県立がんセンター

設計 山下設計（基本設計・監理）

戸田建設一級建築士事務所（実施設計）

施工 戸田建設（建物・建物周辺外構工事）

所在地 埼玉県北足立郡伊奈町

SAITAMA CANCER CENTER

architects: YAMASHITA SEKKEI

TODA CORPORATION ARCHITECTURAL DESIGN DEPT



東側アプローチからの外観。外壁に特注の二丁掛けタイルを用いて旧がんセンターの外観を踏襲した表現にすると共に周辺の自然環境と調和するデザインが目指されている。



1階エントランスから建物の反対側まで抜けるホスピタルストリート。吹抜け上部にはシースルー太陽光発電パネルが設置され、やわらかな日射しが入る。このストリートの両側に、待ち合いやカフェ、レストランを配置し、患者は好きな場所でくつろぎながら、待ち合い時間を過ごすことができる。

患者や家族が安らげるアメニティスペース

埼玉県立がんセンターは、1975（昭和50）年の開院以来、埼玉県におけるがん医療の拠点として、医療水準の向上を牽引してきた。しかし、開院後30年以上が経過し、医療の進歩や患者動向の変化に対応するため、隣接敷地に新病院を建設することとなった。

当施設は、国内有数の高度先進がん医療を実践する病院であり、多様な治療・診断を行う機能を有している。また、患者・家族の心のあり方に着目し、日本一患者と家族にやさしい病院を目指している。敷地は里山の面影を残す自然林を有してお

り、森に囲まれた敷地条件を生かしたデッキテラスや散策路を整備している。本計画は実施設計期間中に東日本大震災が発生した、免震構造の採用など震災に対する備えは当初より対応していたものの、災害の教訓を踏まえインフラや初期医療機能の強化などの対応を行っている。

高層棟と低層棟を繋ぐホスピタルストリートは、西側端部で外部空間に開放され、周辺の自然と一体となった爽やかさと安らぎを感じさせる当病院を象徴する空間である。ストリートの名前の通り病院であることを忘れさせる街並みを構成することで、

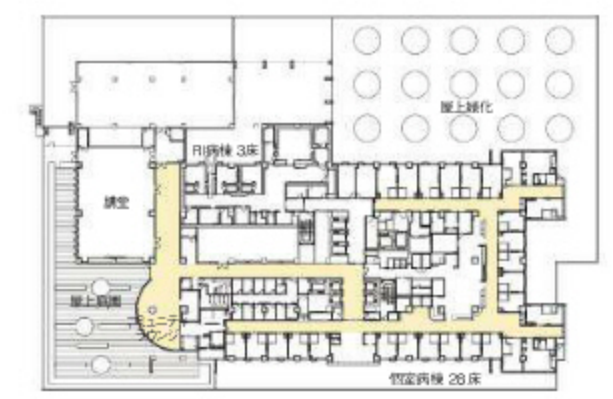
患者同士や家族と共に過ごす空間提供を目指している。街並みの中には、コーヒーショップやコンビニエンスストア、レストランが配置されると共に、ボランティア活動の拠点やイベントスペースが並び、やすらぎと癒しをもたらす療養環境を実現している。外来患者は受付時に渡される携帯端末により受診のタイミングを知ることができ、待ち時間を自分の好きな場所で過ごすことができる。病棟との切り替え階である4階にも、コミュニティラウンジや屋上庭園を設け、パジャマでも気兼ねなく利用できるアメニティスペースを充実させている。（有賀雅尚／戸田建設）



5階平面 縮尺1/800

分かりやすさを追求した平面計画
 ホスピタルストリートを挟み、低層棟に外来部門、高層棟に中央診療部門を配置することで、外来患者にとっての施設の分かりやすさと病棟からの中央診療部へのアクセスのよさを両立させている。施設の分かりやすさは、患者にとってひとつのアメニティであり、ホスピタルストリートは行動の起点として貢献している。また、スタッフ専用の動線と患者の動線を切り離して確保することにより、病院職員にとっても効率的で働きやすい施設計画としている。
 (安達学/戸田建設)

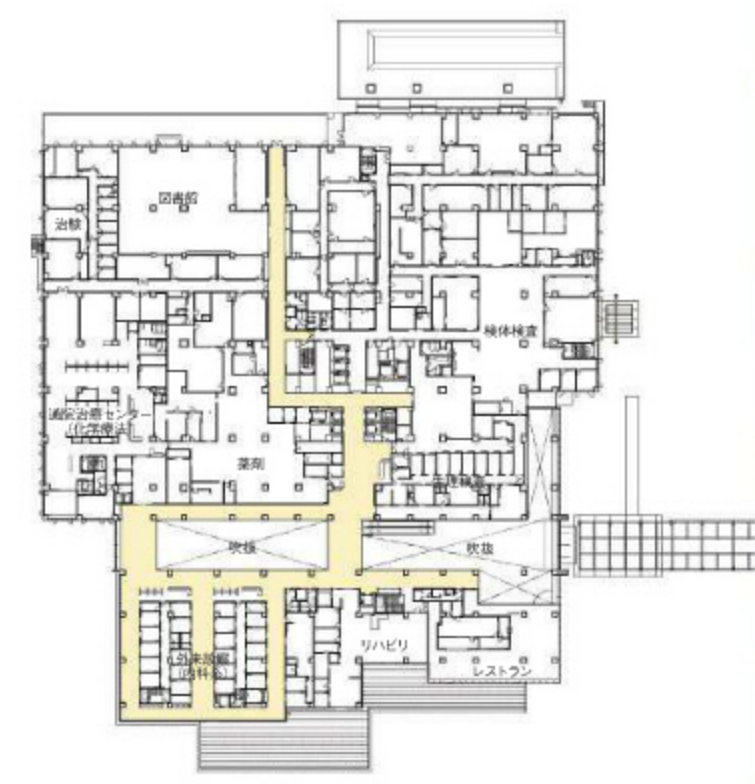
● 患者の動線エリア
 ● 病院スタッフの動線エリア



4階平面 縮尺1/1,800



3階平面 縮尺1/1,800



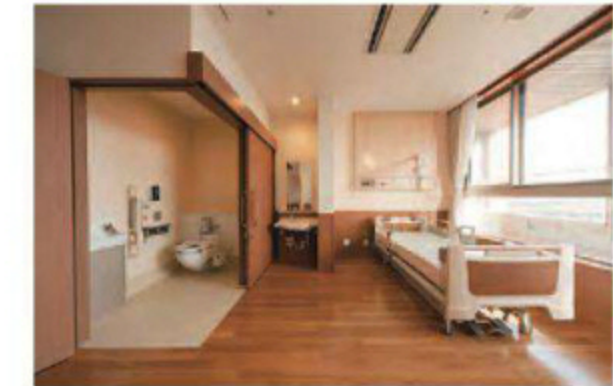
2階平面 縮尺1/1,800



4階屋上庭園。入院患者がバジャマを着たままま気軽に外に出られるスペース。ハーブを中心とした植栽によりアメニティを向上している。



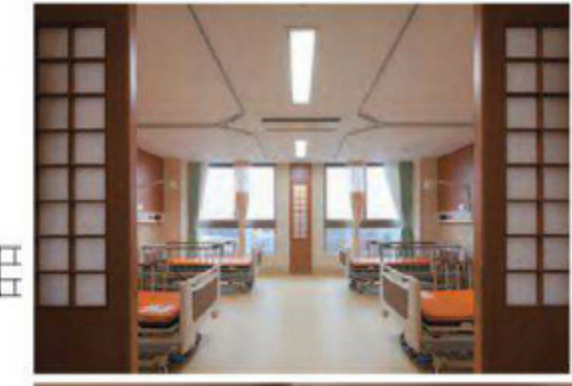
プロムナードグリッド
 ホスピタルストリートと空間の連続性を持たせたアプローチ。外部から内部へと利用者を自然に導く。



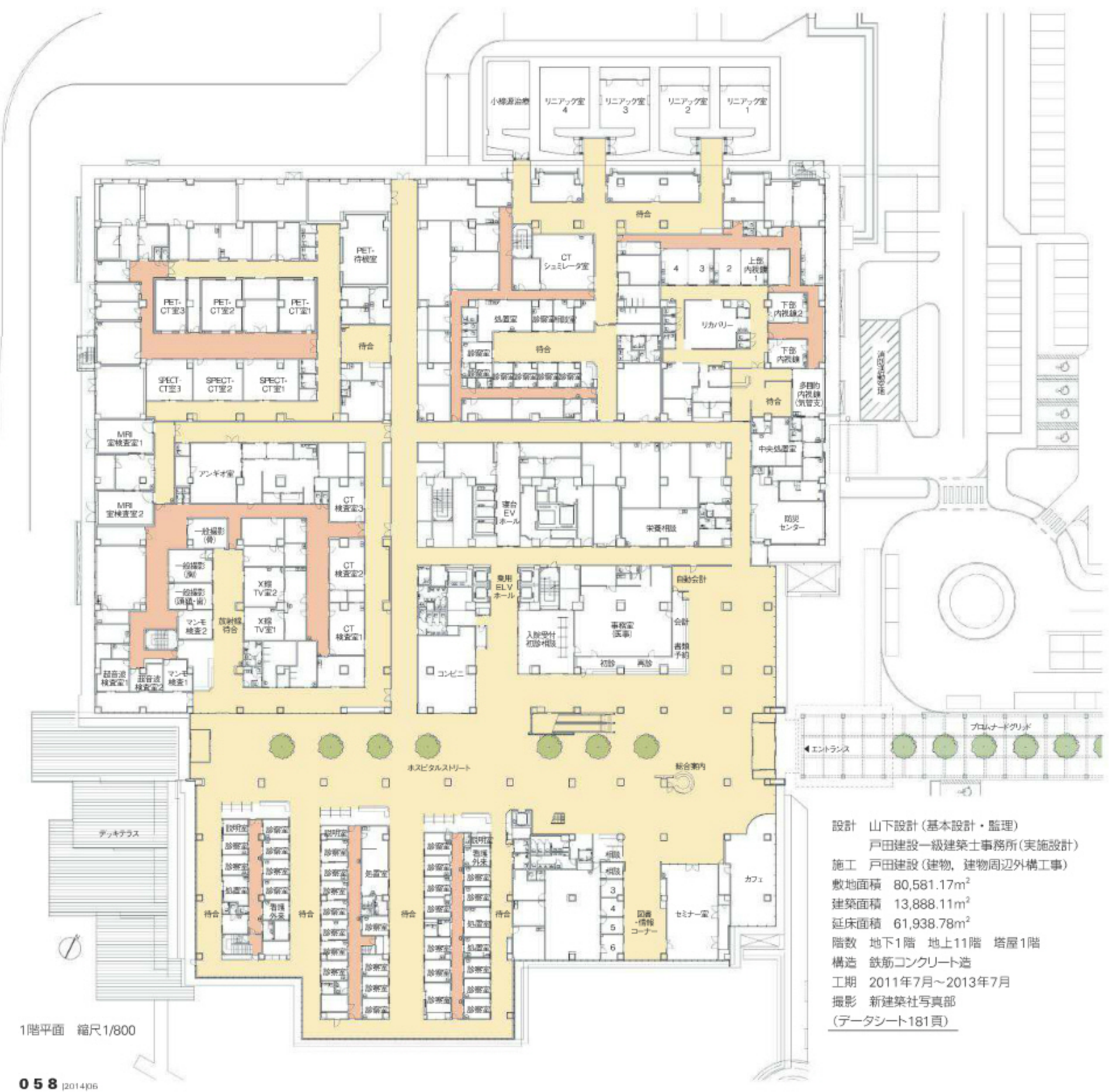
10階：緩和ケア病棟
 下左写真：個室。／右：食堂、テイルーム。この場所の照明にはスマート・ホスピタル・ライティングシステムが採用され、太陽の日射の変化に合わせて光環境をコントロールし、入院患者のサーカディアンリズムの維持をサポートしている。



6階：一般病棟
 上：病棟のプランは、中央にスタッフステーションが配置され、2カ所のステーションが中央の縦動線と合わせたSSリンクで繋がれている。病棟廊下を介して外周部に病室を配置。サインのグラフィックに用いられているモチーフは、埼玉県の新宝島であるサクラソウ。左：4床室。埼玉県小川町産の和紙を用いて、安らぎの空間を創出している。



4階：コミュニティラウンジ
 南側のコミュニティラウンジから屋上庭園を見る。外来・入院患者が利用できる多目的の空間で、ボランティア活動なども行われる。

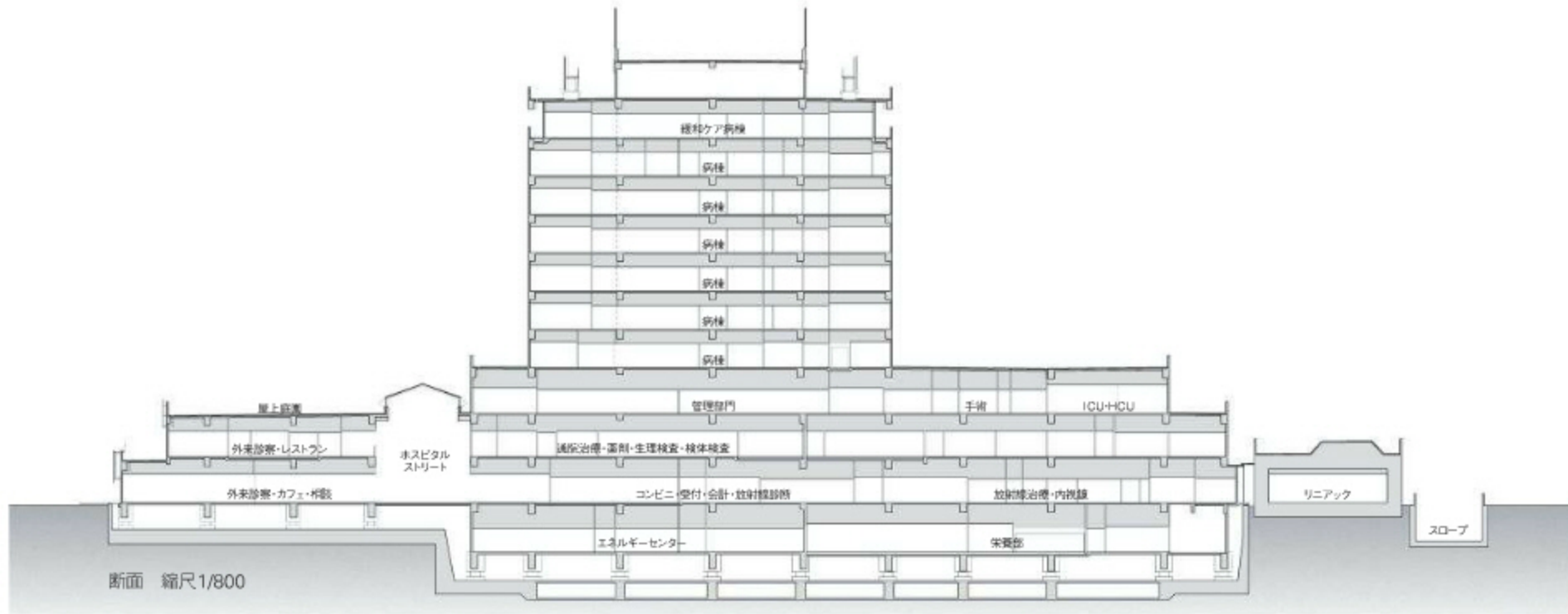


1階平面 縮尺1/800

設計 山下設計(基本設計・監理)
 戸田建設一級建築士事務所(実施設計)
 施工 戸田建設(建物、建物周辺外構工事)
 敷地面積 80,581.17m²
 建築面積 13,888.11m²
 延床面積 61,938.78m²
 階数 地下1階 地上11階 塔屋1階
 構造 鉄筋コンクリート造
 工期 2011年7月～2013年7月
 撮影 新建築社写真部
 (データシート181頁)

医療・建築の連携

順天堂大学・早稲田大学の共同による、次世代型医療建築を目指した研究開発



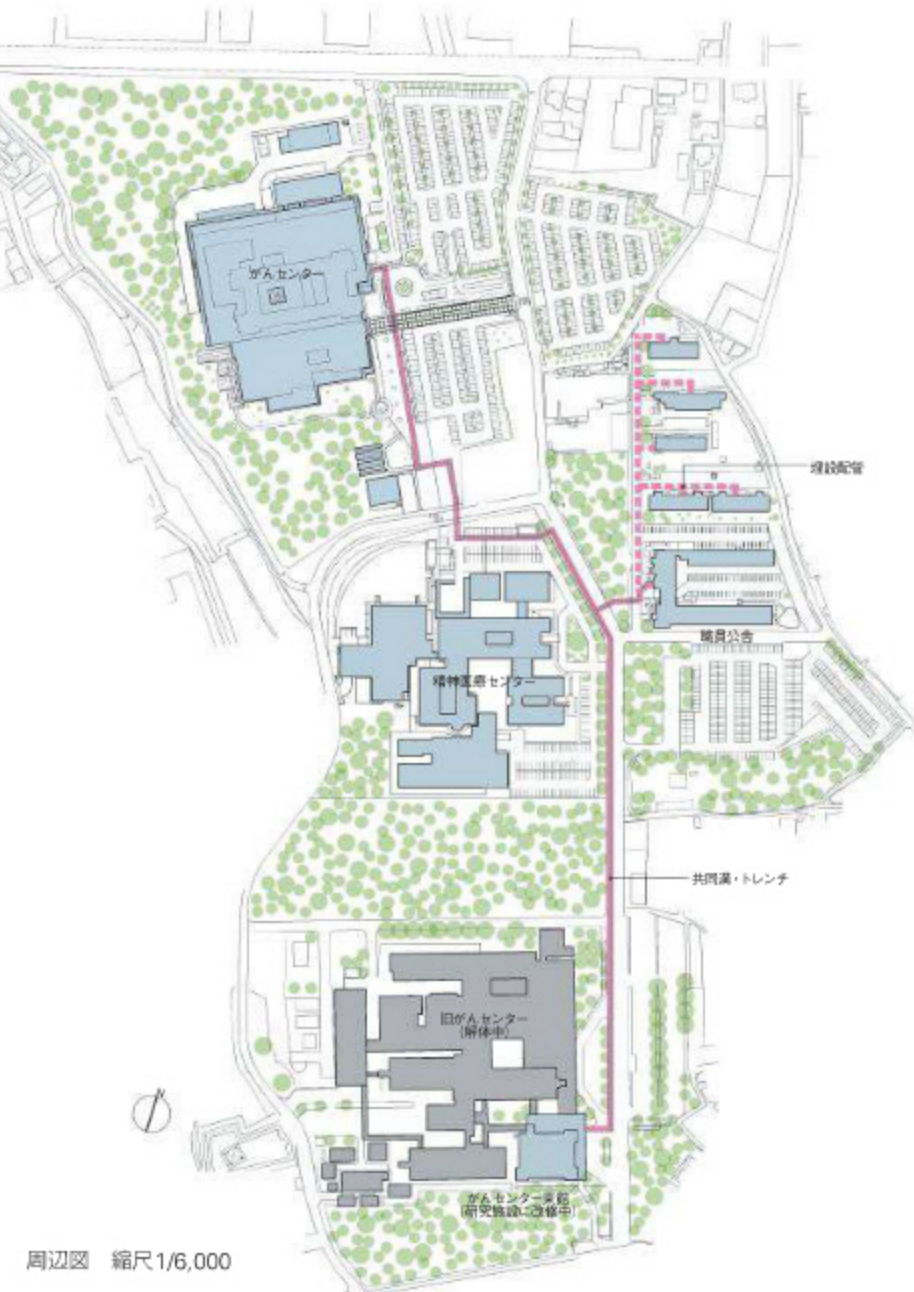
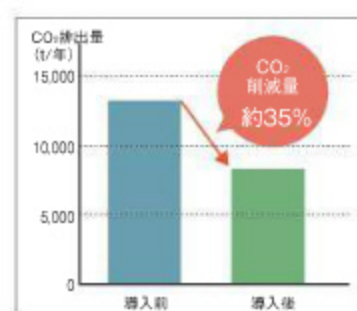
スマートメディカルパークの実現



メディカルパークは、左手前建物（旧がんセンター）のがんセンター東館（改修中）、右手の職員公舎、中央の精神医療センター、奥に見えるがんセンターのネットワーク。

埼玉県立がんセンターを中心としたスマートエネルギーネットワーク
がんセンター、精神医療センター、職員公舎等の県施設で熱（冷水・温水）と電力を融通するエネルギーネットワークシステム。各施設に設置された太陽光発電等の自然エネルギー、コージェネレーションシステム、高効率熱源機器等の省エネ設備でつくられたエネルギーを、がんセンターに導入されたAEMS（エリアマネジメントシステム）により最適に制御し効率的に活用する。たとえば、昼間エネルギー使用の少ない職員公舎でつくられた電力・温水を他の施設で活用するなどして、エリア全体としてCO₂排出量、エネルギー消費量を削減する。導入後は、これらの施設の総CO₂の約35%削減を目標としている（右図）。

（高橋寿十・高橋義行／戸田建設）



周辺図 縮尺1/6,000

異分野融合による共同研究

順天堂大学と早稲田大学は、医療と建築の融合を目指した共同研究を2009年にスタートさせた。直接には、新病院「順天堂医院B棟高層棟」の計画を受けたものである。

小川秀興順天堂大学理事長、白井克彦早稲田大学前総長をトップとする両校メンバーによる研究体制が組織され、全体推進役を富野康己前医学部長と常任理事だった私が担った。メンバーによる打ち合わせを経て、「次世代環境医療」を大テーマとし、感染症制御の病院、エコホスピタル、高層病院の安全・避難・医療継続に関わる研究課題とチームを決定した。感染症対策やエコについては池田志孝教授・堀賢教授（順天堂大学、以下順）・田辺新一教授・高口洋人教授（早稲田大学、以下早）、

高層病院の安全や避難経路研究などについては小林弘幸教授・川崎志保理准教授（順）・長谷見雄二教授（早）・私というワーキンググループによる共同研究を開始した。現実には異分野融合は簡単でないとよく聞かすが、共同研究が迅速順調に滑り出せたのは、富野前医学部長と連携できたことが大きい。

融合の成果は、ほぼ年1回開く「第1～4回次世代環境医療シンポジウム」で披露してきた。第4回である2013年には、「快適性とエコ性能が高い病室・感染に強い病室」（池田、堀、田辺）、「医療現場のソフト・ハード両面からの地震時安全性の確保に向けて」（川崎、西谷）などを発表した。放射空調システムによる感染制御や、入院患者・医療従事者の負担軽減となる避難誘導用エレベーター

病院における防災計画

順天堂大学との協定で行った研究では、病院の防災計画の基盤となるデータ整備と歩行困難な患者の人命安全対策の研究を行ってきた。まず、病棟で避難行動能力別の患者割合や管理体制を調査し、診療科ごとに避難上の負荷を明確にした。特に自力避難できない患者比率の高い病棟では病室近くに安全なスペースがなければ避難や避難先での生命維持が困難である。そこで病棟階に非常用エレベーター（火災時の避難に使用を認める指導基準に基づく認定第1号）、階段付近にろう城可能なスペースを設け、患者は必要に応じそこに滞在できる計画とした。新病棟では、避難時間短縮や少ない看護人数での

災害対応のため病室扉の拡幅や水平区画扉の開閉のしやすさなど、避難遅れの原因になりやすい扉前後の移動を円滑にする設計としている。研究室では、研究会以前から病院・福祉施設の防災の研究を続けており、実際の病棟を使った避難実験で助避難の計算法を整備してきた。今回の新棟の防災計画のシミュレーションでは、こうした研究で得たデータが活用されている。

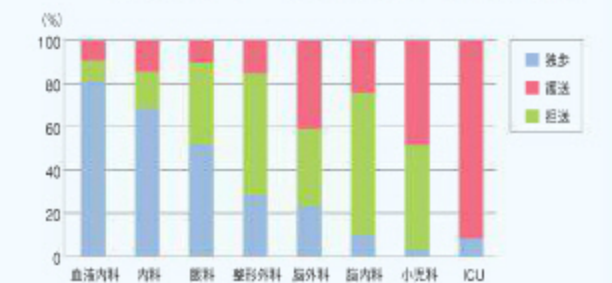
医療・福祉施設は、迅速な災害対応の必要性が高いにもかかわらず機能的な対策が進んでいない施設が多い。今後も病院などとの研究協力やデータや設計法を整備し、機能的な災害対応体制の構築

や加圧防排煙設備付き水平防火区画など、既に今回の新病院に反映されたものもある。私自身は、地震時医療継続を目指すテーマとなる「揺れない手術室」を、川崎志保理准教授（順）と共に進め、問題点の検証、解決に向け提案を行った。新病院の計画に関しては、複数業者からの実施設計提案の場にも出席し、設計者決定後は免震制震の考え方について設計者との議論も行った。上述の手術室など医療継続に向けた成果・提案は、今後の病院の新築改修や、非常時対応マニュアル作成などに反映されるだろう。さらなる共同研究を通して、両校の連携が一層強まることを期待している。共同研究の一部は、両校＋清水建設の3者で提携し実施した。

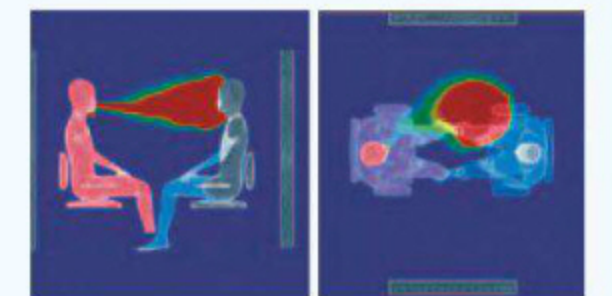
（西谷卓／早稲田大学理工学術院教授）

に活用されることを期待している。

（長谷見雄二／早稲田大学理工学術院教授）



病棟患者の避難困難区分割合の調査結果（診療科別）。2010年に順天堂医院病棟の診療科を対象として長谷見研究室が行った調査によるもの。独歩は自力避難可能。護送は介助が必要（車椅子での避難）、担送は自力避難が困難（ベッドやストレッチャーでの避難、介助者2名を想定）を表す。グラフの上部へいくほど（青→赤→緑）避難困難度が高くなる。



診察室での空調による患者と医師の飛沫感染に関するシミュレーション（田辺研究室による検討）。左は、医師の背後に排気口がある場合、医師に飛沫・飛沫核が直接到達する。右は給排気口を横に配置した場合、医師への直接到達が少なくなっている。

病室内の感染制御・快適環境の追求

われわれのワーキンググループでは、省エネルギーで快適性の高い病院と、感染症をコントロールする建築的手法の研究を行ってきた。主に次のような研究開発を手がけた。透析室放射空調、病室放射空調、飛沫核の漏洩を防ぐ病室空調、家具による感染制御、飛沫防止手洗いである。2年間にわたり透析室で環境測定や患者、医療関係者へのアンケート調査などを行った。その結果、透析治療患者の中には空調の風に非常に弱い方がたがいることが分かった。それらの知見が、新病

棟の放射空調の採用に発展した。また、今回の「順天堂医院B棟高層棟」に採用した病室放射空調や家具による感染制御は、感染の有無が明確でない患者がいる際に特に有効な感染対策である。4床室は今回制作の間仕切り棚によって感染リスクを低減させている。また、飛沫拡散の新しい測定評価方法を開発し、その方法が手洗器とその周辺に水撥ねが少なく、水分が手洗い器とその周辺に残りにくい飛沫防止手洗いの開発に繋がった。一般の手洗器に比べ水撥ね量は1/100になっている。

（田辺新一／早稲田大学理工学術院教授）

順天堂医院B棟高層棟

設計 日本設計（基本設計）

清水建設（実施設計）

施工 清水建設

所在地 東京都文京区

JUNTENDO HOSPITAL BUILDING B
architects: SHIMIZU CORPORATION

南側の神田川越しに見る。順天堂創立175周年を記念したキャンパス・ホスピタル再編事業の一環として、老朽化していた棟を建て替える。清水建設、早稲田大学と研究協力しながら、快適性や安全性、環境に配慮した「エコキャンパス・エコホスピタル」を目指す。建替えながらの施工となるため、工期を分割し既存病棟を活用しながら建て替える。今回高層棟であるI期が完成し、低層棟であるII期は2016年4月完成予定。地上21階、99.72mの高層棟には病棟機能、低層棟には手術室や集中治療室などの診療部門を配置。

未来型医療建築を目指して

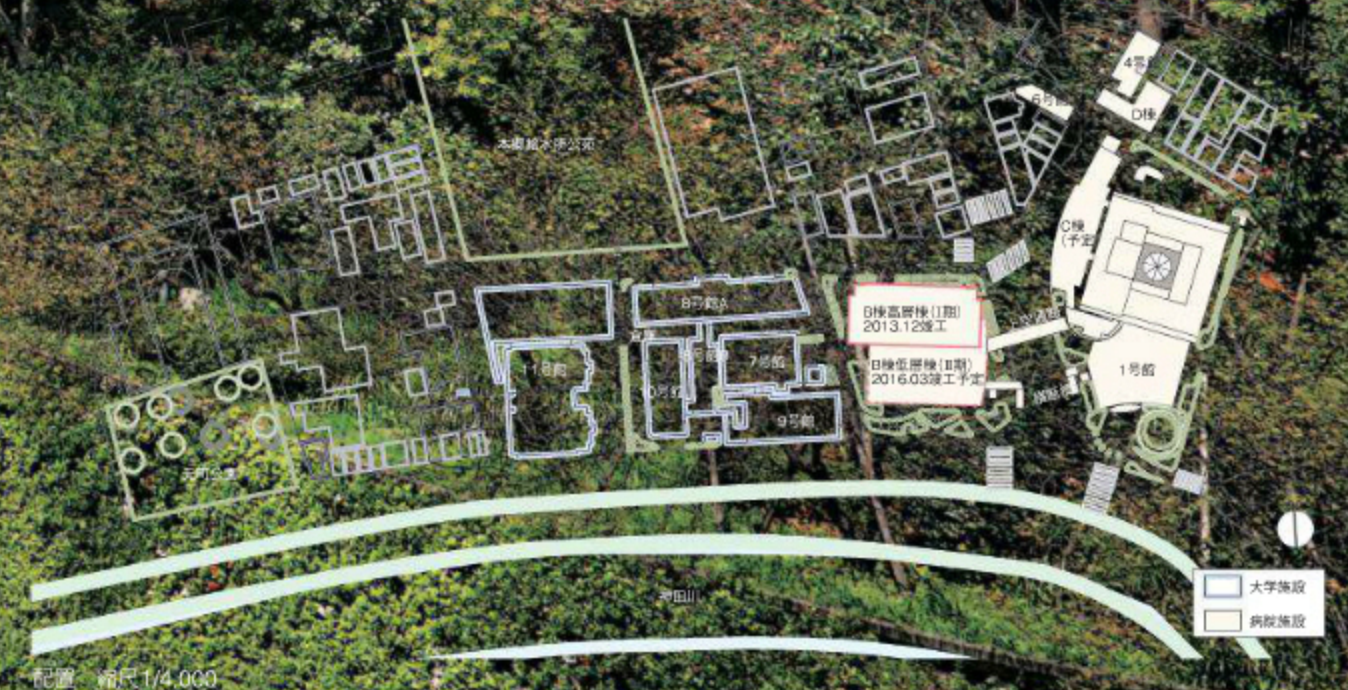
今回の新病棟建設は、順天堂創立175周年を記念した最先端の医療の実践と教育、およびその国際化を視野に入れた順天堂大学キャンパス・ホスピタル再編事業の一環である。

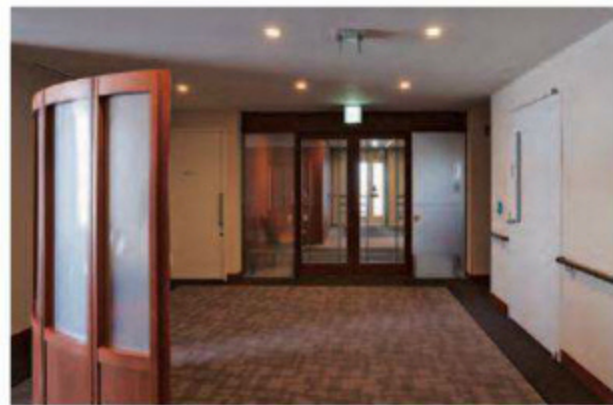
その趣旨に加え、日本の中心地から世界に向けて発信する新病院を実現するべく、実施設計開始時からのコンセプトである「100年建築」、「他の範となる未来型病院」、「エコロジー建築に関する先進的な取り組み」の具現化を目指した。その成果として、①免震構造＋上下動制振構造や自然素材床材の採用による長寿命建築の実現、②感染症に対抗する先進的施設仕様（空気感染・飛沫感染・接触感染のリスク低減に関する建築的仕様）の確立、③加

圧防排煙＋火災フェーズ管理型防災システム、避難エレベータの認定による高層病院の安全性確保、④放射空調システムや臭気センサーといった設備的技術や、4床室の間仕切り家具による準個室化空間によって、患者に対する快適空間の創造など、最先端技術を搭載した今までにない性能の病院建築を実現した。

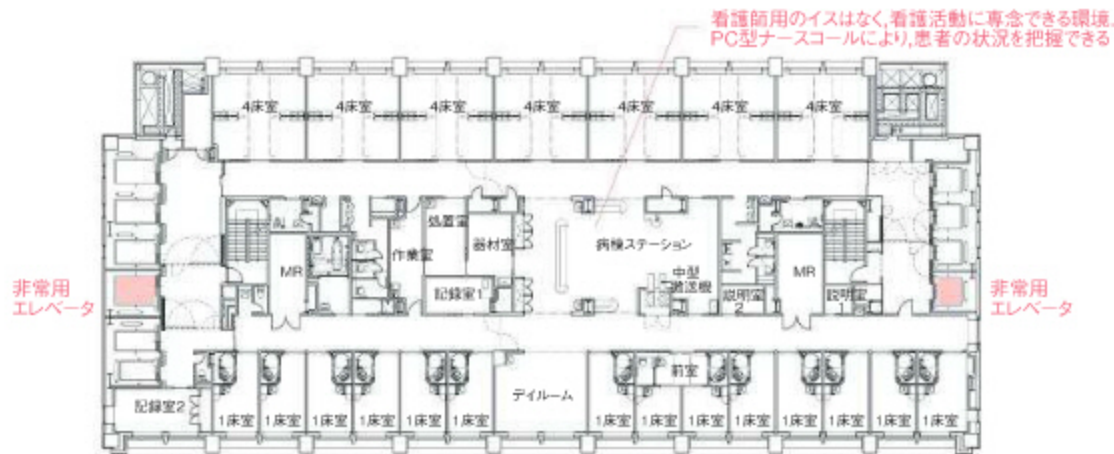
また、新病院ではエコロジー建築の証としてCASBEEのSランクはもちろんのこと、LEED（Leadership in Energy and Environmental Design: Healthcare版）でのGOLD取得を目前にしている（設計審査終了済み、II期工事終了後建設審査を受ける予定）。さらに、各技術の検証においては早稲田大学との共同研究や各種モックアップ、実験結果・成果を

反映し、その実効性・有効性を確認している。一方で総合設計制度の活用により、建物周辺には公開空地や緑地を確保し都市環境の向上にも寄与したプロジェクトとなっている。既存の1号館とは上空通路で繋ぎ、2街区に分かれてはいるが、ひとつの病院として十分機能する構成となっている。具体的な工事手順は、計画敷地内に既存の病棟を使用しながらの建設となるため、2期に分かれている。I期工事である高層棟は、高さ約100m、地下3階、地上21階建て（工期22.5ヵ月）の病棟を中心とした超高層建築であり、II期工事は、診療部門の拡張を中心とした7階建ての低層棟である。II期工事の屋上には緑化された庭園が計画されている。（杉山靖尚／清水建設）





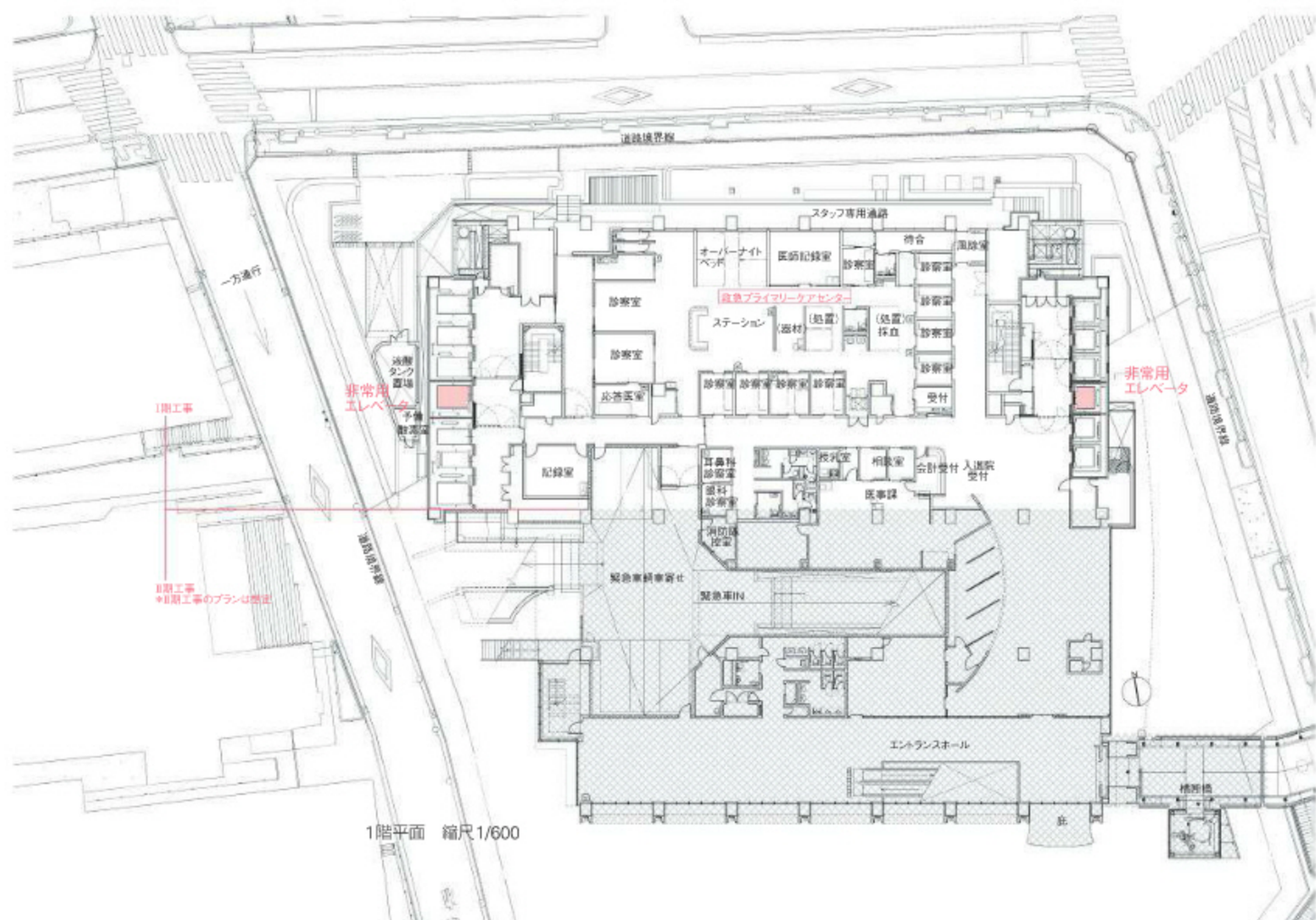
上：特別病棟（19、20階）エントランス。セキュリティのために電気錠としている。
中：標準病棟（10～18階）エレベータホール。右から2番目が非常用エレベータ。非常時には全階へ接続可能となる。
下：8階リハビリテーション室。床は天然素材のリノリウム。



標準病棟（10～18階）平面



5階平面



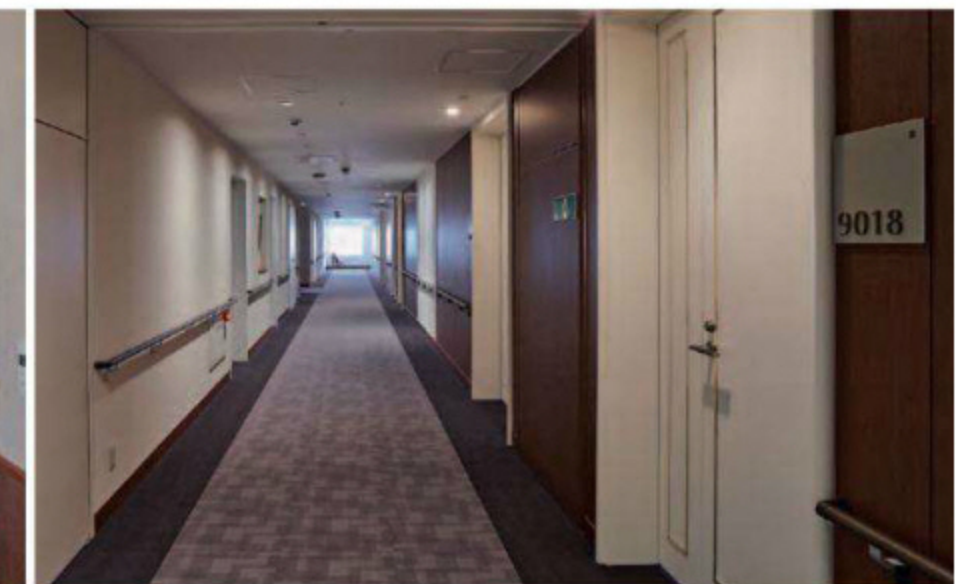
1階平面 縮尺 1/600

設計施工 清水建設
敷地面積 5,156.48m²
建築面積 2,864.06m²（Ⅰ期・Ⅱ期合計）
延床面積 45,217.13m²（Ⅰ期・Ⅱ期合計）
階数 地下3階 地上21階
構造 ハイブリッド構造（鉄筋コンクリート＋鉄骨造のシミズPS Hy-ECOS シミズHy-ECOS シミズNewRCSS）
免震構造
工期 2012年1月～2016年4月（Ⅱ期完了時）
撮影 新建築社写真部（特記を除く）
*提供 清水建設
（データシート182頁）

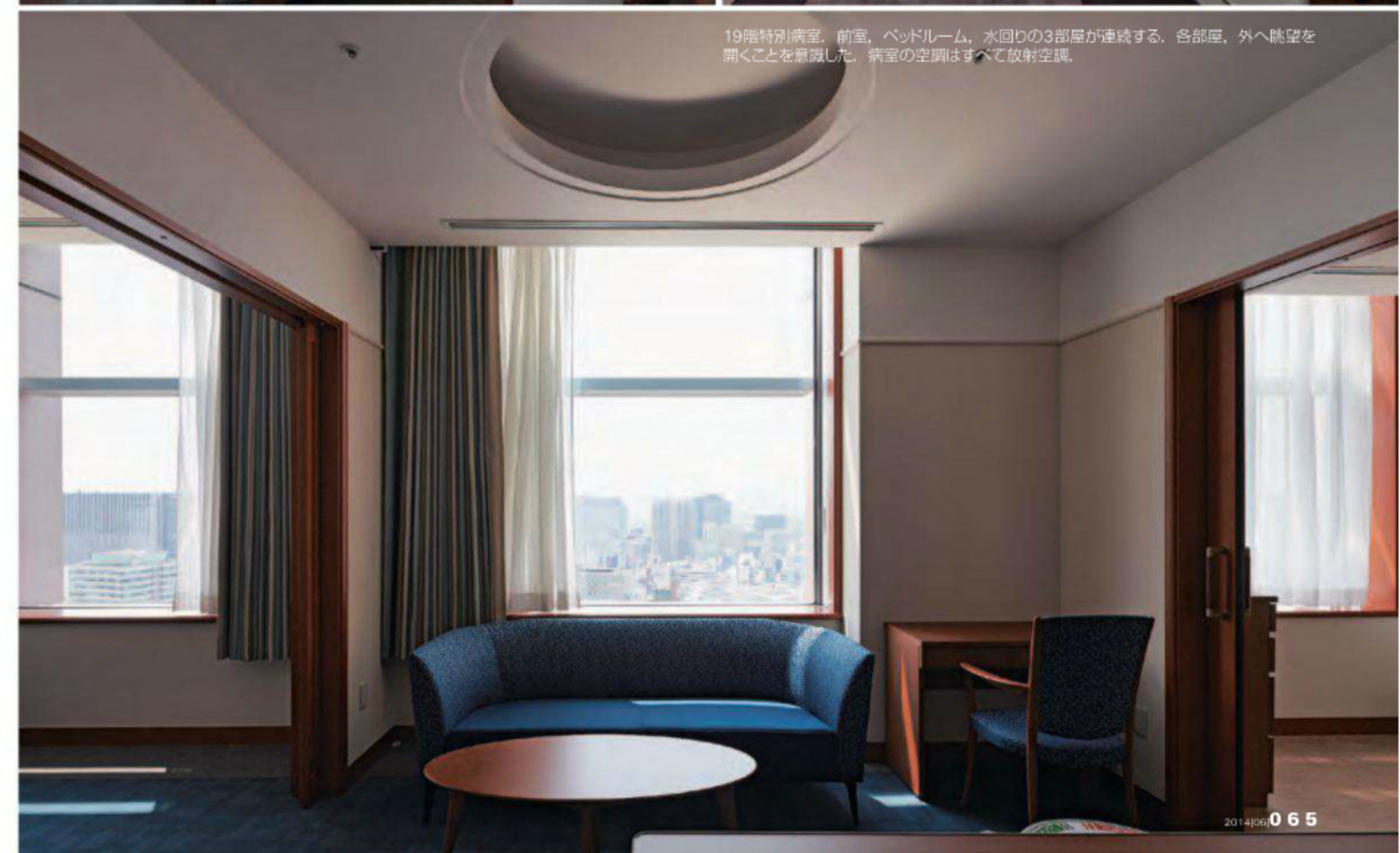


病院機能の連携を強化するため、1号館と繋がる上空通路を設置した。

19階特別病室（個室）。右の手洗いは水栓ねが少なく、菌が繁殖しにくいものを開発。室内の安全性確保およびリハビリテーションもできるよう、手摺を設置。



患者の治療は基本的に治療室で行うため、部屋、ドア幅、廊下幅共にベッドのまま移動ができる寸法に設定。床はカーペット敷き。高密度、直毛タイプの繊維を使った。清掃が容易に行えるもの。照明の照度を抑え落ち着いた雰囲気とした。



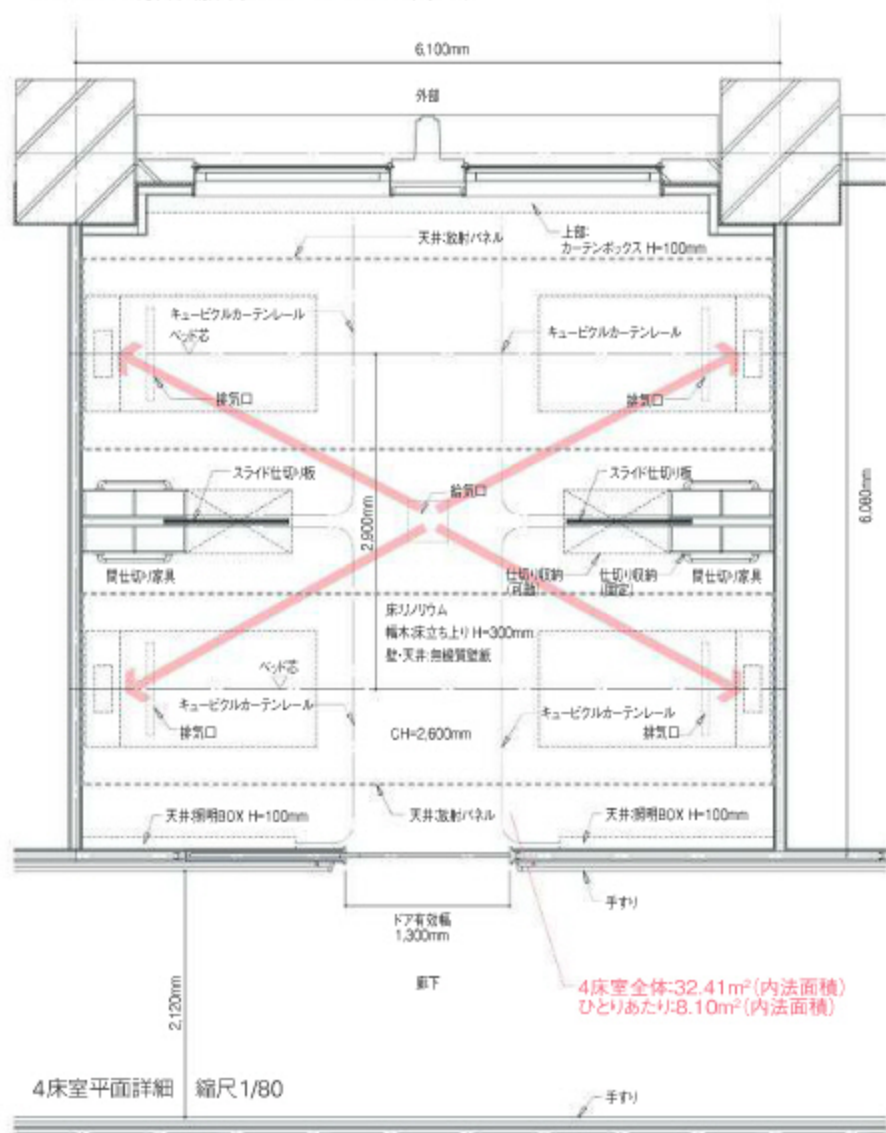
19階特別病室。前室、ベッドルーム、水回りの3部屋が連続する。各部屋、外へ眺望を開くことを意識した。病室の空調はすべて放射空調。



4床室における感染リスクの低減と安全性・快適性の確保

空調機からのドラフトによる不快感を改善する対策として、すべての病室と透析室に空気の流れがなくて放射型空調システムを採用している。これに加え、ベッド間間仕切りの設置と、病室中央から各ベッドへの一方向の気流を確保することによって、4床室各ベッドからの汚染物質や臭いの拡散を最小限に抑えることができる。近年では、高齢者のがん治療などにより免疫が低下し、若い世代の結核を再発することがあるため、放射空調による一方向換気気流システムは、空気感染リスクを低減させる効果が期待できる（現在このシステムを特許出願中）。これまでは「空気感染

症と分かっている場合」の施設対策は数多く考えられてきたが、今回の4室は、現代の高齢化社会が持つリスクである「空気感染型ウイルスが発生するからかたじけなく」に対応したものである。さらに、各部門間には清拭可能な素材の間仕切り家具を設け、飛沫感染対策を図ると同時に、接触感染対策としてPPE (Personal Protective Equipment) BOXやアルコール消毒ペーパーを家具に組み込んだ、感染制御室長である堀教授の指導の下、最先端の感染制御対策を盛り込んだ棟棟となっている。(杉山清樹・清水健哉)



066 | 2014/06

上：今回開発した水栓ねの少ない手洗器。感染拡大防止に、手洗器自体の微生物による汚染を防ぐため、高温多湿の日本の気候に対しては湿潤状態をつくらない工夫が必要となる。水栓の位置・角度や形状を検証し、高温多湿の日本の気候に対して湿潤状態をつくらない工夫をした。意匠権登録を行っている。

下：廊下床材は天然素材のリノリウム。清掃性を向上させるため、床から連続して幅木を立ち上げている。



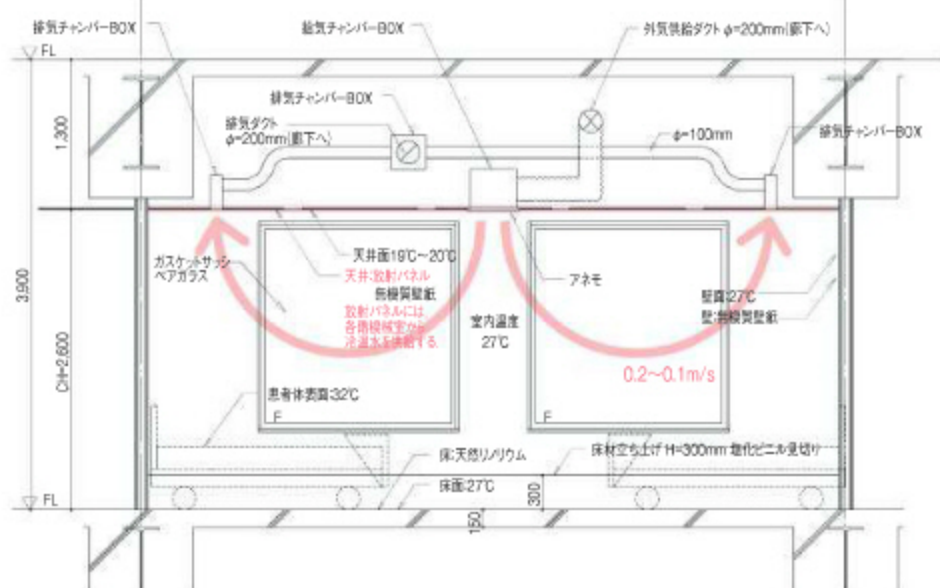
CFD解析による飛沫核拡散シミュレーション

左上のベッドに、結核の飛沫核を排出している患者がいると想定した場合、赤がその飛沫核が高濃度であること、青にかけて低濃度であることを示す。



今回採用した間仕切家具+放射空調システムの状態。一方向のエアフローを形成していることを示す。
(空気をかき混ぜない空調)

従来型の空調システムの状態。
飛沫核が広がっていることを示す。
(空気をかき混ぜる空調)



高層病棟における避難システム

病棟避難では以下が問題点となる。

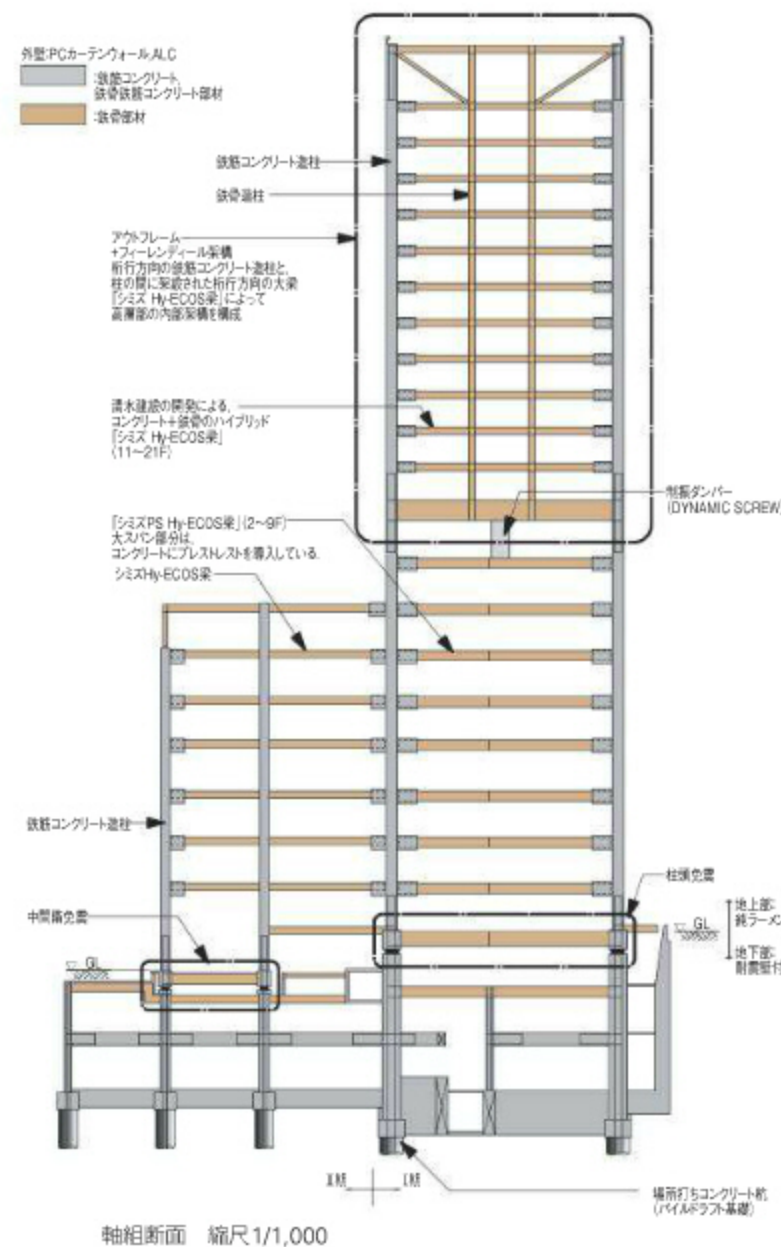
- 自力で移動できない患者が多い。
- 階段を使った避難が困難。
- 介助を伴う避難に時間・人手がかかる。

安全な一時避難エリアの確保と垂直搬送

高層病棟避難安全システムは、建物のフロアを複数のブロックに分割する水平防火区画。患者を焼死から加圧防排煙設備、火災を早期に検知し自動で区画閉鎖や防排煙設備の自動作動を行う自働発火の火災フェイズ管理型防災システム（特許大特許）で構成される。水平防火区画によって分割された各ブロックには非常用エレベータを設置し、火災初期における避難誘導に使用する。これは東京消防庁が2013年10月に制定した新指針基準「高層建築物における歩行困難者等に係る避難安全対策に関するもの」で、B棟高層病棟が適用の第1号となっており、火災時には、避難者は水平防火区画を通して出火区画側から非出火区画側へ水平避難する。非出火区画側は加圧給気されており、煙の影響を受けない状態で一時待機できる。その後、非常用エレベータを介して地上階や緊急治療が可能な階へ避難誘導される。火災フェイズ管理型防災システムにより、火災の確定や防火設備の起動など自動化するため、病院スタッフは避難誘導に専念でき、いち早く入院患者を避難させることが可能になる。また、当該避難の避難シミュレーションモデルを用いて患者に対するスタッフの介助避難誘導訓練に即した検証を行った結果、東奥出火（避難者24人）の場合、水平避難に要する時間は約11分となり、煙が蔓延する前に一時避難エリアに避難できることを確認した。

(野竹宏彰／清水建設)

免震+制振により地震の揺れを軽減



高層部（病棟階）のフィーレンデル架構と低層部の大スパン架構

建築計画としては、鉄骨とコンクリートのハイブリッド部材を用いた最大23.5mのロングスパンとし、フレキシブルな空間を実現している。高層部（病棟階）はスパン内に鉄骨柱を2本設けたフィーレンデル架構として水平・垂直剛性を高め、ロングスパンであるが十分な居住性を確保している。外周の柱は、病室内の面積を最大広く有効活用できるようにアウトフレームを採用した。本建物は免震構造を採用し、きわめて稀に発生する大地震時でも水平方向の応答加速度を250cm/s²以下（ものご倒れない目安）とし、特に手術室は130cm/s²程度に抑えている。また、上下方向の地震の揺れを低減させるために制振ダンパー（DYNAMIC SCREW）を9階に2台設置し、大地震時における上下方向応答加速度を各階とも10～15%程度低減させている。大地震時の上下方向応答加速度は1,000cm/s²を下回っており、これは建物内ものび浮かないことを示している。したがって、この建物は大地震時に内部のものごとが「浮かばない、倒れない」状況を維持できる性能を持っている。

(西谷隆之／清水建設)



火災時の垂れ壁降下後の様子。開口部を床上から1mにすることにより、廊下への漏煙が抑えられる。^{*}



病棟での水平避難計画 縮尺1/500 右のエリアで火災が起きた場合、安全区画は左のエリアとなる。火災発生力所により左右どちらかの方向へ避難が可能。

感染制御科学に基づく治療環境

HEPAフィルターを使用しない手術室・集中治療室

新病院のOP室や集中治療室においては、空気
の清浄度を確保するためによく使用される
HEPAフィルターを使用せず、フランク下の
ファンフィルターを採用している。HEPAフィ
ルターは手術室床間層のみに使用した。これ
は、堤野賢治の指導により感染制御科学のエ
ビデンスに基づいて判断している。

OP室を陽圧とし、廊下から倉庫などにかけて陰
圧とするプレッシャーカスケードを構築し創出
することにより、OP室から廊下へ向かうエ
アフローを確立している。手術室・集中治療
室には、その部屋衣服を着替えることに入
ることが可能。

本来必要な感染対策（水換えの少ない手洗
い器の採用や床材立ち上げによる清浄性の向上
など）を充実させていることで、HEPAフィ
ルターをなくし、換気動力を節減した。これによりエ
ネルギーの節約やランニングコストの削減を実現
している。（杉山靖尚／清水英樹）



5階手術室、廊下に対し陽圧としている。

2025年の医療建築と制度

超高齢社会における病院計画

中山茂樹 (千葉大学 大学院工学研究科・工学部 教授)

超高齢社会へ向け

2007年、わが国は世界に先駆けて65歳以上人口が21％を超える“超高齢社会”となった。入院患者に占める65歳以上の割合は1980年代には約40％であったが、現在では70％を超え、超高齢社会のピークを迎える2025年には75％を超えると推計されている。その中でも、75歳以上の後期高齢者比率ですら60％になるものと考えられている。

わが国にはおよそ8,500の病院があり、精神科や結核などの専門病院を除くと7,500の一般病院がある。国はこれら一般病院をそれぞれの病院が担う機能ごとに分け、高度急性期、急性期、亜急性期（地域包括ケア・回復期病棟）医療などにレベル分けし、それぞれにふさわしい機能と建築を備えた病院に再構成することを目指し、2014年4月の診療報酬改定で既にその一部を導入し、秋までには各病院の機能区分を届け出ることとなっている。また、現在一般病院の中には高齢者を対象とし長期の療養を目的とした病院が4,000弱あるが、これらの多くは徐々に老人ホームなどの施設に転換していく（病院ではなくなる）予定である。

個々の病院の機能・役割の明確化

日本の医療制度は、国民皆保険を基盤とする世界に誇るシステムであるが、経済状況の変化（悪化）や人口構成の著しい推移などにより、大きな見直しが迫られている。現状の国民健康保険が崩壊し、受診抑制や人権侵害を広げる可能性も否めない。医療制度が今後取るべき対策や新しい枠組みについては、「社会保障・税一体改革」や「社会保障制度改革国民会議」などで議論されている。制度改革の柱としては、前述したように病院の機能別ごとの再編成が進められつつある。医療体制の中で、個々の病院の位置付けを計画し、医療資源の集中投入による機能強化を図るなどをして、病院・病床の機能分化・強化が推進されている。このことは病診連携、医療・介護連携などにより必要なサービスを確保しつつ、一般病院における長期入院の適正化を促すものである。

こうした機能分化した病院が互いに連携しながら、医療サービス体系の中で地域全体で患者を治し、支える「地域完結型」への移行が示されている。これは、従来の「病院完結型」から医療・介護のあり方を地域ごとに考えていく「ご当地医療」の考え方の導入や、いわゆるフリーアクセス（どの病院にも行ける）の意義について、「いつでも、好きな医療機関へ」から「必要な時に、必要な医療へアクセスできる」への変容を示している。急性期を担う病院では外来患者を制限し、初期医療を経て他の医療機関から紹介された患者だけの診療に絞ることになろう。これらは、これまでの病院立地の概念とは異なるものである。

こうした背景の中で、将来の社会構造の変化も見据えて、個々の病院は自らが担う機能や役割——これをここではあえて「病院性能」と呼ぶ——を明確にしておく必要が求められているわけだが、これが病院計画の根幹となる。

たとえば、これまで「総合病院」として病院を構成する部門は、病院の規模や内容にかかわらず似たような構成であり、延床面積をどのような割合で各部門に配分するかといった計画指針が重要視されてきた。しかし今後は、病院ごと

に特色ある部門での構成が予想される。たとえば、10日前後の入院が前提の高度急性期・急性期病棟と、2、3カ月月の滞在が通常の回復期病棟では、病室の個室率や生活諸室のあり方が異なるのは自明のことであろう。また、病院の中核である診療部門も、画像診断部門（放射線やMR）や手術部の計画が病院ごとに異なるばかりでなく、技術や機器の進展と共に建築が変容できるようなフレキシビリティを備えた設計が求められる。

高齢患者増加への病棟計画対応

こうした機能分化は制度として急速に広まるであろうが、高度急性期・急性期医療を提供する病院でも高齢患者が増加している点が、建築に対する近未来の大きな問題であり、そうした病院における空間デザインが課題となっている。図1は、急性期病院における入院患者の年齢構成の年次推移である。年々60歳以上患者数の比率が増加しているが、この5年ほどで70歳以上患者の割合は5％以上増加し、さらに80歳以上患者数の伸びが著しいことが読み取れる。少し前までは考えられなかったが、80歳を超える患者にも心臓手術を実施するなど、急性期医療の対象は後期高齢者にもおよんでいる。

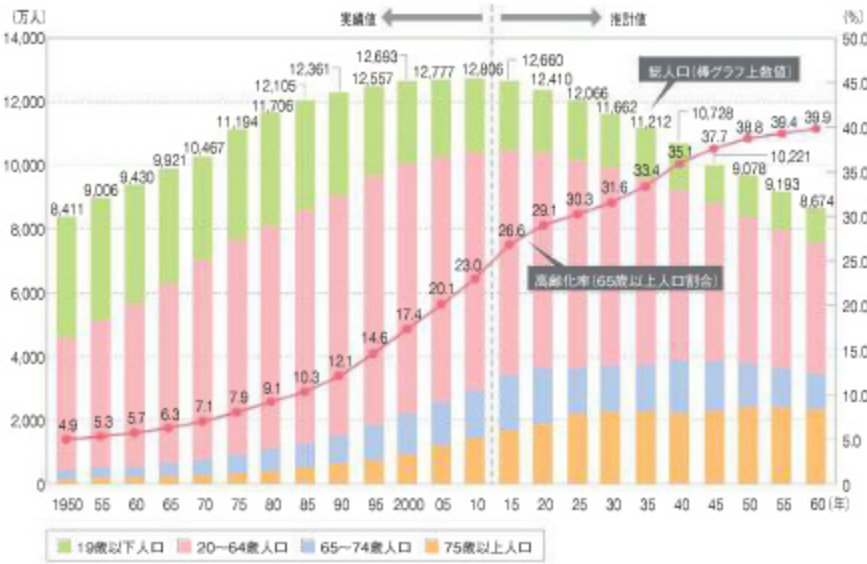
高齢入院患者に多い疾病は、糖尿病などの「内分泌、栄養および代謝疾患」、高血圧・心疾患・脳血管疾患などの「循環器系の疾患」、肺炎などの「呼吸器系の疾患」と言われているが、高齢者の疾病の特徴として、上述した病気を主傷病名とし、さらに別な病気も併せ持っていることが多い。また、低栄養・免疫機能の低下により感染症を発症しやすく、また疾患が慢性化しやすい。さらにADL（日常生活動作能力）の低下により、褥瘡（床ずれ）、尿失禁、嚥下困難・障害といった症候を伴いやすい。そして感覚器機能（視力・聴力・平衡感覚）や認知機能の低下により、転倒・転落を起こしやすくなる。

さらに、ADL低下や認知機能が低下している患者は、廃用症候群や要介護状態になる可能性が高く、これらの予防が必要となる。このように、高齢入院患者には医療と介護（リハビリ含む）が同時に必要になることが多い。ひとつの疾病だけを診る・看るのではなく、総合的に種々の機能を評価し、高齢者のQOL（Quality of Life）の維持・向上の観点から、さまざまな症候に対して全人的に対処することが必要である。以下、高齢者に特徴的な「せん妄」と「転倒・転落事故」に関して高齢患者の特徴を詳しく見てみる。

1）せん妄

せん妄とは、軽度ないし中等度の意識混濁に幻覚が加わり、不安や興奮を伴っている状態を言う。患者はあたかも夢と現実の区別がつかなくなっているように見え、客観的な事実とは異なる発言をし、疎通は困難となる。意識レベルは動揺しやすい。夜間やICUなど周囲からの刺激が少ない状況で発生しやすい（看護大辞典 医学書院：2002年より抜粋）。

入院中の高齢者のうち25～40％が発症すると言われ、かつ入院中にせん妄



資料：2010年までは総務省「国勢調査」、2015年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果
（注）1950年～2010年の転写は年齢不詳を含む

図1 高齢化の推移と将来推計（厚生労働省ホームページより参照）

を合併した高齢患者の1年以内の死亡率は、35～40％と非常に高いことが指摘されている。したがって、多面的なアプローチによりせん妄を防止することは、医療環境の構築の上で必須の要件となる。高齢者のせん妄の原因として直接・間接の引き金となるのは、感染症・複数の身体的疾患・便秘・脱水症・栄養失調症・激しい痛み・薬（特に睡眠薬）の服用の中止・認知症・うつ病・視力障害、などが要因になると言われている。せん妄患者への支援としては、以下の項目が挙げられるが、建築・空間環境として担うべき因子が多々ある。

急激な環境変化を最小限にする。／せん妄患者に安心感をもたらす、家族や友人など慣れ親しんだ人との会話を持つことができる環境調整を行う。／場所や時間を把握することは、錯乱状態の軽減に役立つ。今どこにいて、今日は何日で、現在は何時であるかが分かる環境の工夫を行う。またそれを維持する刺激を与えるために、普段愛用しているものや着用している部屋着など、自宅の生活を思い出すことができるものを活用する。／状況が許すなら、部屋のカーテンを開けるなどオープンな環境調整を行う。／聴覚、視覚への不必要な刺激は避け、気の散るような因子を取り除く。／視覚・聴覚に障害がある場合は、錯乱状態がより重くなる場合がある。視覚・聴覚に悪影響を与えない環境調整を行う。／せん妄患者が興奮したり攻撃的になった場合は、無理に抑制せず転倒・転落や傷害が引き起こされない環境調整に努める。

急性期病棟のあり方として、短期の入院期間が前提であることを先に記したが、わずかな期間しか入院しないからといって、患者の療養環境をないがしろにはできないことが分かるだろう。むしろ高齢患者のことを考えれば、たとえばICUというきわめて重度な患者が入院する病室においても、窓から外の様子が見えるようなレイアウトは有効である。一般にはICUは窓に垂直にベッドが置かれるが、欧米のICUでは普通病室と同じように窓に平行にベッドが置かれ、顔を向ければ外の景色を認識できる例は多い。景観がよいに越したことはないが、それよりも今の時刻を感じ、雨が降っていることを感じることでせん妄防止には役に立つ。

2）転倒・転落事故

病院で発生する転倒事故の50％以上は、65歳以上の高齢者によるものである。その理由は、視覚機能の変化、反応時間の延長、膀胱容量の減少や膀胱収縮機能の低下、骨粗しょう症、バランス機能や筋力の低下、起立性低血圧などが危険因子となっている。高齢者にとって転倒は単なる事故ではなく、入院要因となる疾病の他に重大な障害を抱え、重度の機能低下を引き起こし、入院におけるQOLの低下に繋がる可能性もある。転倒事故を引き起こす外部（環境）要因としては次の項目が挙げられる。濡れた床、段差、階段／固定されていない家具類（オーバークラフ、椅子）／浴衣や履物／点滴棒やその他の機器類を付けた安全ではない状態での歩行や活動／照明が暗い／手すりがない、あっても適切な場所にない／高さが低い

便座／キャスター付き移動ベッド／ロックされていない車椅子など。

たとえば、病室トイレを分散しできるだけ患者の近くに配置する平面形は普及しているが、それでも廊下の反対側にあるようなトイレでは廊下を横切る必要がある。一方、病棟廊下は車椅子やベッドの往來のために広く設計されている。この二律背反的な要求を、建築は受け入れる必要がある。

超高齢社会の病棟環境を総合的に見た計画要件としての視点

以上、病棟を中心に超高齢社会を向かえる日本の病院におけるいくつかの留意点を示した。医療を取り巻く社会環境はますます厳しさが増すであろう。そうした社会背景の中で人びとの健康を守る医療サービスを提供するためには、従来の病院のビルディングタイプでは不十分である。個々の病院が担う医療機能に見合った性能を備えておく必要があり、それらは個々の病院を取り巻く環境、条件により異なるので、解は病院の数だけある。最後に高齢者が多く入院する高度急性期・急性期病院の計画にあたって、計画の際の視座をまとめておく。

1. 複合疾病の増加の視点

高齢患者の特徴は、複数の疾患に罹患していることである。今日、看護単位構成は診療科別構成から臓器別構成への移行が見られるなどより細分化した体制が整いつつあるが、一方で複合疾病を持った高齢者の入院に対する医療・看護環境を想定すると、総合的な看護単位の可能性もあろう。急性期を脱していたとしても、継続的がん放射線治療など諸般の事情により、急性期病棟に入院し続けることの可能性も指摘されている。こうした状況をどのように捉えるかの視点が必要となろう。

2. 高齢ゆえの課題に対する予防的視点

せん妄、転倒・転落、感染の防止に関する管理的視点は、いずれの病院・病棟でも計画の基本指針であるが、上述したように高齢患者の場合はリスクが大きいので、より丁寧な視点が必要となる。「高齢患者は1週間寝続けると退院できなくなる」（木村壮介／元国立国際医療センター長）と指摘されるように、疾病ゆえの入院の長期化ではなく、その他の理由による長期入院への移行も危惧され、生活の質そのものが低下することが懸念される。

3. QOLを含む包括的管理の視点

身体的機能、精神・心理機能、社会・経済的機能により、QOLが決定される。したがって、病院環境の中でも目標設定、治療法の決定、介護支援、社会参加、社会貢献への支援、生きがいづくりへの支援が求められる。

4. 看取りの視点

死亡場所の80％は病院であるという現状は、将来的には大きな課題がある。しかし、その現実ゆえに、病院における看取りの環境（建築空間と「ひと」体制）の視点が新たな課題として、急性期病院においてもより深刻な視点として捉える必要がある。

5. 医療の変化への対応の視点

病院計画で重要なことは、「成長と変化」にどのように対応するかであり、このことに対するさまざまな提案・モデル提示がされてきた。これはもちろん今日でも重要な課題である。ただし、従来のような端部増築といった解決策では、なかなか実行し得ないことも判明してきた。敷地の確保、内部改修の困難さ、設備への対応などが成長（増築）を妨げている。また、最近は無償構造の導入が多いが、これは部分的増築にはそぐわない。そのため事前に「伸びしろ」を内部に仕込んでおく、やや先行投資的な手法が用いられるようになっている。単に増設できる空間を用意しておくのではなく、後でいつでも動けるような部門を仮に挿入しておき、しかるべき時に別な場所へ移設するような手法である。こうした建築技術の対応が有効に導入されている病院建築に、さらに多くのアイデアが盛り込まれることを期待したい。

特集

地域ごとの保育の場

——保育施設（幼稚園・保育所・子ども園他）として求められる空間とは

保育施設は、少子化により園児が集まらず閉園する保育施設が出てくる中、都市部では共働き世帯の増加による待機児童問題がしばしば取り上げられています。こうした状況を受けて、幼稚園でも未就園児の保育や預かり保育の開始、立地に合わせた独自の教育プログラムの導入、あるいは園児や保護者も参加しながらつくることを試みたりと、さまざまな取り組みが行われています。本特集では保育施設15作品を集め、地域ごとの環境に対してどのように建築が応えているか、園の取り組みも含めて紹介します。（編）

072 特集記事：少子化に応える保育建築への期待

佐藤将之

地域の素材、技術、伝統、人を活かしみんなでつくる

074 美濃保育園 子育て支援棟

象設計集団

東日本大震災の被災地域での仮設園舎再建

084 美田園わかば幼稚園

石原健也／千葉工業大学＋石森建築設計事務所

既存平面の踏襲による早期再建

094 気仙沼小学校区留守家庭児童センター

薩田英男／薩田建築スタジオ

大きな切妻屋根の下につくる7.5尺モジュールの多様な場

100 巨理町児童福祉施設

薩田英男／薩田建築スタジオ

清水建設本社一体再開発による都心の子ども園

108 京橋こども園

清水建設

雲のような壁で空間を仕切り繋げる

116 アミューあつぎ8階 屋内広場・託児室・子育て支援センター

石上純也建築設計事務所

デザインビルドでつくる子どもの空間

122 ぐるりん

DesignBuildFUKUOKA

2歳児のための外部スペースが連続する園舎

128 聖愛幼稚園 第2園舎

SUDA設計室

PCアーチによる冗長的な空間

134 港区立伊皿子坂保育園

遠藤政樹／EDH遠藤設計室

0歳～5歳児。ふたつの幼稚園、保育所、子育て支援センターの統合

142 たがわこどもセンター「まいまい」

塩塚隆生アトリエ

里山に囲まれて建つ長さ約100mの木造平屋建ての園舎

150 東京ゆりかご幼稚園

渡辺治建築都市設計事務所

大人の高さで子どもの低さで空間をつくる

156 うれしの東保育園 カンガルーのおうち

大建met 大建設計 なわけんジム

柔らかな光に覆われた子どものひろば

162 かなや幼稚園

石嶋設計室＋小松豪一級建築士事務所

自然豊かな環境を生かし保育園を増設

168 東村山むさしの認定こども園

ジャクエツ環境事業＋アトリエ9建築研究所＋村松基安＋村松デザイン事務所

上下階共通の構造の中に、異なる機能をつくる

174 NNビル／君津の保育所

kwass／渡邊健介建築設計事務所

少子化に応える 保育建築への期待

佐藤将之（早稲田大学人間科学学術院准教授）

本誌では本稿を含めると4年連続で保育建築（幼稚園・保育所・認定こども園の就学前保育施設建築）を中心にした特集が組まれ（本誌1106、同1204、同1304）、社会的需要や関心の高いことが分かる。そしてついに、2006年から始まった認定こども園の新制度*1が2015年開始の消費税10%での財源確保とセットで始まろうとしている。そこで本稿では、今だからこそ求められている保育建築、そして今後の保育建築を論考する。

少子化によって子どもが集まらずに既に全国各地の幼稚園・保育所が閉園し始めているが、筆者は、今後、特に幼稚園は10年も経てばすべての存続が危ういと考えている。新制度は最終調整が続いているが、検討過程では既存の幼稚園や保育所からの移行特例が認められた場合であっても「施行10年経過後に、設置の状況等を勘案し、移行特例の内容等を改めて検討」と、穏やかな表現ではあるが、今の状況が続くのは「10年」までという具体的な数字が表れた*1。こども園に移行できた園であっても、難局が待ち受けている場合もある。

建築家が手掛ける保育建築は、これらの危機を救い子どもを集める好機となり得る。経営者らにこの危機感があるからこそ、園それぞれが設計コンペ等を開催し、昔から園舎に関係してきた工務店や建築士ではなく、競うことに長けた建築家を新しい設計者として選ぶようになってきている。本誌読者には絶好期が到来している。

3歳未満児のための保育建築

新聞紙面で見かけると、少子化や人口減少が進んでいる。しかし、待機児童解消は求められ続けている。つまり、未就学児の数は減っているものの長時間保育のニーズが高いということである。そして実はその待機児童数の80%以上が、かつての幼稚園にはいなかった3歳未満児＝0,1,2歳児であることが大きなポイントである*2。

つまり、ここ数年、そしてこれからの数年、定員を割ったり、園舎が老朽化する幼稚園にとっては、3歳未満児を受け入れて就学前の全学齢で長時間保育を実施することも園化が、幼稚園の事情と世の保育ニーズが合致した主流のこども園への移行であろう。言い換えれば、幼稚園にとっては、3歳未満児の保育を行うことが今後の生き残りをかけた有力な手段である。実際、2006年度からの認定こども園開始や2008年度からの保育園舎建設資金源となる「安心こども基金」などをきっかけとして、3歳未満児の受け入れ、預かり（延長）保育、給食や昼寝（休憩）、一時保育、など保育所機能を追加した幼稚園・こども園が増えた（元もともと幼稚園であれば、認定こども園であっても看板を分かりやすいようにするために〇〇幼稚園のまま続けている場合がある）。そして上記「10年」の意味を考えた幼稚園が今、あるいは来年からの新制度と共にこども園化を検討し建設費補助を受けようと自治体の窓口に行くことが想像できる。ともすれば、消費税10%化や新制度開

始を受け、2016年から数年にわたり保育建築は、新制度の財源確保に伴って建設が増え、しばらくの間は、コンペで競い合った魅力的な保育建築が数多く登場することになるだろう。

さて、3歳未満児の受け入れは、最も導入前後の差が顕著に分かる移行であるが、運営者側は、新しい保育者の採用にも目を向けなければならない。夏を過ぎてから翌年度に開始するための建設費補助が決定する現在のスケジュールでは、基本設計を進める時間が余りにも短い。現行のこの計画の流れは保育所の建て替えや新設にも言えることで、待機児童解消のために定員増＝延床面積が大きくなる設計の中で、設計者と運営者側とでの意思確認が十分でないことが起きる。運営者は現状使っている空間が新しい空間を考える上での基準となる。保育所の建て替えでは、現状よりも人数が増えるのに、特に基準のない保育室以外のスペースを現状の人数で考えてしまいがちである。そして、3歳未満児を受け入れたことがない幼稚園では特に注意が必要となる。3歳未満児では3歳以上児とは違い、匍匐したり座ったりしている時間が長いので、高さ方向への配慮が必要となる。設計プロセスでは、展開図や断面図の検討が特に必要であり、展開図では具体的にできる空間に近い写真を見せなければ伝わらないし、断面図では単に人を入れるだけではなく、具体的な場面として示さねば伝わらない（写真1）。また、昼寝の場所と昼寝用布団の収納、保育室を西側に配置したために陽が入りやすく昼寝ができないなど、子どものための落ち着く時間が完成後の使いやすさに結び付くのが3歳以上児と3歳未満児との空間の違いである。保育士からすれば、いかに早く昼寝をさせるかで大人の落ち着く時間の確保にも繋がっている。3歳未満児の空間では、3歳以上児の活動を思っ空間を創造したり、とりえず経営のために3歳未満児を収容するので深く考えずに設計者に任される場合がある。これらが個人住宅のように施主との関係でつくりながらも、使い手である子どもや保育士の声が聞こえにくい保育建築の特徴である。

騒がしい空間から落ち着ける空間へのシフト

少子化が進む中、賑わいを求めたくなることも理解できる。しかしながら騒がしいことを賑わいだと勘違いしている運営者がいる。3歳以上児では、騒がしい子どもたち全員を誘導するために、枯れそうに張り上げる先生の声が響き渡る保育が行われていたりする（日本らしさでもあるが）、騒がしい中での一斉的な保育者の操作には難しさが伴うので、それを「保育力」「美德」と考える人が生まれている。実は、騒がしいことが子どもらしいという価値観は大人の視点、大人から見た勝手な子ども像ゆえ気を付けなければならない。川井敬二氏（熊本大学）によると、乳幼児のための音環境最低基準はないが、騒がしい保育施設の音環境は、保育者の労働環境として見た時には労働基準法に違反する音になるとのことである。騒がしさにあふれ喧噪感に満ちた空間では、当然、友だちや保育者



写真1：展開図や断面図での検討がうかがえる事例「あきたチャイルド園（本誌1304）」。屋内外には視覚的な連続性があり、オープンな空間の家具配置やゆったりとしたゾーン配置、設え替えを見据えた検討が行われたことが想像できる。写真手前の子どもや保育者が園庭の賑わいを感じながらも落ち着いて自分たちの活動に夢中になっている。*
写真2：あきたチャイルド園の屋上（写真手前から一周）と中庭（写真中央部）。屋上が乗り物に乗って遊べるような平らな園庭として、起伏があり泥遊びもできる園庭として中庭が配置されている。子どもの屋外環境への欲求に対し最大限敷地を活用している。
写真3：デンマークの保育建築で見かける昼寝用のかご（krybber）と昼寝スペース。屋根はあるが、壁面はルーバーだけで外気に接している。枯葉の溜まりから吹き込みの様子が分かる。通訳の現地在住日本人女性は、15年以上前の雪の日に現地の外で昼寝をしているわが子を見て、はじめは「殺される」と思ったと語った。*
写真4：認定こども園松幼稚園の設計プロセスにおける保護者・保育者を交えたワークショップ（2014年3月）。建築家、谷口麻里子・梶浦曉・佐藤将之研究室の企画で開催。*（佐藤将之）

との距離調節は非常に難しくなり、人間関係づくりにまで影響を及ぼす。併せて当然、落ち着いた気持ちをつくることも難しくなる。また、室内吸音が園児や保育者の発声音量の低減に効果があることも明らかになっており、音環境から空間の質を考えることもできる*3。ビジネスために多数収容することを賑わいとしてプレゼンしている運営者がいるが、建築家はそれに加担してはならない。

屋外空間への欲求（写真2）

昨今の待機児童を解消するために、保育建築の最低基準は自治体ごとに解釈が行われ*4、保育施設の高層階設置が増えた。屋上を園庭として計上するものも見られるが、最低基準面積を満たす屋上すらなく近隣の公園が園庭の代わりとされているものもある。

園庭が最低基準以上で設置された保育所において、筆者らが滞り場所と好きな場所についての調査を行ったところ、ほとんど屋外に出ない園であっても園庭が好きな場所として位置付けられていることが分かった。一方、調査中に晴れていても1日中屋内にいるクラスがあったりもした。子どもたちが主体性を持って過ごすには、主体的に環境を選択できることが必要であり、収容建築としての社会的・地域的背景が落ち着けば、保護者らには保育建築に対して子どもの育ちとしての質的な評価基準が生まれてくるだろう。10年後には、戦後の集合住宅の変遷と同様に生活や子育ての質的な視点が培われていくに違いない。

また、筆者が昨年と一昨年、デンマークの幼児一体施設を調査したところ、屋外や外気に触れた半屋外で昼寝をしている事例を度々見かけた（写真3）。気温が零下であってもこの昼寝が行われているらしい。また、毎日15時のおやつを屋外で食べており、筆者が見た場面では気温が7度程度でも行われていた。デンマークと日本では、屋外に対する価値観がかなり異なっていることが分かった。また、最近日本では、ビタミンDが不足することで起きる「くる病」が増えている*5。さまざまな原因が複合的に関係するようだが、その中のひとつに日光浴不足があった。日本における保育建築の配置計画が大人の都合でつくり、部屋に閉じ込めやすい状況を生んでいるのではないかと、関係者のひとりとして心配する日々である。

使い続ける仕組み、多様に地域と繋がる保育建築の展開

現場の保育者は、設計者と理事長（園長）だけで設計を進めた場合、自分の意志がなくでき上がった場所で保育をしていくことになる。当然、設計された環境についての理解が乏しくなる。他方、ワークショップなど（写真4）によって自分の意志が反映された部分があれば理解や愛着を持って保育を行うことができる。保育建築は、子どもたちの育ちを助けるものであり、保育者をはじめとした子どもに関わる大人たちが、保育建築に愛着を持たなければ子どもたちの育ちにも

影響を及ぼすであろう。このようなワークショップは、アイデアづくりだけではなく、人と人との繋がりがつくりとなり、人材が発掘されて園の活動に活用されることにもなる。設計者も色んな人と知り合いになり現場に行きやすくなる。

実は、現状の建て替えでは3歳未満児の待機児童数が多いにも関わらず、増員数は3歳以上児の方が多いことすらあり、建てる側（施主）と自治体の建設補助費・運営補助費補助のバランスが取れていないように思えるものがある。将来的に、保育建築が無駄の多いハコモノとして指を差される可能性があり、3歳以上児の空間に大きな余裕ができることになる。アイデア力に長けた建築家には、園と共に将来的な構想を含めての提案を期待したい。

既に認定こども園になったいくつかの園からは、次の変容としてコミュニティづくり（カフェ、高齢者の集う場所、駄菓子屋等々）の機能を追加する構想が届いている。地域の人びとが集い、地域みんなで育ちあう場をつくらうとしている。それが回り回って、でき上がった保育建築の魅力もつくることになることになりそうだ。保育建築を保育をするための空間として考えるのではなく、保育建築を中心として地域のさまざまな人びとが集い、カフェを使った保育、高齢者にゲストとなってもらふ保育など、地域みんなで育ちあう場となる計画が始まっている。保育建築をつくる際には、子どもがいるだけの空間としてではなく地域の魅力の場となるような、まちづくりを含めたマスタープランを考えることが必要である。完成後もいろんな大人が保育建築と子どもを通じた愛着を育んでほしい。自治体には、弾力的な運営費補助を期待しているが、上記、保育以外での雇用でシルバー人材が活動する場ともなれば、多世代交流のシステムが構築されることになるだろう。

以上、これまでは最低限が見つめられてきた保育建築であったが、地域の多世代がさまざまな価値を見出せる場となる保育建築がつくられていくことを期待している。

*1：西田紫郎（内閣府）著「子ども・子育て支援新制度と認定こども園の理解について」（全国認定こども園協会子ども・子育て支援新制度特別研修会資料、2014年2月28日）
*2：「保育所入所待機児童数（平成25年10月）」（厚生労働省、2014年3月 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000042049.html>）
*3：川井敬二著「保育空間における喧噪な音環境に対する室内吸音の効果の検証」（こども環境学研究 Vol.8、No.2 pp.58-64、2012年）
*4：幼稚園保育所が連携する認定こども園では、2015年度以降は基本的に「幼稚園又は保育所の高い水準を引き継ぐ」とされ、園舎・保育室等の面積では、満3歳以上の園舎面積は幼稚園基準（3学級420㎡、1学級につき100㎡増）、居室・教室面積は、保育所基準（1.98㎡／人、乳児室は1.65㎡／人、ほふく室は、3.3㎡）となっている。また、「地域型保育事業の認可基準について」、国が定める基準については、「従うべき基準」と「参酌すべき基準」とがあり、「特に、「保育室及びその面積（面積基準）」については、地域の実情に応じて、公的スペース等の活用を図るため、保育所等とは異なり「参酌すべき基準」としている」と明記されている*2。
*5：「くる病：乳幼児に増える 母乳、日光浴不足、食事が要因」（毎日新聞テータ版、2014年5月2日）

地域の素材、技術、伝統、人を活かしみんなでつくる

美濃保育園 子育て支援棟

設計 象設計集団

施工 澤崎建設

所在地 岐阜県美濃市

MINO NURSERY SCHOOL MOKUIKU MODEL PROJECT

architects: ATELIER ZO

南東より見る。岐阜県美濃市の曹洞宗寺院の境内に建つ美濃保育園子育て支援棟の建て替え計画。下階に子育て支援施設、上階に遊戯室が入る。5本の丸太が屋根を支える。手前の格子は耐力壁。木のよさを子どもたちに伝えられるような空間を目指した。



西側より見る。中央の柱は、保育園が地元林業会社の協力を得て山から切り出した。切り出しには園の園児も立ち会った。その形や枝付きから「おばけの木」と名付けた。手前の格子は耐力壁。奥には鐘樓堂が見える。



1階遊戯室。子どもたちは同じ敷地内の保育園舎から境内を通過して遊戯室に来る。柱はおばけの木。柱の枝は子どもが怪我しない長さで残した。



1階遊戯室。小屋組は多面体の屋根を支える丸太の柱とランダムな梁で構成されるが、地元大工の技術を生かし在来軸組構法で実現した。山から切り出した丸太柱が屋根を支える。丸太以外の軸組部はプレカット材を使用した。主なスパンは3,800mm×4,000mm。最高天井高は約5,200mm。天井材は木毛セメント板極薄塗装。



境内より見る。左は鐘楼堂。屋根は美濃の山々のかたちに沿うように多面体のデザインで、ガルバリウム鋼板立てはげ書き。

「木」を子どもたちに伝える空間

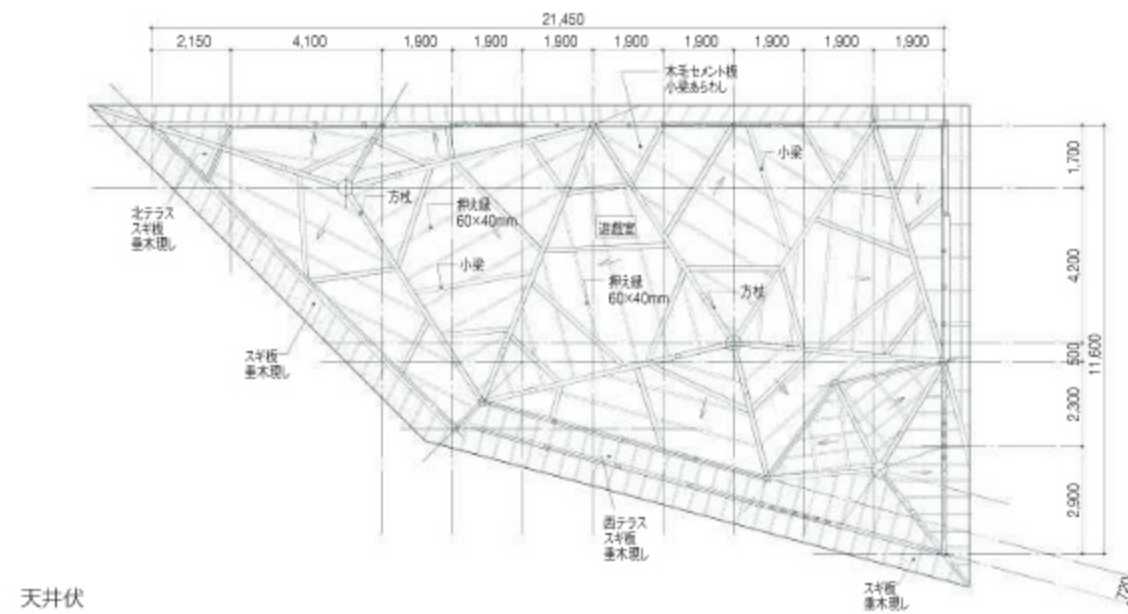
曹洞宗寺院の境内にある美濃保育園は、子育て支援棟の耐震改修にあたり、「お寺の本堂は木造で何百年も経っているが、コンクリート造の園舎は数十年で建て替えなくてはならない。新園舎は木造で建築する」という考えに基づき、2010年より岐阜県立森林文化アカデミー木造建築講座と共同で保育モデル園舎づくりのための基礎調査研究事業として、地域や環境や素材調査、地域の人びと、保育者の意識調査などを行い、これを基礎として、2012年園舎建設プロジェクトがスタートした。

木育とは、日本の資源である「木」を、子どもたちに伝えること(教育)として、国の林業施策の中で位置づけられている。私たちは、それにとどまらず、「木」の環境によって子どもたちを健やかに育む(保育)ことと考へた。「木」の環境とは、森林、素材としての木、自然環境、地域、文化、技術、人びとの暮らし、すべてに関わることである。園舎は古い美濃の街、長良川水系の山々、お寺の景観に調和するよう、軒を低く抑え、落ち着いたある景観をつくるような外観をデザインとした。2階建ての木造園舎を力強く支えるのは、5本の枝つき自然丸

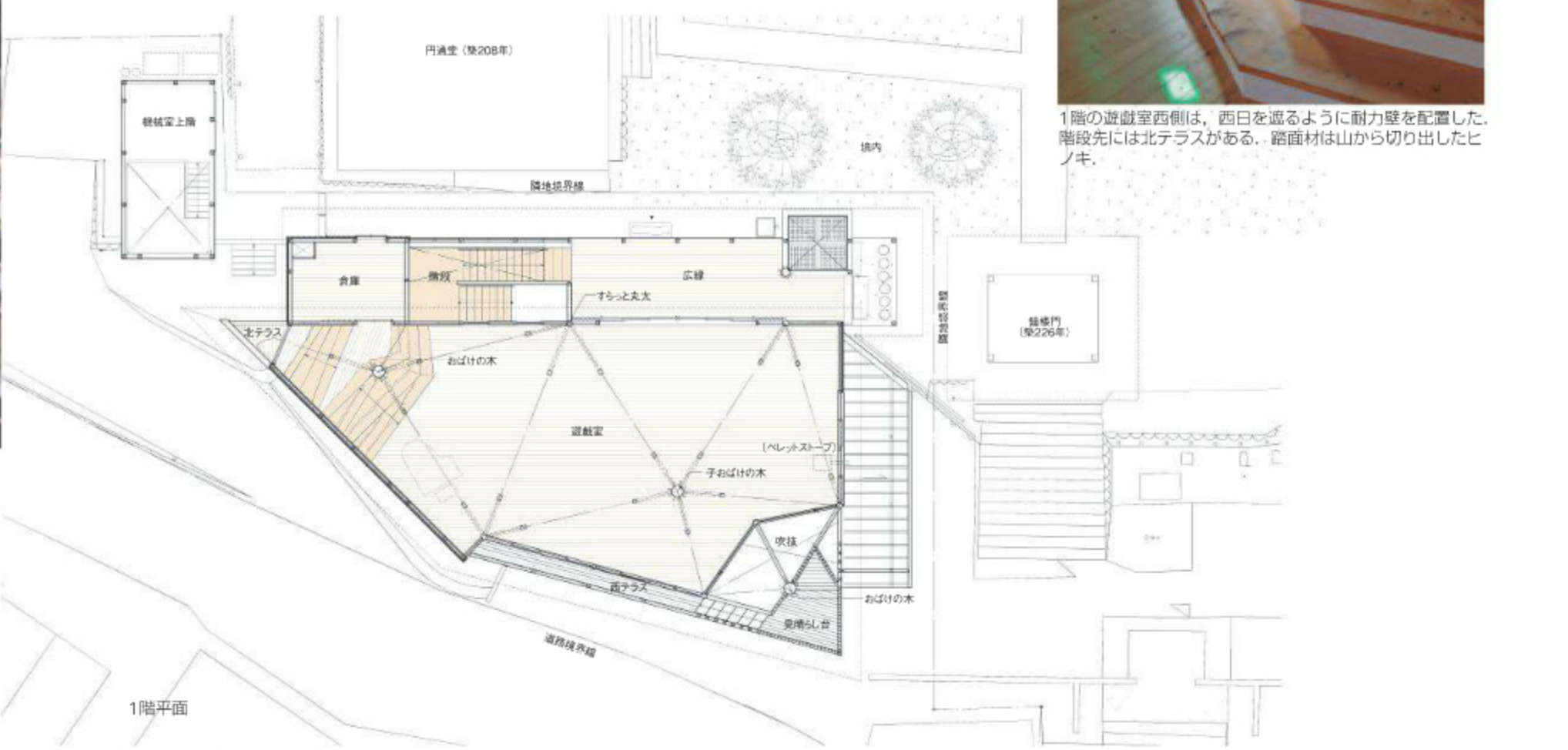
太の柱である。保育園が地域の林業家の協力を得て、山に入り樹齢200年弱のヒノキの木を選び、伐倒し自然乾燥しておいたものだ。丸太柱を中心として枝を広げたような屋根架構が、森のような内部空間、山が連なるような屋根デザインをつくっている。東側境内と西側前面道路にある高低差を活かし、上階も下階も接地する断面構成とした。境内側は広縁と列柱がお寺の本堂、座禅堂と共に境内を取り囲む。2階建て保育園の準耐火建築物としないていように、下階は地階となるように設計し、現しの木を活かした空間を実現した。丸太柱と屋根の架構は、地域の大工の墨付け手刻み加工によるが、それ以外の軸組部分はプレカットとして、工事費を抑えている。美濃地方は、森林と林業の土地であり、和紙や、柿渋などの自然環境がもたらす素材、技術、文化が今も残る地域である。また、人びとが山や自然と共に生活する知恵や伝統も残されている。これらを計画に取り入れ活かすことによって、地域らしさのある特徴的な空間をデザインすることを目指した。保育園の先生達、地域の人、美濃市にある岐阜県立森林文化アカデミー木造建築講座の学生や先生、多くの人たちが、地域の材料を使った園舎のためのいくつかのワークショップに参加した。このようなプロセスでつくった園舎は、子どもたちにとっての何よりの学びの場、すくすくと育つ場となることだろう。(関前代／象設計集団)



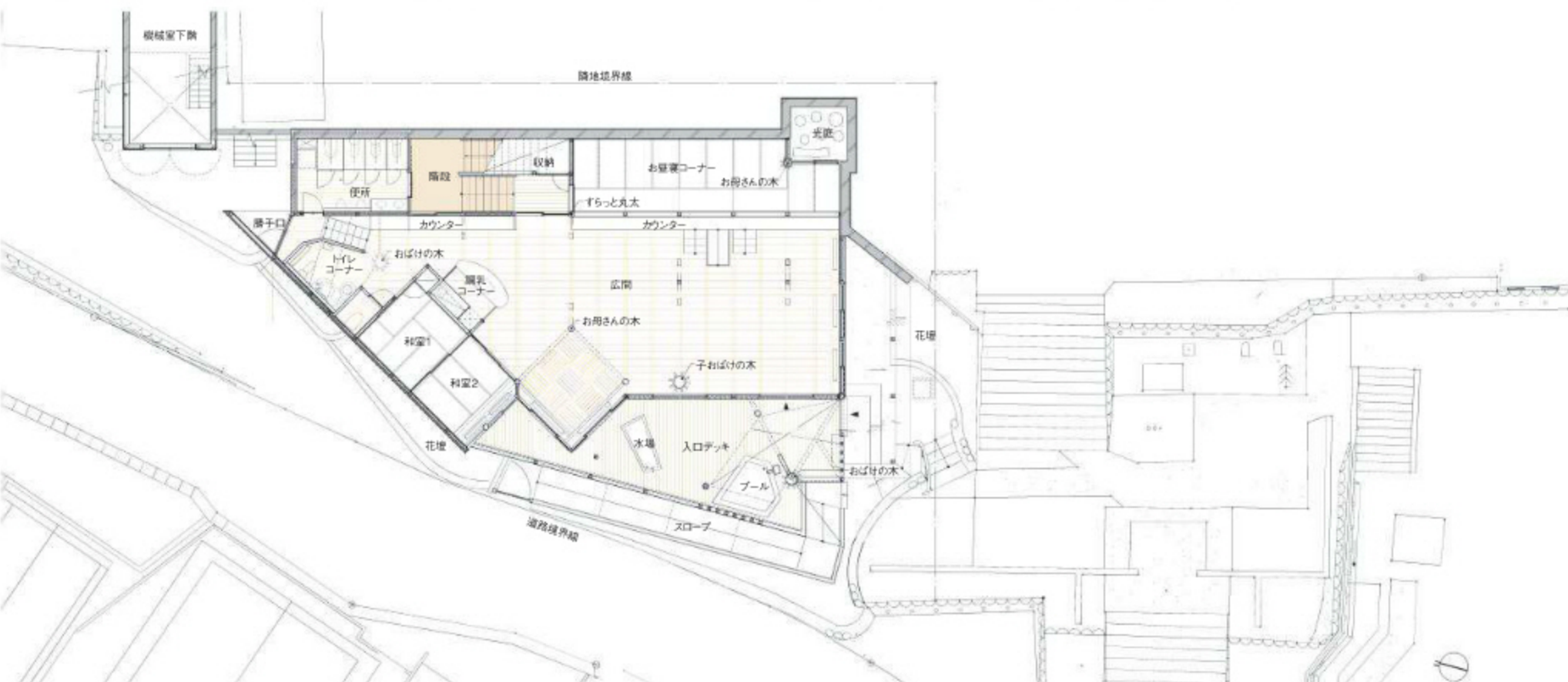
配置 縮尺1/15,000



天井伏



1階平面

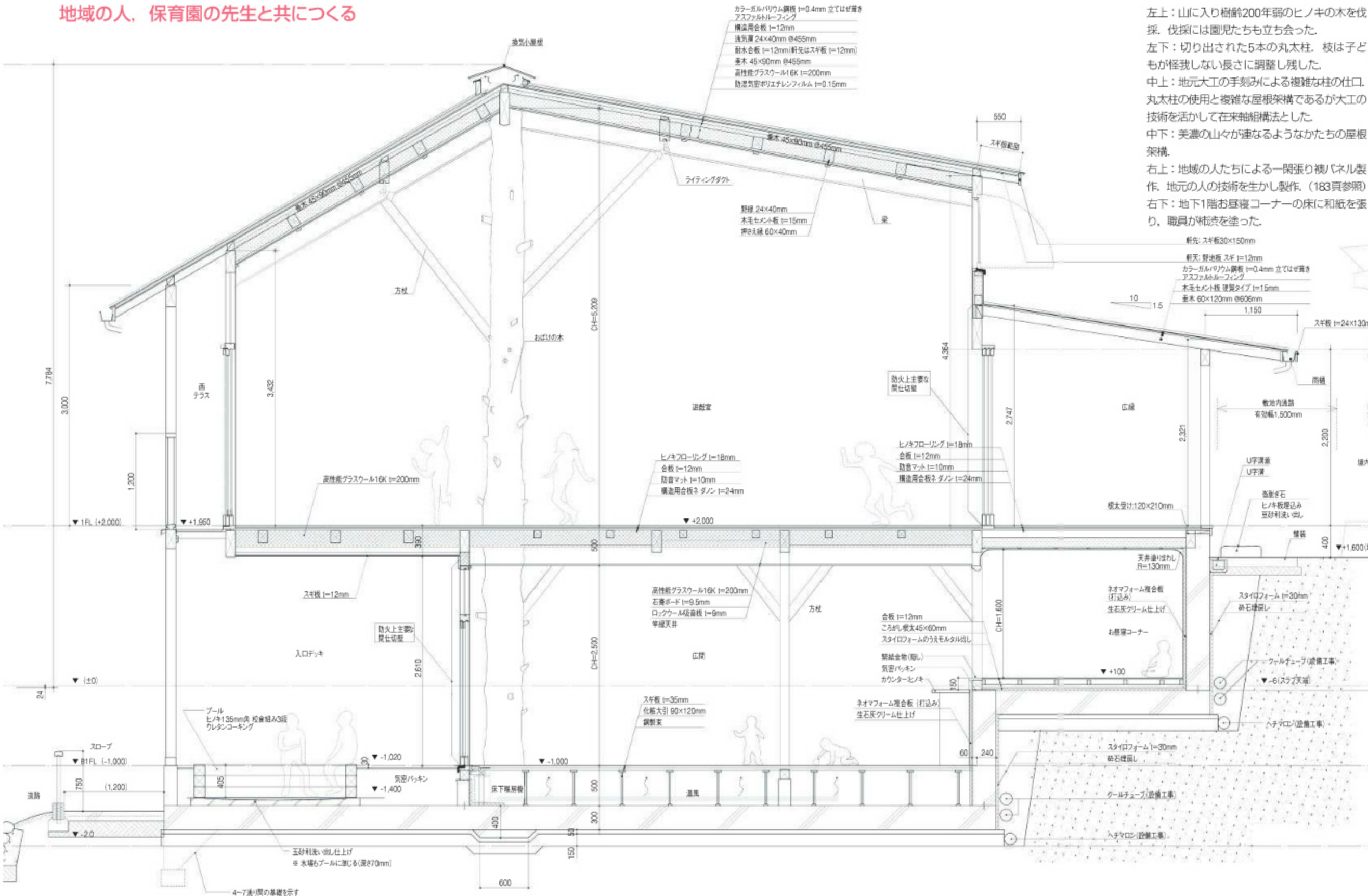


地下1階平面 縮尺1/250



1階の遊戯室西側は、西日を遮るように耐力壁を配置した。階段先には北テラスがある。階面材は山から切り出したヒノキ。

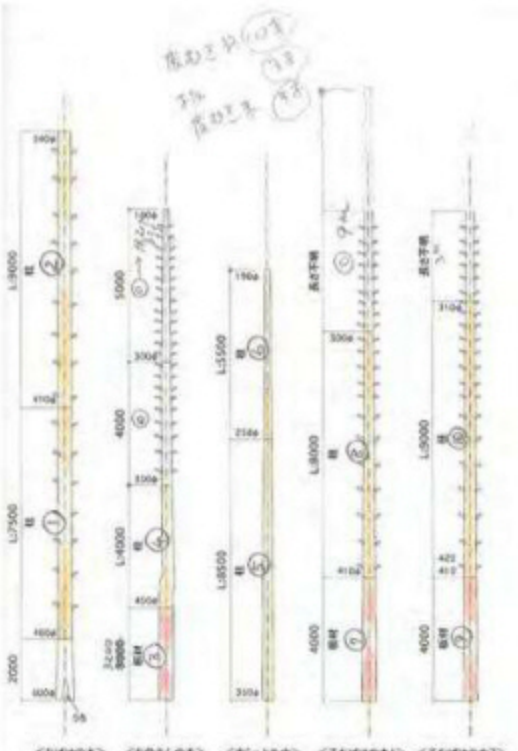
地域の人、保育園の先生と共につくる



断面 縮尺1/60



敷地調査 縮尺1/1,700



丸太柱 縮尺1/300

左：岐阜県立森林文化アカデミー木造建築講座の学生による敷地調査。地下1階を街側、1階を境内側に接地させ、中間レベルにある山門は、地域とのクロッシングポイントとなる重要な場所であることを見つけた。ここに主たる出入口を設定し、地域の人のために保育園が身近で密接な関係となるよう計画すべきであるとした結論付けた。北の山に向かって視線を絞る、隣接する家のある西側に壁をつくる、円通堂越しの緑が見える高い開口をとるなど敷地調査の結果から建物の構成要素が導き出された。

右：丸太柱の有効活用
山より切り出して来た丸太柱を採寸し、形状などを把握した。どの部位を柱として使用するのかを検討、柱として使用する所以以外は板材として床に使用するなどして、伐採した木を余すことなく使用した。

左上：山に入り樹齢200年弱のヒノキの木を伐採。伐採には園児たちも立ち会った。
左下：切り出された5本の丸太柱。枝は子どもが怪我しない長さに調整し残した。
中上：地元大工の手刻みによる複雑な柱の仕口。丸太柱の使用と複雑な屋根架構であるが大工の技術を活かして在来軸組工法とした。
中下：美濃の山々が連なるようなかたち屋根架構。
右上：地域の人たちによる一閑張り襦ろパネル製作。地元の人々の技術を生かし製作。(183頁参照)
右下：地下1階お昼寝コーナーの床に和紙を張り、職員が板敷を塗った。



設計 建築 象設計集団
構造 鹿島建築構造設計事務所
設備 共信設備設計
施工 澤崎建設
敷地面積 536.97m²
建築面積 262.88m² (支援棟243.97m² 機械室 18.91m²)
延床面積 473.00m² (支援棟443.83m² 機械室 29.16m²)
階数 地下1階 地上1階
構造 木造
工期 2012年4月～11月
撮影 新建築社写真部(特記を除く)
*撮影 澤崎建設
(データシート183頁)



左：入口デッキ。半屋外空間で、プールが配置されており子どもが利用したり、地域の人が足湯として利用したりする。(183頁参照)
右上：地下1階広間。子育て支援施設として使われている。右の柱はおかあさんの木。
右下：地下1階広間。床材には9種類の木材が使用されており、子どもが、裸足で木の質感を感じられるようにした。

東日本大震災の被災地域での仮設園舎再建

美田園わかば幼稚園

設計 石原健也／千葉工業大学＋石森建築設計事務所

施工 プライム下館工務店

所在地 宮城県名取市

MITAZONO WAKABA KINDERGARTEN

architects:KENYA ISHIHARA / CHIBA INSTITUTE OF TECHNOLOGY + ISHIMORI ARCHITECTS



保育室。東日本大震災により被災した閑上地区の仮幼稚園の再建計画。宮城県名取市美田園地区に建つ。元もと園舎が建っていた閑上地区は被害が大きく、土地の嵩上げ復興事業が未着手であることより、場所を美田園地区へと移し、いずれ閑上地区へと戻れることを考え、5年間の期限付きで仮設園舎として再建。ボルト接合による木構造体とテント膜により移築可能なつくりとしている。



南側外観。5年間の期限付きの借地であるため、今後の移築を考えて保育室棟は木造による架構と膜屋根による構成。保育室の周囲にまわる回廊の気分スペースにより、膜屋根の引力を受ける。プランは浄土寺浄土堂に範をとった丸間プランを採用。



保育室、中央の檜組みと周囲の回廊がワイヤケーブルによって繋がり一体的に屋根を支える。東西方向はアーチを介して東西の力がバランスし、檜組みは鉛直力のみを柱に伝える。南北方向はアーチの平化通じた3本のスチールロッドを介して南北の張力をバランスさせ、入母屋形状を利用した東西・南北の張力の交差を処理している。



回廊。右に保育室。膜屋根の張力を受ける偏心ブレースがトンネル状の空間をつくり出している。

はじまりの形式と工作の精神

「関上わかば幼稚園」再建の相談を受けたのは、2012年初頭のことだった。再建とは言っても地区の復興計画もまとまらない中、借地に建てる仮設園舎になる。理事長の佐々木加知枝さんはまだ再建を躊躇されていたが、「もう一度はしめるのなら、子どもたちだけでなく保護者や地域の人みんなが集まれる園舎にしたい」と話された。振り返ればこの言葉が、この園舎の方向を決定付けたと言ってよい。仮設園舎とは言えプレファブではなく移築可能な木造建築であれば、こうした希望に応えられるのではないかと考えた。

園舎は力強く、みんなが共感できる形式がよいと思った。モデルは浄土寺浄土堂である。三間四面堂の単純な平面形式は、集まりの場にふさわしく、多くの人に馴染みのある原初的空間(堂)となる。事務室など付属機能を別棟とすることで、お堂形式の保育棟を持つ初期案が生まれた。

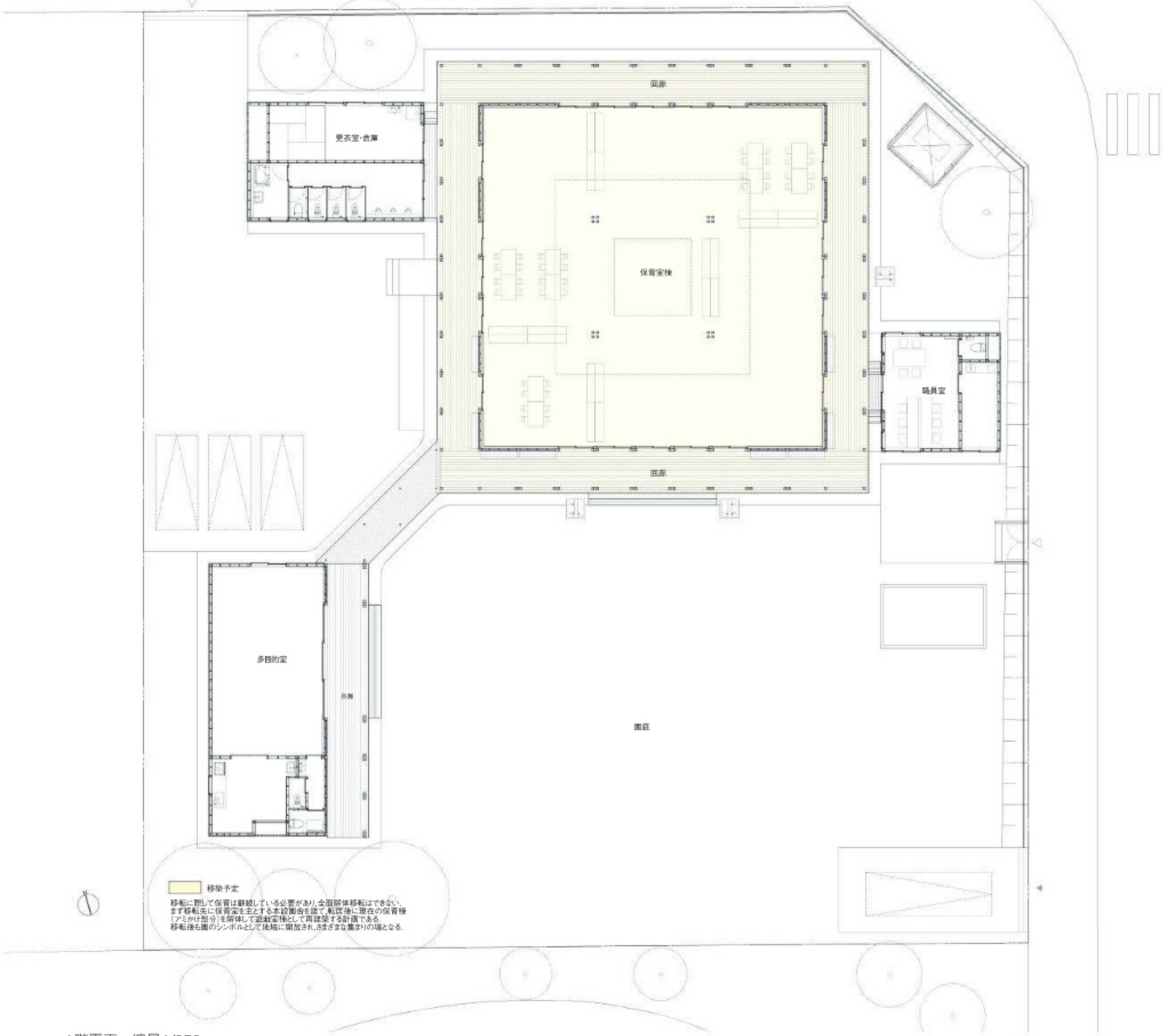
以降の設計は、この形式をいかに合理的に構築し移築できる建築とすることに集中した。屋根材は再利用の容易さからテントを選択し、初期案の方形屋根は頂部を一枚の膜材で納めるためにアーチ形の入母屋に変形した。木材は解体と補修(部材の入れ替え)の容易さから小断面流通材(105mm角)をボルト接合によって組み上げ、中央の檜組み頂部には私たち(プレイグラウンド・サポーターズ)が志津川で自作したシェルターと同型のアーチを載せた。檜と回廊の間は木材ではなく、テントを支持するワイヤで繋ぐ。このワイヤは放射垂木状に配され回廊の木軸に張力をかける。その力に対抗する木軸フレームに3列の偏心ブレースを重ねた結果、回廊には独特なトンネル空間が出現した。

設計は合理的な構築に集中したと説明したが、この合理は経済的合理性だけを意味しない。実際、材料費に比べて実に手間のかかる仕事は現在のコスト合理化手法に反し、大工職人をはじめとした施

工者の皆さんに多大な苦勞を強いることになった。しかし原初的な形式をさまざまな条件に即して工夫することで、力強い骨組みと柔らかい光に満ちた、子どもたちを優しく包み込む空間を生み出すことができた。そしてこの空間には、職人さんたちや私たちの手仕事の痕跡が満ちていて、それはある種の励ましとして子どもたちに伝わるのではないかと思っている。

工作とは、ものを工夫してつくり出すことを言う。物事はスピーディに効率よく進むべきだが、都市やまち、それを構成する建築には「時間をかけた創意工夫＝工作の精神」も欠かせないと私は思う。東北の厳しい状況の中で、わかば学園の皆さんの熱意と多くの協力者の方々によって、この建築は奇跡的に誕生した。しかし道半ばである。この園舎が最終移転地で根を張るまで、私たちも協力を継続して工夫を重ね、園の成長を見守っていきたい。(石原健也)

人びとが集える場所として、期限付きの仮設での園舎再建



1階平面 縮尺1/250



多目的室より園庭を見る。扉を開け放つことで園庭を客席とした舞台として使用でき、地域のイベントなどにも活用される。

幼稚園再建へ向けて

大きく被災した関上わかば幼稚園は、関上における唯一の幼稚園でした。開園より56年、地元に生まれ育つ幼子の成長を、地域の方々、関上小学校、関上中学校と共に守ってきました。幼友たちは一生の友だち、宝になります。その最初の友だちと出会う場が関上わかば幼稚園でした。避難所の方々や卒園した住民から子育て支援に関する要望や幼稚園復旧を望む声が多く、2011年5月に再建を決意しました。余震が続く、原発事故のニュースが連日流れていたあの頃、幼稚園もすべてを津波で失い、建設地も資金もないような状況でした。その頃、多くの復興関連の建築物が仮設という縛りの中にあり、簡易簡素な使い捨ての建物に被災し心に傷を負った人々たちを押し込めている現状がありました。私たちは子どもたちだけではそうはさせたくない、の

びのびと元気に楽しく学べる、そして声を出して遊べる環境をつくろう、安心・安全な建物で幼稚園をつくろう、そういった気持ちを持って園舎再建に臨みました。設計支援をしていただいた石原健也教授をはじめとするプレイグラウンド・サポーターズの皆さんも志を同じい、仮設でありながら、本設としても使用できる完成度、土地の形状を問わない柔軟性、仮の土地での復旧後、故郷関上での移設復旧も可能にするという前代未聞の復旧計画・設計を行っていただきました。実施設計を担当された石森史寛氏と共に、山積する課題をひとつひとつ消化しながら、でも確実に新園舎は像を結んでいき、再建を決意してから約3年、ついに園舎建築が完成した時は万感の思いがこみ上げました。

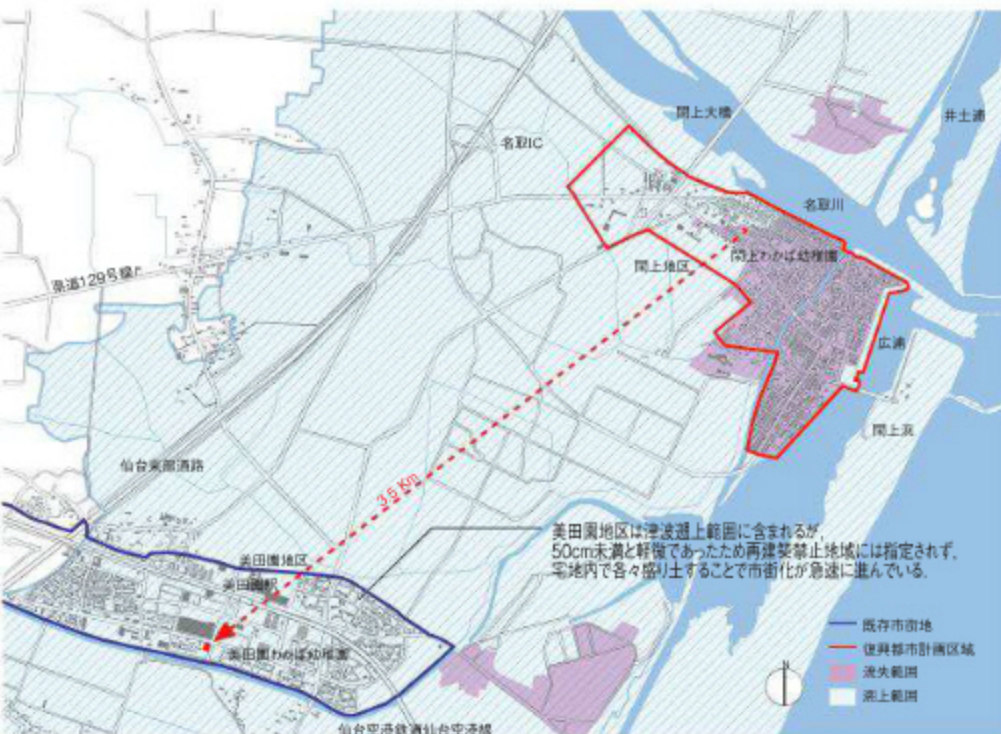
(佐々木洋／わかば学園事務長)



東より見る。美田園駅から2ブロック先の交差点に新たなシンボルとして建つ。



配置 縮尺1/8,000



東日本大震災による津波の被災状況 縮尺1/50,000

プレイグラウンド・サポーターズ(千葉工業大学石原研究室)のこれまでの被災地での活動



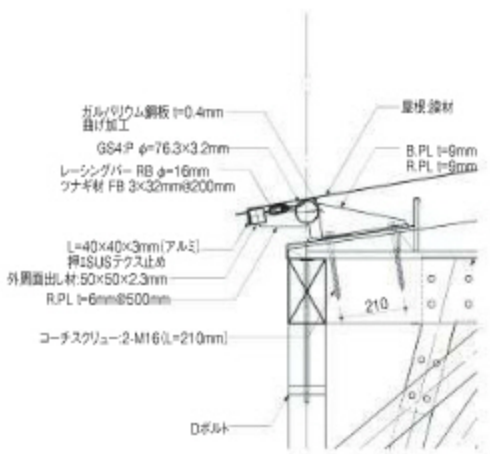
宮城県南三陸町の仮設住宅内に住民が集まる場をつくる一連のプロジェクト、CycleⅡ(本誌1112)。写真はシェルタープロジェクト(2011年9月1日)。小さなベンチから徐々に拡大し、アーチのかかる空間へと発展した。



左：ベンチプロジェクト(2011年8月4日)。右：野点床プロジェクト(2011年8月20日)「建築のはじまり」から「はじまりの建築」へ2011年5月、千葉工業大学石原研究室を中心に多くの協力者を得てプレイグラウンド・サポーターズの東北支援活動が始まった。仮設住宅の周囲にベンチ、野点床(カフェ)、シェルターというように、少しずつ大きな工作物をつくりながら、その場の人びとと交流し、子どもたちの遊び場と住民の集まりの場を育てていく活動だった。小学校の運動会では機軸席を用意し、500人を超える集まりの場をつくった。こうした活動を通して、私たちは「建築のはじまり」を体験してきたと言える。わかば幼稚園再建プロジェクトは、こうした活動の延長上にある。それゆえに、「はじまりの建築」を強く意識することになった(石原健也)

移築を可能にする構造
木造の架構に膜屋根を架けたこの計画は、将来的な移築を可能とすることが求められた。建物のシンボルとなる櫓組みや、アーチの架構が中央に計画されている。部材はすべて、流通材の製材スギ105mm角で組まれているのが特徴である。外周部には、門型のフレームが1間ピッチで並んでいる。フレームを構成する柱や梁、斜材はユニット化

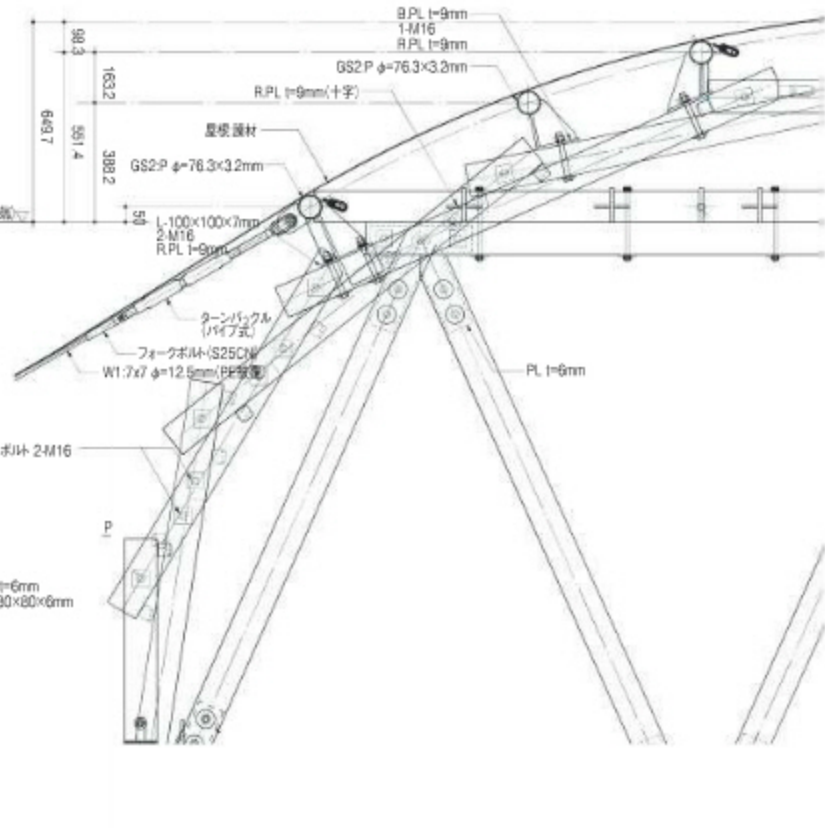
され、解体することなく移築が可能である。接合方式は、ドリフトピンを用いて凹凸のないものとし、園児の安全性に配慮をした。膜屋根のケーブル材には、わずかな張力導入を行い面剛性を確保している。膜の固定金物と、木部材との接合精度は非常に難しいものであったが、施工者の協力により実現することができた。
(高田雅之 / RGB STRUCTURE)



A詳細 縮尺1/15



B詳細



C詳細

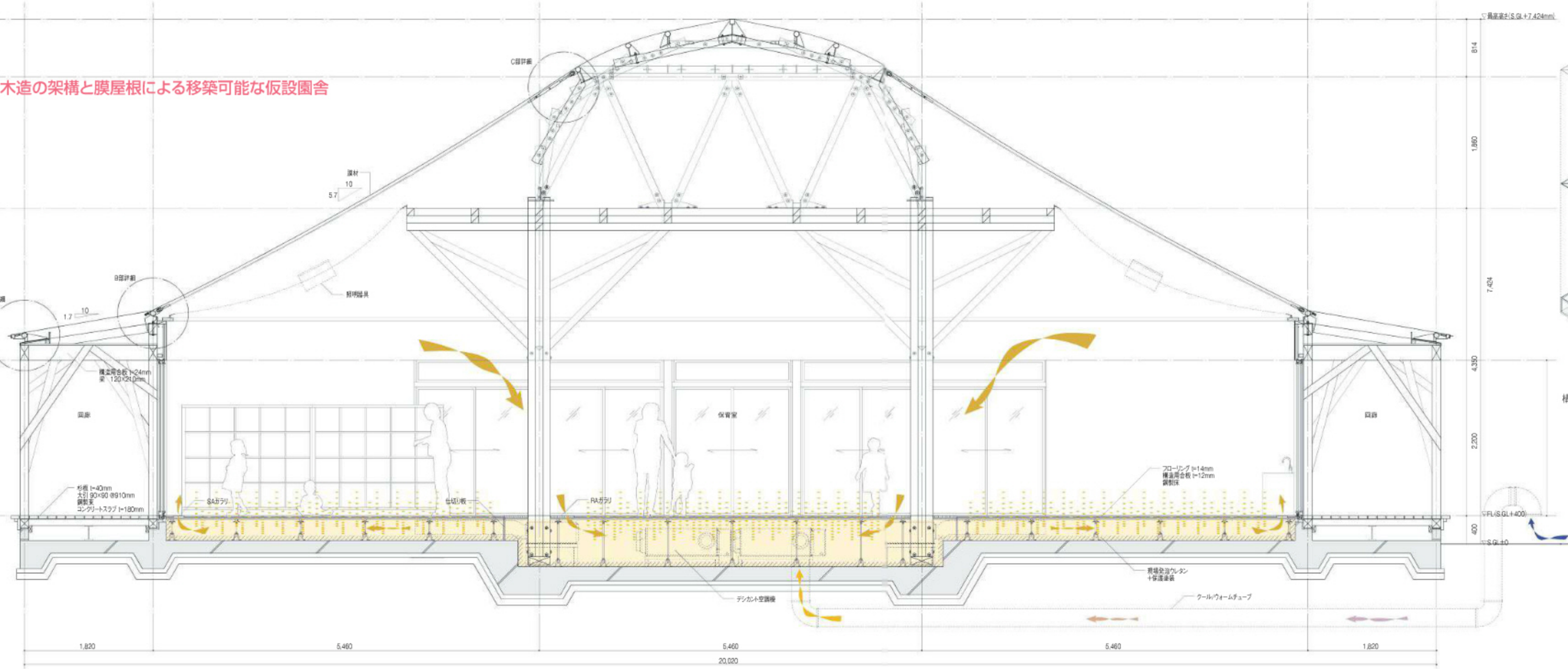


回廊より保育室を見る。

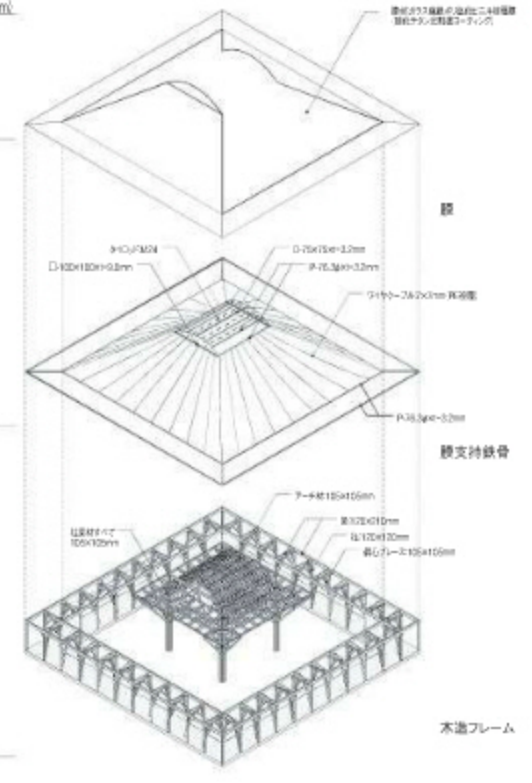


保育室、膜屋根は中央の櫓と回廊により支持され、テントを透過した柔らかな昼光によって人工照明が不要な空間である。

木造の架構と膜屋根による移築可能な仮設園舎



断面詳細 縮尺1/60



構造アクソメ

設計 建築 石原健也 / 千葉工業大学 + 石森建築設計事務所
構造 佐藤淳構造設計事務所 + RGB STRUCTURE
設備 テーテンス事務所
施工 プライム下館工務店
敷地面積 1,828.29m²
建築面積 581.68m²
延床面積 437.24m²
階数 地上1階
構造 木造 一部鉄骨造
工期 2013年11月~3月
撮影 新建築社写真部
(データシート184頁)

既存の平面踏襲による早期再建

気仙沼小学校区留守家庭児童センター

設計 薩田英男／薩田建築スタジオ

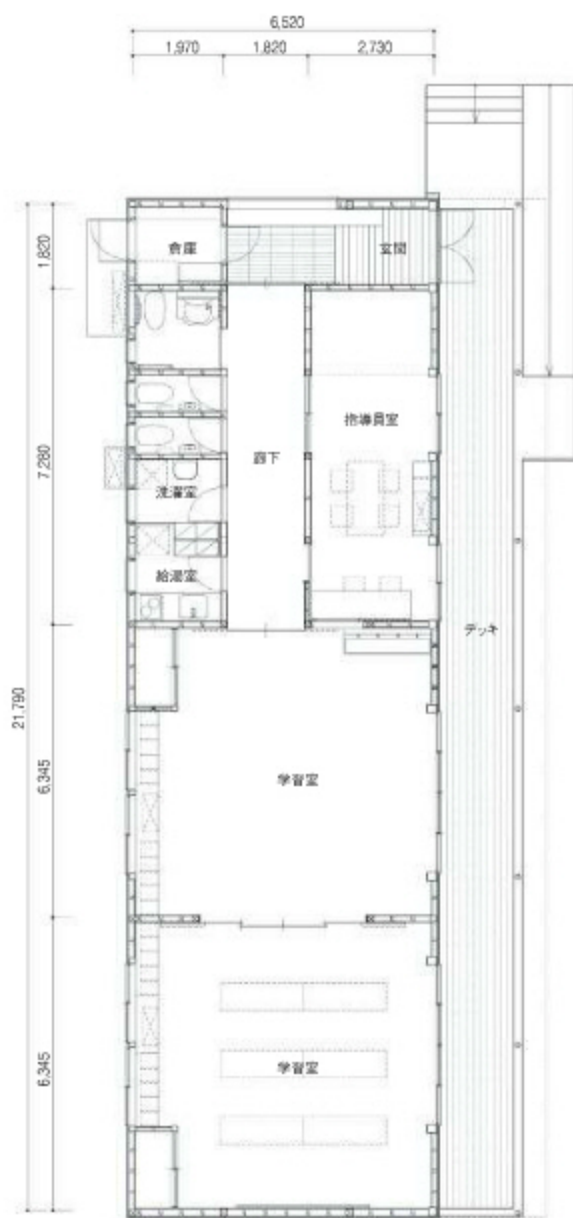
施工 みちのく建設工業

所在地 宮城県気仙沼市

AFTER SCHOOL DAY CARE CENTER, KESENNUMA ELEMENTARY SCHOOL

architects: HIROEO SATSUTA / SATSUTA STUDIO OF ARCHITECTURE

北側より見る。2011年に東日本大震災後の津波で流された学童施設の再建。1日も早い再建のために平面計画は被災前のものを踏襲しつつ、半外部デッキを設け、採光確保のために片流れの屋根とするなど、より快適な空間へと手を加えた。外壁には被災したマツ材の厚板を使用。震災後初の公共の恒久施設として2012年4月に完成した。



平面 縮尺 1/200



設計 建築 藤田英男／藤田建築スタジオ
 構造 山辺構造設計事務所
 施工 みちのく建設工業
 敷地面積 719.28m²
 建築面積 182.14m²
 延床面積 142.39m²
 階数 平屋建て
 構造 木造
 工期 2011年12月～2012年4月
 撮影 新建築社写真部 (特記を除く)
 (データシート185頁)

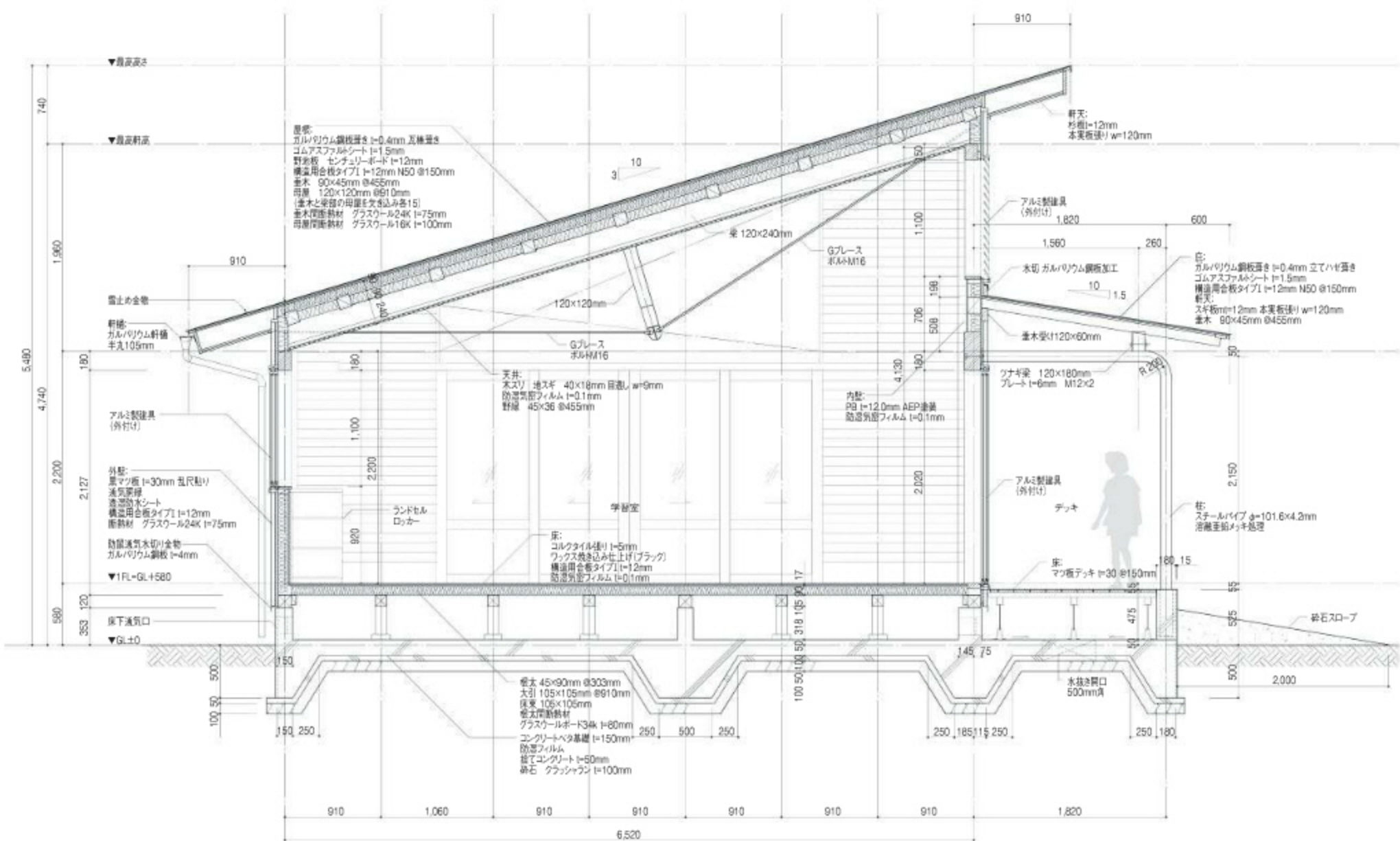


2階続きの学習室。トップサイドライトから採光と自然換気を行う。プレカット集成材と張弦梁の採用により工事のスピード化を図った。

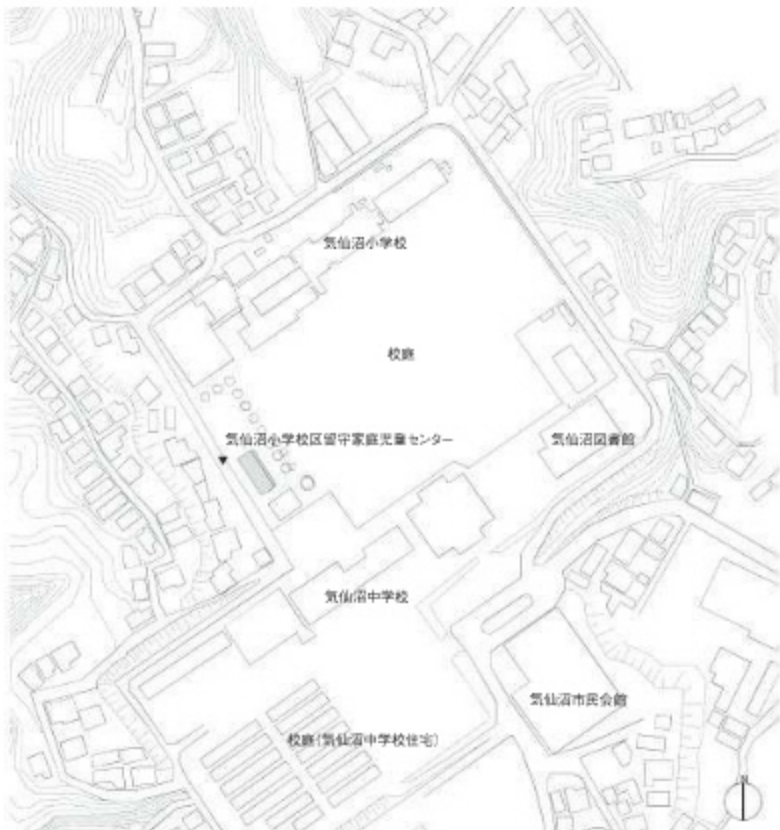


左：デッキより見る。庇の架構は曲げスチールパイプに載せるだけの簡易な組み方とし、職人の手間を軽減。
右：廊下より学習室を見る。廊下の幅は1,820mm。

迅速な再建のための「つくり方」と「既存の踏襲」



断面詳細 縮尺 1/60



配置 縮尺 1/5,000

2011年3月11日
東日本大震災発生

2011年5月

日本ユニセフ協会による「幼稚園保育園再建プロジェクト」がスタート。地元自治体の要請も受け、被災状況や地域における重要性などに配慮し、岩手県、宮城県、福島県の3県で15施設の再建を支援した。

磯部裕子氏（宮城学院女子大学）が支援プロジェクト企画について、佐藤得之氏（早稲田大学）が一部の建築計画、設計についての技術的なアドバイザーとして協力。



建設予定地視察の様子。

2012年4月

震災後、初の公共の恒久施設として「気仙沼小学校区留守家庭児童センター」竣工。



落成式の様子。

2012年12月

本支援による最後の恒久施設である「亘理町児童福祉施設」が竣工。



左：あさひ幼稚園、右：ふじ幼稚園（共に本誌1210）。

「渡す建築」から「受け取る建築」へ

日本ユニセフ協会の東日本大震災復興支援で被災直後から現地の調査に同行する中で、3つの施設の再建に関わるようになった。援助される側は東北人の気質もあり、多くのものを求めずに受け入れようとしてくれたように思う。十分に地元の声を聞く時間のない中で、設計する側が一方的につくって「渡す」のではなく、支援される側としても主体性を持って「受け取る」建築になるように建築家として心がけた。

気仙沼小学校区留守家庭児童センター

市立気仙沼小学校の敷地内に建つ学童施設である。東日本大震災から1年後に東北で最初に復興した公共の建築である。以前にも建設中の様子を紹介したが（本誌1204）、1日も早い再建が望まれる中で敏速に対応するために、新規に計画するのではなく、使い慣れた以前の施設の平面を踏襲した。一部利便性を考え、新たに外廊下を設け、入口周りを広げ、屋根を切り妻から片流れとし、トップサイドライトから採光と自然換気を取り入れるなどの変更を行った。

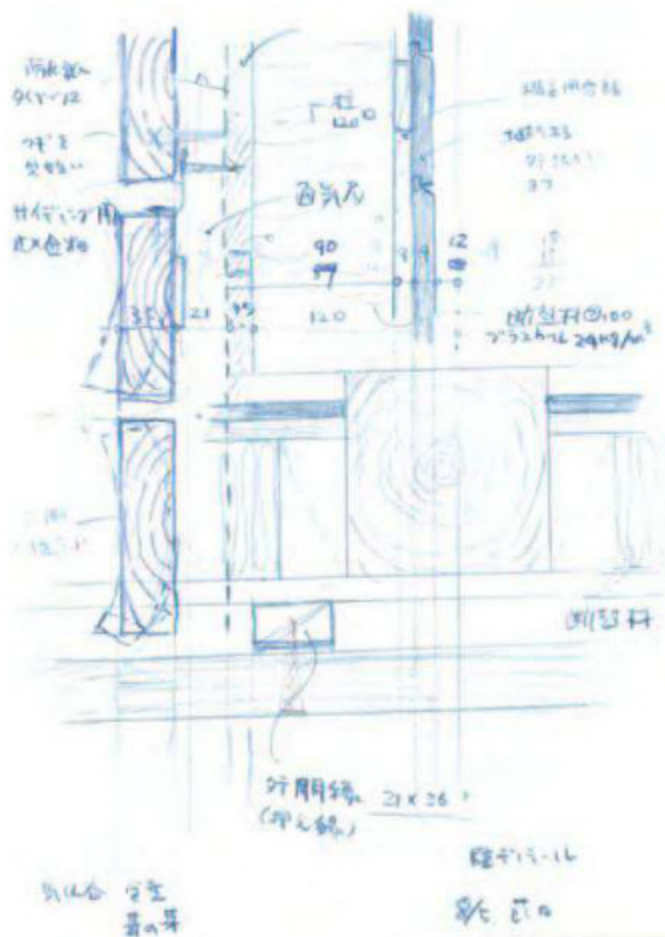
建設に際してもプレカット工法を用い、メインの屋根架構を集成材の張弦梁とし、外廊下はスチールパイプに土庇を乗せるだけの簡便なものとし、職人の手間を省く工夫を行った。現場の尽力もあり3.5カ月の工期で完成にこぎつけた。しかし単に簡便さを優先させるだけでなく、子どもたちの健康的な生活環境と地域の風土・景観に配慮して地場のスギ材など自然素材を多用した。被災した気仙沼近くには多くの板蔵が残っている。時を経た板の表情にはこの地の厳しい気候風土の中で耐えてきた凄みがあり見る者を圧倒させる。外壁は津波でなぎ倒された浜辺のマツを再生したものである。震災の記憶を残すのではなく、板蔵のように雄々しく新たな命を建築に与えるべく30mmの厚板に加工し、あえて塗装せずに利用した。完成から2年近くが過ぎ、マツ板は斑に変色し少しずつ時が刻まれ出している。雪景色の中で隣接した木々の幹のテクスチャーに似て、この建築が人工物ではなく自然の「景」に近付いてきたように感じる。永く人びとの記憶に残る愛着のある建築となることを望む。

（藤田英男）

被災したマツを生かす



上：外壁。地域の伝統的な板倉から学び、被災したマツを厚さ30mmの板として使う。／下：被災したマツの皮むき。皮の間に砂が入っていたため、刃が偏みやすく苦労した



経年による木材の反りも考慮した外壁の初期のディテール。

大きな切妻屋根の下につくる7.5尺モジュールの多様な場

亘理町児童福祉施設

設計 薩田英男／薩田建築スタジオ

施工 小野良組

所在地 宮城県亘理郡亘理町

DAY-CARE CENTER, WATARI TOWN

architects: HIDEO SATSUTA / SATSUTA STUDIO OF ARCHITECTURE

北西より見る。東日本大震災後の津波で流された保育園の再建。児童館の園庭内に建てられた。大きな切妻屋根の中に、さまざまなスケールの場所が展開する。正面中央の昇降口は北国の気候に合わせて木ルーバーと深い庇で守られる。気仙沼小学校区留守家庭児童センター（94頁）と同じく、津波をかぶったマツの厚板を外壁に使用している。木造平屋建て。



北西より昇降口越しにホールを見る。昇降口は風除けルーバーが配された奥行2,424mmの空間。



3・4歳児共有スペースよりホールを見る。ホールの回りに廊下や昇降口・保育室を巡らせ、外部にアクセスしやすい構成とした。平面、高さ共に7.5尺(2,272.5mm)を基本モジュールとし、木架構の経済性や空間に秩序をつくり出すと共に、ゆとりある廊下幅が潜在行為を生み出す。木の回りで子どもたちが遊びまわれるように共有スペース中央にスギ丸太を配した。



ホール、最高天井高は約6,200mm、地場産のスギ材による架構。ダクトを通して冷・暖気を床下に送風する。



上：2歳児室より南側を見る（最高天井高は約4,400mm）、建具を開け放し廊下空間と一体的に利用可能。／左下：南廊下を見る。2歳児室前にもスギ丸太を配した。／右下：5歳児室前室よりトイレを見る。トイレの外側は蔵入りの土壁。キズ防止のためのスギ板の間には絵本を飾ることができる。トイレ上部のロフトも遊び空間として利用。

7.5尺モジュールでつくる多様で開かれた場

海岸近くの平野部で津波に流された保育園の仮園舎として建てられた。復興が急がれる中、浸水した被害地は建設不可なこともあり適任地がなく、やっと見つかったのが津波の心配のない山側の児童館の敷地内だった。手狭な敷地条件の解決として園舎を児童館の南側にコンパクトにまとめた。子どもたちが冬は南廊下でヒナタボッコができ、夏は自由に外へ飛び出すことができる、全方位に開かれた保育空間とした。

大きなホールを中心に据え、四周に遊び空間となる広めの廊下空間を配し、各保育室をゾーンに分け、ひとつの屋根の下に気積の違う保育空間を整合的に配した。3歳、4歳、5歳は子どもたちの自

由な動きに合わせ、落ち着いた保育室から廊下や屋根裏部屋を介してホールまで、天井が徐々に高くなりながら広く活発な空間へと繋がる。また2歳児は独立した小さな家形の部屋とし廊下と繋げ、0、1歳児は天井を低くし2間続きの静かな東向きの部屋とした。食育を考えホール脇には厨房を置き、子どもたちが食事をつくっている様子を覗けるようにした。

木架構の経済性と遊び場として廊下の広さを確保するために、7.5尺×7.5尺(2,272.5mm)の基本モジュールを採用した。各部屋はその倍数でできている。桁梁高さを同じ7.5尺にすることで正方形のプロポーションが現れる。平面図共に正方形によって構成されることで空間に秩序をつくり出している。

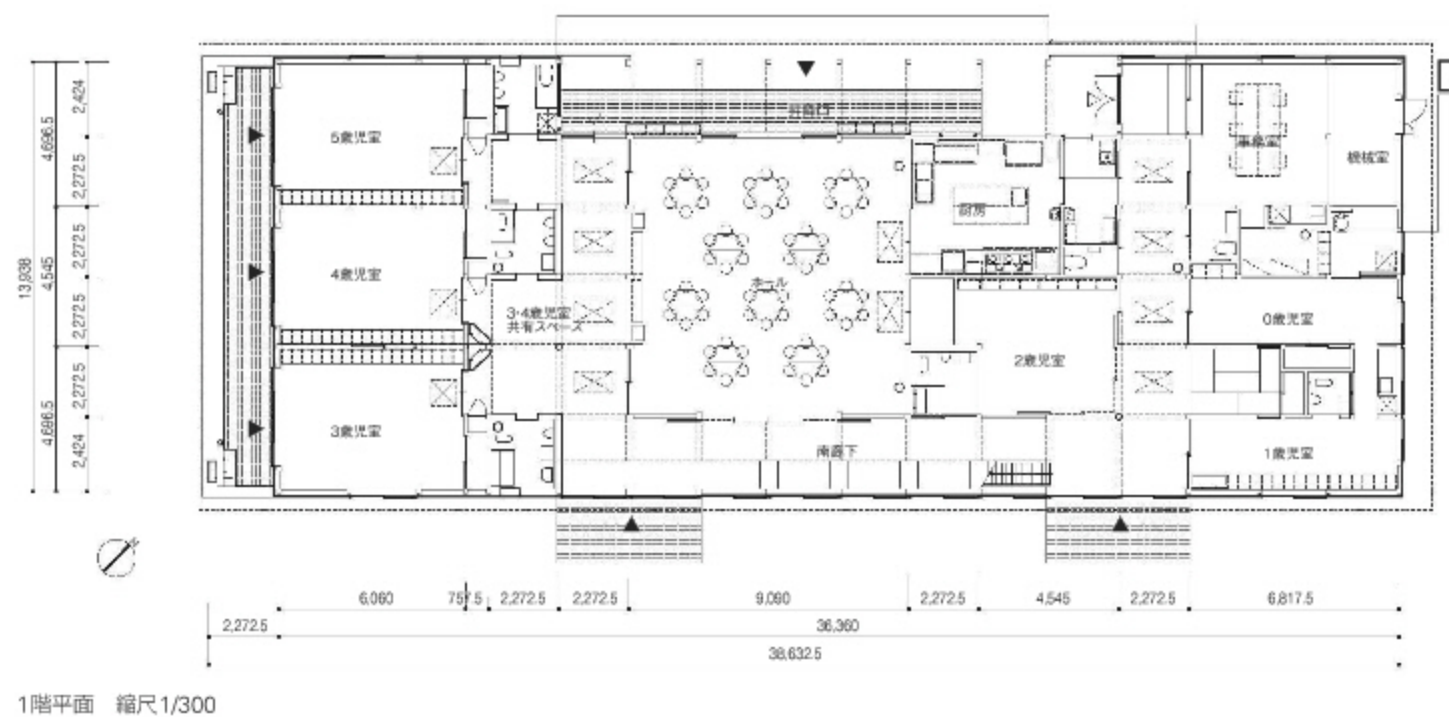
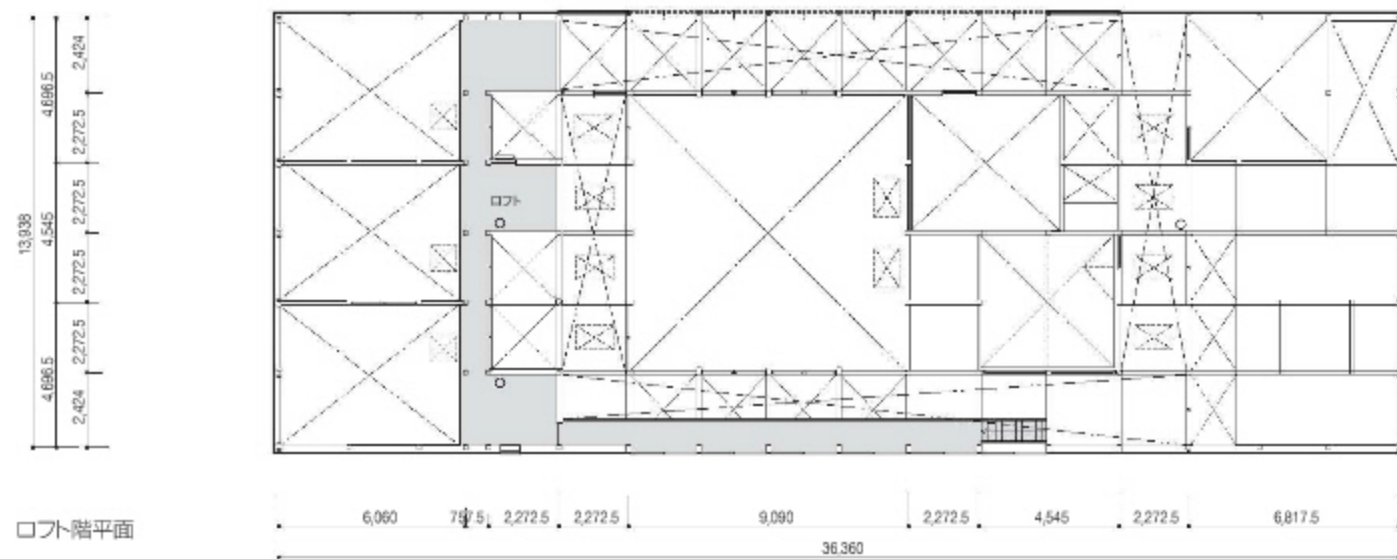
北国の暮らしに配慮して南側は大きな窓とし、北側は軒下空間や風除けルーバーを設けた。夏や中間期は自然換気を旨とし引き違い窓を多用した。廊下やホールには床下へ暖気を流しゆっくりと空気を循環させている。

デリケートな子どもたちをシックハウスから守るために、無垢の地場のスギ、藁入り土壁、漆喰など柔らかな自然素材を多用した。山のような大きな屋根がやさしく子どもたちを包む、見慣れた切妻の建物が人びとにとって地域の風景と共に懐かしく心安らかなものとなることを願っている。

(薩田英男)

設計 建築 薩田英男／薩田建築スタジオ
構造 松本構造設計室
設備 設備計画研究所
施工 小野良組
敷地面積 1,807.01m²
建築面積 528.74m²
延床面積 495.79m²
階数 平屋建て
構造 木造
工期 2012年4月～2012年12月
撮影 新建築社写真部(特記を除く)
(データシート185頁)

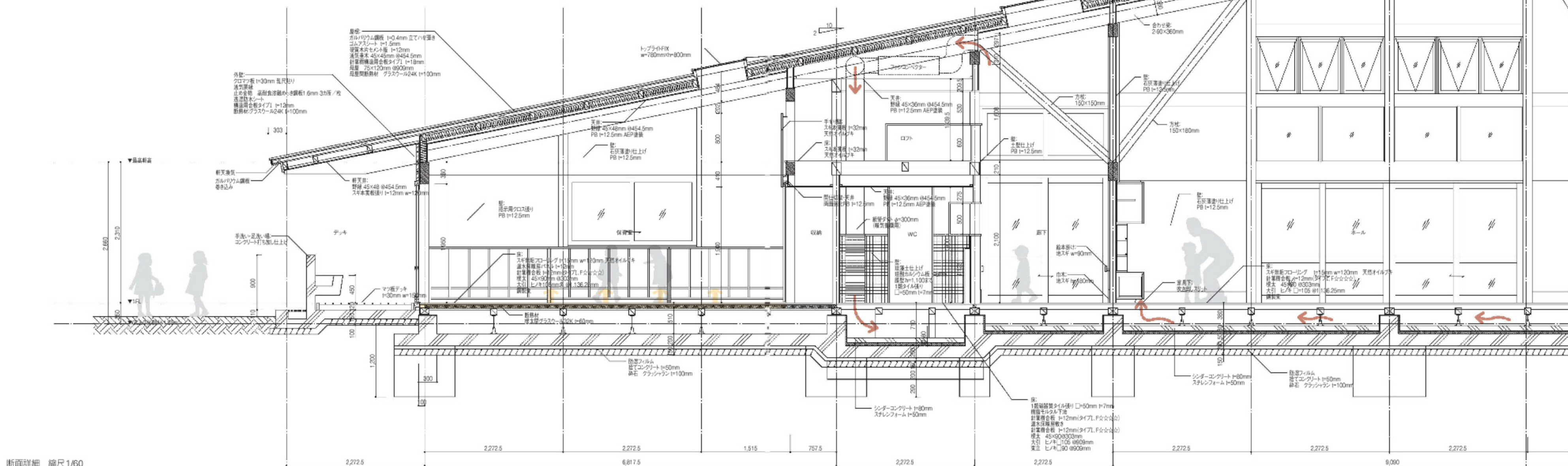
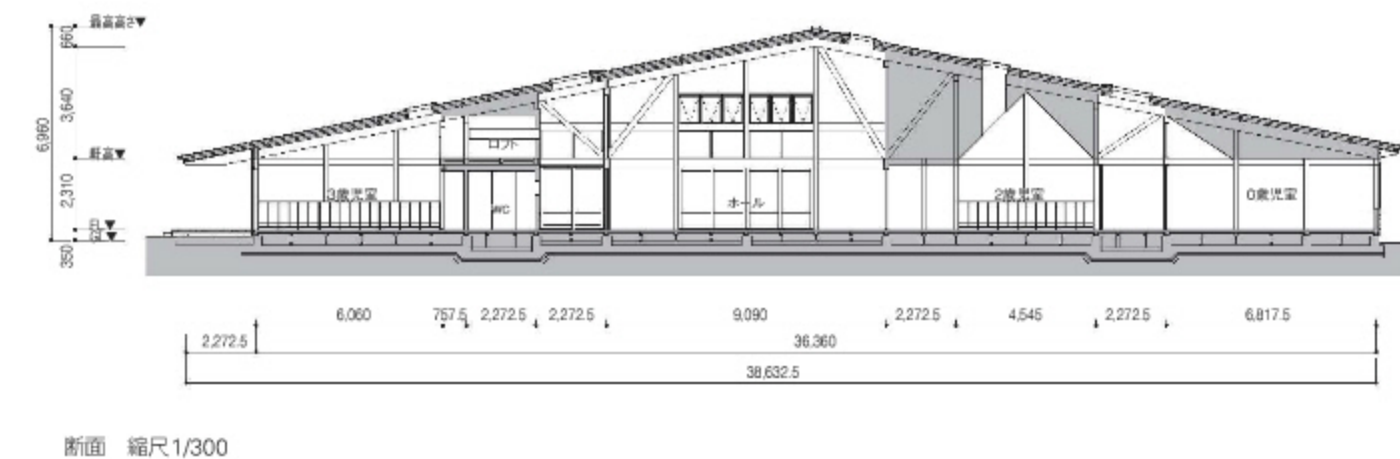




東より見る。南面には引違い窓を多用し、十分な採光と換気ができるようにした。



南西より見る。中央の園庭は右手の既存児童館と共同利用。



清水建設本社一体再開発による都心のこども園

京橋こども園

設計施工 清水建設

所在地 東京都中央区

KYOBASHI CHILD INSTITUTION

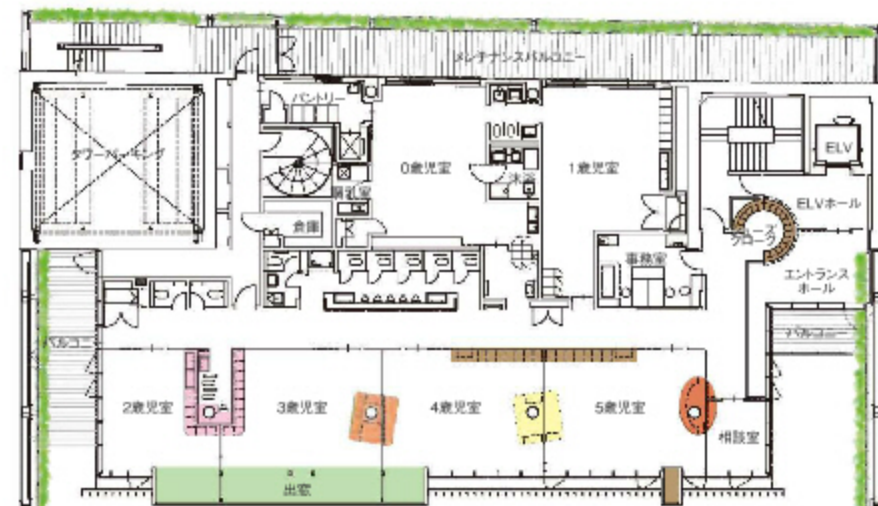
architects: SHIMIZU CORPORATION



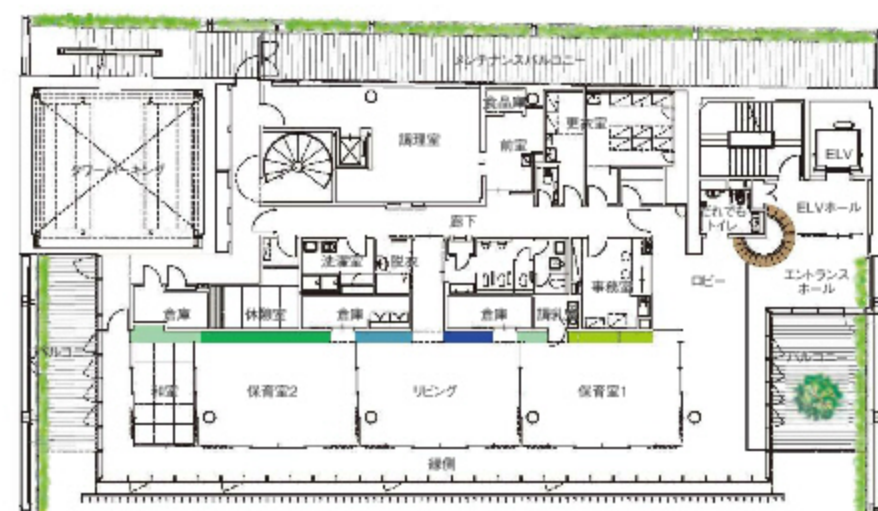
西側より見る夜景。色鮮やかな家具を採用した内部が見える。建物高さ23,500mm。500～1,000mmの連続字列に対し、GL+3,000mmを2階ビロティとし近隣のための防災広場とする。GL+9,500mmに上げた3階が子育て支援室、4、5階が認定こども園。



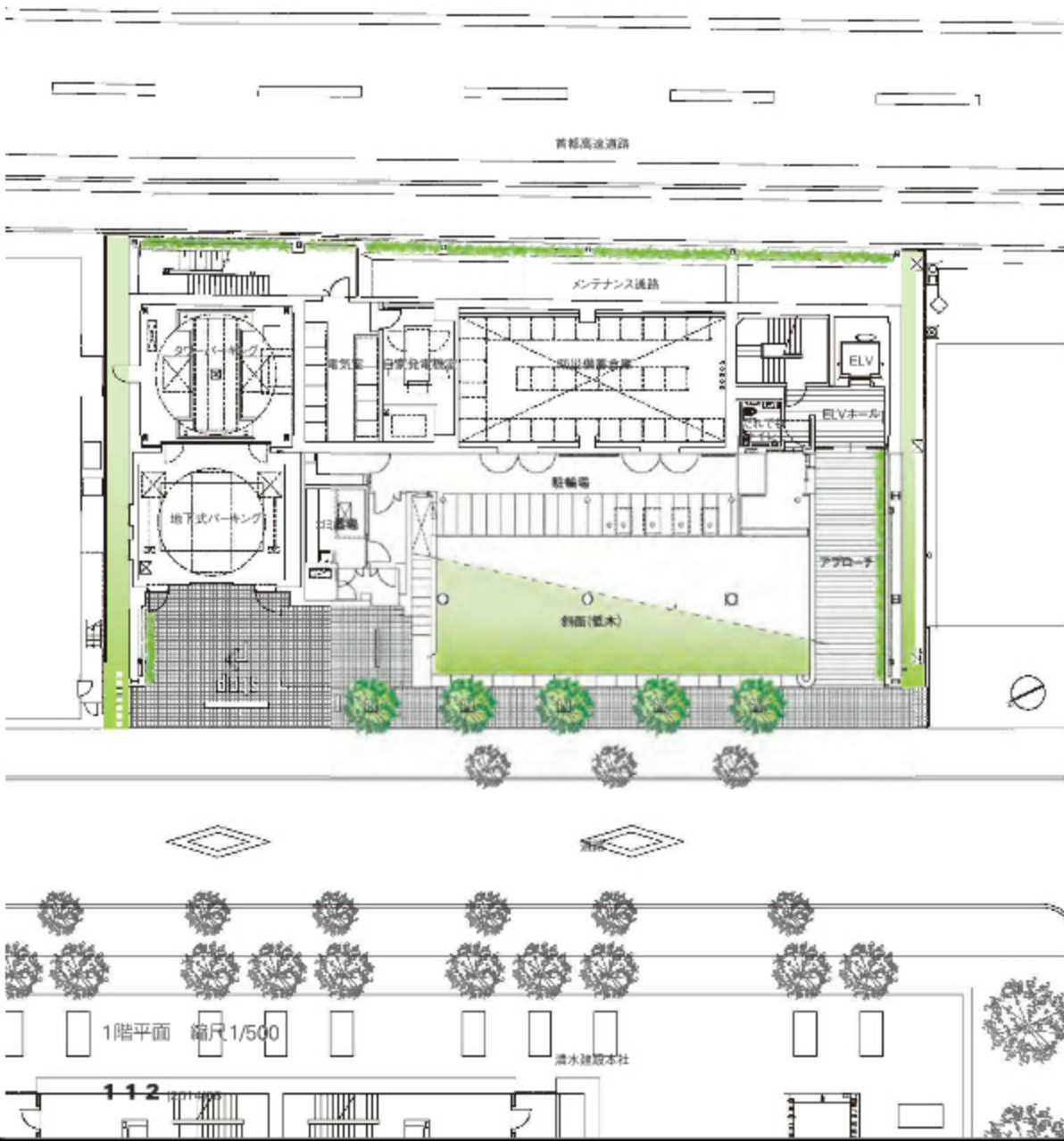
4階の5歳児室。積層する施設の随所に、子どものスケールの遊び場をちりばめた。奥に清水建設本社が見える。



4階平面



3階平面



都会のオアシスとして地域に貢献する

保育所と幼稚園の機能を一体的に提供すると共に、子育て支援事業を行う区立の認定こども園である。東京都の都市再生特別地区の指定を受けた「清水建設本社」（本社1207）の社会貢献施設として建設されたものであり、近年の人口増加に伴う、待機児童解消の一翼を担う。中央区では晴海・月島等の高層マンションの新築に伴い、区の東部に子育て支援施設が集中していたが、西部の京橋・八丁堀周辺でも同様に需要が増加してきた。その需要に応えるべく、通勤に便利で延長保育のできる子育て施設が京橋に整備された。

緑で包む

都市再生特別地区の指定を受ける条件のひとつであった大規模緑化を、道路に対して直交方向の南北壁面に配置したことで、街を歩くビジネスマンが豊かな緑を享受できると共に、保育室の中の子どもたちも常に緑に包まれながら遊ぶことができる。また、施設東面の壁面緑化は日射制御の役割と共に、子どもたちの視界に入る首都高速道路や猥雑なビル群に対する視覚的緩衝帯の役割を担っている。

色と形で包む

色の刺激は子どもの脳の成長に重要な要素だと考えられている。また、兄弟の少ない現代の子どもたちにとって、異年齢児との交流が図れることも重要になってきている。4階の保育室には、おもちゃ箱のようにカラフルなBOXをちりばめた。BOXには子ども専用の遊び場となるよう、子どもスケールのさまざまなニッチを設け、色と形による楽しい仕掛けを施した。この施設は幼稚園の要素も有するため、保育室が年齢ごとにガラスで緩やかに間仕切られているが、BOXの高さを1,100mmとすることで、子どもたちはほどよく囲まれながら、BOXの間から隣室の子どもたちの遊びを覗き互いに刺激し合う空間となっている。大人たちには見通しがよく、子どもたちの様子を常に把握することができる。

3階の子育て支援施設は、「サザエさんの家」をテーマに昭和の住宅をイメージした。緑側、障子、襖で構成されたリニアな空間は半透明の木スクリーンでリファインされ、さまざまな使い方に対応できる可変空間となる。（藤田聡／清水建設）

設計施工 清水建設
敷地面積 941.93m²
建築面積 790.54m²
延床面積 1,695.00m²
階数 地下1階 地上5階
構造 鉄筋コンクリート造 鉄骨造
工期 2012年4月～2013年8月
撮影 新建築社写真部
（データシート186頁）



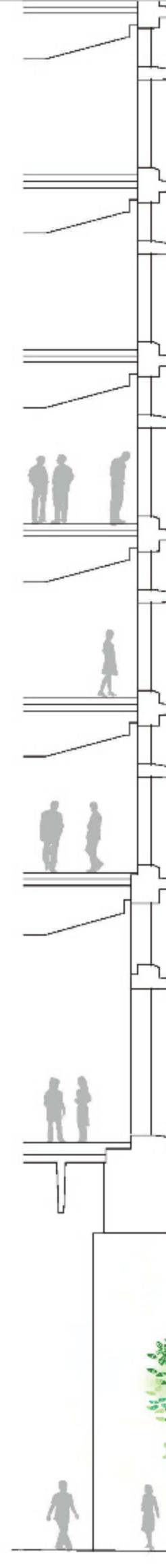
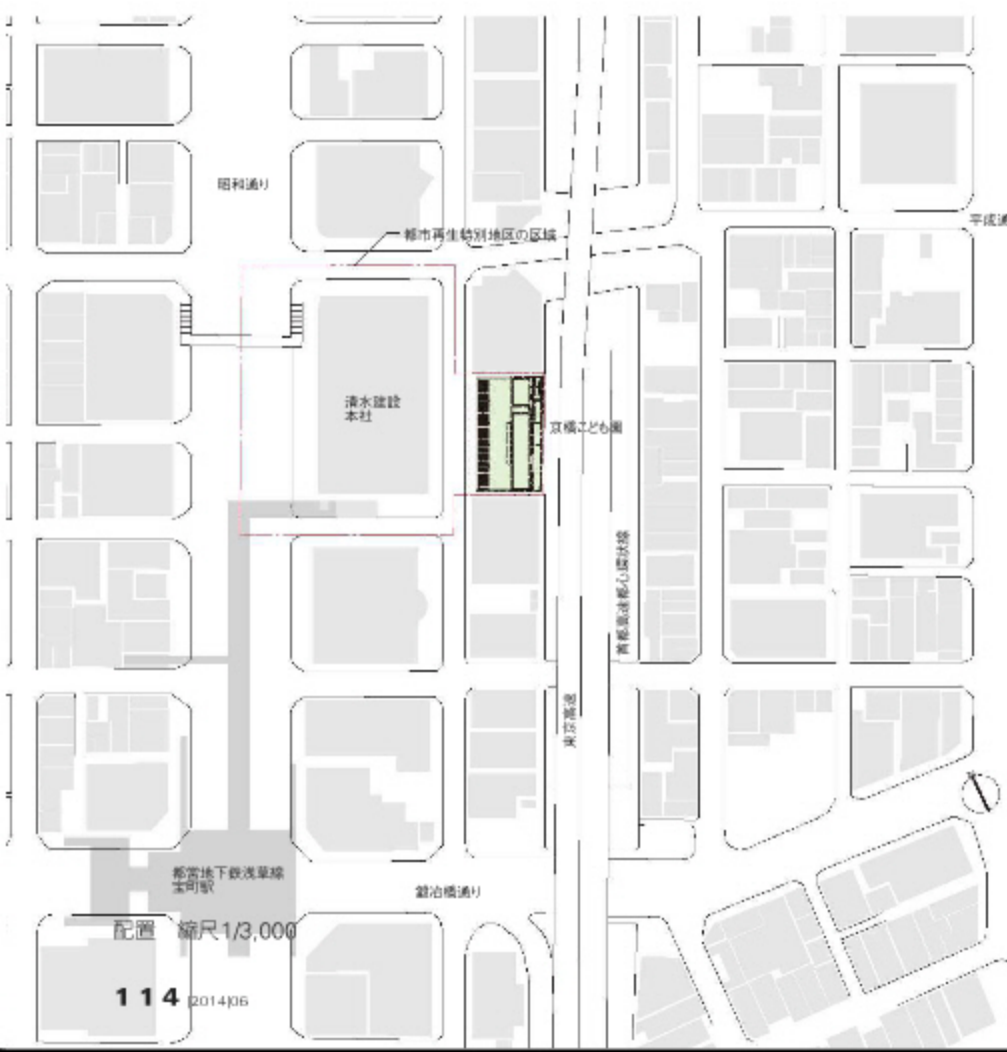
4階、手前が5歳児室。幼稚園の要素も有するため年齢ごとに間仕切られた各部屋の間に、構造柱を取り込んだカラフルなBOXを挿入して、ガラスで仕切られた各部屋は、大人の目線では緩やかに繋がり、子どもの目線では落ち着いた囲まれ感を生んでいる。



4階、3歳児室より見る。前面道路側に設けられた出窓は高さ1,185mmと、子どもに合わせたスケール。



上：西側には清水建設本社が建つ。建物外周を緑化し、街に緑を提供している。
下：東側は首都高速道路に隣接するため、壁面緑化し緩衝地帯とした。



断面 縮尺1/150

緑豊かな都市空間の創出と、災害時支援機能の強化

当施設は、都市再生特別地区の社会貢献施設として、都の「緑の東京10年プロジェクト」推進に則り、約1,400㎡におよぶ壁面緑化とビロティのオープンスペースの相乗効果で、緑の少ないオフィス街に潤いと安らぎのある街並みを創出し、都市環境改善を図った。

また、地域防災への貢献として、ビロティ部の2階レベルに、周辺オフィス街の帰宅困難者を受け入れる防災広場を設け、地下には中央区の防災備蓄倉庫を設置し、災害時に地域の防災に貢献できる施設とした。

こども園のBCP（事業継続計画）としては、災害時に親御さんが迎えに来るまでの間(1日分)、施設の機能を維持する設備を持たせた。24時間分の自家発電機、上水の備蓄、雑用水を備蓄する雨水再利用槽、雨水貯留槽の汚水利用、マンホールトイレなどの設置を行った。

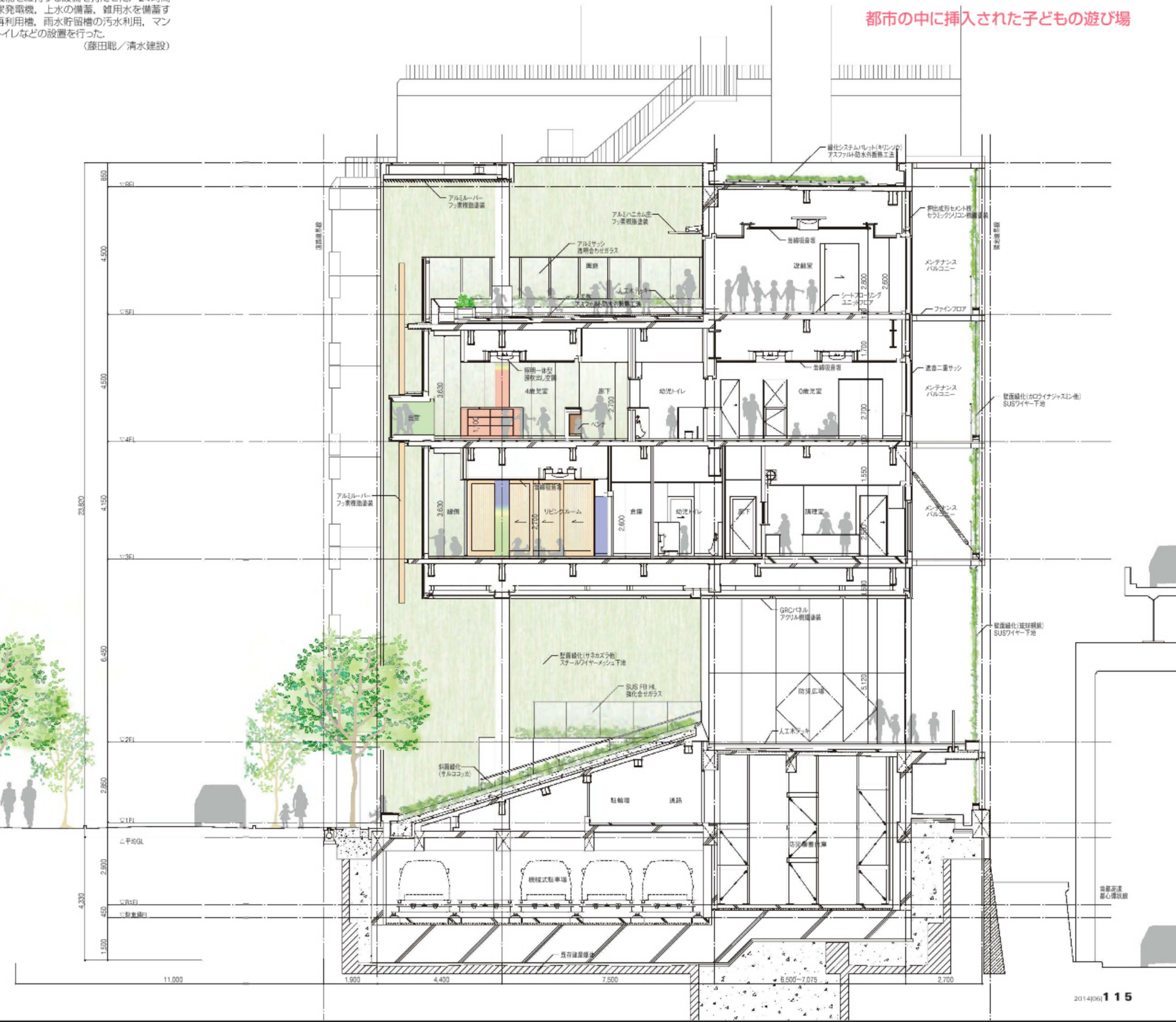
(藤田聡／清水建設)

左：2階防災広場。緊急時は近隣の人の避難場所となる。中：3階子育て支援室のリビングルーム。部屋を仕切れることも、一体的な利用も可能な空間。カラフルな棚の制作は清水建設による。

右：5階園庭。ビル街にあってでも園児が遊ぶ場所をつくっている。



都市の中に挿入された子どもの遊び場



雲のような壁で空間を仕切り繋ぐ

アミューあつぎ8階 屋内広場・託児室・子育て支援センター

設計 石上純也建築設計事務所

施工 アトリエ海（雲壁） 前田・山王・同郷特別共同企業体

所在地 神奈川県厚木市

INTERIOR PARK, NURSERY ROOM, PARENTING SUPPORT CENTER IN AMYU ATSUGI 8F

architects: JUNYA.ISHIGAMI + ASSOCIATES

屋内広場より見る。2008年閉店の商業ビルを厚木市が取得し、民間との共同事業によりリニューアルした官民複合施設「アミューあつぎ」（地下1階～地上4階：商業施設、5～8階：公共施設「あつぎ市民交流プラザ」、9階：映画館）の8階に新設された子育て支援施設。親子で利用できる子育て支援センターの他、時間制の託児所、市民に開かれた屋内広場などを備える。雲のような壁が、約2,000m²の大空間を緩やかに仕切りつつ繋げる。

約8,000mmスパンの既存ラーメン構造躯体に沿って取り付けられる「雲壁」は、36枚すべて異なる形状。子どもの視点、大人の視点それぞれを考慮しつつ、動線や排煙上必要な開口率、既存の設備機器との関係も踏まえて形状が導かれた。モルタル金ゴテ仕上げ。

雲のようにおおらかに

僕は、雲を眺めるのが好きだ。

どの雲もひとつとして同じものがないし、かといって全然違うわけでもない。だから、それなりに落ち着く、もちろん、時には、驚くような特別な日もあるけれど、それでも、そういう日もあるのかな、という感じで受け入れられる。その時々環境の気まぐれにも見える変化に付き合うかのように、彼らなりのある合理性にしたがって、その姿形を自在に変化させていく。しかも、みんな白っぽくてモクモクしていて、統一感と一貫性だってある。その上、広大である。なにか、うまく言えないけれど、そういう雰囲気建築を考えられないかなと、最近よく考える。

このプロジェクトは、厚木市にオープンした「アミューあつぎ」という施設の8階部分に子ども施設を計画するというもの。閉鎖した商業ビルを厚木市が取得し、再生を進めてきた官民複合施設である。8階のプログラムは、屋内広場、託児室、子育て支援センターで、僕たちはこの約2,000m²の既存の空間を全面的に改装した。屋内広場は、普段はこの施設に来た子どもたちが楽しく遊び回ったり、昼時に親子でお弁当など

を食べたりする空間である。企画によっては、ものづくりのワークショップや科学実験ショーなどが行われることもある。

このフロアは、元々、商業施設の飲食街だったということもあり、さまざまな設備が天井を縦横無尽に這いずり回っていた。しかも、ある程度それらを流用するというのが条件のひとつ。構造上の変更申請を出さないという制約もあり、新しい重量物を置けるのは、グリッド状に計画されたラーメン構造の既存の梁の上だけ。その上、工期がとても短く、現場の人たちとあだこうだ言いながら、多くを決めていく必要があった。そういう中で、いろいろな物事をおおらかに考えられるような方法がないかと模索していった。

僕たちには理解できないさまざまな変遷をたどったぐちゃぐちゃの設備、突然現れてくる梁、床から立ち上がる配管など、それらを柔軟に受け入れつつ、空中にスケッチを描くかのようにして空間全体にやさしさを与えながら計画していった。丸みを帯びた柔らかな雲のような形をした分厚いモルタルの壁で空間をふわりとなんとなく仕切り、そこに要求された機能と雰囲気を与え、同時にそれらを遊具としても設計し、子

どもたちが楽しく冒険心に満ちていろいろなことを感ずる空間ができないかと考えるようになったのである。

結果、いろいろな建築的要素(設備、柱、梁、照明、家具、雲の壁など)が重層的に絡み合いながら、場所場所によって、さまざまに変化していく不思議な空間ができ上がった。子どもたちにしか通れない小さな隙間、設備を避けるためにつくられたもっと小さな余白、大人にとっても巨大に感じる抜けなど、いろいろな物やスケールが、柔らかく結びつく空間である。

子どもたちは、原っぱや、廃屋や屋根裏部屋を探検するように空間を発見し、その都度移り変わる空間を風景のように眺め、走り回ったり、隠れたり、登ったり、くぐったり、この建築が持つ可能性を全身で感じながら遊び回る。

僕自身もこの空間を体験しながら、等身大で設計し、そこに現れてくる風景の懐の大きさを身体で感じつつ工事を眺めていた。そういうおおらかさが、みんなを幸せな気分にするのかもしれない。そう思っている。(石上純也)

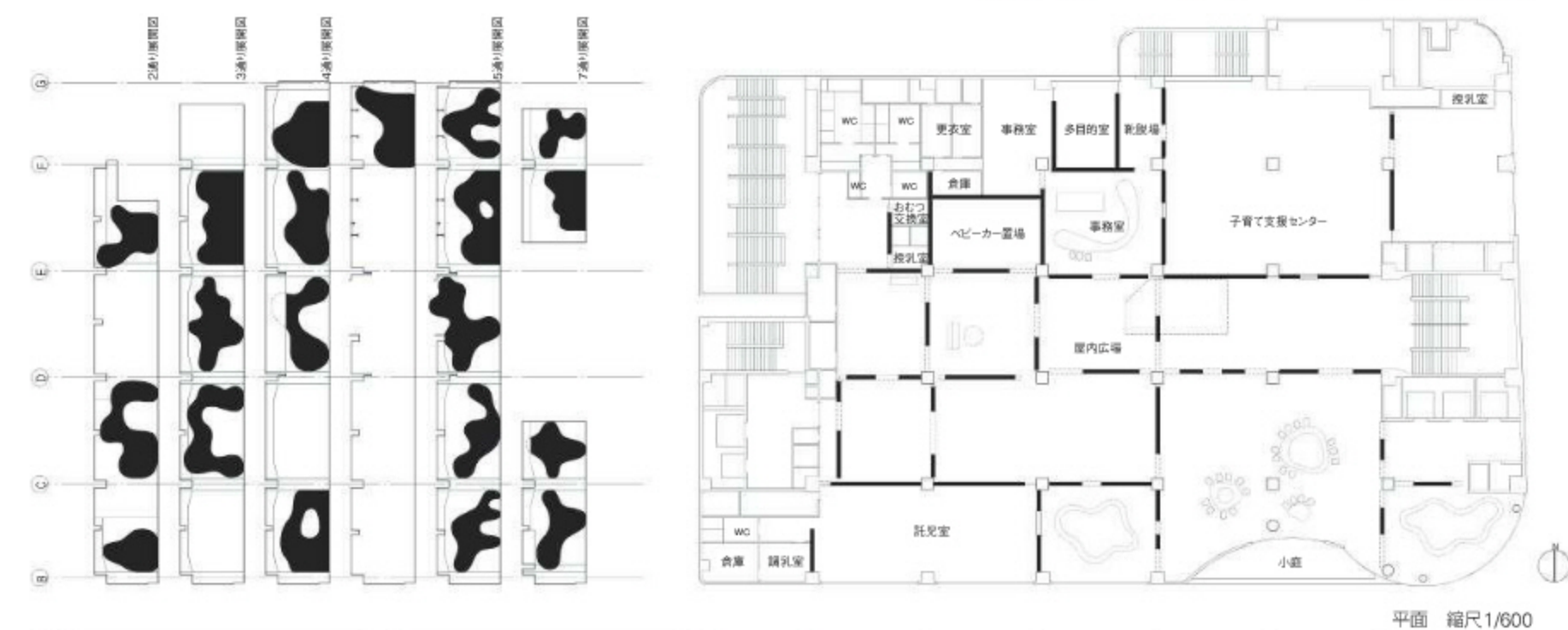
屋内広場より見る。子どもが雲壁をよじ登ったりくくり抜けて遊べるように、形状や高さのスタディがなされた。

設計 建築 石上純也建築設計事務所
前田建設工業一級建築士事務所
構造・設備 前田建設工業一級建築士事務所
構造アドバイザー（雲壁） 佐藤淳構造設計事務所
照明アドバイザー（8階） 岡安泉照明設計事務所
施工 アトリ工海（雲壁）
前田・山王・同郷特別共同企業体（8階その他）
建築面積 2,264m²（8階）
階数 地下3階 地上10階 塔屋1階（うち8階）
構造 鉄骨鉄筋コンクリート造（既存） 鉄骨造（雲壁）
工期 2013年8月～2014年3月
撮影 新建築社写真部
（データシート204頁）

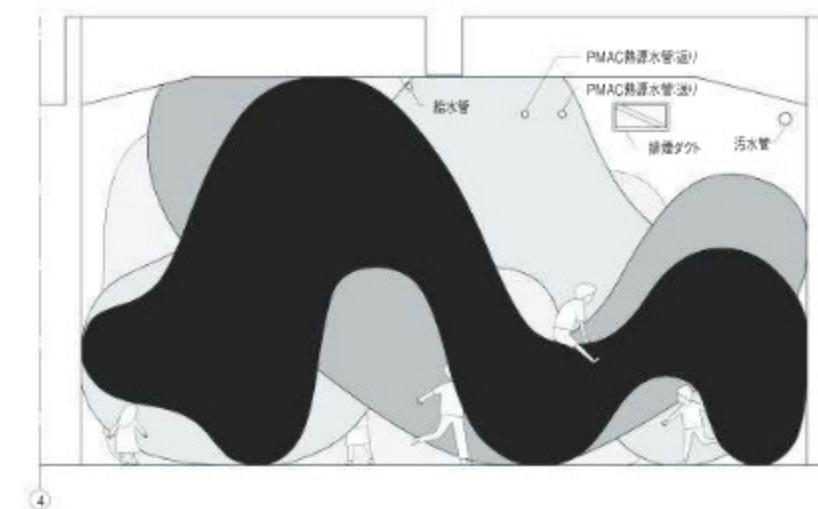


自然光の差し込む屋内広場。

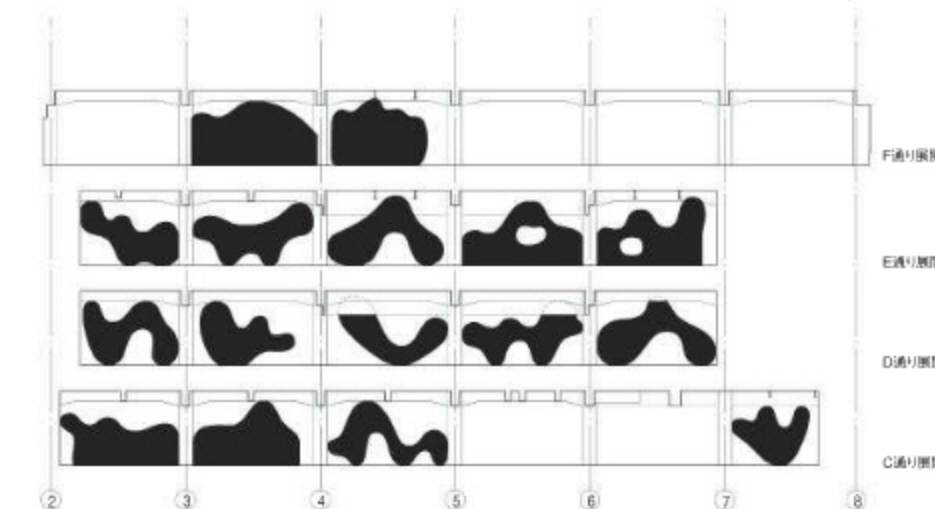
形状の異なる「雲壁」がつくる多様な居場所



平面 縮尺1/600



雲壁立面 縮尺1/100



雲壁展開 縮尺1/600

デザインビルドでつくる子どもの空間

ぐるりん

設計・施工 DesignBuildFUKUOKA

所在地 福岡県福岡市南区

GURURIN

architects: DESIGNBUILDFUKUOKA

北側より見る。福岡市南区にある清星幼稚園の敷地内にある、幼稚園に通う子どもと地域の子どもが利用する施設。建築を学ぶ学生、および29歳以下の社会人を対象とした、設計から施工までを行う実践型教育プログラムDesignBuildFUKUOKAの第一期プロジェクト。

奥の白い建物が清星幼稚園。園舎はDesignBuildFUKUOKAに講師として参加する鴻原昌洋氏が設計。保育室が所有する敷地に、子どものための建築をつくることになった。右には、放課後の交流施設(星のいえ)。



中庭、子どもたちの遊びの誘発と視線の抜けを考慮して、さまざまな所に大きさの異なる開口を設けた。壁は廃棄される木柱の端材をプレカット工場から集めたもの、105mm角と120mm角の木材でビスを斜め打ちして上下左右を固定しながら積み上げた。中庭には、エゴノキが植えられている。

上：南側より見る。
中：中庭より見る。左には、トンネル状の開口。
下：子どもがくぐって遊べるように、回廊には天井の低い小さな空間をつくった。端材は内面で揃うように積み上げた。



みんなでつくる子どもの空間

空き地の中に置かれる土管のように、子どもたちの遊びのきっかけを生み出す存在が街の中から減りつつある。子どもたちは学校や公園など、決められた区画の中で、遊び方の決まった遊具に囲まれている。子どもたちが自ら遊び方や居場所を発見し、各々が愛着を持てるような存在をつくり出そうと考えた。清星幼稚園は全面道路を挟んで向かい側に放課後の交流施設（星のいえ）を有しており、ぐるりんはその施設の50㎡に満たない庭に建つ。まず、建築自体を遊び道具として捉えてもらうことを期待した。そ

れが遊具とは異なるのは、遊び方が限定されないことである。ぐるりと回った回廊の途中には、空き地への出口や、中庭へ続くトンネル、少し薄暗い場所などがあり、子どもたちは度々、さまざまな居場所を発見することになる。自分のお気に入りの居場所を見つけ、この建築との向き合い方、遊び方を自分で見つけるようになる。そして、中庭、回廊、空き地へと、その境を越えて子どもが建築を使うことで、余白となる空き地スペースも遊び場へと変化することを考えた。

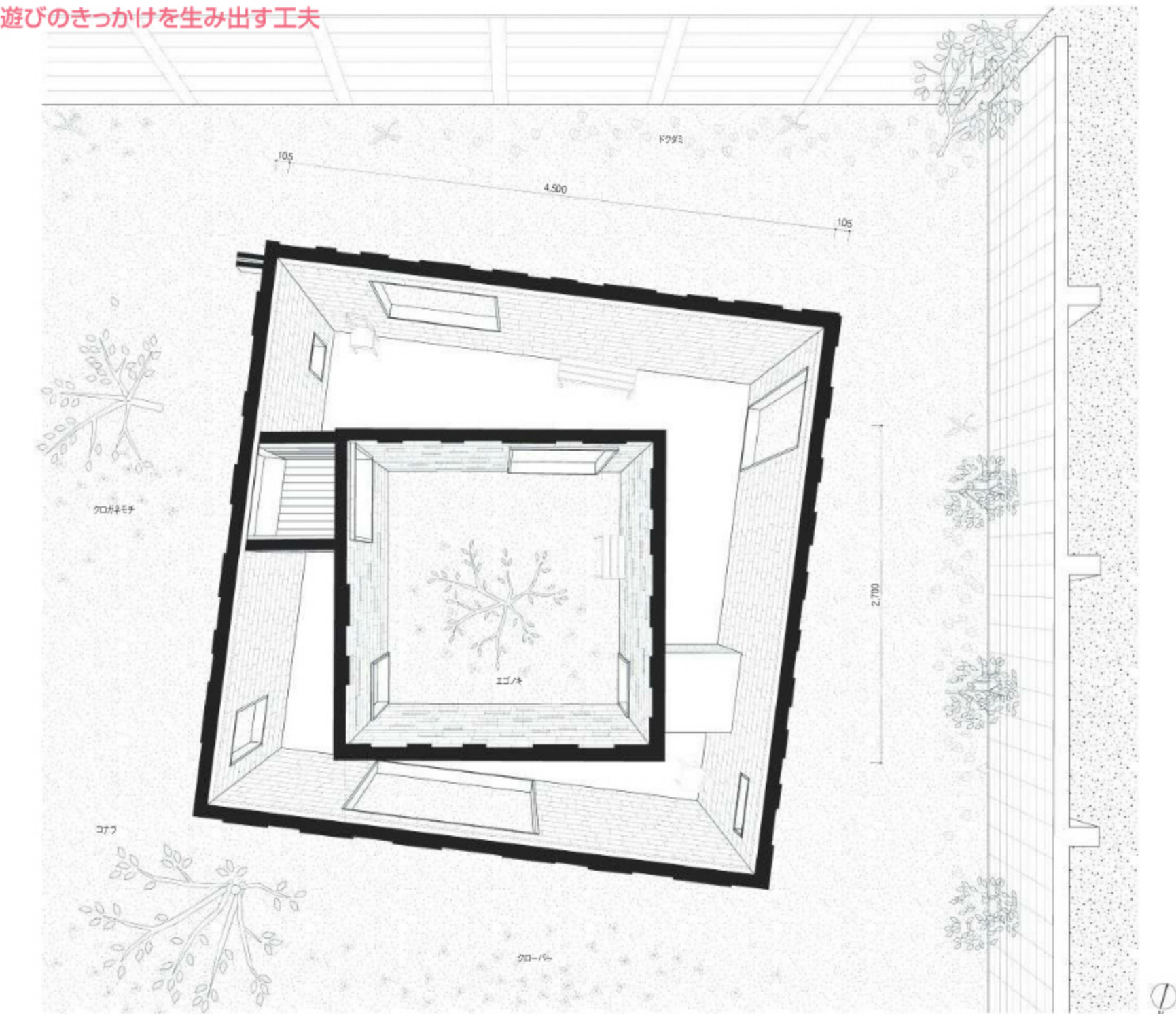
空き地の塀に対し7°傾いた4,800mm角の口の字の

壁と、2,700mm角の口の字の壁を組み合わせ、中庭、回廊、外庭に広狭さまざまなスケールの回遊性を持つ空間をつくった。中庭と外庭を繋ぐトンネル状の開口や、子どもの背丈によって意味の異なる開口は、近いけど遠い、遠いけど近い、というように小さな空き地に距離感を生み出すことを意図している。壁は素材に105mm角と120mm角の柱の端材を用い、素人にも施工が容易なうえ、偶発的に隙間ができていく変則的な透かし積みを採用した。「積む」というプロセスは手間が非常にかかる反面、途中で開口の大きさや位置等を変更する余地や、各々の積み方に

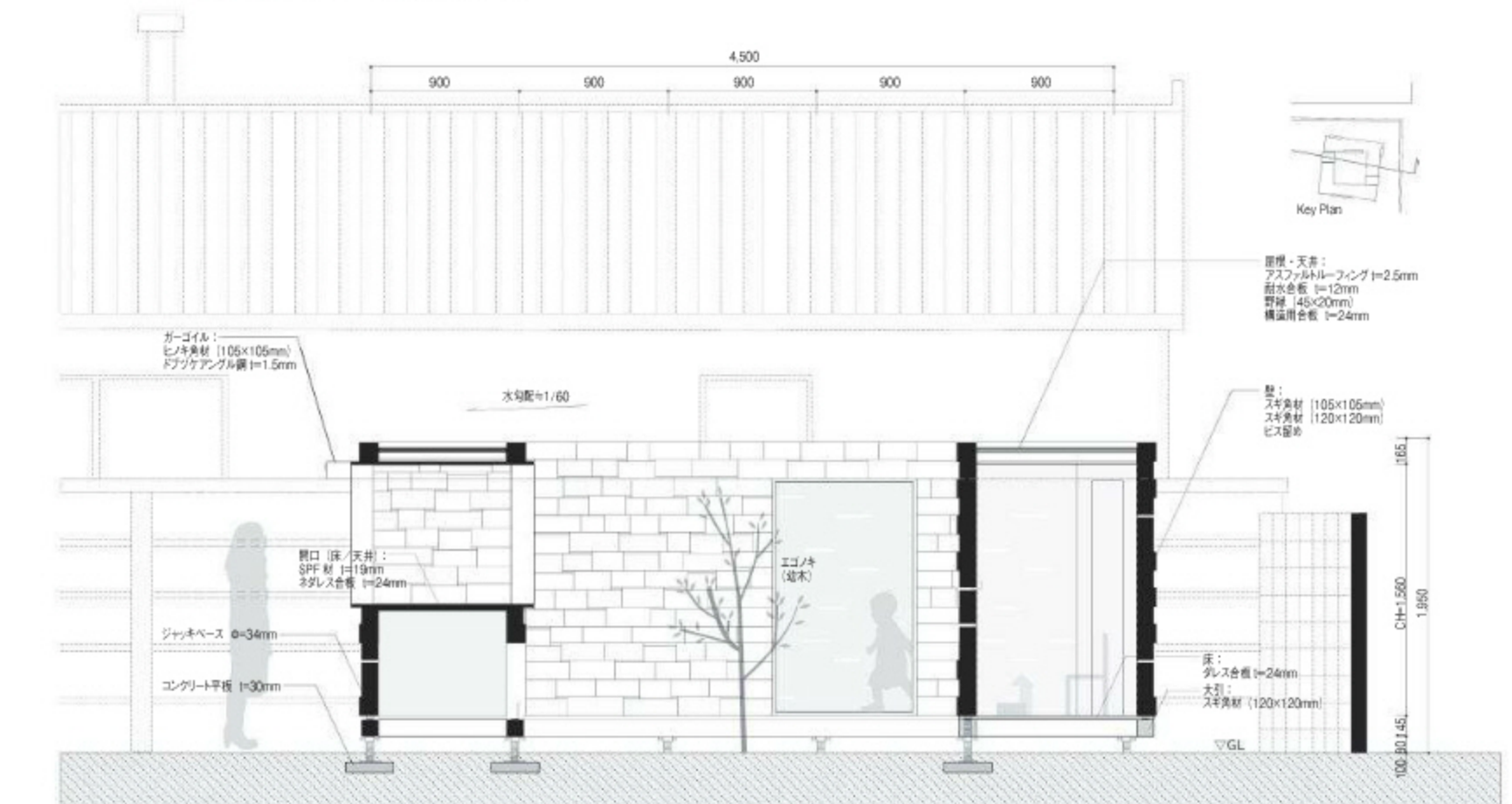
依る表現の余地、街の人びとが徐々に建築が立ち上がる姿を見守る余地など、セルフビルド特有の寛容な余地を生み出した。そしてこの寛容な余地が、使い手からつくり手、ひいては街の人びとが、この小さな建築にもささやかな愛着を持つきっかけになったのではないと思う。ぐるりんを駆け回る子どもたちの元気な姿がこの街の日常の風景になればと思っている。

（池邊絢子＋葉師寺智也＋中土居宏紀／DesignBuildFUKUOKA＋松田満成／マツダグミ）

遊びのきっかけを生み出す工夫



平面 縮尺 1/50
口の字型の建物を南西側に寄せ、敷地境界の塀も第3の壁として入れ子構造に取り入れた。外周壁を7°傾けることにより、回廊幅に広狭を与えて空間のバリエーションを持たせた。



断面 縮尺 1/50
基礎は工事足場用のジャッキベースを用いることによって水平が取りやすく、工期を短縮させた。それらを回廊側に揃えて積むことで、その外側の壁面に凹凸のモザイクをつくり出している。高い所に設けた中庭と外とをつなぐトンネル状の開口は、幼児が年長さんになったら登れるような高さに設定した。



清星幼稚園の園舎。設計は、DesignBuildFUKUOKAに講師として参加する清原昌洋氏設計。

放課後の交流施設（星のいえ）よりくるりんを見る。

設計・施工 DesignBuildFUKUOKA
敷地面積 279.29m²
建築面積 12.96m²
延床面積 9.49m²
階数 地上1階
構造 木造
工期 2012年8月～9月
撮影 新建築写真部（特記を除く）
（データシート187頁）

DesignBuildFUKUOKA設立

2012/1/5

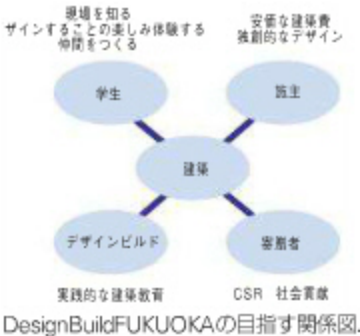
アメリカの大学の建築学科学生にデザイン&建設プログラムを提供するNPO団体DesignBuildBLUFFのプログラムを、現在DesignBuildFUKUOKAのディレクターを務める本田雄一氏がアメリカで見て共感。本田氏が拠点とする福岡でもこのようなプログラムができないかと検討。

DesignBuildFUKUOKA設立

本田氏の考えに賛同した松田満成氏と、DesignBuildBLUFF運営メンバーである山本篤志氏・小木曾裕子氏の協力のもと、DesignBuildFUKUOKAを設立。



DesignBuildBLUFFの施工の様子。



DesignBuildFUKUOKAとは
DesignBuildFUKUOKA（デザインビルドフクオカ）は建築を学ぶ学生、および29歳以下の社会人を対象とした、設計から施工までを行う実践型教育プログラム。
建築には体験しなければ学べないことが数多くある。頭を使いアイデアを出し、手を使いデザインし、体を動かし、汗をかき建物を建てていく。その過程の中で様々な人と意見を交わし、協力し合う必要があることがプログラムの本質である。

第一期プログラム くるりん

第一期プログラム くるりん

福岡市にある清星幼稚園の敷地内に、幼稚園に通う子ども達と地域の子もたちが利用する施設を建設した。

6/3 現地調査

現地に集まり、大体の平面規模検討を行った。



配置 縮尺 1/3,000

プレインストーミング・プランニング

6/10 原案出

各自案を考え、週末に集まって案出し検討を行った。

7/8 施主プレゼンテーション

施主（園長先生）を招いてプレゼンを行った。

8/7 配置決定

現地に集まり、ダンボールの壁を用いて位置を決定した。

8/9 基礎施工

基盤となるコンクリート平板を200mmの深さに埋めた。

8/11 床完成

ネグレス合板t=24mmを切り出し、床を敷き詰める。

-6/24 設計結め

原案が決まり、細かな開口や構成の設計を行った。

7/20-モックアップ作成

105mm角、120mm角の柱材で実寸スタディを行った。

-8/9 材料調達

プレカット工場などから端材を提供して貰った。

8/10 土台完成

ジャッキベースと土台を結合し寸法を合わせる。



工法計画、材料調達、コスト計算などセルフビルドならではの課題にも衝突した。



子どもたちのために考え出された4つのコンセプト。



開口部分の詳細やスケール、木の積み方についてモックアップを作成して検討を行った。



土台施工。



床施工。基礎や床材はホームセンター材料を買い集めた。

建物施工

8/12-壁積み

材を一段一段、材同士からビスが出ないよう横で連結。

8/18-19 屋根施工

屋根は桧木合板にルーフィング材を敷き詰めた。

9/29 植樹

建物周辺に選んだ木を植え、クローバーの種を蒔いた。

-8/16 壁完成

現地で開口の位置を微調整しながら、14段の壁が完成。

8/30 植栽選定

植栽選定に栽培地へ、コナラ、エゴノキ、クロガネモチに決定。

9/30 竣工



開口や凹凸のバランスについて考えながら、ひたすら木柱の端材を積み上げる。



だんだんと壁が積み上がり、建物の全体像が見えてきた。



屋根が張り終わり、建物部分が完成。

第二期プログラム 古民家リノベーション

第二期プログラム 古民家リノベーション、地域の拠点をつくる。

福岡県東端、上毛町有田地区にある古民家をリノベーションし地域の拠点となる複合施設（用途：コワーキングスペース、交流スペース、共有キッチン、上毛町サテライトオフィス）を設計・施工している。



DesignBuildFUKUOKA第二期プログラムの現場となる築100年を越える古民家。

2歳児のための外部スペースが連続する園舎

聖愛幼稚園 第2園舎

設計 SUDA設計室

施工 扶桑建設

所在地 東京都福生市

SEIAI KINDERGARTEN

architects: SUDA ARCHITECTS

園庭を見る。東京都福生市に建つ私立聖愛幼稚園の第2園舎。敷地の北側。元もと駐車場として使用されていた場所に建設された。2歳児保育と預かり保育用に使用される。

2歳児室を見る。向かい合う預かり保育室との間には中庭デッキが設けられ、内外が連続する。



なか庭デッキを見る。下にバス用の駐車場を設けているために生じる床レベルの違いを利用し、なか庭デッキや室内には小さな段差やスロープが設置され、子どもたちの遊びのきっかけとなる。



北東より見る。園庭と連続して設けられたデッキは、140x390mmの緩やかな段々により2階のなか庭デッキへと続く。デッキにはポリカーボネートの屋根がかかる。園庭とデッキには建築と一体化したさまざまな遊具が計画されている。

子どものあそびを誘発する建築

福生の空は広く、富士もくっきりと望むことができる。聖愛幼稚園では、正規保育である年少(3歳)クラスへの移行がスムーズに行えるよう、2歳児保育と、正規保育終了後の預かり保育を数年前から行ってきたが、充実を図るため、そして地域の幼児教育発展に寄与できるよう、駐車場としていた北側部分に第2園舎を建てることとなった。本園舎北側の東西に長い敷地において、東側にまとまった園庭を確保したいという思いから、ほぼ正方形の平面形とし、保育室の環境や保育のあり方および外部への声漏れなどを考慮して、主要3室が「なか庭デッキ」へ向かって内に開いた構成とした。この2階の3室からは互いの気配が感じられるが、自己と他者の認識という大きな命題に少しでも向

き合うきっかけになればと思う。また、風の大きく抜けるデッキには、子どもたちの活発な行動を呼び起こさせる段々やスロープ、気候や四季を感じさせる雨のあたる部分などを設け、内外・天候を問わず多様な活動ができるよう意図している。断面形においては、2階にある「なか庭デッキ」と1階のデッキや園庭とのレベル差を最小限にし、建築的にも心理的にも連続した空間となるよう計画した。2階のなか庭からゆったりとした段々を降りると段ステージに至り、光を含んだ底を不定形に掛けた1階のデッキへと至る。園庭と連続するこの広々としたデッキにも、子どもたちの行動領域が点から線へさらに面へ広がるあそびの連鎖を期待して、シンプルな構成のしつらいを点在させた。近い将来、さまざまなかたちで社会に飛び出す子

どもたちにとって、自分以外の人たちや身のまわりのモノとの交流、接触、摩擦など体験すべき要素は限りなく多い。子どもたちは不安がいっぱいの、しかしながら喜びに満ちた世界を知るために、全身で身のまわりのモノに触れ、全力で身のまわりのモノとの格闘を始める。無意識のうちに建物に触れながら建築を感じ、空間を感じ、あそびや友だちとのコミュニケーションを図り、成長する。そのような子どもたちが多くを過ごす園舎においては、床や壁やしつらいなどの身体に触れる部分と、内外の空間などとの相互の関係が非常に重要な意味を持つ。幼児のための建築は、その健やかで創造的な成長を阻害することのない包容力のある器でありたいと思う。(須田充洋)



配置 縮尺 1/3,000



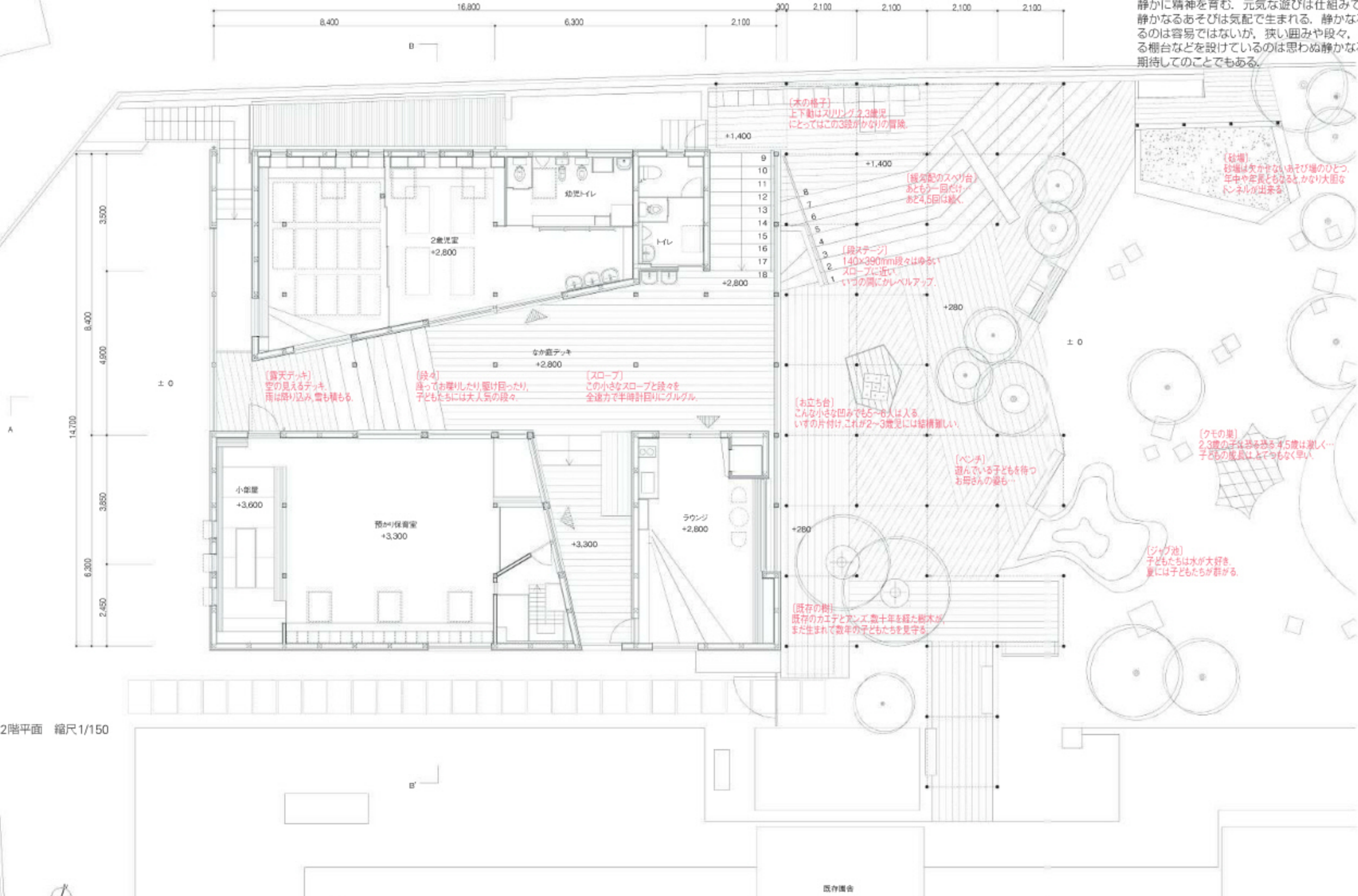
既存園舎を南より見る。門扉は第2園舎の設計者であるSUDA設計室によるデザイン。

外部と内部のスペースが連続する2歳児のための保育空間

子どもの遊び
2歳児ともなると体の動きも自然になり、俊敏性や力強さも急激に身についてくる。それに伴いあそびも多様性を増し、ほんの小さな「何か」がきっかけとなり遊びが生まれ、その創造性はつきることがない。建築はその「何か」になる多くの可能性を秘めており、床や壁などの建築要素が遊び具となり、遊び具は建築となる。子どもたちは「目の前にあるモノ」を巧みに利用して見事にあそびこなし、多くが元気に遊び回中、何かにじっと熱中する子どもたちも少なくない。一方は健やかに体と気持ちを鍛え、一方は静かに精神を育む。元気な遊びは仕組みでも生まれるが、静かなるあそびは気配で生まれる。静かなる遊びを誘発するのは容易ではないが、狭い囲みや段々、座ることもできる棚台などを設けているのは思わぬ静かなる遊びの誘発を期待してのことでもある。(須田充洋)

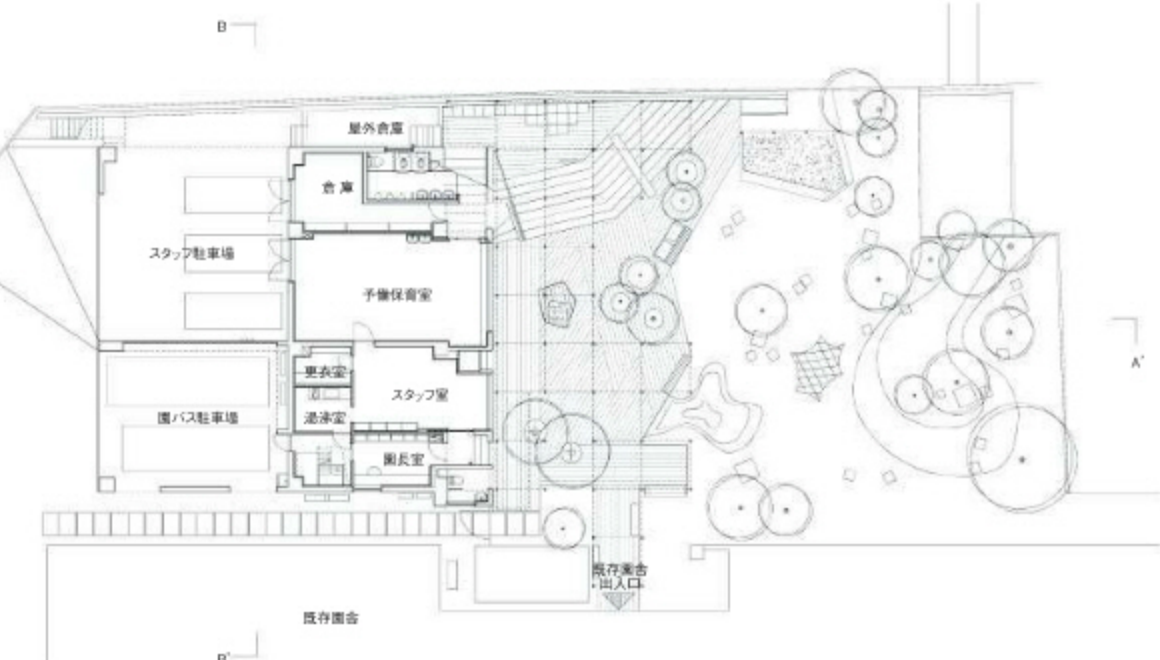


左：2歳児室、右に中庭デッキを見る。右：預かり保育室を見る。室内の一面には畳を敷いたスペースが設けられている。

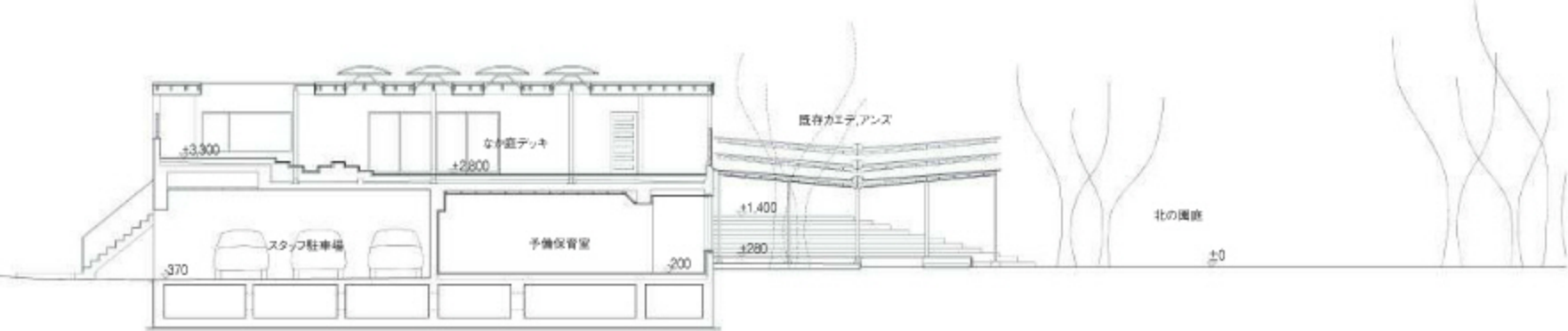


2階平面 縮尺1/150

1階平面 縮尺1/400



設計 建築 SUDA設計室
構造 木村佳央建築構造設計室
衛生・空調 東真水道工務店
電気 エスイーサービス
施工 扶桑建設
敷地面積 3,199.61m²
(うち第2園舎部分：約900m²)
建築面積 317.17m² (第2園舎)
延床面積 488.12m² (第2園舎)
階数 地上2階
構造 鉄筋コンクリート造+木造
工期 2012年6月～12月
撮影 新建築社写真部
(データシート188頁)



A-A'断面 縮尺1/250



B-B'断面 縮尺1/250

PCアーチによる冗長的な空間

港区立伊皿子坂保育園

設計 遠藤政樹 / EDH遠藤設計室

施工 りんかい日産・進和建設共同企業体

所在地 東京都港区

MINATO-KU ISARAGOZAKA NURSERY SCHOOL
architects: EDH/ENDOHI DESIGN HOUSE



図面から見ると、傾斜する敷地に建つ都心の保育園。PC（プレキャストコンクリート）による円筒型のスラブが連続し、児童と室内の廊の半外部空間をつくり出している。構造は小梁なしの逆スラブとし、高さ差があるにもかかわらず、空調の配管もすべて大梁とPCアーチの間を通る。



1階、5歳児保育室。円筒PC天井が外部まで連続している。床下に空調機械や配管を通し、短配管も1カ所に集約したこと、将来的なレイアウトや用途の変更にも対応可能になっている。最上階梁にはプレストレスト鉄筋コンクリートを用いて梁せいを抑えている。



西側外観。高低差がある敷地に建ち、左のエントランスは2階にあたる。塀は、石材外壁乾式ハンガー工法＋色ガラス。



3階テラス。はり出した庇は最大で4.5mあり、園庭が広く取れない中で園児の遊び場となる。

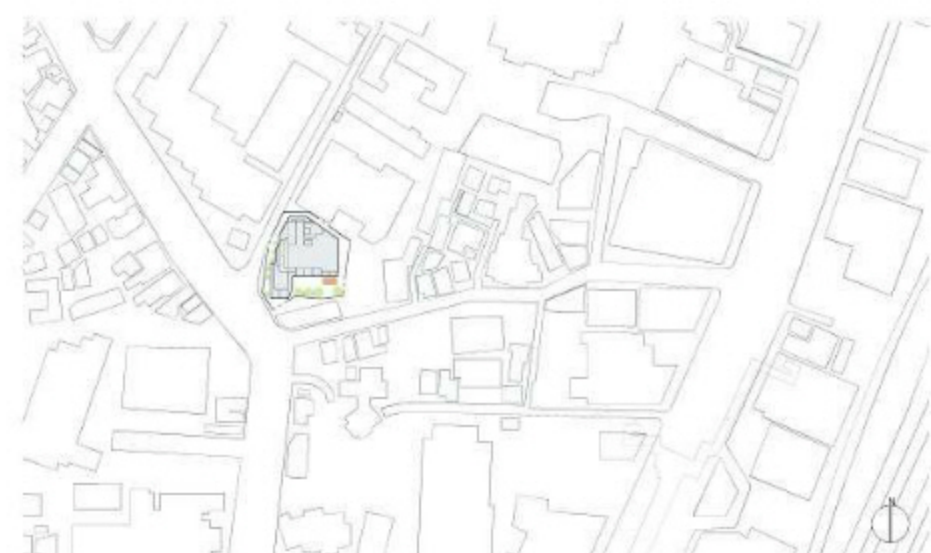
円筒PCスラブがつくり出す、子どもたちの空間

坂の多い都心の変形三角敷地にこの保育園がある。6クラス約150名の区立保育園である。子どもたちの元気な活動と自然な見守り、食育としての給食サービスを実現し、それに加え待機児童を解消すべく早急の建設が求められた。さらに近隣からのプライバシー保護、工事中も含めて近隣への配慮という都心施設特有の要求や、公共施設としての厳格な省エネルギーやメンテナンスフリー対策、将来へいかにようでも用途変更可能にするなど考慮すべき点は多岐にわたった。これらの高水準な解決を目指した施設である。敷地は3層分の高低差がある南傾斜である。そこに10.8×21.6mという最大限の無柱空間を確保す

る。建物が南に広い三角形であることを考慮し、北側の地面に埋まる狭い三角部分に、縦動線や倉庫など裏方小部屋をレイアウトする計画である。その南が園庭である。園庭は広くは取れない。子どもにとって大切な外遊び場を効果的に確保するデザインを中心に考えた。建物の天井高を低く抑え、構造部材の寸法を小さくし、室内から続く半屋外底空間の充実を図ったデザインである。空間モジュールは小さめの3.6mである。間仕切り壁を効果的に配置し、機能モジュールと構造モジュールの整合性を高めた。半屋外空間は、室内から連続する円筒型の底空間によって特徴付けられている。通常のラーメン構造と異なり、スラブを円筒形にした3.6×10.8mの小梁のない逆スラ

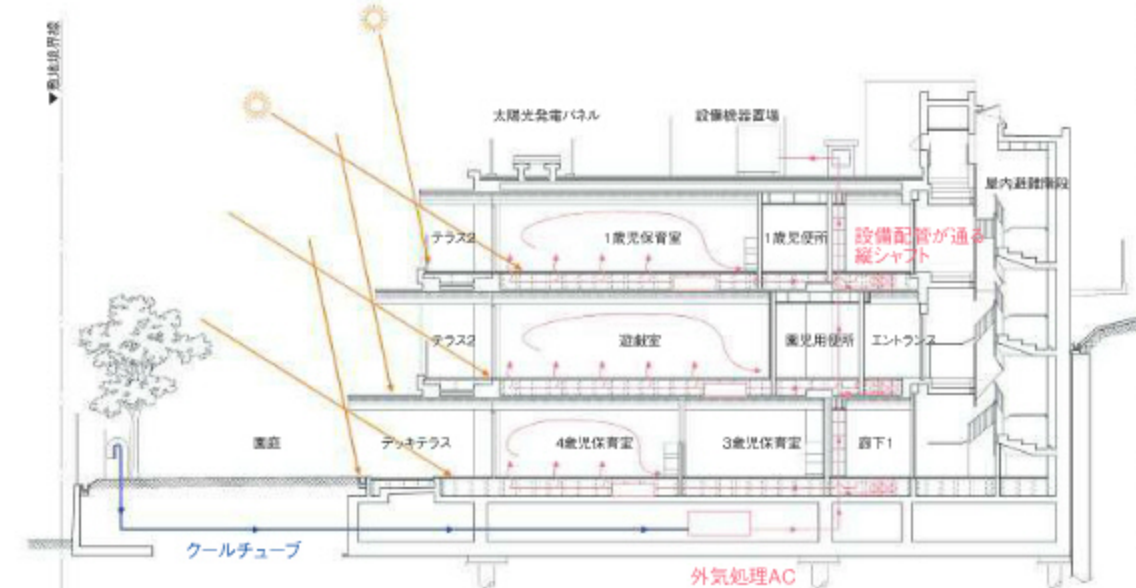
ブ方式である。ひとつの保育室単位はこのふたつの円筒で覆われ、各保育室は可動間仕切りで緩やかに繋がっている。円筒スラブはプレキャストである。工期短縮のためと、高強度にして薄くし高さ方向のスペースを確保し、最大4.5mの園庭に繋がる底空間を確保するためである。小梁のない保育室の床下は空調のための空間となり、子どもに適した居住域空調を床から均一に行った。子どもたちの記憶に残るような保育園を願っている。保育園のあらゆるところに円筒天井を仕込むことで、日常的なアイコンをその解答として用意した。

(遠藤政樹／EDH遠藤設計室)



配置 縮尺1/4,000

設計 建築 遠藤政樹／EDH遠藤設計室
構造 江尻建築構造設計事務所
設備 テーデンス事務所＋設備計画
施工 りんかい日産・進和建設共同企業体
敷地面積 1,118.04m²
建築面積 679.44m²
延床面積 1,664.82m²
階数 地上3階 塔屋1階
構造 鉄筋コンクリート造＋プレキャストコンクリート造＋プレストレストコンクリート造
工期 2011年12月～2013年5月
撮影 新建築社写真部(特記を除く)
(データシート188頁)



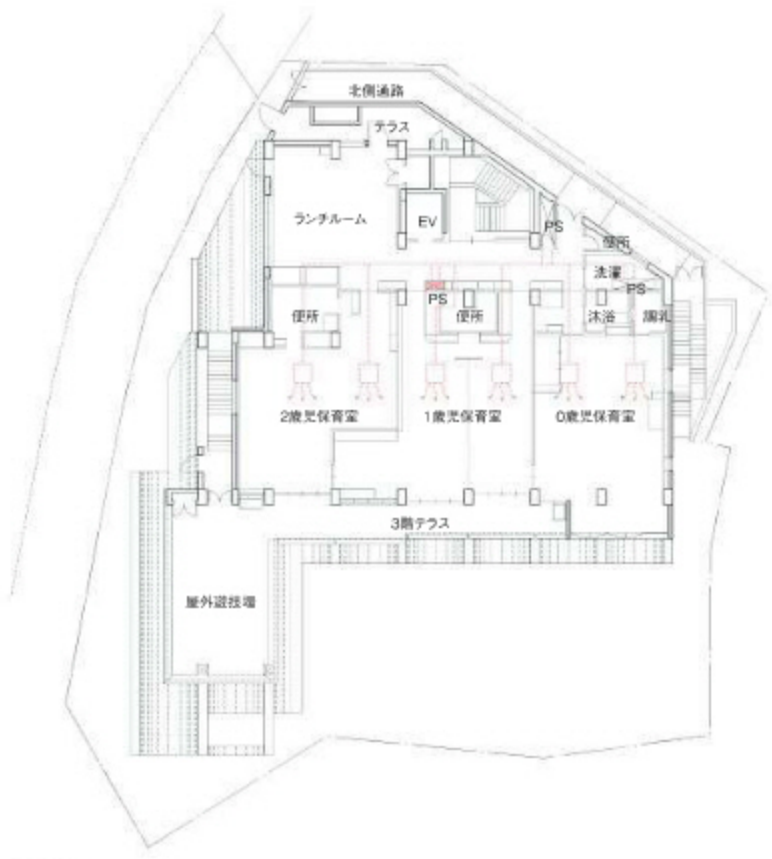
長手断面 縮尺1/300



上：3階屋外遊技場。下：3階ランデルーム。円筒PC天井のもと奥の2歳児保育室まで連続する。



2階遊戯室。床剛性をPCアーチで確保し、10.8×21.6mの無柱空間をつくり出した。

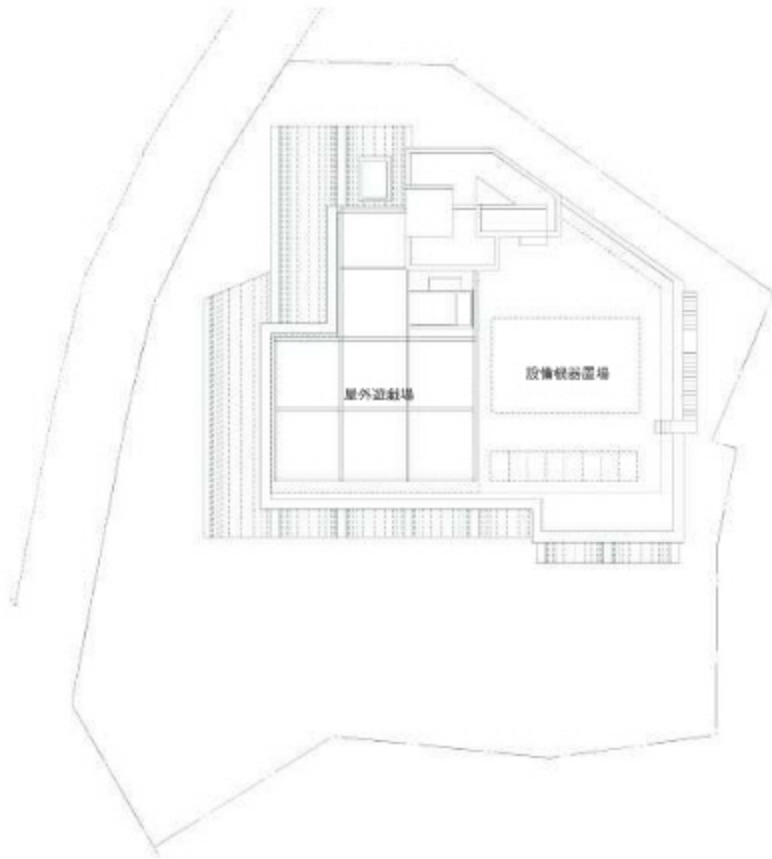


3階平面



1階平面 縮尺1/500

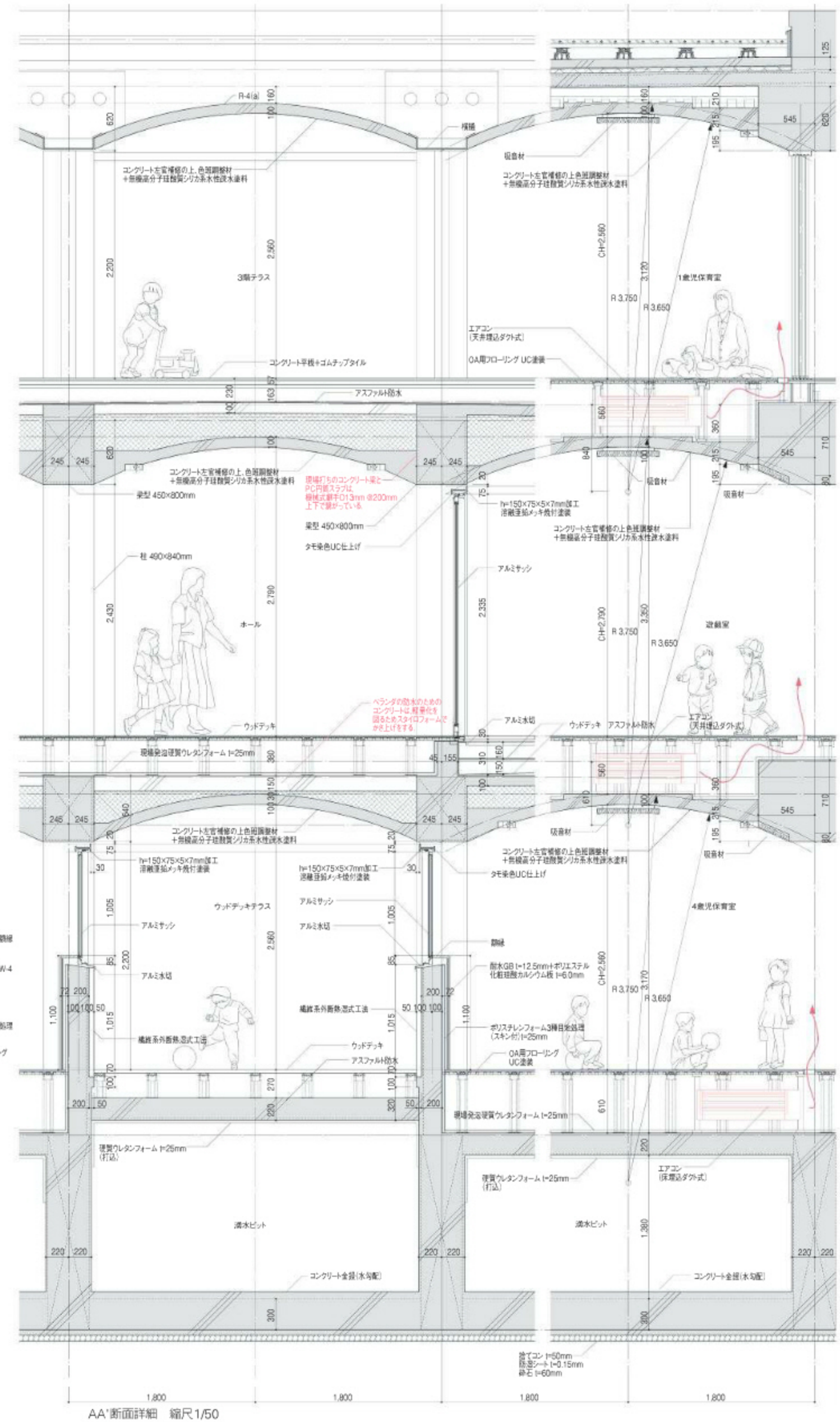
PCスラブによるアーチが連続し、構造・設備を担う



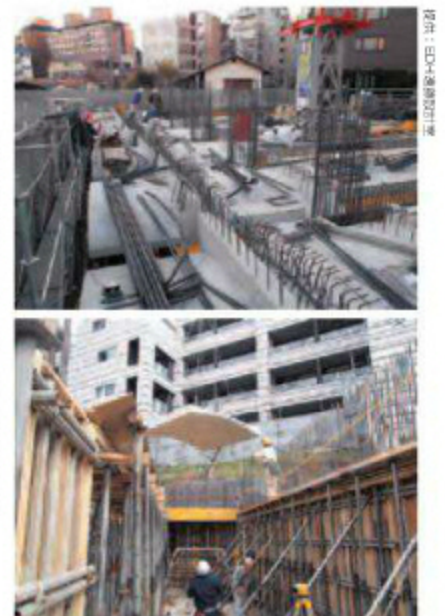
屋上階平面



2階平面



PCスラブが担う構造、空調スペース
構造は、床剛性をPC(プレキャストコンクリート)で確保する鉄筋コンクリートラーメン構造である。また、小梁なしの逆スラブであることが構造の特徴である。工期短縮、天井高確保、室内から連続する軒下空間の支持、床下の室内空調機確保のためにこの構造形式が決定された。それによる保育室天井高は梁下2,200mm、スラブ中央で2,560mmである。床空調は子どものための居住域空調として最適であり、また将来のレイアウト変更にも左右されない空調方式である。設備横引本管と縦本管は、保育室北の廊下部分に限定され、配管貫通などの施工管理と将来の配置変更を容易にする。屋根梁は、空調室内機スペース不要のため逆スラブでなく、さらに梁に鉄筋プレストレスを用いて天井高を確保している。(遠藤政樹/ EDH遠藤設計室)



上: PCスラブ施工の様子。下: PCスラブは3.6m角のユニットで搬入。

0歳～5歳児、ふたつの幼稚園、保育所、子育て支援センターの統合

たがわこどもセンター「まいまい」

設計 塩塚隆生アトリエ

施工 成定建設

所在地 福岡県田川市

TAGAWA CHILD CENTER "MaiMai"

architects:TAKAO SHIOTSUKA ATELIER



配置 縮尺 1/6,500



西側高台からの見下ろし。団地や、運動公園と隣接した立地環境に建っている。運動公園内の芝生広場ではあったが、使われていなかった敷地に、離れた場所にあった4つの施設（ふたつの幼稚園、保育所、子育て支援センター）を集約し、子育ての拠点とすべくつくられた。



夕景。保育室は7:30～17:30、幼稚園は9:00～15:00までの時間で子どもを預かる。0歳から5歳までの居室が、ひと繋がり配置されている。

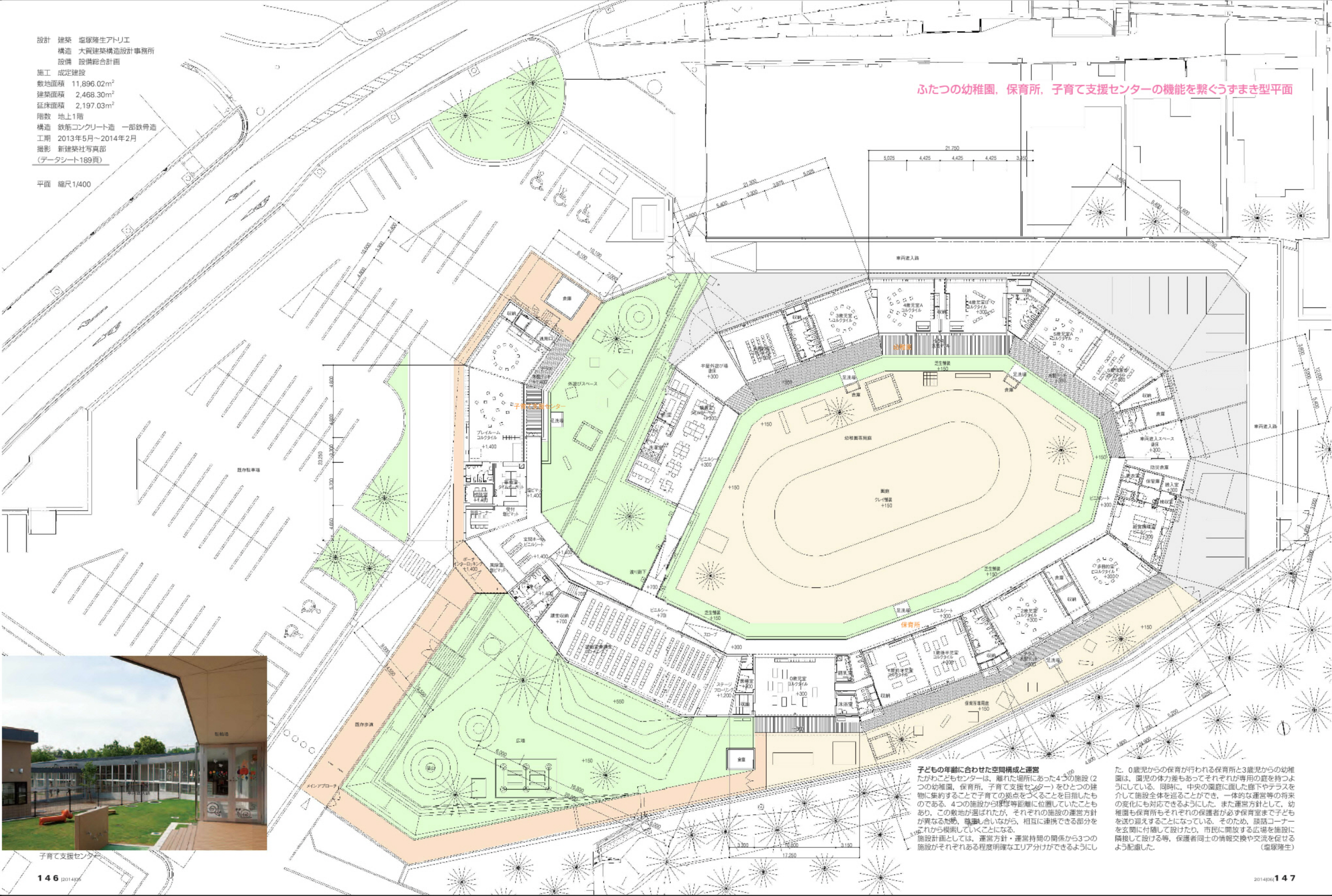


幼稚園の南側デッキから見る。庭園をぐるっと囲う高さ約2,500mmの軒下に長いデッキ空間が配置され、どの場所の園庭からも直接デッキを介して園庭に出られる。

設計 建築 塩塚隆生アトリエ
 構造 大賀建築構造設計事務所
 設備 設備総合計画
 施工 成定建設
 敷地面積 11,896.02m²
 建築面積 2,468.30m²
 延床面積 2,197.03m²
 階数 地上1階
 構造 鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造
 工期 2013年5月～2014年2月
 撮影 新建築社写真部
 (データシート189頁)

平面 縮尺1/400

ふたつの幼稚園、保育所、子育て支援センターの機能を繋ぐすまき型平面



子育て支援センター

子どもの年齢に合わせた空間構成と運営
 たがわこどもセンターは、離れた場所にあった4つの施設(2つの幼稚園、保育所、子育て支援センター)をひとつの建物に集約することで子育ての拠点を一つにすることを狙ったものである。4つの施設からほぼ等距離に位置していたこともあり、この敷地が選ばれたが、それぞれの施設の運営方針が異なるため、無理に合わせるのではなく、相互に連携できる部分をこれから模索していくことになる。

施設計画としては、運営方針・運営時間の関係から3つの施設がそれぞれある程度明確なエリア分けができるようにし、0歳児からの保育が行われる保育所と3歳児からの幼稚園は、園児の体力差もあってそれぞれが専用の庭を持つようにしている。同時に、中央の園庭に面した廊下やテラスを介して施設全体を巡ることができ、一体的な運営等の将来の変化にも対応できるようにした。また運営方針として、幼稚園も保育所もそれぞれの保護者が必ず保育室まで子どもを送り迎えすることになっている。そのため、談話コーナーを玄関に付随して設けたり、市民に開放する広場を施設に隣接して設ける等、保護者同士の情報交換や交流を促せるよう配慮した。

(塩塚隆生)

多様な環境を巻き込み包み込むうすまきの空間

福岡県田川市における市立の幼稚園・保育所・子育て支援センターを併設した施設である。田川市は福岡県の北東部に位置する人口約5万人の町で、かつては炭坑の町として栄えた。高齢化・少子化が進む中で、ふたつの幼稚園とひとつの保育所、子育て支援センターをそれぞれの施設からほぼ等距離にある場所に集約することで市の子育ての拠点、こどもセンターを整備することとなった。建物は、市が掲げる施設理念「同一の中の多様」を実現するために、園庭を囲い込むように3つの施設機能を連ねたうすまき状の施設配置になっている。うすまきは開かれながらも守られたかたちをしていて、これからの地域や他施設との連携・協働の中で築かれるであろうこれからの保育環境に適しているのではないかと考え、多様な機能、子供たち・大人たちのさまざまな活動が重なり合

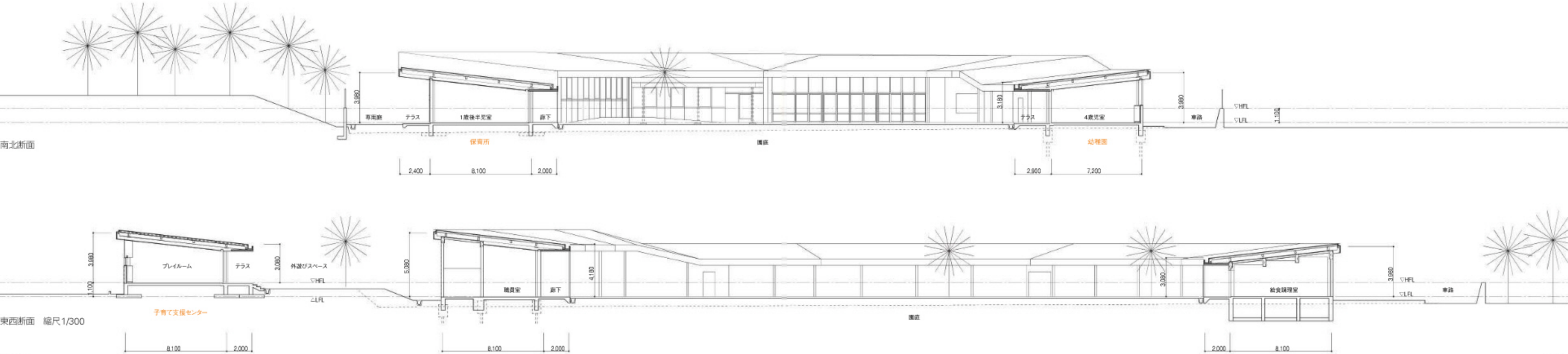
う施設イメージを提示した。また、敷地が運動公園の駐車場と芝生広場を含めた広い範囲であったことから、平屋建てとし敷地全体にわたって施設が配置されるようにした。駐車場と芝生広場の2mほどの高低差はスロープによって繋げ、3つの施設機能がひと繋がりになるようにした。うすまき状の配置は、囲まれた安全な園庭をつくり出すと同時に、すべての保育室が南面するほぼ均等な室内環境を確保できる。施設が細長く連続していることで、各室は必ず2面が屋外に面した開口を持ち、施設全体に明るさと開放感をもたらす。また、うすまきの内側に向けて屋根を傾斜させ、園庭側の親密なスケールと外側へ開いていくような開放性を持った保育室をつくり出している。このうすまき状の配置は、全体を繋ぐことも、どこかで区切ることもでき、将来の保育環境の変化にも柔軟に対応できると考えている。（垣塚隆生）



1歳児保育室。



保育所側の廊下から見る。廊下の幅は約2,000mm。囲われた園庭側は約1,500mmの幅で芝生が敷かれ、その内側にクレイ舗装の庭が広がる。



里山に囲まれて建つ長さ約100mの木造平屋建ての園舎

東京ゆりかご幼稚園

設計 渡辺治建築都市設計事務所

施工 砂川・ロード建設共同企業体

所在地 東京都八王子市

TOKYO YURIKAGO KINDERGARTEN

architects:OSAMU WATANABE ARCHITECTS

ホールより園庭を介して保育棟を見る。東京都八王子市にある東京ゆりかご幼稚園の移転に際して建てられた新園舎。周辺の住宅街より15m上がった高台の山の麓に建つ。保育棟と遊戯棟からなる木造平屋建て。桁行き方向の柱スパンは5.4m。



身近な自然を取り入れた園庭での里山教育

未来の建物
何を仕立てるかにはヒミツ...

付帯施設建設予定

お父さんとお母さんが
車で送り迎えをします

子どもを迎え、親と出会う
ツバサのような庭

大きなツバサ
里山の風景へ繋がるロビーとなる

設計 建築 渡辺治建築都市設計事務所
構造 リズムデザイン・モウー級建築士事務所
設備 三島設計
施工 砂川・ロード建設共同企業体
敷地面積 21,301.01m²
建築面積 1,801.05m²
延床面積 1,855.65m²
階数 地上2階
構造 木造
工期 2013年7月～2014年1月
撮影 新建築社写真部
(データシート190頁)

断面 縮尺 1/500

植林中

植林中

植林中

何かとメンテに使える道路

中古のショベルカーが入っている
園長先生の最強兵器

井戸水を使ったピオトップ
春はまたまじゅしが住む

消防車が通れる

雨水タンクと花壇
親たちがつくった

芝生
みんなで植えました

平面 縮尺 1/500

未来の建物

稲田
親と子どもが一緒に作る田んぼ

板を使った園長先生お手製の遊び場

夜になるとイノシシやタヌキが
出てきて驚かします

鳥や虫の声に囲まれた外の教室

大きく開く教室

森の中には、イノシシやタヌキ、
多くの野生動物が住む



未来予想図
この場所は元も豊かな「里山」で、周辺に住む人たちは雑木林で薪をとり、山菜を採ったり、畑の肥料に使う落ち葉を拾ったりと、里山からの「恵み」を受けて生活してきました。家の周りには畑や田んぼ、小川や草原があり、子どもたちは自然との繋がりが見える環境で生活し、五感を使い思う存分に遊んでいました。おもしろい遊びがなくとも、豊かな自然は子どもたちの心を十分に満たし「生きる力」が存在していました。われわれは、園庭に「身近な自然」を取り入れ、子どもたちが主体的に関わる中で、興味・関心の芽を育て、「生きる力」が育まれるような取り組みに力を注いできました。この新しい園舎ではさらに理想の環境を追求し、園庭をそのまま里山に戻していく「園庭里山化」を掲げています。自然と関わり自然を育てていく過程を通して、大いに遊び、学び、育ち合う場を創造していきたいと考えています。
(内野裕裕 / 東京ゆりかご幼稚園園長)



配置 縮尺 1/5,000

過酷な環境と付き合う

5年前に雑草が生えて、水はけの悪いこの敷地に内野先生に案内された。水はけは悪くそこら中に動物の足跡があった。上の敷地にのぼるための道さえなく、道の計画から手をつけた。敷地は住宅地から15m上がった高台で、夏の灼熱、冬の雪、そして強風にさらされる。熱帯地方と寒帯に適合する建物が要求された。北側採光、南傾斜屋根、南北換気、冬密閉、夏開放、などで熱と寒さを克服させる。かつては当たり前の工夫だったかも知れない。

里山保育のための教室として、木造の民家がふさわしいと考えた。北側は空と、町並みを望むように開口部を配置し、園庭と森に向かっては、大開口が開き、直射と雨をしのぐ2間の深い庇をつくり、保育空間と外部の自然と連続させる民家。保育は、母親のストレスを癒す目的もある。そのために、従来の幼稚園にはない空間をつかった。乳児をカフェを楽しめる子育て支援室。緊急時に保育してくれる預かり保育室。また、未来の建物へ繋げるための階段とロビーと

しての大きなテラスを厨房の上につくった。未来の可能性に向かい、楽しい会話が生まれてほしい。木構造は、合理的な小断面の材を基本とし、屋根にH型断面のLVLの梁を採用することで、2間の庇を跳ね出すことができ、優雅な半戶外空間を獲得することに成功している。そうやって、過酷な気候下で、室内の保育スペースが確保されたが、いぜんとして森からイノシシやタヌキが夜中に園庭にやってきて、こどもたちの田畑を荒らす。手を入れ続けねば過酷な自然にやられてしまうのが、里山環境なのだ。(渡辺治)

大人の高さと子供の低さで空間をつくる

うれしの東保育園 カンガルーのおうち

設計 大建met 大建設計 なわけんじム

施工 内藤建設

所在地 岐阜県羽島郡

URESHINO NURSERY SCHOOL

architects:met ARCHITECTS NAWAKENJI-M

中央のコミュニティスペース。天井の高さは梁下で2,250mm。左手に1・2歳児保育ユニットのハウス、右手奥に2・3歳児保育ユニットのハウスと繋がる。ハウスは1歳～3歳児の子どもたちのための小さなユニット。大人が覗き込める高さに抜けが取られている。

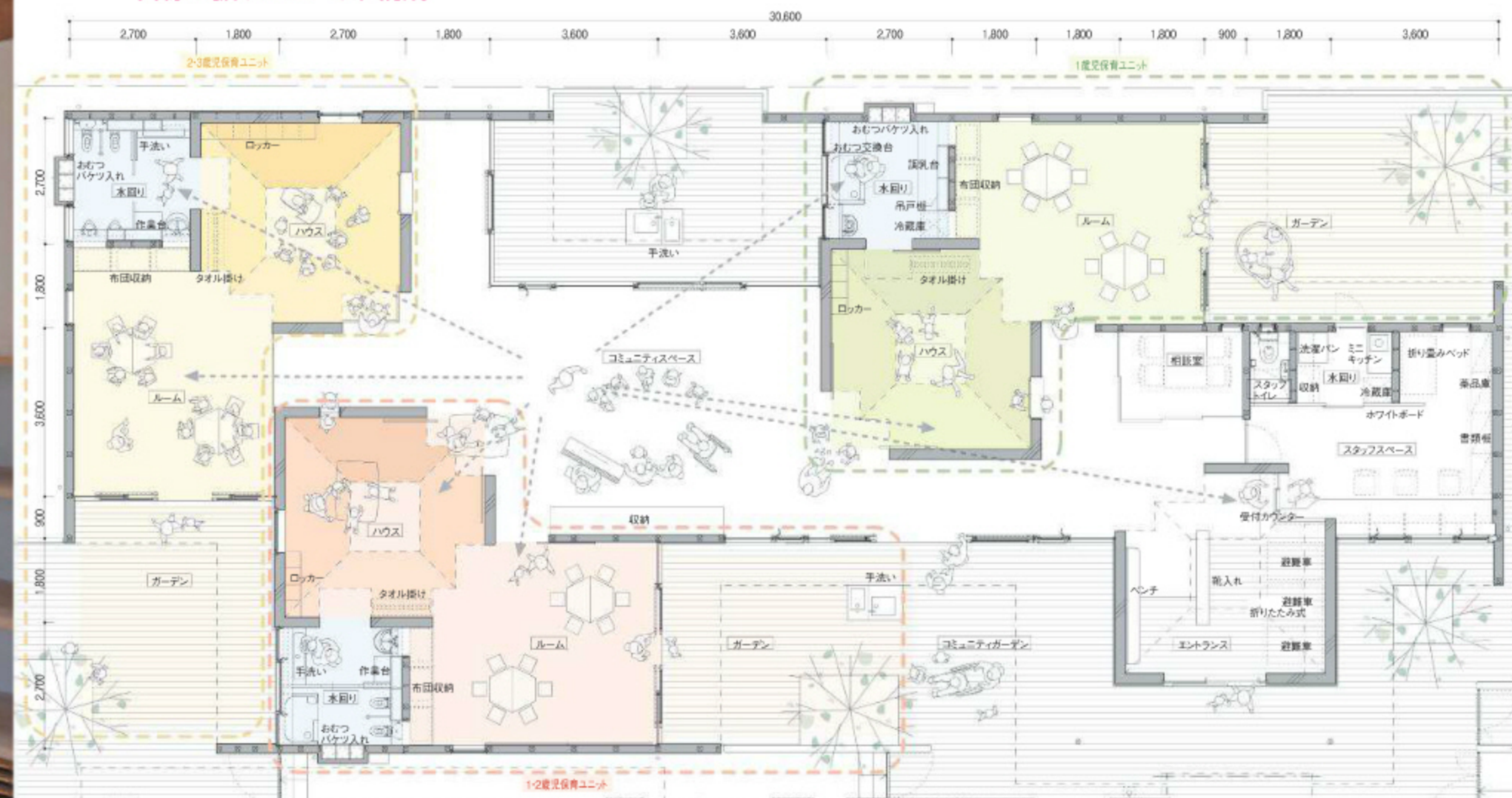


ルームからハウスを見る。その奥にさらにコミュニティスペースがあって、ガーデンへと繋がる。ハウスの壁の開口部は子どもの視線が抜ける高さで開けられている。



ガーデンとコミュニティガーデン。右奥が増築されたこの施設のエンタランス。

目線が抜けるユニット構成

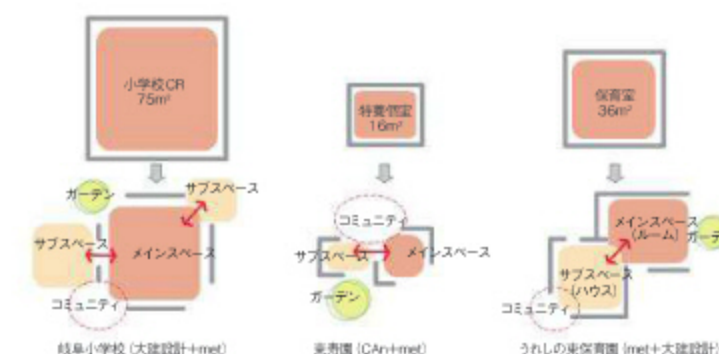


平面 縮尺 1/150

室を連続するボリュームに分節する

保育ユニットの「ハウスとルーム」はふたつを合わせて施設基準面積を満たす保育室となる。「基準面積を有する一室」をそこの行為に特化した異なる空間の連続体に分節し、新しい場所を生み出す手法はこれまでにいくつかのプロジェクトで行なった(右図)。ここでは一室分の面積を等しく分節することで保育室を子どもスケールにサイズダウンすることを試みた。

(鈴木えいじ 平野勝雅/大建met)



結果小学校(大建設計+met) 実用園(CAn+met) うれしの東保育園(met+大建設計)

うれしの東保育園は岐阜市南部に隣接する岐阜町の公立保育園が民間委譲されたもので、それに伴う増築工事が今回の3歳未満児保育室棟となる。徒歩圏内には同法人が運営するもうひとつの保育園と特別養護老人ホームがあって園児やお年寄りがここを訪れることはもちろん、クライアントの「子どもの育ちと共に保護者の子育てをも支える」という考えのもと、保護者たちも園内部(コミュニティスペース)へと日常的に導かれる。

ハウスとルーム

既存園舎北側の限られた敷地に、十分な採光と安全な外部環境を持つ保育室を子どもスケールで実現するため保育室を「ハウス」と「ルーム」に分節し、適度な囲みを設けた「ガーデン」と、年齢にあわせた「水回り」を接続して、全体を「保育ユニット」と位置付けた。小屋型のハウス内部では採光を抑える一方、ルームはハウス屋根面を介した

トップライトからの反射光が溢れる屋外的な場所とし、子どもたちの多様な過ごし方を誘発できるよう空間に変化を与えている。

子どもの「視線」、大人の「視線」

「ハウス」の壁面はFL+1,250mmまで立ち上がってから傾斜して建物全体の水平力を負担する閉じた小屋型をつくる。この室内に現れた屋根面と、高さを1,250mmに抑えた内部建具(引戸)により、大人の視線が通り3つの保育ユニットとエントランス間を一度に見通すことを可能にした。この低く小さな建具は軽く安全に動き、子どもたちの視線と日常行動をコントロールする。

カンガルーのおうち

3つの「保育ユニット」に囲まれた中央のコミュニティスペースからはすべての「ハウス」の内部をちょうどベビーサークルを覗き込むようにうかが

うことができる。カンガルーのおなかに入った子どもを見るような、そんな想いからクライアントによってこの増築棟の名前が付けられた。

(鈴木えいじ 平野勝雅/大建met)



配置 縮尺 1/2,500

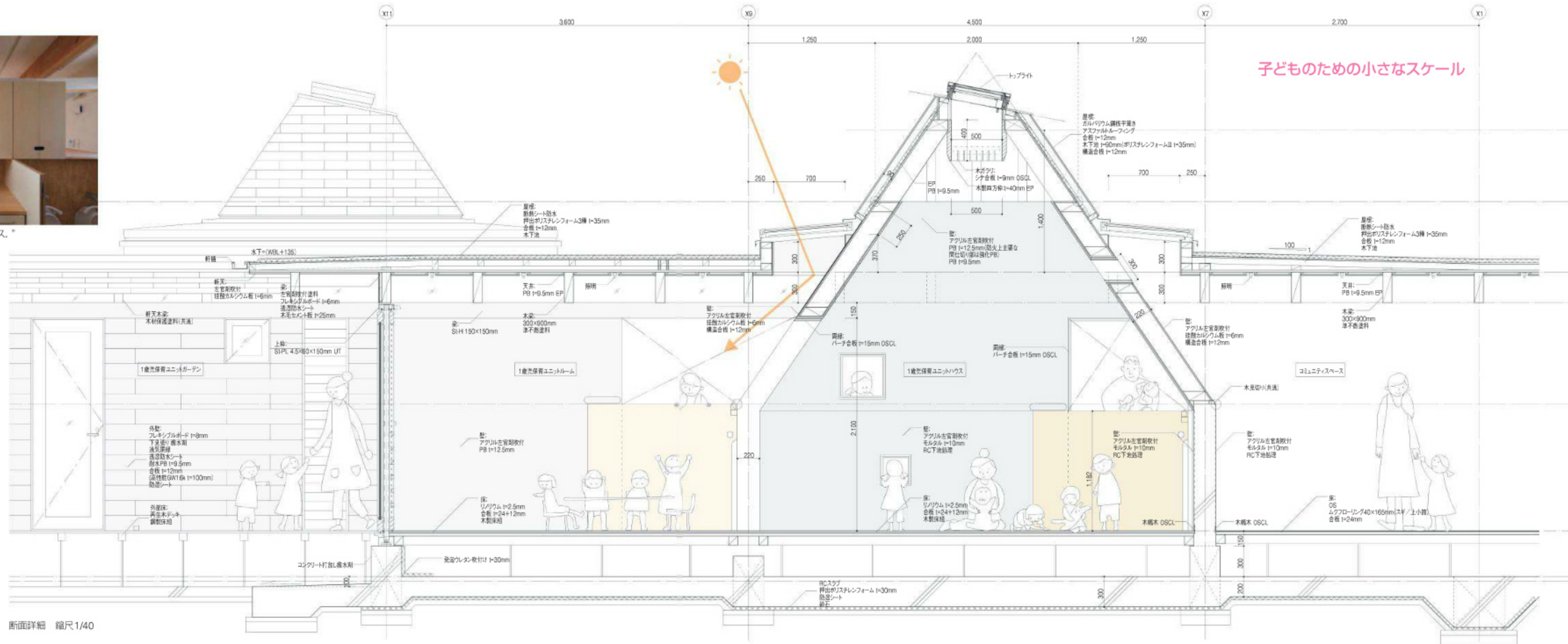


2歳・3歳児保育ユニットの水回りスペース。*

方形のハウスとフラットルーフ（構造計画）

本建物は、建物全体を覆うフラットルーフ部とそこより突出したハウス部とによって構成される。4つのハウス部は垂直に立ち上がった鉄筋コンクリート壁上部に方向性のない方形屋根を被せ閉じた構造とした。一方フラットルーフ部は短手方向に架けた垂木（90×300mm）@900mmを長手方向の鋼材で（H150mm鋼材）繋ぎ、水平力をハウスに負担させることで方向性を強調した開放空間を実現した。（名和研二）

*写真提供：大建met



断面詳細 縮尺 1/40



北側から見る。奥に見えるのが3歳児以上の既存棟。手前に増築された部分が「カンガルーのおうち」。

3つの施設を繋ぐ

うれしの東保育園の周辺は、宅地と農地が混在しながらも戸建て住宅が増え続けている一帯で、開かれたコミュニティガーデン／スペースによって同法人運営のもうひとつの保育園および特別養護老人ホームとの相互訪問はもちろん地域コミュニティとの交流も活発化しようとしている。

（鈴木えいじ 平野勝雅／大建met）



周辺図 縮尺 1/30,000

設計 建築 大建met 大建設
構造 なわけんジム
施工 内藤建設
敷地面積 2,898.05m²
建築面積 336.10m²
延床面積 269.60m²
階数 地上1階
構造 木造 一部鉄筋コンクリート造
工期 2013年10月～2014年3月
撮影 新建築社写真部（特記を除く）
（データシート190頁）



ハウスの中の子どもを見守る先生たち。*

柔らかな光に覆われた子どものひろば

かなや幼稚園

設計 石嶋設計室＋小松豪一級建築士事務所

施工 横浜大一建設

所在地 福島県いわき市

KANAYA KINDERGARTEN

architects: ISHIJIMA ARCHITECTS + GO KOMATSU ARCHITECTS

ひろば（屋内遊戯室）を見る。屋根（天井）には酸化チタン光触媒コーティングされた膜材（協立工業）を張り、外の光をできるだけ透過させ、外部に近い室内環境をつくり出している。



西側の園庭。子どもの送り迎えと共に、さまざまな人が交流できる場所がつくられている。左隣接する老人介護保健施設仮設格葉ときわ苑に入所されている方々がこの庭で花見を楽しんだり、子どもたちが施設内へ歌を披露に行ったりなど、施設間の交流も深められている。



夜になると、膜屋根を通して内部の光が街に漏れる。朝の預かり保育は7:30～、通常保育は9:00～14:00、夕方の預かり保育は～18:00、外構の照明消灯は22:00。膜屋根はシンボルとして常夜灯となっている。



配置 縮尺 1/2,000

工場

新川

介護老人保健施設

集合住宅

文部科学省の2013年度学校保健統計調査速報によると、福島県では肥満化傾向の子どもの割合が増加しているとのこと。これは福島第一原発の事故以降の屋外活動の減少や生活環境の変化等がひとつの原因とも言われている。このような背景を踏まえ、「かなや幼稚園」では子どもたちが安心して「汗をかける幼稚園」をつくることを目指した。それは屋外での活動を補完するための体育館のような囲われている大空間をつくるだけでなく、あたかも屋外にいるかのような「開放的な半屋外空間」をつくることである。

敷地周辺には総合病院や保健所など医療・福祉系

施設が多く立地し、来街者は多世代にわたる。また敷地北側には同じグループの医療法人社団が運営する介護老人保健施設が隣接しているため園舎を逆L字型の変形敷地の中央に配置することで、園舎の前面に高齢者や地域に開放した前庭を設けた。前庭はイベントやお祭りの場であると共に、災害時には高齢者や園児の一時避難としても機能する。園舎は3つのゾーンで構成した。中央の屋内遊戯室は膜屋根を透過した柔らかな自然光が降り注ぐ「開放的な半屋外空間」である。2階の回廊やさまざまな遊具を挿入することで子どもたちが屋内で

も目一杯遊べる場を実現した。一方、それを挟むかたちで配置した保育室や管理諸室等はルーバー状の梁を現し、落ち着いた居場所としてつくった。これらの内部を覆う膜屋根は、できるだけシンプルな面だけ見えるよう、ブレースなど膜面の透過性を阻害する部材がなくても成立する形態を模索し、寄棟が導き出された。さらに膜の継ぎ目を登梁にあわせることで、膜面の透過性を確保している。そこから入る柔らかな光は暖かみのある木の表情と共に、子どもたちの居場所を優しく包み込んでいる。

(石嶋寿和)



2階の回廊。朝登園してきた子どもたちは、まずこの回廊を走って汗をかき、1日が始まる。

子どもが快適に遊べる室内環境をつくる

- 室内空気の流れ・吸い込み
- 室内空気の流れ・吹き出し
- 床下空気の流れ



南側の園庭。左奥の植栽の裏側に、外気取り入れ口が3つ。地中にクール & ヒートチューブを通して、機械室外側の壁（中央のダクト3本が見える壁）から室内に引き込んでいる。

左の着替え室の壁がガラリとなっており、取り入れた外気が屋内遊戯室に吹き出される。



手前に保育室内の家具と一体化した吸込み口と奥の床には吹き出し用木製グリルが見える。造作家具の制作はlaboratory。



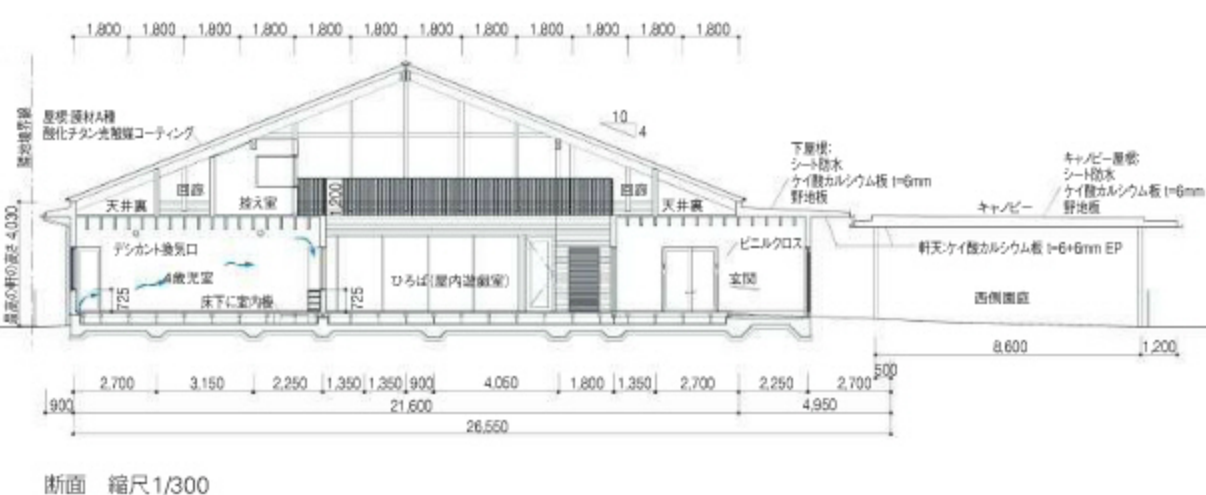
ひろば（屋内遊戯室）の気流：地中熱を利用した機械換気

南側園庭に通したクール & ヒートチューブから涼しい（暖かい）空気を取り込み、着替え室の壁や、床下を通して3歳児室の壁からひろば（屋内遊戯室）に吹き出している。空気は北側階段下から床下に吸い込まれて機械室へと運ばれ、そこから外部へ排気される。ひろば（屋内遊戯室）中央のダクト下にはファンが取り付け、夏場は冷たい空気を上部へ、冬場は暖かい空気を下部へと戻す役割を果たしている。

保育室の気流：直接気流をあてない床吹き出し空調

エアコンの室内機を床下に設置し、家具の上部から吸った空気を床下で（冷/暖）し、反対側の壁下の床グリルから吹き出す。湿度を調整するデシカント換気を採用。

平面図に記載される床下風向調整板は、床下に板を入れるだけで、空気の滞留が生じ、熱効率が上がるために採用している。



上：3歳児室の内部から見る。開口は子どもの目線を考え、床から725mmの高さに設置されている。／下：5歳児室の前にある子どものためのベンチ。小さな居場所がつけられている。

設計 建築 石嶋設計室+小松豪一級建築士事務所
構造 KAP
設備 テーダンス事務所
施工 福浜大一建設
膜屋根 協立工業
敷地面積 1,642.65m²
建築面積 661.74m²
延床面積 763.08m²
階数 地上2階
構造 木造 一部鉄骨造
工期 2013年6月～2014年3月
撮影 新建築社写真部
(データシート191頁)



左：着替え室の外側にあるクライミングウォール。／南側園庭の遊具。コト葉LAB.による制作。

自然豊かな環境を生かし保育園を増設

東村山むさしの認定こども園

設計 ジャクエツ環境事業 + アトリエ9建築研究所 + 村松基安 + 村松デザイン事務所

施工 松井建設

所在地 東京都東村山市

HIGASHIMURAYAMA MUSASHINO CENTER FOR EARLY CHILDHOOD EDUCATION AND CARE

architects: JAKUETSU + ATELIER9 ARCHITECTS & ASSOCIATES + MOTOYASU MURAMATSU ARCHITECTS

北側より見る。幼稚園の雑木林豊かな園庭内に新たに建設されたこども園。中庭を囲む回遊式プラン。園庭に面して設けられた透明感のあるランチルームは視線を中庭へと引き込む。既存の幼稚園とも共有する。鉄骨造（一部鉄筋コンクリート造）2階建て。



2階テラスより園庭方向を見る。中庭を囲んでテラスが設けられている。園庭に面したガラス張りのランチルームを通して、どこにいても緑や風を感じられる。

設計・監理 建築 ジャクエツ環境事業＋
アトリエ9建築研究所＋村松基安＋
村松デザイン事務所
構造 川上構造デザイン＋河合構造設計
設備 島津設計
施工 松井建設
敷地面積 3,040.27㎡
建築面積 1,193.78㎡
延床面積 1,647.51㎡
階数 地上2階
構造 鉄骨造 一部鉄筋コンクリート造
工期 2012年3月～2013年3月
撮影 新建築社写真部(特記を除く)
(データシート192頁)

子どもたちの心を育む美しい環境を

東村山むさしの認定こども園の建設地は東京の西、雑木林のひろがる狭山丘陵にさしかかる住宅地にある。自然環境と人間生活の調和を感じられる場所にある。東村山むさしの幼稚園が創設40年を迎えることを機に保育園を増設し、認定こども園として新たな環境の整備をすることになった。創設時に園庭に植えられ、この地で長く子どもたちの成長を見守ってきた木々は、いまや天空を覆うばかりの姿となり、子どもたちをその枝葉で優しく抱いているかの様である。ケヤキやクス、ナラ、モミジなどの木陰は、梢を吹抜ける風や煌めく木漏れ日などを通して自然の多様な事象を経験できる場となっている。本計画に当たり、保育園が子どもたちのためだけにあってはならず、家族や保育士も含めた大人にとって

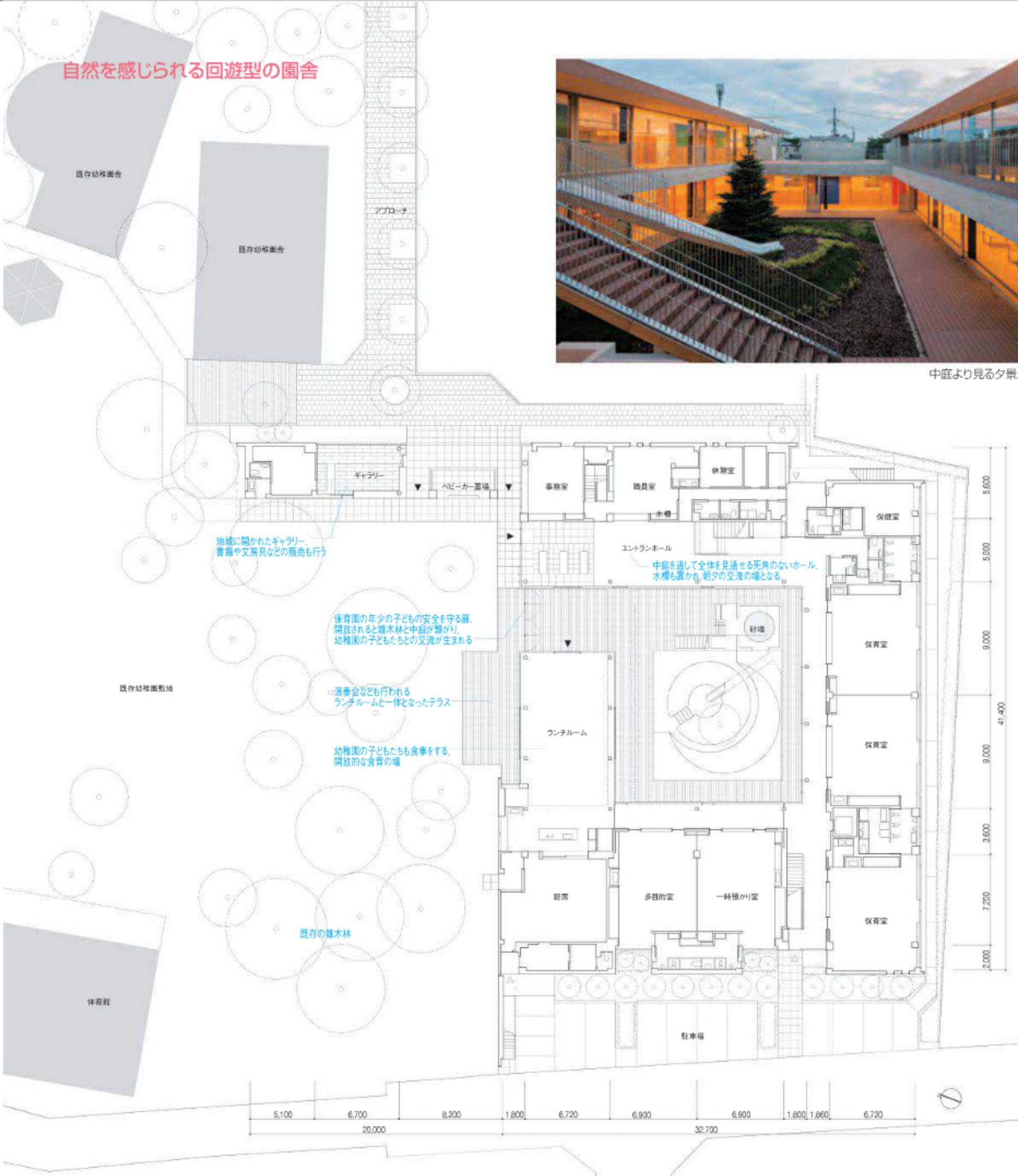
も快く、安心して子どもの生活を任せられる、三者の絆を紡ぐ美しい環境となることが望まれた。同時に変遷する社会の状況や制度が求める枠組みを超えて、子どもたちの敏感な感性と応答する多様な柔軟性を持つ、子どもたちの心の中の写真となる環境の創出が求められた。われわれ設計チームはその思いに応えるため、既存の園舎や木々に優しく包み込まれながら周辺の世界との繋がりを感じられる園庭の透明性のある空間性をさらに発展させ、早朝から夜までの活発な活動と静かな休息が繰り返される起伏ある日々の生活のリズムに柔軟に対応できるおほかで安全な生活の場を設えることに意を尽くした。園庭の東に新たに差し込んだ南北に伸びる壁部には、内外を結びつける開口を設け、ギャラリーと共に幼稚園と保育園それぞれが自立しながらひとつに統合

されるこども園の門としての役割を与えた。樹林の南側の保育園はモミの木と滑り台や薬山、砂場のある中庭を囲んだ回遊式の園舎であり、透明性が高められ快い開放感と暖かく包み込まれた安心感を併せ持つ環境である。中庭を取り巻くホール、回廊、保育室では穏やかな光と内外を吹き抜ける微風をいつも体感することができる。なかでも雑木林に沿って設けられたランチルームではケヤキの梢を感じながら楽しく食事や会合を共にすることができ、心が解放される豊かな体験が得られる。園内のどこにいても日々の天候や、太陽や雲の動き、鳥のさえずりなどともに四季折々の自然の醒し出す風景を感じ取ることができるこの場所が、子どもたちの心の中に豊かな感性を開花させ、人間の成長が促される場所であり続けることを願う。
(村松基安)



東側外観。南北に伸びた壁が外部の喧嘩や視線を遮る。右手にギャラリーと一体になったエントランスゲート。壁の上部に雑木林の木々の梢が見え、近付くと木々の足下空間へと視線が広がる。

自然を感じられる回遊型の園舎



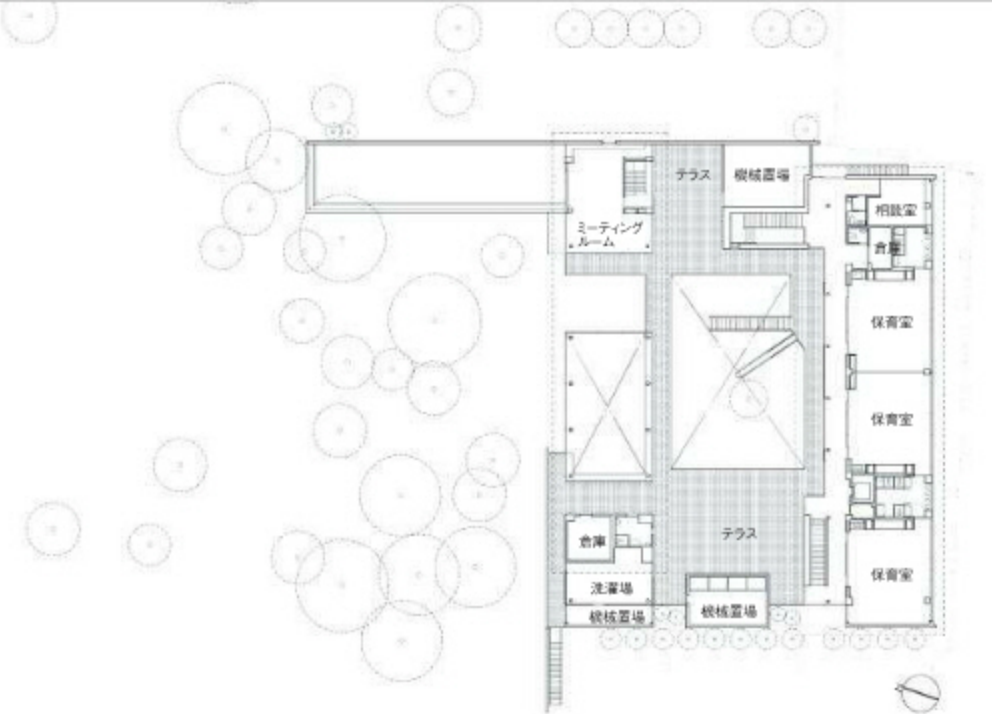
1階平面 縮尺 1/400



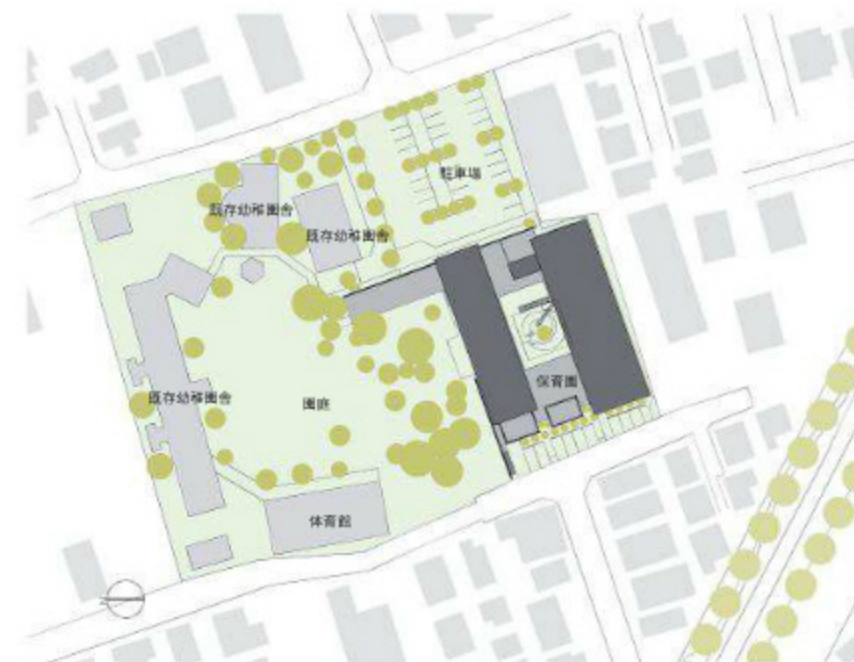
断面 縮尺 1/600



中庭より見る夕景



2階平面 縮尺 1/800



配置 縮尺 1/2,000



アプローチに面したギャラリー夜景。地域に開かれた場所をエントランス付近に設けることで交流を生み出すことを意図した。



左上：戸が引き込まれ、テラスと一体となった2階保育室。／左下：園庭と中庭に挟まれたランチルーム。天井高は6,120mm。／右：1階エントランスホール。階段下に子どもがもぐり込むスペースが設けられている。夜間の人数が少ない際にはここで保育がなされることも想定し、通路幅を約5,000mmと広めに確保した。

上下階共通の構造の中に、異なる機能をつくる

NNビル／君津の保育所

設計 kwas／渡邊健介建築設計事務所

施工 キミツ鐵構建設

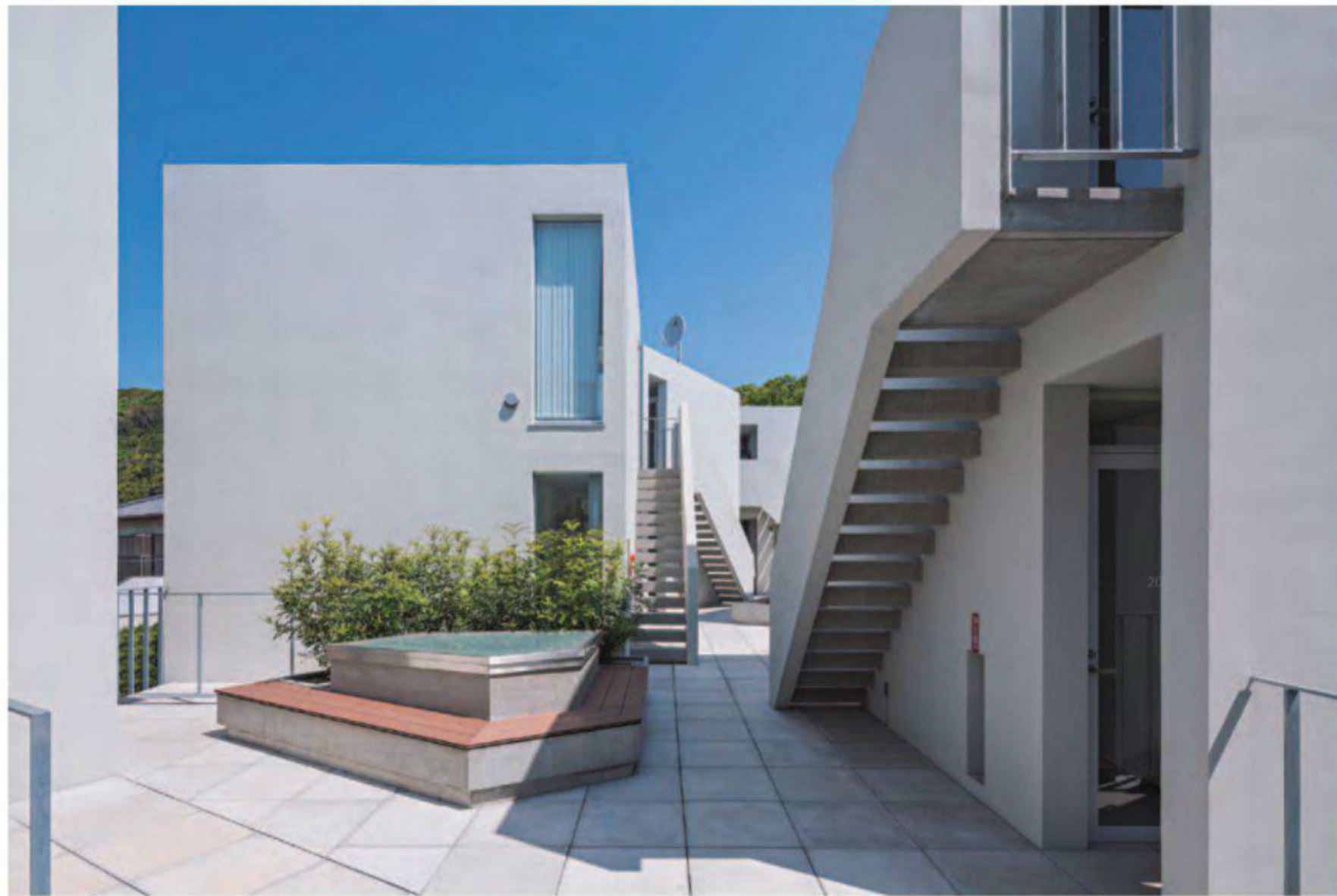
所在地 千葉県君津市

NN BUILDING

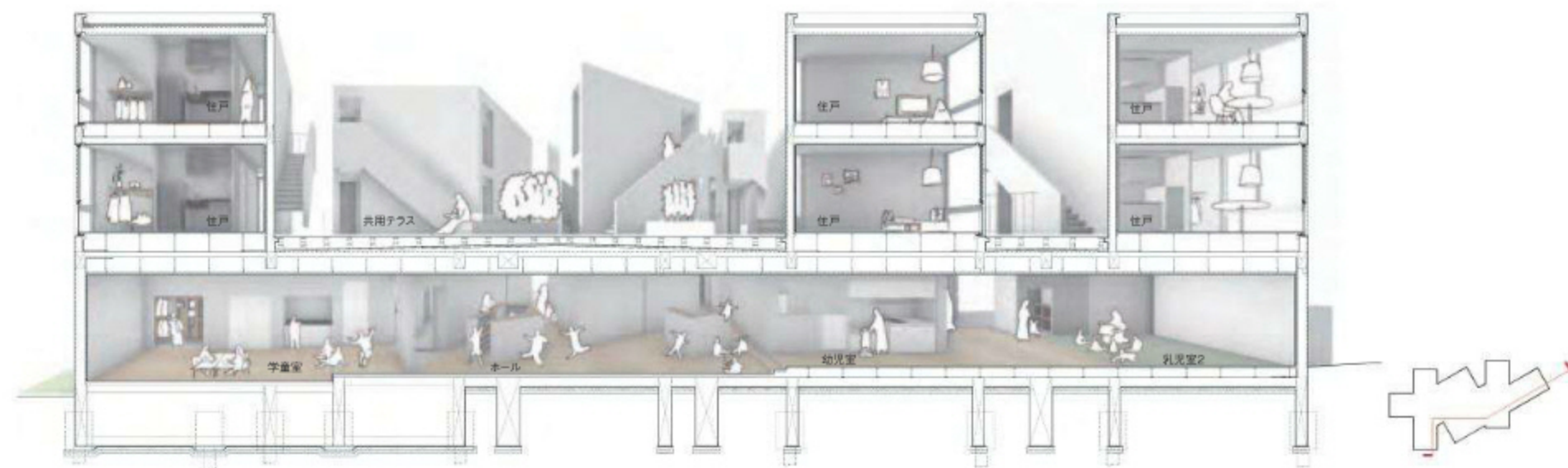
architects: KWAS / KENSUKE WATANABE ARCHITECTURE STUDIO



東側より見る。1階は保育所、2、3階は共同住宅と上下階で異なる機能が入る。5×5mのユニットを上階は分棟し、下階は大空間として一体的に繋げ、露出させている。共同住宅では、互いの住戸が見合わないよう各住戸のポリコームを付た。その角柱がそのまま保育所にも連続し、各部屋が見通せないながらも緩やかに繋がっている。



2階共用テラス。分棟の住戸ボリュームに囲まれた路地のような空間。ボリュームは異なる方向にふられ、住人のプライバシーを確保している。中央のベンチは、1階ホールの天窓になっている。



断面バース 縮尺1/200



1階学童室。テラス1と連続し、園児が内外を駆け回れる回遊性を持つ。天井高さ2,800mm。



1階乳幼児室2。開口はそれぞれ異なる方へ向き、さまざまな採光面を得つつ、プライバシーを確保できる居場所もつくり出している。天井高さ2,400mm。



1階幼児室。奥に乳幼児室2が見える。上階では分散していた5x5mのユニットが、下階では水回りを納めたコアを中心に回遊する空間となる。元もとの敷地の傾斜を活かし、階段によって緩やかに空間を区切る。

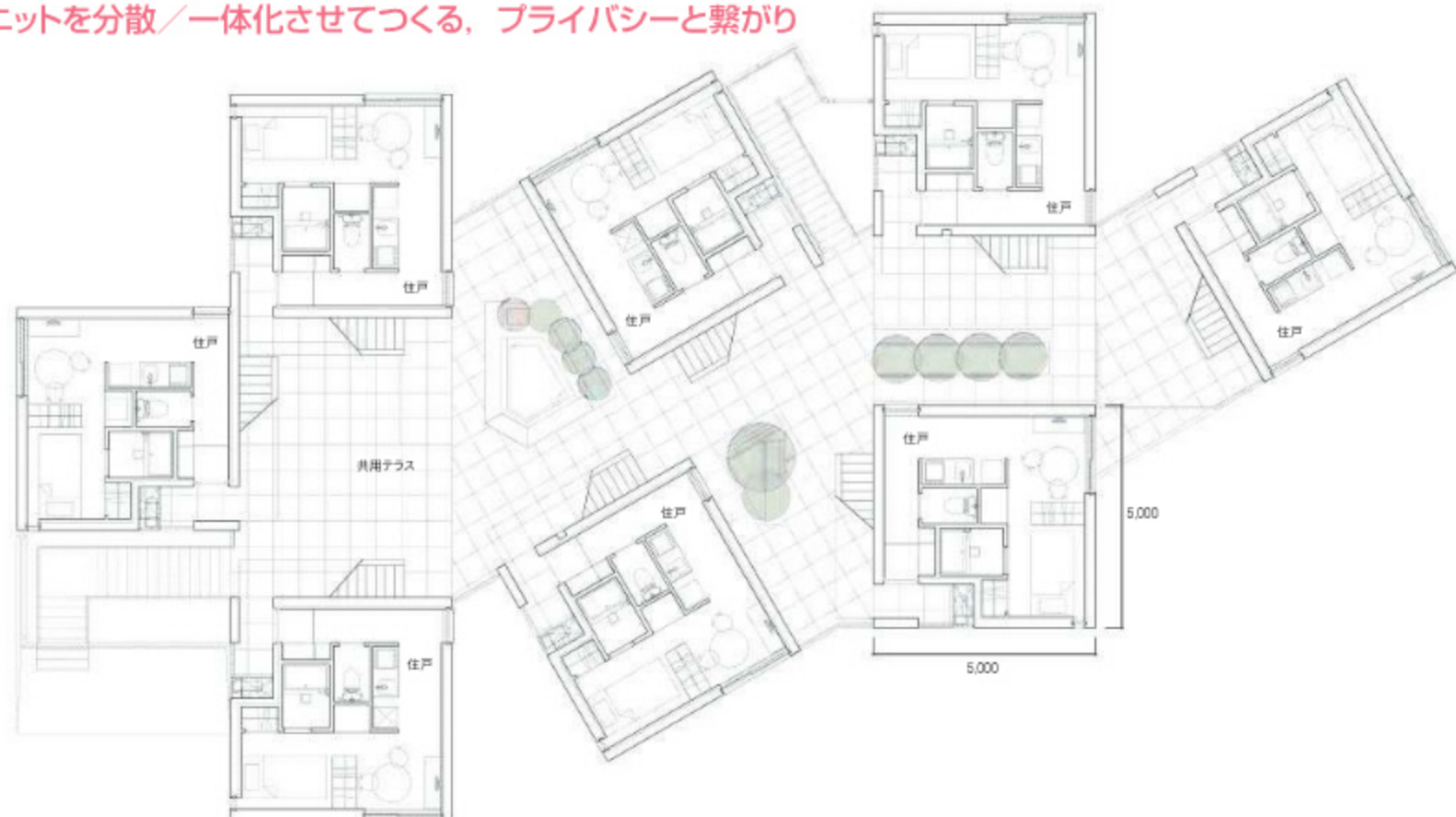


1階ホール。2階共用テラスと繋がる天窓がある。靴箱も今回制作したもの。保育所は病院付属のもので、職員の不規則なシフトに合わせ子どもを預けることが可能。



左：3階住戸の開口より共用テラスを見る。互いの視線が合わないよう、住戸ボリュームは角度を付けて配置されている。
右：住戸内部。水回りを納めたコアを中央に持ち、玄関から徐々にプライベートな空間になる。

ユニットを分散／一体化させてつくる、プライバシーと繋がり



2階平面



1階平面 縮尺1/200



南側外観。保育所を所有する病院のすぐ側にある。周辺は住宅が広がり、北側に林を持つ緑豊かな敷地。

設計 建築 kwas／渡邊健介建築設計事務所
構造 長坂設計工舎
設備 a'gua設備設計 ギャ設計パートナーズ
照明 シリウスライティングオフィス
施工 キミツ鐵構建設
敷地面積 1,392.65m²
建築面積 361.43m²
延床面積 703.19m²
階数 地上3階
構造 鉄筋コンクリート造
工期 2012年10月～2013年7月
撮影 新建築社写真部（特記を除く）
（データシート192頁）



配置 縮尺1/5,000

連続と離散の積層

病院に付属する保育所と、上部に共同住宅を計画した複合建築です。保育室の大きな空間と、住まいの小さな空間という、異なるスケールの空間が積層しています。

1階の保育所は0～7歳児までを預かり、病院職員でもある保護者の個別の勤務シフトに合わせ、受け入れる乳幼児の人数や年齢が変化します。保護者の出勤が早朝の場合、年長の幼児は保育所で一度引き取った後近隣の幼稚園へ通園し、再び戻って親のお迎えを待つことも可能です。時間、日ごとに異なる幼児の受け入れに合わせ柔軟に保育ができ、また異なる年齢の幼児同士の交流も図

るような、連続性を特徴とした空間が展開します。これとは対照的に、上階の共同住宅は互いの独立性を重視し、5x5m単位の住戸がさまざまな方向に離散配置されています。住戸内は水回りや収納をコアとして中央に集め、その周りは奥に行くに従ってプライベートな空間となります。各住戸へアクセスする共用テラスは、住戸のボリュームによって囲まれ、周囲から少し距離を置いたセミプライベートな空間です。上階のグリッドを引き継いだ保育室は、壁の配置、水回り、家具やテラスによっていくつもの回遊するアクティビティをつくり出しています。角度の

付いた壁の中を移動すると次から次へと空間が展開し、窓からは異なる方角の風景が切り取られます。敷地の緩やかな傾斜に合わせて床レベルが変化し、天井の高い手前の部屋では年長の子もたちが活発に動き回り、天井の低くなる奥の部屋では乳幼児たちがゆっくりと過ごすことができます。連続と離散という、相反する空間の要望を豊かな空間へと特徴付けられないか苦心しました。竣工後に訪れるたびに、目指していた活発な子どもたちのアクティビティと、2階の共用テラスに流れるゆっくりとした時間の対比が実現できたことをうれしく思います。

（渡邊健介）

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 相模原市南区北里1-15-1

主要用途 大学病院

建主 学校法人 北里研究所

設計

日建設計

総括／川島克也 藤記真

建築担当／塩田洋 小杉暢彦

高島貴一 飯島敦義 北川正仁

今井佑允 伊藤純一 山賀千恵子

構造担当／長瀬悟 染谷朝幸 山本恵一

瀧口真衣子 重松瑞樹

機械設備担当／山下開 菱田誠

塚見史郎 渡邊賢太郎 丹羽浩範

永瀬修 岡田尚子 片岡えり

電気設備担当／小倉良友 関根雅文

大高恵 本多敏 戸倉紀彦

ランドスケープ担当／根本哲夫

甲田和彦 佐藤勇 相澤恵美

監理担当／金泰彦 峯田昭雄 瀬戸達夫

入原宇一 工藤泰司 寺山秀忠

インテリア 日建スペースデザイン

担当／戸井賢一郎 水原宏 藤井崇司

大橋裕史 伊藤愛

土木 日建設計シビル

担当／藤原克光 吉川弘司

設計協力

建築 竹中工務店

担当／斎藤俊一郎 森元一 堀内隆

吉田泰洋

構造 竹中工務店

担当／若林博 山本章起一 菊岡隆二郎

青山将也

機械 東洋熱工業

担当／小野秀雄 佐藤出 伊藤正志

高崎勝敏 小塚誠司 町田年 斎川樹一

電気設備 きんでん 担当／田中和伸

BIM 3D Innovations

施工

建築 竹中工務店 担当／細田英一

機械 東洋熱工業 担当／会沢正寛

電気 きんでん 担当／伊藤昇

規模

敷地面積 199,807.96m²

建築面積 18,421.98m²

延床面積 102,402.91m² (病院本館)

125,016.42m² (病院本館＋1号館)

地下1階 9,615.78m²

1階 11,056.61m²／2階 10,427.47m²

7～13階 3,315.48m²

塔屋1階 484.29m²

建築率 33.85% (許容：60%)

容積率 144.74% (許容：200%)

階数 地下1階 地上14階 塔屋3階

寸法

最高高 74,030mm

軒高 62,030mm

階高 病室：3,900mm

天井高 病室：2,700mm

主なスパン 6,570mm×6,570mm

敷地条件

地域地区 準工業地域 準防火地域

道路幅員 東5.79m 西6.03m 南16.14m

北6.01m

駐車台数 約1,300台

構造

主体構造 鉄筋コンクリート造 免震構造

杭・基礎 既成コンクリート杭

設備

環境配慮技術

ゼロエナジー病室(エコシャフト自然換気

自然採光 井水熱＋太陽熱放射空調 太陽光発

電直流給電 高効率LED照明 太陽熱＋熱回

収HP給湯 空気汚れセンサー換気量制御

生体リズム快通制御) 共同湯クールヒー

トレンチ 手術室タスクランピエント空調

シースルーエレベータシャフト自然採光 厨

房換気天井システム＋スマートメーター換気

量制御 高効率熱源システム(空冷ヒート

ポンプチラー＋水蓄熱) LCCO₂管理BEMS

デジタルサイネージによる見える化

CASBEE Sランク,PAL値 280 (MJ/m²・年)

空調設備

空調方式 外調機＋水熱源ヒートポンプパッ

ーגיעアコン併用方式 外調機＋放射

空調方式 厨房天井換気システム

熱源 空気熱源ヒートポンプチラー 熱回収型

ヒートポンプチラー ガス焚真空気温

水機 水蓄熱槽 ガス焚真流蒸気ボイ

ラー 空気熱源ヒートポンプパッケー

גיעアコン

衛生設備

給水 上水 雑用水 冷却塔補給水の3系統

加圧給水方式

給湯 熱回収型ヒートポンプ深夜電力給湯

太陽熱給湯システム

排水 屋内排水 合流方式(特殊排水は除く)

電気設備

受電方式 3φ3W 6.6kV

(既設特高電気室より受電)

契約電力 約5,000kW (病院本館)

予備電源 ガスタービン発電機2,500kVA×3台

(既設2台含む)

防災設備

消火 スプリンクラー設備 フード消火設備

不活性ガス消火設備 泡消火設備

連結送水管

排煙 機械排煙 自然排煙

その他 自動火災報知設備 非常放送設備

非常照明・誘導灯設備 避難設備

昇降機 乗用エレベータ(外来用3台 病棟用4

台 スタッフ用4台) 寝台用(高層4台

低層1台) 人荷用(物品用2台 給食

用1台) 非常用(高層2台 人荷用兼用)

小荷物用(低層1台)

エスカレータ×6台

特殊設備

気送管設備(エス&エスエンジニアリング) 太

陽光発電設備

工程

設計期間 2009年5月～2011年9月

施工期間 2011年9月～2013年12月(病院本

館完成まで)

外部仕上げ

屋根 アスファルト防水押えコンクリート 塗

膜防水 一部屋上緑化

外壁 碍子ルーバー(ヤマキ電器 サムシング・

ファイン 不二サッシ 昭和リーフ)

磁器質タイル(ダイナマ) 複層塗材

コンクリート化粧打ち放し

開口部 アルミサッシ(三協立山 YKK AP

不二サッシ 昭和リーフ)

外構 タイル(アドヴァン) インターロッキ

ング アスファルト舗装

内部仕上げ

エントランスホール 外来廊下

床 ビニル床タイル(タジマ：レイフラットタ

イル木目調 t=4.0mm ノルディック：

レジスタードブランクス t=2.5mm)

壁 不燃化粧板 t=3.0mm (アイカ：セラー)

ビニルクロス(ルノン：クラフトライン)

天井 ビニルクロス(ルノン：フレッシュ)

ロックウール化粧吸音板

診察室

床 ビニル床シート t=4.0mm (タジマ：レイ

フラットタイル木目調)

壁 ビニルクロス(ルノン：クラフトライン)

天井 ビニルクロス(ルノン：フレッシュ)

一般病室

床 ビニル床シート(サンゲツ：グラニッ

t=2.0mm 東リ：ノンワックスリウム)

壁 ビニルクロス t=2.0mm (ルノン：クラ

フトライン)

天井 ビニルクロス(ルノン：フレッシュ)

病室廊下

床 ビニル床シート(サンゲツ：グラニッ

壁 ビニルクロス(ルノン：クラフトライン

リース)

天井 ビニルクロス(ルノン：フレッシュ)

特別病室

床 ビニル床タイル t=3.0mm (タジマ：ウッ

ドライン)

壁 ウォルナット縋り付け化粧板 t=6.0mm(AD

ワールド) 塩ビシート(ベルビアン)

天井 ビニルクロス(ルノン：フレッシュ)

川島克也(かわしま・かつや)

1957年京都府生まれ／

1981年京都大学工学研究

科建築学第二修了後、日建

設計／2005年設計部副代

表兼設計室長／現在、常務

執行役員設計部門副統括

藤記真(ふじき・まこと)

1957年富山県生まれ／

1980年大阪大学工学部建

築工学科卒業／1982年大

阪大学大学院修士課程修了

後、日建設計／現在、日建

設計設計部門副代表、APECアーキテクト、

医業経営コンサルタント

塩田洋(しおた・よう)

1967年愛知県生まれ／

1993年東京工業大学大学

院修士課程修了後、日建

設計／現在、同社設計部

門設計主管

森元一(もり・げんいち)

1960年福岡県生まれ／

1984年福岡大学工学部建

築学科卒業後、竹中工務店

／2012年芝浦工業大学工

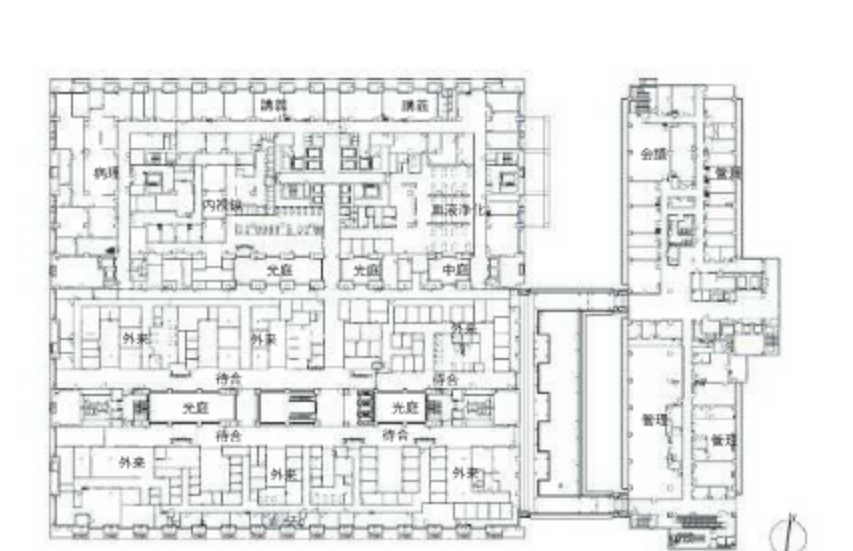
学部建築工学科非常勤講師

／現在、竹中工務店東京本店設計部プロダ

クト設計部長



4階平面



3階平面 縮尺1/2,000

所在地 埼玉県北足立郡伊奈町大字小室780

主要用途 病院

建主 埼玉県病院局

設計

基本設計・監理 山下設計

統括／松丸典義

建築担当／佐藤利也 高橋彰仁

構造担当／早瀬元明

機械設備担当／大山有紀子

電気設備担当／齊藤忠夫

植算担当／植村潤子

監理担当／日浦博史 清水正 金和彦

福島清一

実施設計 戸田建設一級建築士事務所

統括／竹村和晃

設計PM／有賀雅尚

建築担当／有森憲治 安達学

石山康彦 小倉哲

構造担当／中原理揮 石坂隆幸

多田公平 高山真一* (*元社員)

設備担当／早川和男 高橋寿

高橋義行 小林秀樹 小川勉

太田裕司 竹原暢洋

ランドスケープデザイン協力／アース

タイプ 団家栄喜

施工

戸田建設関東支店(建物工事 建物周辺外構

工事)

統括／清水義一* (*元社員)

建築担当／大江明弘 権田良信 中西務

設備担当／木村真弘 沼尾剛志

生産設計／山本和彦 山脇裕一郎

空調 ダイナン

衛生 西原衛生工業所

電気 雄電社

規模

敷地面積 80,581.17m²(建築基準法上の敷

地面積71,338.33m²)

建築面積 13,888.11m²

延床面積 61,938.78m²(容積対象床面積

61,734.78m²)

地下1階 8,323.46m²

1階 13,443.81m²／2階 10,035.51m²

3階 7,742.00m²／4階 3,939.93m²

5～8階 2,971.91m²／9階 2,974.40m²

10階 2,644.34m²／11階 811.06m²

塔屋階 136.63m²

建築率 19.47% (許容：60%)

容積率 86.54% (許容：100%)

階数 地下1階 地上11階 塔屋1階

寸法

最高高 48,670mm

軒高 48,070mm

階高 地下1階 5,200mm

1階 4,800mm／2階 4,500mm

3階 4,800mm／4～11階 4,000mm

天井高 1階外来診察待合 3,000mm

各階病室 2,700mm

主なスパン 6,400×9,600mm

敷地条件

地域地区 市街化調整区域 防火指定なし

道路幅員 東12.0m 西6.0m 南12.0m

北13.0m

駐車台数 638台

構造

主体構造 鉄筋コンクリート造(免震構造：TO-HIS工法)

杭・基礎 杭基礎(既成コンクリート杭)

設備

環境配慮技術

スマートメディカルパーク(周辺県施設とのエ

ネルギーネットワーク) BEMS

エネルギーの見える化 冷水蓄熱槽(温度成

層方式) コジェネレーションシステム

ジェネリク(排熱投入形冷温水機) 井水利

用 LED照明 シースルー太陽光発電設備

屋上緑化 Low-eガラス 発熱ガラス

CASBEE Sランク(BEE=3.4)

空調設備

空調方式 外調機＋ファンコイル(4管式、2

管式) 一部空冷ヒートポンプ方式

熱源 コジェネレーションシステム ジェネリ

ンク(排熱投入形冷温水機)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 東京都文京区本郷2-1-1

主要用途 病院

建主 学校法人 順天堂

設計

清水建設

建築担当／富田恒雄 杉山靖尚
池谷雅秀 若園敦 大石茂 上田嘉之
早田倫人
構造担当／西谷隆之 小倉賢人
菅野英幸 巽英明
設備担当／辻裕次 町田晃一
金川満裕 中野信哉

技術開発・技術協力、LEED対応 他

清水建設技術研究所 清水建設環境・
技術ソリューション本部 清水建設プ
ロポーザル本部

プロジェクト・アーキテクト・基本設計・工
事監理 日本設計

施工

建築 清水建設

担当／鈴木和夫 瀧田博 早坂公志
羽根剛愼一 浜木利成 土橋正樹
西山陽成 眞下健一 阿部晋也
松田恵吾 倉知正和

空調 新菱冷熱工業 担当／林真広

衛生 朝日工業社 担当／茂田邦彰

電気 関電工 担当／中満努

規模

敷地面積 5,156.48m²
建築面積 2,864.06m² (Ⅰ期・Ⅱ期合計)
延床面積 45,217.13m² (容積対象面積
37,739.59m² Ⅰ期・Ⅱ期合計)
地下3階 3,753.35m² / 地下2階3,683.71
m² / 地下1階2,933.88m² /
1階2,314.44m² / 2階2,597.56m² /
3～6階2,529.85m² /
7階2,317.86m² /
8～18階1,299.92m² /
19～20階1,345.03m² /
21階507.75m²

建蔽率 55.55% (許容：100.00%)
容積率 731.89% (許容：748.07% 総合
設計制度による)
階数 地下3階 地上21階
寸法
最高高 99,720mm
軒高 98,720mm
階高 地下3階6,300mm 地下2階
7,000mm
地下1階4,600mm 1階5,200mm
2～4階4,950mm 5階5,150mm
6～8階4,950mm 9階5,850mm
10～20階3,900mm 21階6,350mm
(すべてⅠ期・Ⅱ期合計)
天井高 外来待合：2,800mm 診察室：
2,600mm 病室：2,600mm
主なスパン 6,100x24,500mm

敷地条件

地域地区 商業地域 第一種・第二種文教地
区
道路幅員 東21.86m 西5.80m
南21.78m 北10.81m
駐車場数 134台(Ⅰ期・Ⅱ期合計)

構造

主体構造 ハイブリッド構造(鉄筋コンクリ
ートと鉄骨のハイブリッド構造であ
る、シミズPS Hy-ECOS シミズHy-
ECOS シミズNewRCSS) 免震構
造
杭・基礎 バイルドラフト(場所打ち鋼管コ
ンクリート杭+直接基礎)

設備

環境配慮技術

CASBEE Sランク LEED Gold (目標) :
設計審査済 PAL : 232.1MJ/年m² ERR :
44.43% ガスコージェネレーション 水蓄
熱 プリークーリング 放射冷暖房 臭気セ
ンサーによる換気制御 大温度差送水 冷
水・温水・冷却水変流量制御 井水利用 太
陽光発電パネル LEDパーソナル照明 他

空調設備

熱源方式 ガス・電気複合熱源方式(ターボ
冷凍機：蓄熱 冷温水発生機：コジェ
ネ排熱利用 プリークーリング)
空調方式 外調機+ファンコイル主体
一般病棟は放射冷暖房方式、臭気セン
サーによる換気制御 放射線エリア、
防災センターなどは空冷PAC方式

衛生設備

給水設備 上水 雑用水 冷却塔補給水の3
系統 受水槽+高架水槽方式(高層・

低層) 加圧給水方式(地下)
雑用水水源は井水・雨水再利用水、3
日間の備蓄対応
給湯設備 中央・局併用方式(コジェネ排
熱利用)
排水設備 汚水雑排水・雨水排水 特殊排水
(厨房除外 感染 透析・検査・ボイ
ラ R)

電気設備

受電方式 22kV3回線スポットネットワー
ク受電方式
変圧器容量 2,500kVAx3台
予備電源 非常用発電機：ガスタービン
2,000kVAx1台
コージェネレーション設備 ガスエンジン
740kWx2台

無停電電源 UPS300kVAx1台

防火設備

防火設備 火災フェイズ管理型防災システム
(大警認定)
消火設備 スプリンクラー設備 連結送水管
泡消火設備 不活性ガス消火設備 他
排煙設備 機械排煙主体(病棟は陽陰圧切替、
加圧防排煙システム)

昇降機

乗用エレベータ(15人乗)高層用x3台
乗用エレベータ(15人乗)低層用x2台
寝台用エレベータ(17人乗)救急搬送
用x1台
寝台用エレベータ(17人乗)集中治療
室・OP専用x1台(Ⅱ期工事)
人荷用エレベータ(17人乗)物品用x1
台
人荷用エレベータ(20人乗)給食専用x1
台
非常用エレベータ(17人乗)東側x1台
(乗用兼用)
非常用エレベータ(33人乗)西側x1台
(寝台エレベータ兼用)
寝台用エレベータ(15人乗)x3台
乗用エレベータ(9人乗)供給用x1台
乗用エレベータ(6人乗)回収用x1台
エスカレータx2台(Ⅱ期工事)

その他

電話・情報配線設備 TV共聴設備
非常放送設備 ナースコール設備 防
犯(IV 電気錠制御)設備
工程
設計期間 2009年8月～2011年10月(実施
設計期間)
施工期間 2011年11月～2016年4月(Ⅱ期
完了時)

外部仕上げ

屋根 高耐久合成高分子系ルーフィングシー
ト防水(外断熱)
外壁 PC板下地 フッ素樹脂塗装仕上げ
開口部 ガスケットサッシ・アルミサッシ
ガラス 北側：ペアガラス 東西南側：
高遮熱ペアガラス

内部仕上げ

標準病室

床 リノリウム(FORBO：マーモリウム)
幅木：床材立ち上げ
壁 無機質壁紙
天井 無機質壁紙 放射パネル
主な使用機器 ユニットシャワートイレ
(TOTO：オクタゴン)

手術室

床 導電性塩化ビニルタイル(FORBO：カ
ラレックス)

壁・天井 化粧珪酸カルシウム板

特別病室

床 高密度バイルタイルカーペット
(FORBO：フローテックス)
腰壁：不燃化粧壁紙

壁 ガラスクロスの上合成樹脂エマルジョン
塗装
天井 合成樹脂エマルジョン塗装 放射パネ
ル

リハビリテーション室

床 リノリウム(FORBO)
壁 合成樹脂エマルジョン塗装
天井 岩綿吸音板

富田恒雄(とみた・つねお)

1955年大阪府生まれ／
1978年神戸大学工学部建
築学科卒業後、清水建設
計本部／現在、清水建設
西事業本部建築設計3部上
席設計長

杉山靖尚(すぎやま・やすなお)

1961年名古屋市生まれ／
1987年名古屋大学大学院
工学研究科建築学専攻卒業
後、清水建設設計本部／現
在、清水建設建築事業本部
設計本部医療福祉施設設計部長兼順天堂プロ
ジェクト設計室室長

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 岐阜県美濃市吉川町1765-4

主要用途 保育所

建主 社会福祉法人 愛育会

設計・監理

建築 象設計集団

担当／関部代 山内玲子

構造 茂島建築構造設計事務所

担当／茂島規行

設備 共信設備設計横須賀事務所

担当／海老道緒

施工

澤崎建設 担当／前畑孝徳

規模

敷地面積 536.97m²
建築面積 262.88m² (支援棟243.97m² 機
械室18.91m²)
延床面積 473.00m² (支援棟443.83m² 機
械室29.16m²)

地下1階 233.61m²

1階 210.22m²

建蔽率 48.96% (許容：60%)

容積率 88.09% (許容：200%)

階数 地下1階 地上1階

寸法

最高高 7,784mm
軒高 6,776mm
階高 広間：3,000mm
天井 広間：2,500mm 遊戯室：平均
4,396mm
主なスパン 3,800x4,000mm

敷地条件

地域地区 第一種住居地域
道路幅員 西5.6m
駐車場数 0台(敷地外駐車場あり)

構造

主体構造 木造

杭・基礎 ベタ基礎

設備

空調設備

空調方式 空冷ヒートポンプ方式 床下暖房

熱源 ガス ベレット

衛生設備

給水 直結給水方式

給湯 ガス給湯方式 ベレットボイラー

排水 敷地内分流方式

電気設備

受電方式 低圧受電方式

契約電力 電灯6kVA 動力30kVA

防火設備

消火 消火器

排煙 自然排煙

その他 自動火災報知器 放送設備 誘導灯
非常照明

工程

設計期間 2011年8月～2012年3月

施工期間 2012年4月～11月

工事費

建築 87,354,548円(解体含)
機械 6,879,180円(空調・衛生・換気)
電気 3,699,272円
総工費 97,933,000円

外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 立てハゼ
葺き
外壁 スギ板 t=15mm 縦目板張り

w=185mm 特一等 塗装：プラネ
ットカラーウッドコート
開口部 ヒノキ 上小節 塗装：リボスカルデ
ット
外構 コンクリート洗い出し舗装 t=120mm
小石模様埋込み

内部仕上げ

広間

床 スギ板 t=35mm (一部広葉樹板 t=30mm)
リボス アルドボス塗装
壁 生石灰クリーム(タナクリーム)
天井 ロックウール吸音板(ダイケン ダイロ
ートン ニューギンガ)

遊戯室

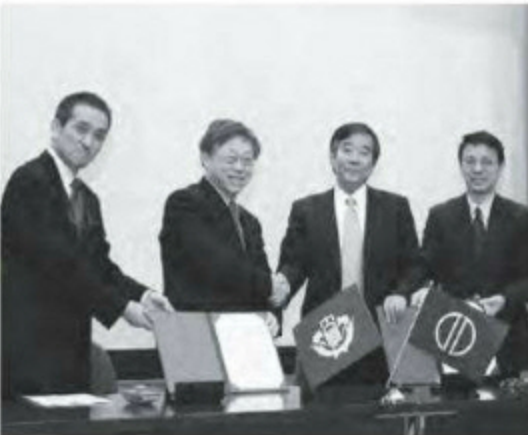
床 ヒノキ t=18mm プラネットカラー ハ
ードクリアオイル塗装
壁 生石灰クリーム(タナクリーム)
天井 木毛セメント板(ぎふ証明材) 横流塗装

関部代(せき・いくよ)

1960年東京都生まれ／
1984年早稲田大学理工学
部建築学科卒業／1984年
象設計集団入室／2002年
代表取締役後に就任／2011
年～岐阜県立森林文化アカデミー 非常勤講師



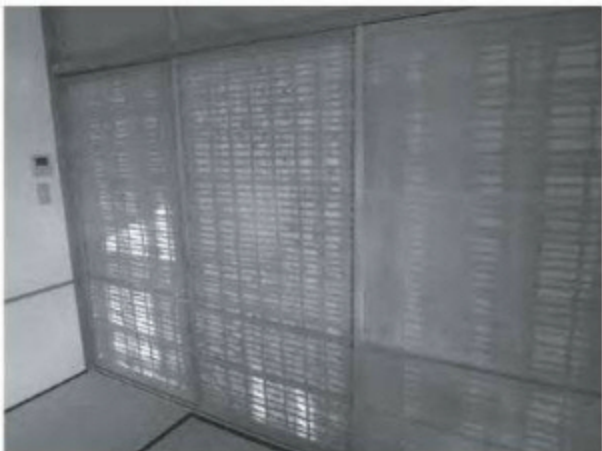
上：4床室。部屋全体の照明はなく、各ベッドにLED照明を設け、窓のない廊下側のブースには壁面間接照明も設置。中央は今回制作の間仕切り家具。
下：5階手術室。窓を設置し、手術中에서도外部の様子を感じることができるよう配慮した。ダブルサッシ+ブラインドによって機密性・遮光性を上げている。



左：共同研究成果を発表する「第4回次世代環境医療シンポジウム」の様子。
右：順天堂大学、早稲田大学の共同研究に際し、協定書を交わす両大学。左から西谷章氏、白井克彦氏、小川秀典氏、富野康己氏。



入口デッキのプール。地域の人が足湯としても利用する。



地域の人がたがが制作した一閑張り襖パネル。



1階お昼寝コーナー。床には和紙を張り糊染を塗った。



和室2よりお母さんの木を見る。

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 宮城県名取市美田園6-16-10

主要用途 幼稚園

建主 学校法人わかば学園（理事長：佐々木加知枝）

企画マネージメント 佐々木洋 佐竹悦子
菊池富紀子（学校法人わかば学園）

設計

建築 統括 石原健也／千葉工業大学
基本設計 千葉工業大学大学院石原健也研究室
担当／國島真吾 渡辺鋼 大野宏己
実施設計 石森建築設計事務所
担当／石森史寛 江川拓未

構造 基本設計 佐藤淳構造設計事務所
担当／佐藤淳
実施設計・監理 RGB STRUCTURE
担当／高田雅之

設備・電気 テーテンス事務所

設備担当／新井英昭
電気担当／勅使川原良一

照明 岡安泉照明設計事務所
担当／岡安泉 杉尾篤

監理 石原健也／千葉工業大学（監修）
石森建築設計事務所
担当／石森史寛 江川拓未

保環境アドバイザー
佐藤将之／早稲田大学 稲葉直樹
（早稲田大学佐藤将之研究室大学院生）

環境コンセプト Arup

担当／佐々木仁 曾健太郎
プロジェクト支援 まきビス／アーキテクチャー・フォー・ヒューマニティ

施工

建築 プライム下館工務店
担当／関口俊光 野村敏治 平塚修
田中雅彦 渡邉康太 葛西直人 川崎隆
大工／旭岡富士義 旭岡努 山崎優太
玉岡雄作 江刈正二 関国雄
中野幸一 高田康貴 川崎富蔵
木材加工担当／小向隆男
施工図担当／西塚英夫
積算担当／下館齊央

テント工事 太陽工業
担当／宮下正毅 西寿隆 長尾聡
竹内大介
銅製建具／三協アルミ
担当／田洗圭二郎 中村雅志 谷豊
阿部洋敏

施工協力 千葉工業大学石原健也研究室
担当／朝倉萌 鈴木恵三 大川華奈
小塩健太 小峰彰陽 櫻井彩 富田達哉 永盛岳 谷野仁美 山田祐樹
早稲田大学佐藤将之研究室
担当／佐藤将之 稲葉直樹
石森建築設計事務所
担当／石森史寛 江川拓未
東北大学大学院工学研究科五十嵐研究室
担当／棚座基道 根本岡 浅沼拓也
佐々木暢 白鳥加奈 横田広果

空調 昭和電気

衛生 エスティアイ

電気 昭和電気

規模
敷地面積 1,828.29m²
建築面積 581.68m²
延床面積 437.24m²
1階 437.24m²
建蔽率 31.82％（許容：60％）
容積率 23.92％（許容：200％）

階数 地上1階
寸法
最高高 7,420mm
軒高 2,960mm
天井高 保育室：4.38mm（平均）
職員室棟・倉庫棟：2,200mm
多目的室：3,510mm（平均）
主なスパン 5,460×5,460mm
敷地条件
地域地区 第1種住居地域 法22条地域
地区計画区域（美田園地区整備計画区域）

道路幅員 東13.5m 北18.0m
駐車台数 3台
構造
主体構造 木造 一部鉄骨造
杭・基礎 ベタ基礎

設備
空調設備
空調方式 床吹出し式冷暖房
熱源 ガス

衛生設備
給水 直結直圧方式
給湯 ガス給湯方式
排水 合流方式

電気設備
受電方式 低圧受電方式
設備容量 30kVA
契約電力 24kVA
防災設備
消火 消火器
排煙 自然排煙

その他 自動火災報知設備 非常用放送設備
誘導灯

工程
設計期間 基本設計：2012年1月～2013年

3月
実施設計：2013年5月～8月
施工期間 2013年11月～2014年3月

外部仕上げ
屋根 酸化チタン光触媒膜材CMX220（太陽工業 施工協力）

外壁 本実パネル ベベルサイディング（チャネルオリジナル）

開口部 アルミサッシ（三協アルミ 製品寄贈）

外構 良質土入れ替え
車路：アスファルト舗装

内部仕上げ
保育室
床 バインフローリング（チャネルオリジナル）

壁 ラウンベニア+ウッドワックス（オスモ&エーデル）

天井 酸化チタン光触媒膜材CMX220（太陽工業）

職員室・多目的室

床 バインフローリング（チャネルオリジナル）

壁 ラウンベニア+ウッドワックス（オスモ&エーデル）

トイレ・教材室

床 長尺塩化ビニル床シート

壁・天井 ビニルクロス

家具 IKEA（製品提供）

主な使用機器
衛生機器：TOTO
空調設備：ダイキン
換気設備：三菱電機

利用案内
開園時間 8:00～18:00
定員 105名

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 宮城県気仙沼市笹か津3-1

主要用途 学童保育施設

建主 公益財団法人 日本ユニセフ協会

設計

建築・監理 薩田建築スタジオ
担当／薩田英男 平田麻里子

構造 山辺構造設計事務所
担当／山辺豊彦 鈴木竜子

基本設計協力 千田秀作建築設計事務所
担当／千田秀作
オールドマン 担当／森谷茂樹
松下朋子（元・日本ユニセフ協会）

施工
建築 みちのく建設工業
担当／石黒忠之 熊谷文雄
空調・衛生 熊谷ポンプ商会
電気 熊谷電気

規模
敷地面積 719.28m²
建築面積 182.14m²
延床面積 142.39m²
1階 142.39m²

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 宮城県亘理郡亘理町吉田字宮前40

主要用途 保育所

建主 公益財団法人 日本ユニセフ協会

設計

建築・監理 薩田建築スタジオ
担当／薩田英男 平田麻里子

構造 松本構造設計室
担当／松本年史

設備 設備計画研究所
担当／志賀常雄 山本龍英

左官 珠玉屋 担当／渡辺真志志 渡辺真
基本計画アドバイス 佐藤将之（早稲田大学）

施工
建築 小野良組 仙台支店
担当／蔵利司 佐藤智也
空調・衛生 アトマックス
電気 三共電気

規模
敷地面積 1,807.01m²
建築面積 528.74m²
延床面積 495.79m²
1階 495.79m²
建蔽率 29.26％（許容：70％）
容積率 27.44％（許容：200％）
階数 地上1階
寸法
最高高 6,960mm
軒高 2,660mm
天井高 0, 1歳児室：2,260～3,655mm
2歳児室：2,310～4,565mm
3～5歳児室：2,605～3,795mm
主なスパン 2,272.5mm×2,272.5mm,
2,272.5mm×2,424mm
敷地条件
地域地区 法第22条指定区域
道路幅員 東9.50m
構造
主体構造 木造
杭・基礎 ベタ基礎

設備
空調設備
空調方式 保育室：温水式床暖房＋空冷ヒートポンプパッケージ方式
廊下：温水ファンコンベクター（床下吹出）
ダイニングホール：空冷ヒートポンプパッケージ方式（床下吹出）
熱源 灯油
衛生設備
給水 直結給水方式
給湯 個別給湯方式（LPG）
排水 汚水・雨水分流方式
電気設備
受電方式 低圧受電方式
設備容量 57kVA
防災設備
消火 消火器設備
排煙 自然排煙
その他 非常用照明設備 自動火災報知設備 誘導灯

建蔽率 25.32％（許容：60％）
容積率 19.80％（許容：200％）
階数 平屋建て
寸法
最高高 5,480mm
軒高 4,740mm
天井高 学習室：2,214～4,130mm
主なスパン 1,820mm×6,520mm
敷地条件
地域地区 第1種住居地域 法第22条指定区域

道路幅員 南5.5m
構造
主体構造 木造
杭・基礎 ベタ基礎
設備
空調設備
空調方式 個別方式（石油ファンヒーター）
熱源 灯油
衛生設備
給水 直結給水方式
給湯 個別給湯方式（灯油）
排水 汚水・雨水分流方式

電気設備
受電方式 低圧受電方式

空調設備
空調方式 保育室：温水式床暖房＋空冷ヒートポンプパッケージ方式
廊下：温水ファンコンベクター（床下吹出）
ダイニングホール：空冷ヒートポンプパッケージ方式（床下吹出）

熱源 灯油
衛生設備
給水 直結給水方式
給湯 個別給湯方式（LPG）
排水 汚水・雨水分流方式
電気設備
受電方式 低圧受電方式
設備容量 57kVA
防災設備
消火 消火器設備
排煙 自然排煙
その他 非常用照明設備 自動火災報知設備 誘導灯

工程
設計期間 2011年9月～2012年3月
施工期間 2012年4月～12月

外部仕上げ
屋根 ガルバリウム鋼板 立てハゼ葺き
外壁 マツ板（被災マツ利用）t=30mm
w=90～210mm 引掛け金物 乱尺貼り（守屋木材）

開口部 アルミサッシ（立山三協アルミ）木製建具

外構 エントランス舗装 コンクリート打放しのうえビション仕上げ

内部仕上げ
保育室
床 スギ無垢フローリングt=15mm w=120mm（ワフベ）天然オイル拭き

壁 PB t=12.5mmの上石灰薄塗り仕上げ 一部掲示用クロス張り（サンゲツ サンフォーム・ドット）

天井 PB t=12.5mm AEP塗装

ホール・廊下・南園下・事務室
床 スギ無垢フローリング t=15mm
w=120mm（ワフベ）天然オイル拭き

設備容量 12kVA
防災設備
消火 消火器設備
排煙 自然排煙
その他 非常用照明設備 誘導標識

工程
設計期間 2011年5月～10月
施工期間 2011年12月～2012年4月

外部仕上げ
屋根 ガルバリウム鋼板 瓦葺葺き
外壁 マツ板（被災マツ利用）t=30mm
w=90～210mm 乱尺張り（守屋木材）
開口部 アルミサッシ（トステム デュオPG）
外構 砕石舗装

内部仕上げ
学習室・相談員室
床 コルクタイル（千代田商会ロビンソンコルク）

壁 PB t=12.5mm AEP塗装

天井 木すり天井 地スギ18×40mm 目透し
w=5mm

給湯室・洗濯室・トイレ

床 ビニルタイル t=2mm（東リ：MSプレーン）

壁 PB t=12.5mm AEP塗装

壁 PB t=12.5mmの上石灰薄塗り仕上げ
天井 PB t=12.5mm AEP塗装
トイレ
床 無釉一類磁器質タイル50mm角貼り（名古屋モザイク：ホルトカラー）
壁 珪酸カルシウム板 t=8mmの上、珪藻土塗り 腰壁：無釉一類磁器質タイル50mm角貼り（名古屋モザイク：ホルトカラー）
天井 PB t=12.5mmの上、AEP塗装
厨房
床 ノンスリップ塗布防水
壁 強化PB t=12.5mm＋珪酸カルシウム板 t=6mm AEP塗装 一部ステンレス張り

利用案内
想定児童数 0, 1歳児 11名
2歳児12名
3～5歳児 各18名
計77名

天井 地スグリーバー 30×60mm @50mm
主な使用機器
衛生機器 TOTO
照明器具 パナソニック電工

利用案内
想定児童数 40名

藤田英男（さつた・ひでお）
1955年北海道生まれ／
1978年東京理科大学工学
部建築学科卒業／1981～
87年AUR建築都市研究コ
ンサルタント／1987～
89年ヴェネツィア建築大学（イタリア政府給
費留学生）／1990年薩田建築スタジオ設立
／現在、東京理科大学非常勤講師

石原健也（いしはら・けんや）
1959年山梨県生まれ／1981
年九州芸術工科大学 環境設
計学科卒業／1983年同大学
大学院修士課程修了／1983
～87年 仙田滿＋環境デザ
イン研究所勤務／1989年デネフェス計画研究
所設立、代表取締役就任／2001年千葉工業大
学工学部建築学科助教授就任／現在、千葉工
業大学工学部建築都市環境学科教授

石森史寛（いしもり・ふみひろ）
1978年宮城県生まれ／
2006年東北大学大学院修
士課程修了／2006～10年
ノルムナルオフィス／2010
年石森建築設計事務所設立
／2011年～東北学院大学非常勤講師／2014
年～東北工業大学非常勤講師

天井 珪酸カルシウム板 t=6mm AEP塗装
主な使用機器
厨房機器 タニコー
衛生機器 TOTO
照明器具 遠藤照明 パナソニック電工

利用案内
想定児童数 0, 1歳児 11名
2歳児12名
3～5歳児 各18名
計77名

藤田英男（さつた・ひでお）
●プロフィールは上。



3歳児保育室。

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 東京都中央区京橋2-17-7

主要用途 保育所型認定こども園

建主 中央区

設計・監理

清水建設

建築担当／藤田聡 加地則之
岡嶋亜都夫 若杉晋吾 佐野穂高
構造担当／広瀬景一 櫻本秀文
瀬古裕子
設備担当／本間康雄
電気担当／井村隆 齊田光一

インテリア フィールドフォー・デザインオ
フィス 担当／志村美治 伊藤公美
照明 LightingM 担当／森秀人 加賀美鋭
グラフィック CHEAP POP

担当／太公良
テキスタイル KATSUKI CONNECTION
担当／香月裕子

アートペイント A&M 担当／川原さやか

施工

清水建設

建築担当／北里浩一 平沢卓
柿沼丈夫 青木茂伸 平井善成
落合勇志 下村舞＊（＊元社員）
増尾隆一（増尾建築工房）
設備担当／沼田修一 齊藤寛

空調 九電工 担当／植松史博
衛生 高工工業 担当／喜多裕記
電気 関電工 担当／金井伸仁

規模

敷地面積 941.93m²
建築面積 790.54m²
延床面積 1,695.00m²
地下1階 166.09m²／1階 151.01m²／
2階 67.85m²／3階 549.17m²／
4階 563.27m²／5階 197.61m²
建蔽率 83.93％（許容：100％）
容積率 179.95％（許容：600％）
階数 地下1階 地上5階

寸法

最高高 23,820mm
軒高 22,970mm
階高 1階：2,850mm／2階：6,450mm／
3階：4,150mm／4・5階：4,500mm
天井高 子育て支援室・保育室：2,700mm
主なスパン 7,000×7,500mm

敷地条件
地域地区 商業地域 防火地域
道路幅員 西11.00m
駐車台数 44台
構造
主体構造 鉄筋コンクリート造 鉄骨造
杭・基礎 場所打ちコンクリート杭

設備
環境配慮技術
自然採光 自然通風 LED照明 雨水利用
雨水流出抑制
空調設備
空調方式 外調機による新鮮外気供給 マル
チバッケージエアコン方式＋温水式床
暖房方式
保育室：照明一体型膜吹き出し空調

熱源 空冷ヒートポンプ chilled
給水 上水：増圧直結方式
雑用水：受水槽＋加圧給水方式
給湯 中央方式（ヒートポンプ給湯器） 一
部局所方式
排水 汚水・雑排水合流 雨水分流方式

電気設備
受電方式 高圧受電・屋内キュービクル方式
設備容量 1φ100kVA 3φ300kVA
自家発電機 130kVA（低騒音型・燃料24時
間分）
契約電力 245kW

防災設備
消火 屋内消火栓設備 新ガス消火設備（機
械式駐車場）
排煙 自然排煙
その他 災害時雨水槽を汚水槽に転用 雑用
水（備蓄 自家発電設備 地域向け防災
備蓄倉庫 自動火災報知設備 非常照
明設備 誘導灯 非常放送設備 中央

監視設備 警察への緊急通報装置
昇降機 乗用エレベータ（17人乗り）×1台
工程

設計期間 2011年4月～2012年4月
施工期間 2012年4月～2013年8月

外部仕上げ

屋根 アスファルト防水外断熱工法の上緑化
システムバレット（キリンソウ）
外壁 コンクリート化粧打ち放しセラミック
シリコン樹脂塗装（日本ペイント：
DANシリコンセラ）
軒天 GRCパネル（ニチアスセムクリート）
開口部 アルミサッシマット仕上げ（三協立
山：ARMS-S） Low-Eガラス
日除ルーバー：アルミ型材フッ素塗装
外構 園庭：人工芝 ピロティ：斜面緑化（サ
ルココッカ） 南北外壁：壁面緑化（サ
ネカスラ 他）

内部仕上げ

子育て支援室

床 シートフローリング（朝日ウッドテック）
壁 ツインカーボ入り木製可動建具
天井 岩綿吸音板
保育室
床 シートフローリング（朝日ウッドテック）
壁 ガラス間仕切り オリジナルデザインフ
ィルム貼
天井 岩綿吸音板

天井 岩綿吸音板
遊戯室
床 シートフローリング（朝日ウッドテック）
壁 ビニルクロス（リリカラ）
天井 岩綿吸音板

主な使用機器
造作家具 清水建設東京木工場
膜吹き出し オーツカ（AIRSOX）
厨房機器 タニコー
衛生機器 TOTO
施設詳細
認定こども園
定員 69人（0～5歳）
年令別定員：
長時間保育 0歳児6人 1歳児10人
2～5歳児 各11人

短時間保育 3～5歳児 各3人
1ク ラ ス 面 積 36.45m²（0歳児）／
37.06m²（1歳児）／22.11m²（2歳児）
／28.96m²（3歳児）／30.59m²（4
歳児）／30.22m²（5歳児）
一時預かり保育定員 15人（0～5歳）

藤田聡（ふじた・あきら）

1957年東京都生まれ／
1981年早稲田大学理工学
部建築学科卒業／1983年
同大学大学院修士課程修了
後、清水建設／現在、清水
建設設計本部教育・文化施設設計部副部長

加地則之（かじ・のりゆき）

1967年北海道生まれ／
1990年北海道大学工学部
建築工学科卒業後、清水建
設／現在、清水建設設計本
部教育・文化施設設計部グ
ループ長

岡嶋亜都夫（おかじま・あつお）

1969年大阪府生まれ／
1993年京都工芸繊維大学
造形工学科卒業／1995年
同大学大学院修士課程修了
後、清水建設／現在、清水
建設設計本部医療福祉施設設計部設計長

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 厚木市中町2-12-15ほか

主要用途 屋内広場 託児室 子育て支援セ
ンター

建主 厚木市

設計

建築 石上純也建築設計事務所
担当／石上純也 佐藤敬 阿部妙子
戸村英子 丁周恵
前田建設工業一級建築士事務所
担当／齋藤宏 前田利幸

サインデザイン 林琢真デザイン事務所
担当／林琢真
カーテンデザイン 安東陽子デザイン
担当／安東陽子 山口かすみ

構造 雲壁部：構造アドバイザー 佐藤淳構
造設計事務所
担当／佐藤淳 Shingi Tarirah
都筑碧
既存躯体 前田建設工業一級建築士事
務所
担当／飯塚淳司 山下礼子

設備 前田建設工業一級建築士事務所
担当／馬場英樹 鈴木卓哉
照明アドバイザー 同安泉照明設計事務所
担当／岡安泉 杉尾篤

監理 大建設
担当／小林七郎
施工
建築 雲形壁：アトリエ海
担当／佐々木君吉
8階その他：前田共同企業体
担当／大野博士

空調・衛生 高砂熱学工業
電気 関電工
規模
既存建物
敷地面積 3,732.12m²
建築面積 2,558.66m²
延床面積 26,866.548m²
8階：2,264m²
基準階 2,304m²
建蔽率 68.55％（許容：70％）

容積率 675.63％（許容：650％）※電気
事業の用に供する広域変電所に係る容
積制限の緩和あり
階数 地下3階 地上10階 塔屋1階
うち8階

寸法

最高高 42,500mm
軒高 41,650mm
階高 8階：5,000mm
天井高 8階：4,850mm
主なスパン 8,100mm×8,750mm

敷地条件

地域地区 市街化地域 防火地域 商業地域
道路幅員 東18.0m 南8.0m 北4.0m
駐車台数 86台

構造

主体構造 鉄骨鉄筋コンクリート造（既存）
鉄骨造（雲壁）
杭・基礎 杭基礎（既存）
既存コンクリートスラブにベースブレー
ト、ケミカルアンカー（雲壁）

設備

環境配慮技術 LED照明 節水型器具 全
熱交換機

空調設備
空調方式 水冷HPパッケージ
その他 空冷HPパッケージ 外気処理空調
機

熱源 ガス焚きボイラ 冷却塔
その他 ガス焚き冷温水発生機 冷却塔

衛生設備
給水 ポンプ直送方式 高置タンク方式 給
水系統2系統
給湯 局所式電気温水器
排水 屋内合流方式 屋外分流方式

電気設備
受電方式 高圧（6.6kV）1回線受電方式
設備容量 6,300kVA
契約電力 1,998kVA
予備電源 非常用発電機、直流電源装置

防災設備
消火 消火器 屋内消火栓設備 スプリン
ラー設備 連結送水管 泡消火設備
ハロゲン化合物消火設備
排煙 機械排煙

その他 緊急救助スペース灯火設備
昇降機 エレベータ エスカレータ

工程
設計期間 2013年4月～7月
施工期間 2013年8月～2014年3月

内部仕上げ

屋内広場
床 カバザクラ材フローリング
壁 雲壁 モルタル金ゴテ仕上
その他壁 既存補修 PB+EP-S
天井 直天井
小庭土壌 E・ソイル（大林環境技術研究所）
子育て支援センター
床 ハードメーブル材フローリング
壁 雲壁：モルタル金ゴテ仕上
その他壁：既存補修 PB+EP-S
天井 直天井
カーテン 造作カーテン（安東陽子デザイン）

託児室
床 ハードメーブル材フローリング
壁 雲壁 モルタル金ゴテ仕上
その他壁 既存補修 PB+EP-S
天井 直天井
カーテン 造作カーテン（安東陽子デザイン）

主な使用機器
テーブル・イス graf
担当／小松祐介
カウンター・収納家具類・事務机 hhstyle.

その他 緊急救助スペース灯火設備
昇降機 エレベータ エスカレータ

工程
設計期間 2013年4月～7月
施工期間 2013年8月～2014年3月

内部仕上げ
屋内広場
床 カバザクラ材フローリング
壁 雲壁 モルタル金ゴテ仕上
その他壁 既存補修 PB+EP-S
天井 直天井
カーテン 造作カーテン（安東陽子デザイン）

託児室
床 ハードメーブル材フローリング
壁 雲壁 モルタル金ゴテ仕上
その他壁 既存補修 PB+EP-S
天井 直天井
カーテン 造作カーテン（安東陽子デザイン）

主な使用機器
テーブル・イス graf
担当／小松祐介
カウンター・収納家具類・事務机 hhstyle.

com
担当／渡邊淳 秋山昌平
ソファ CASE GROUND
担当／小松和久

利用案内
開館時間 屋内広場sola：9:00～20:00
子育て支援センター もみじの手：9:00
～16:00
託児室 わたくも：9:00～18:00

休館日 屋内広場 sola：年中無休
子育て支援センター もみじの手：祝日
託児室 わたくも：年中無休
入館料 無料（託児利用は子ども1名500円
／1時間）
問合せ tel. 046-225-2833

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立

石上純也（いしがみ・じゅんや）
1974年神奈川県川島生まれ／
2000年東京藝術大学大学
院美術研究科建築科修士課
程修了／2000～04年妹島
和世建築設計事務所勤務／
2004年石上純也建築設計事務所設立



保育室の空調は、膜吹き出し＋床暖房。気流速度は0.15m/sと遅くし、子どもに快適な環境とした。



3階は今回制作の、ツインカーポに木を挿入したサッシで区切られている。開放放すことで一体的な利用も可能。



各階のサイン（左）はフェルトを天然素材で染色したもの。

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 岐阜県美濃市古川町1765-4

主要用途 保育所

建主 社会福祉法人 愛育会

設計・施工

建築・構造・監理 DesignBuildFUKUOKA
担当／中西優太 池邊詢子 佐藤和真
吉岡慶太 薬師寺智也 中土居宏紀
栗原優輝 野口雄太 中田秀樹
峰仁美 城島和貴子 小森文賀
清原昌洋（講師） 平野公平（講師）
松田満成（講師） 山本篤志（講師）
小木曾裕子（講師） 末廣香織（アドバ
イザー） 高木正三郎（アドバイザー）
本田雄一（ディレクター）

協賛・協力

各協力企業の不良品・廃棄材を再利用
ホームセンターグッディ（豊橋無敵）（工具
一式・建築材料提供）
鷹野材木店（建築材料提供）
今村工務店（技術指導・工具提供）

ワイテック（建築材料提供）
末永ハウジング（建築材料提供）
住幸房（建築材料提供）
同製作所（材料指導）
ミヤビ建築（建築材料提供）
DesignBuildBLUFF
Double Dot Design
福岡建設専門学校

規模

敷地面積 279.29m²
建築面積 12.96m²
延床面積 9.49m²
1階 9.49m²
建蔽率 4.64％（許容：50％）
容積率 3.40％（許容：80％）
階数 地上1階

寸法

最高高 1,950mm
軒高 1,785mm
天井高 1,560mm
敷地条件
地域地区 第一種低層住居専用地域
道路幅員 北4.5m

構造

主体構造 木造
杭・基礎 工事足場用ジャッキベース
工程
設計期間 2012年6月～7月
施工期間 2012年8月～9月

工事費

総工費 150,000～200,000円
外部仕上げ
屋根 アスファルトルーフィング
外壁 スギ端材
開口部 スギ端材
外構 クローバー
内部仕上げ
床・天井 構造用合板 t=24mm
壁 スギ端材

寸法

最高高 1,950mm
軒高 1,785mm
天井高 1,560mm
敷地条件
地域地区 第一種低層住居専用地域
道路幅員 北4.5m

敷地面積 279.29m²
建築面積 12.96m²
延床面積 9.49m²
1階 9.49m²
建蔽率 4.64％（許容：50％）
容積率 3.40％（許容：80％）
階数 地上1階

敷地面積 279.29m²
建築面積 12.96m²
延床面積 9.49m²
1階 9.49m²
建蔽率 4.64％（許容：50％）
容積率 3.40％（許容：80％）
階数 地上1階

敷地面積 279.29m²
建築面積 12.96m²
延床面積 9.49m²
1階 9.49m²
建蔽率 4.64％（許容：50％）
容積率 3.40％（許容：80％）
階数 地上1階

図解：新建築ONLINE

図解：新建築ONLINE

図解：新建築ONLINE

図解：新建築ONLINE

聖愛幼稚園 第2園舎 (本文128頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地	東京都福生市熊川490
主要用途	幼稚園
建主	学校法人 聖愛学園
設計	
建築	SUDA設計室 担当／須田充洋 松尾宗則（元所員） 高尾佐和子
構造	木村佳央建築構造設計室 担当／木村佳央
衛生・空調設備	東真水道工務店 担当／菅哲治 担当／真勝勝
電気設備	エスイーサービス 担当／澤田孝広
監理	SUDA設計室 担当／須田充洋 松尾宗則（元所員）
施工	
建築	扶桑建設 担当／北林和男 大地宗彦



東側外観。

港区立伊皿子坂保育園 (本文134頁)

所在地	東京都港区三田
主要用途	保育所
建主	港区
設計・監理	
建築	EDH遠藤設計室 担当／遠藤政樹 三木基嗣 岩間直樹
構造	江尻建築構造設計事務所 担当／江尻憲泰 楠本玄英
設備	機械：テーテンス事務所 担当／新井英昭 電気：設備計画 担当／森末次郎
音響	千葉工業大学工学部建築都市環境学科 佐藤研究室 担当／佐藤史明
施工	
建築	りんかい日産・進和建設共同企業体 担当／岩下弘幸 駒井誠 齊徹雄 小林俊洋
空調・衛生	旭シンクロテック 担当／中嶋洋介
電気	宮崎電気工事 担当／廣瀬好生
昇降機	フジテック 担当／川口拓海
板金工事	MAX KENZO 担当／畑雅明
照明	山田照明 担当／横尾裕克
家具	帝国器材 担当／築地和弘 日高久登
銅製建具	不二サッシ 担当／小川司
木製建具	ワークオブアート 担当／鈴木孝史
OA工事	イトーキ 担当／藤沼淳一
フローリング工事	フリー AXEZ 担当／平山峻也
木工事	ニシト工業 担当／永井裕彦
外構工事	大成ロテック 担当／古屋礼二
遊具工事	中村製作所 担当／泉地高雄

躯体工事	鉄筋 宇田川鉄筋 担当／宇田川正男 型枠 野崎建設興業 担当／野崎利彦
木工事	協栄組 担当／鈴木栄 板金 森田板金 担当／島崎孝一 板裁 鈴木造園 担当／鈴木孝之
家具・建具	荒川木工所 担当／荒川義明 大森陽一
左官	園田工業 担当／園田清文
塗装	東都塗装 担当／野口洋子
衛生・空調	東真水道工務店 担当／菅哲治 電気(防災設備含む) エスイーサービス 担当／澤田孝広
床暖房	フジクリエート 担当／児島行良
規模	
敷地面積	3199.61m ² （うち第2園舎部分：約900m ² ）
建築面積	317.17m ² （第2園舎）

延床面積	488.12m ² （第2園舎）
1階床面積	266.07m ²
2階床面積	209.44m ²
建蔽率	39.68％（園全体 許容：40％）
容積率	58.69％（園全体 許容：80％）
階数	地上2階
寸法	
最高高	7,066mm
軒高	6,956mm
階高	なか庭デッキ：3,000mm
天井高	預り保育室：2,050～3,300mm 2歳児室：2,000～2,450mm ラウンジ：2,750～3,950mm
主なスパン	2,100x2,100mm

敷地条件	
地域地区	第1種住居専用地域 準防火地域 第1種高度地区
道路幅員	西：4.1m
駐車台数	6台（ビロティー内）
構造	
主体構造	鉄筋コンクリート造＋木造
杭・基礎	ベタ基礎
設備	
空調設備	
空調方式	個別方式(空冷ヒートポンプ方式)
熱源	電気
床暖房設備	
床暖房方式	温水循環式床暖房
熱源	石油
衛生設備	
給水	直結給水方式
給湯	局所給湯方式
排水	汚水・雑排水合流方式、雨水浸透方式
電気設備	
受電方式	高圧受電方式

設備容量	125kVA（園全体）
防災設備	
消火	消火器設備
排煙	自然排煙
その他	自動火災報知設備 誘導灯
昇降機	ダムウェーター（クマリフト）
特殊設備	防犯カメラ設備（バナソニック）
工程	
設計期間	2011年10月～2012年6月
施工期間	2012年6月～12月
工事費	
建築＋外構	96,000,000円
衛生・空調	13,000,000円
電気(防災設備含む)	5,000,000円
総工費	116,000,000円

外部仕上げ	
屋根	ガルバリウム鋼板 t=0.35mm 立てハ ゼ葺き
外壁	アクリル系複層塗材吹き付け（エスケ ー化研）
開口部	アルミサッシ（新日軽）
外構	オーストラリアヒノキ t=20mmx w=90mm（ニッシンイクス）
内部仕上げ	
なか庭デッキ（半屋外）	
床	オーストラリアヒノキ t=20mmx w=90mm（ニッシンイクス）
壁	アクリル系複層塗材吹き付け（エスケ ー化研）
天井	珪酸カルシウム板 t=10mm AE塗装
現し柱・梁	ツガ浸透性自然系塗料塗装（プ ラネットジャパン）
保育室（予備、2歳児、預り保育室）	
床	パーチフローリング t=12mmx w=120mm（IOC）

コンクリート打ち放し	色珪調整剤＋ 無機高分子珪酸質シリカ系水性疎水塗 料
フッ素樹脂塗装	
開口部	アルミサッシ ステンレス製 アルミ 製トップライト
外構	透水性インターロッキング 人工再生 木材ウッドデッキ
内部仕上げ	
エントランス・保育室・遊戯室	
床	フローリング：硬質ゴム入り ユニット型 滑り止め床材 OAフロア：C金ゴテ
壁	ビニルクロス EP塗装 天然木化粧合 板 t=12mm 染色UC塗装
天井	色珪調整材 無機高分子珪酸質シリカ 系水性疎水塗料
保育室	
床	ユニット型フローリング OAフロア
壁	ビニルクロス 天然木化粧合板 t=12mm 染色UC塗装
天井	色珪調整材 無機高分子珪酸質シリカ 系水性疎水塗料
遊戯室	
床	ユニット型フローリング OAフロア
壁	ホワイトパーチ練り付け合板 t=6.5mm 染色UC塗装
天井	色珪調整材 無機高分子珪酸質シリカ 系水性疎水塗料
医務室	
床	天然リノリウム t=2.5mm
壁	ポリエステル化粧抗菌珪酸カルシウム板 t=6mm
天井	ビニルクロス

壁	PB t=9.5mm＋12.5mmの上AEP塗装 一部シナ合板 t=6mmの上水性UC 塗装
天井	シナ合板 t=6mmの上水性UC塗装
現し柱	ツガ浸透性自然系塗料塗装（プラネ ットジャパン）
ラウンジ	
床	パーチフローリング t=12mmx w=120mm（IOC）
壁	PB t=9.5mm＋12.5mmの上AEP塗装
天井	シナ合板 t=6mmの上水性UC塗装
園長室・スタッフ室	
床	パーチフローリング t=12mmx w=120mm（IOC）
壁	PB t=9.5mm＋12.5mmの上AEP塗装
天井	シナ合板 t=6mmの上水性UC塗
主な使用機器	
衛生陶器	TOTO
空調	ダイキン
施設詳細	
2歳児クラス	10～15人
預り保育クラス	10～30人
園全体園児数	約250人

須田充洋 （すだ・みつひろ）	
	兵庫県生まれ／1976年早 稲田大学理工学部金属工学 科卒業／1991～96年鈴木 柊＋AMS／1996年SUDA 設計室設立／2004～10年 早稲田大学芸術学校非常勤講師

須田充洋 （すだ・みつひろ）	
-----------------------	--

職員休憩室	
床	豊敷 一部緑甲板 t=15mm 踏込部ユ ニット型フローリング
壁・天井	ビニルクロス
便所	
床	天然リノリウム t=2.5mm 乾式遮音二 重床
壁	ポリエステル化粧抗菌珪酸カルシウム板 t=6mm 耐水GB12.5
天井	EP塗装
施設詳細	
1クラス人数	0歳児：15人 1歳児：24人
2歳児	24人 3歳児：30人 4歳児：30人
5歳児	30人
総園児数	153人

遠藤政樹 （えんどう・まさき）	
	1963年東京都生まれ／ 1987年東京理科大学理工 学部建築学科卒業／1989 年同大学大学院修士課程修 了／1989～94年難波和彦 ＋界工作舎／1994年EDH遠藤設計室設立 ／現在、千葉工業大学教授

たがわこどもセンター「まいまい」 (本文142頁)

所在地	福岡県田川市大字伊田2744-2他
主要用途	幼稚園 保育所
建主	田川市
設計	
建築	塚塚隆生アトリエ 担当／塚塚隆生 古庄恵子 村本有佳理
構造	大賀建築構造設計事務所 担当／大賀成典 古澤慶之助
設備	設備総合計画 担当／宮川興誠 田上憲二
土木	地形社 担当／飛田隆雄
積算	福積
監理	担当／里村秀和
田川市都市整備部建築住宅課	担当／荒木雅伸 二嶋康光 芳川かおり
施工	
建築	成定建設 担当／梶原茂一
空調・衛生	石見商会 担当／友野雅浩
電気	リクデン 担当／荒尾高弘

規模	
敷地面積	11,896.02m ²
建築面積	2,468.30m ²
延床面積	2,197.03m ²
1階	2,197.03m ²
建蔽率	21.35％（許容：60.00％）
容積率	18.75％（許容：200.00％）
階数	地上1階
寸法	
最高高	5,912mm
軒高	5,680mm
階高	保育室：4,130mm
天井高	保育室：2,500～3,400mm
主なスパン	8,100mmx5,400mm
敷地条件	
地域地区	第一種住居地域 準工業地域 法 第22条区域
道路幅員	南西16.050m
駐車台数	80台
構造	
主体構造	鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造
杭・基礎	鋼管杭 ラップルコンクリート 直 接基礎

設備	
空調設備	
空調方式	個別パッケージ方式
熱源	電気
衛生設備	
給水	上水道直結方式
給湯	局所方式
排水	分流(ポンプアップ)方式
電気設備	
受電方式	高圧受電(3φ3W 6,600V 60Hz)方式
設備容量	300kVA
予備電源	20kVA
防災設備	
消火	消火器設備
排煙	自然排煙
工程	
設計期間	2012年8月～2013年2月
施工期間	2013年5月～2014年2月
外部仕上げ	
屋根	塗装ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 立 てハゼ葺(ハ代テクノルーフ：オールマ イティルーフ)
外壁	コンクリート化粧打放し＋疎水剤塗布 (大日技研工業 ランデックスコート) 押出し成型セメント板 t=60mm (ノザ ワ アスロック ナチュリアル)＋疎水 剤塗布

開口部	ビル用アルミサッシ (YKK AP)
外構	クレイ舗装 インターロッキング 天 然芝舗装 浸透性アスファルト舗装 コンクリート舗装
内部仕上げ	
保育室	
床	300mm角コルクタイル t=5mm ソフト セラミック塗装(東亜コルク)
壁	PB t=12.5mm＋難燃シナ合 t=5.5mm ＋木材保護塗料塗布
天井	PB t=9.5mm＋グラスウールマット t=25mm 額貼り 化粧ボタンワッシャ ー留め(マグイソパール マグボード)

遊戯室兼講堂	
床	天然木複合フローリング t=12mm
壁	PB t=12.5mm＋難燃シナ合 t=5.5mm ＋木材保護塗料塗布
天井	PB t=9.5mm＋グラスウールマット t=25mm 額貼り 化粧ボタンワッシャ ー留め

廊下	
床	ビニルシート
壁	コンクリート化粧打放し＋疎水剤塗布
天井	PB t=9.5mm＋化粧PB t=9mm
職員室	
床	OAフロア＋タイルカーペット t=6.5mm
壁	コンクリート化粧打放し
天井	PB t=9.5mm＋グラスウールマット t=25mm額貼り 化粧ボタンワッシャ ー留め



遊戯室兼講堂。



軒下のデッキに腰掛けしている園児たち。

東京ゆりかご幼稚園 (本文150頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 東京都八王子市七国3-50-2

主要用途 幼稚園

建主 学校法人東京内野学園理事長 内野彰裕

設計 渡辺治建築都市設計事務所
建築 渡辺治建築都市設計事務所
担当／渡辺治 加茂下喜人 本田京
山崎智貴 沖水理恵

構造 リズムデザイン＝モヴー級建築士事務所

担当／中田琢史 斉藤美幸

設備 三高設計

担当／三島行雄

監理 渡辺治建築都市設計事務所

担当／渡辺治 加茂下喜人

施工 建築 砂川・ロード建設共同企業体

担当／岡野弘幸 村越秀仁 勝見昭彦

空調 萩原電機

衛生 大黒設備工業

電気 萩原電機

規模

敷地面積 21,301.01m²

建築面積 1,801.05m²

延床面積 1,855.65m²

1階 1,801.56m²／2階 54.60m²

基準階 1,801.56m²

建蔽率 8.46％（許容：30％）

容積率 8.72％（許容：60％）

階数 地上2階

寸法

最高高 6,860mm

軒高 6,500mm

階高 3,240 ～ 3,420mm

天井高 4,170 ～ 2,260mm

主なスパン 7,500×9,100mm

敷地条件

地域地区 第一種高度地区 第一種低層住居

絶対高さ10m 下水処理区域 南八

王子地区計画 法22条区域 宅地造

成区域

道路幅員 北22.0m

駐車台数 36台

構造

主体構造 木造 一部鉄骨柱

杭・基礎 直接基礎

設備

環境配慮技術

井戸水 太陽光発電 雨水利用

空調設備

空調方式 ヒートポンプ方式

熱源 電気 ガス

衛生設備

給水 市水直結方式

給湯 ガス給湯方式

排水 公共下水道方式

電気設備

受電方式 低圧受電方式

契約電力 44kVA

防災設備

消火 バッケージ消火設備、消火器

排煙 自然排煙(法的義務なし)

昇降機 なし

特殊設備 薪ストーブ

工程

設計期間 2011年4月～2013年7月

施工期間 2013年7月～2014年1月

工事費

建築 247,000,000円

空調 2,000,000円

衛生 39,400,000円

電気 28,600,000円

総工費 317,000,000円

外部仕上げ

屋根 折板屋根(宇都宮セキノ興産)

外壁 サイディング(ニチハ) 杉板

開口部 アルミサッシ(LIXIL)

外構

内部仕上げ

保育室

床 ナラフローリング(北海道バークett)

メーブル無垢材再利用

壁 PB(コンバウンド) スギ板

天井 モチップ入り紙クロス(ルナファーマー)

職員室

床 長尺燐化ビニルシート(サンゲツ)

壁 PB(コンバウンド)

天井 モチップ入り紙クロス(ルナファーマー)

トイレ

床 長尺燐化ビニルシート(サンゲツ)

壁 ビニルクロス(サンゲツ)

腰壁：ポリ合板(アイカ)

天井 ビニルクロス(サンゲツ)

ラコート)

天井 EP

主な使用機器

トイレ TOTO

空調 ダイキン

利用案内

開館時間 8:30～16:30

休園日 日曜日

問合せ tel. 058-247-7233

主体構造 木造 一部鉄筋コンクリート造

杭・基礎 ベタ基礎

設備

空調設備

空調方式 床下隠蔽方式

熱源 電気

衛生設備

給水 水道直結方式

給湯 局所式

排水 公共下水道放流

電気設備

受電方式 低圧受電方式

防災設備

消火 消火器

排煙 自然排煙

その他 非常警報設備 非常照明

工程

設計期間 2013年6月～2013年9月

施工期間 2013年10月～2014年3月

外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板(日新製鋼：SELIOS)

外壁 フレキシブルボード

開口部 木製建具 アルミサッシ スチール

サッシ

外構 駐車場：コンクリート舗装

ガーデン：再生木デッキ(ハンディテク

ノ：ハンディウッド)

内部仕上げ

保育ユニット・スタッフスペース

床 リノリウム(forbo：マーモリウム)

壁 アクリル左官刮吹付け(関西ペイント：ソ

ラコート)

天井 EP

コミュニティスペース

床 フローリング(丸牧)

壁 アクリル左官刮吹付け(関西ペイント：ソ

すむ製作所設立

渡辺治(わたなべ・おさむ)

1959年北海道生まれ／

1985年北海道大学修士課程

修了／1986年ベンシルバ

ニア大学修士課程修了／

1991年東京大学博士課程

(高橋廣志研究室)修了／1992年渡辺治建築都

市設計事務所設立／1996年シビル設計コンサ

ルタント設立／2005年川崎ファクトリー主宰

加茂下喜人(かもした・よしと)

1975年埼玉県生まれ／

1998年千葉工業大学工業

デザイン学科卒業／2000

年千葉工業大学博士前期課

程工業デザイン学専攻修了

／2000～09年渡辺治建築都市設計事務所／

2011年二級建築士事務所用工会設立／2014

年一級建築士事務所用工会に変更

ラコート)

天井 EP

主な使用機器

トイレ TOTO

空調 ダイキン

利用案内

開館時間 8:30～16:30

休園日 日曜日

問合せ tel. 058-247-7233

主体構造 木造 一部鉄筋コンクリート造

杭・基礎 ベタ基礎

設備

空調設備

空調方式 床下隠蔽方式

熱源 電気

衛生設備

給水 水道直結方式

給湯 局所式

排水 公共下水道放流

電気設備

受電方式 低圧受電方式

防災設備

消火 消火器

排煙 自然排煙

その他 非常警報設備 非常照明

工程

設計期間 2013年6月～2013年9月

施工期間 2013年10月～2014年3月

外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板(日新製鋼：SELIOS)

外壁 フレキシブルボード

開口部 木製建具 アルミサッシ スチール

サッシ

外構 駐車場：コンクリート舗装

ガーデン：再生木デッキ(ハンディテク

ノ：ハンディウッド)

内部仕上げ

保育ユニット・スタッフスペース

床 リノリウム(forbo：マーモリウム)

壁 アクリル左官刮吹付け(関西ペイント：ソ

ラコート)

天井 EP

コミュニティスペース

床 フローリング(丸牧)

壁 アクリル左官刮吹付け(関西ペイント：ソ

すむ製作所設立

かなや幼稚園 (本文162頁)

所在地 福島県いわき市内郷高坂町四方木田

153

主要用途 幼稚園

建主 学校法人志向学園かなや幼稚園

設計

建築 石嶋設計室＋小松豪一級建築士事務所

担当／石嶋寿和 小松豪 大野泰弘

西田聡 小林惟子 宇佐美銀一

構造 KAP

担当／岡村仁 江田拓也

設備 テーダンス事務所

担当／村瀬豊 星野佳子

照明 ほんぼり光環境計画

担当／角館政英 若山香保

外構 高橋ランドスケープ

担当／高橋裕美

家具 laboratory

担当／田中英一

屋外遊具 コト業LAB.

担当／安中圭三 クナウプ絵里奈

サイン 藤城光

施工

建築 福浜大一建設

担当／中田明 熊田裕之 渡辺浩幸

膜屋根 協立工業

担当／小西力 野口孝

大断面木軸工事 ダイテック

担当／鈴木謙司郎 倉敷憲作 鈴木敦

空調 興盛工業所

担当／澁谷泰

衛生 興盛工業所

担当／澁谷泰

電気 ユアテック

担当／長谷川隆

家具 laboratory

屋外遊具 アネビー

担当／鈴木敬文

規模

敷地面積 1,642.65m²

建築面積 661.74m²

延床面積 763.08m²

1階 586.44m²／2階 176.64m²

建蔽率 40.28％（許容：60％）

容積率 46.45％（許容：200％）

階数 地上2階

寸法

最高高 8,600mm

軒高 4,030mm

階高 保育室：3,150mm

天井高 保育室：3,087mm

主なスパン 4,500mm×4,850mm

敷地条件

地域地区 準工業地域

道路幅員 西15m

構造

主体構造 木造 一部鉄骨造

杭・基礎 布基礎＋地盤改良

設備

環境配慮技術

地中熱利用(クール＆ヒートチューブ)

空調設備

空調方式 保育室：床吹出し空調方式

室内遊戯場：空調機＋ファンコイルユ

ニット方式

熱源 保育室：ガスヒートポンプ式マルチエ

アコン＋デシカント式調湿換気装置

室内遊戯場：空冷ヒートポンプ式セラ

ー＋地中熱(クール＆ヒートチューブ)

衛生設備

給水 直結給水方式

給湯 ガス給湯方式(一部電気温水器)

排水 下水道放流方式(汚水雑排水合流)

電気設備

受電方式 低圧受電方式(弾力運用)

設備容量 61kVA

契約電力 61kVA

防災設備

消火 屋外消火栓設備

その他 自動火災報知設備 誘導灯設備 非

常照明設備

工程

設計期間 2012年7月～2013年3月

施工期間 2013年6月～2014年3月

外部仕上げ

屋根 膜材A種酸化チタン光触媒コーティング

(協立工業) シート防水(早川ゴム)

外壁 ガルバリウム鋼板 t=0.4mm横置き(セ

イキ工業)

東村山むさしの認定こども園 (本文168頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 東京都東村山市廻田町2-14-1

主要用途 認定こども園（保育園）

建主 学校法人野澤学園

設計

建築 ジャクエツ環境事業

担当／坂東正

アトリエ9建築研究所

担当／呉屋彦四郎 長瀬敦*

松岡早矢香*（*元所員）

村松デザイン事務所

担当／村松基安 松岡伸明*

構造 川上構造デザイン 担当／川上俊二

河合構造設計 担当／河合一成

設備 島津設計

担当／島津充宏 一色麻子 熊谷聡

サイン・ランドスケープ 村松デザイン事務所

担当／村松基安

監理 建築 ジャクエツ環境事業

担当／坂東正

アトリエ9建築研究所

担当／呉屋彦四郎 長瀬敦*

村松デザイン事務所

担当／村松基安 松岡伸明*

構造 河合構造設計 担当／河合一成

設備 島津設計 担当／島津充宏

施工

建築 松井建設東京支店

担当／若山竜男 佐藤拓哉

空調・衛生 昭和工業 担当／高橋直之

電気 小川電気 担当／塩田良継

規模

敷地面積 3,040.27m²

建築面積 1,193.78m²

延床面積 1,647.51m²

1階 1,112.30m²／2階 535.21m²

建蔽率 39.83％（許容：40％）

容積率 54.96％（許容：80％）

階数 地上2階

寸法

最高高 7,070mm

軒高 6,263mm

階高 1階：3,450mm 2階：3,450mm

天井高 保育室（1階）：2,500mm、保育室（2

階）：2,540mm、ランチルーム：

6,120mm

主なスパン 6,720mm×9,000mm

6,720mm×4,000mm

敷地条件

地域地区 第一種低層住居専用地域 第一種

高度地区

道路幅員 東5.5m 西6.0m

駐車台数 36台

構造

主体構造 鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造

杭・基礎 直接基礎 ベタ基礎

設備

CASBEE（LEED）、PALなどの数値 省エ

ネ仕様基準130点

空調設備

空調方式 ガスエンジンヒートポンプ方式（東

京ガス、TES）

熱源 ガス

衛生設備

給水 直結給水方式

給湯 局所方式 ガス 瞬間式

排水 公共下水直放流方式、雨水：宅地浸透

電気設備

受電方式 高圧受電方式

設備容量 動力200kVA 電灯100kVA

契約電力 実量制

防災設備 火災通報装置 自動火災報知設備

消火 消火器

排煙 自然排煙

その他 温水式床暖房設備（東京ガス、TES）

太陽光発電：屋根組込形 23.3kw

昇降機 乗用エレベータ（三菱電機、車椅子

兼用機械室レスエレベータ11人乗り

45m/min）

工程

設計期間 2011年9月～2012年2月

施工期間 2012年3月～2013年3月

工事費

建築 417,452,000円

空調 35,854,000円

衛生 34,933,000円

電気 56,761,000円

総工費 545,000,000円

外部仕上げ

屋根 フッ素ガルバリウム鋼板縦葺き屋根（元

旦ビユーティー工業：スフィンクスルー

フ2型、TRX-3型）

外壁 タイル（国産耐火工業所：炬器賢無釉

タイルBS）

コンクリート打ち放し浸透性遮水剤（フ

ッコー、ナノシリコンコート） 押出成

形板（ノザワ：アスロック）

開口部 アルミサッシ 一部木製サッシ（エン

ヴェロップ） 門扉：スチール溶融亜鉛

メッキ リン酸処理仕上（エンヴェロッ

プ）

外構 床 タイル（アドヴァン：マルチオー

ツ） 平板（サンエス：鍍石平板）

テラス デッキ床 木材・プラスチック再生複

合材（文化シャッター：テクモク）

植栽：カツラ、ヤマボウシ、シマトネリコ、ト

サミズキ、ヒペリカムヒデコート、アベ

リア、ユキヤナギ、コデマリ、レッドロ

ビン、ヒラドツツジ、フィリツルニチニ

デソウ、セイヨウイワナンテン、フィリ

フェラオーレア、コトネアスター等

内部仕上げ

保育室・一時預かり室・多目的室（1階）

床 無垢バインフローリング t=12mm（ウッ

ドワン：ビノアース）

壁 PB t=12mm下地 ビニルクロス（サン

ゲツ） 腰壁 PB t=12mm下地 タ

モ練付け板 t=6mm（ダイケン：ダイ

ライト）塗装（オスモカラー）

天井 化粧PB t=9.5mm（吉野石膏）

ランチルーム

床 無垢バインフローリング t=12mm（ウッ

ドワン：ビノアース）

壁 PB t=12mm下地 ビニルクロス（サン

ゲツ）、PB t=12mm下地 タモ練付

け板 t=6mm（ダイケン：ダイライト）

塗装（オスモカラー）

天井 PB t=12mm下地、タモ練付け板

t=6mm（ダイケン：ダイライト）塗装（オ

スモカラー）

ギャラリー

床 タイル（アドヴァン：トレバークホーム）

壁 PB t=12mm下地 タモ練付け板t=6mm

（ダイケン：ダイライト）塗装（オスモカ

ラー）

天井 PB t=9.5+9.5mm AEP

保育室（2階）

床 無垢バインフローリング t=12mm（ウッ

ドワン：ビノアース）

壁 PB t=12mm下地、ビニルクロス（サン

ゲツ） 腰壁 PB t=12mm下地 タ

モ練付け板 t=6mm（ダイケン：ダイ

ライト）塗装（オスモカラー）

天井 PB t=9.5mm下地 ビニルクロス（サ

ンゲツ）

園児用トイレ

床 長尺シート（サンゲツ：エスリューム・ブ

レーン）

壁 PB t=12mm下地 ビニルクロス（サン

ゲツ） 一部 カラー珪酸カルシウム板

t=6mm（DIC：DICフネン）

天井 PB t=9.5mm下地 ビニルクロス（サ

ンゲツ）

特記仕様 子ども用トイレブース（ジャクエツ）

中庭滑り台（ジャクエツ） 可動間仕切り

（コマニー）

サイン製作 イーブランニング

主な使用機器

照明器具 東芝ライテック パナソニック 遠

藤照明 モデュレックス エルコライテ

ィング ヤマギワ コイズミ

給湯器 リンナイ

衛生器具 ジャクエツ（子ども用衛生器具）、

TOTO、LIXIL

厨房機器 ジャクエツ

太陽光発電 元旦ビユーティー：サンピカ

床暖房 東京ガス：TES

利用案内

定員 幼稚園：320名

保育園：100名

問合せ

tel. 042-394-4536

HP <http://www3.plala.or.jp/musasino/>

Facebook：[https://www.facebook.com/](https://www.facebook.com/musasinoninteikodomoen)

[musasinoninteikodomoen](https://www.facebook.com/musasinoninteikodomoen)

坂東正（ばんどう・ただし）



1959年福井県生まれ／

1983年日本大学理工学部

建築学科卒業／1983～

1990年アモ設計事務所／

1991年ジャクエツ環境事

業取締役設計部長

呉屋彦四郎（ごや・ひこしろう）



1959年宮崎県生まれ／東

京藝術大学大学院美術研

究科修士課程修了／在学中、

建築家トーマゾ・パツェに

師事（在ローマ）／1989

年谷口建築設計研究所入所／1995年丹下健

三・都市・建築設計研究所入所／1999年～

アトリエ9建築研究所代表取締役

村松基安（むらまつ・もとやす）



1957年東京都生まれ／

1980年早稲田大学理工学

部建築学科卒業／1982年

早稲田大学大学院理工学

部研究科建設工学専攻博士前期

課程修了後、清水建設／1984年谷口建築設

計研究所／1993年村松デザイン事務所設立

／2009～13年明治大学理工学部兼任講師



園庭より見る。



一時預かり室。

NNビル／君津の保育所 (本文174頁)

●案内図は新建築Onlineへ
http://bit.ly/sk1406_map

所在地 千葉県君津市坂田1633-1

主要用途 保育所 共同住宅

建主 ノバ・メディクス

設計・監理

建築 kwae／渡邊健介建築設計事務所

担当／渡邊健介 上月亮太*（*元所員）

構造 長坂設計工舎

担当／長坂健太郎 馬土友弘

設備 a'gua設備設計 担当／南條章浩

ギア設計パートナーズ

担当／平岩省吾

照明 シリウスライティングオフィス

担当／戸恒浩人 山口喬久

施工

建築 キミツ鐵構建設

担当／松本正樹 土方克則

空調・衛生 相川精機

担当／坂口尚之 坂口京野

電気 六幸電気工業 担当／嶋野貞雄

規模

敷地面積 1,392.65m²

建築面積 361.43m²

延床面積 703.19m²

1階 329.95m²／2・3階 186.62m²

建蔽率 24.44％（許容：50％）

容積率 50.49％（許容：200％）

階数 地上3階

寸法

最高高 9,657mm

天井高 保育所：2,400～2,800mm

共同住宅：2,300mm

主なスパン 5,000×5,000mm

敷地条件

地域地区 第一種低層住専地域 法22条地

域

道路幅員 西4.3m 南6m

駐車台数 28台

構造

主体構造 鉄筋コンクリート造

杭・基礎 杭基礎（既製鋼管杭）

設備

空調設備

空調方式 保育所：空冷ヒートポンプバック

ージ・ビル用マルチ方式

共同住宅：ヒートポンプルームクーラー

熱源 電気

衛生設備

給水 直結給水方式

給湯 局所給湯方式・ガス瞬間給湯器

排水 汚水・雑排水合流方式

電気設備

受電方式 低圧受電方式

設備容量 保育所：1φ20kVA 3φ23kW

共同住宅各戸：50A

防災設備

消火 自動火災報知設備 誘導灯

排煙 自然排煙

工程

設計期間 2011年10月～2012年7月

施工期間 2012年10月～2013年7月

外部仕上げ

屋根 3階屋根：アスファルト防水露出仕様

2階テラス：アスファルトルーフィ

ング保護仕様・PFシステム（日新工業）

外壁 ジョリバットアルファ JP-100（アイ

カ工業）

開口部 アルミサッシ（三協アルミ）

外構 合成木ウッドデッキ 植栽 コンクリ

ート剛毛引き 花崗岩パーナー仕上げ

アスファルト舗装

SMOKERS' STYLE COMPETITION 2013

結果発表

2013年も「分煙空間」をテーマに開催されたSMOKERS' STYLE COMPETITION. 2014年3月10日に行われたプロポーザル部門1次審査で229点(登録529件)の応募案から選出された8組が、去る2014年4月13日、JTアートホールアフィニスにて、公開プレゼンテーションを行いました。その後、2次審査を行い、下記のように各賞を決定しました。また、18点(登録22件)の応募をいただいた作品例部門についても、3月10日の審査により各賞が決定しています。(編)

主催者メッセージ

日本たばこ産業株式会社 代表取締役副社長 佐伯明
2013年は、プロポーザル部門において「たばこも吸えるインドアブリックスペース」をテーマに、東京・神保町のオフィスビル1階に敷地を決め、たばこを吸われる方と吸われない方との共存に向けたアイデアを募集させていただきました(応募要項本誌1310掲載)。

今回は建物内部の壁に囲まれた空間において、実現を視野に入れたコンペであったことから、非常に難しいものでしたが、全国から229点ものアイデアをいただくことができました。

優れた分煙の施工事例を示していただいた作品例部門も含め、建築・デザイン等に関わる多くの方に取り組んでいただけたことに感謝申し上げます。今回皆様からいただいた分煙に対するアイデア、そして建築・デザインに対する熱い想いをしっかりと受け止め、私共JTはたばこを吸われる方、吸われない方が、協調して共存できる社会の実現に向けた活動を、今後も実施していきたいと考えております。

プロポーザル部門

最優秀賞(1点/賞金200万円)

三木真平 (mikikurota) **黒田美知子** (mikikurota)

優秀賞(1点/賞金50万円)

北潟寛史 (東京大学大学院) **清野新** (東京大学大学院) **伊藤遼太** (東京大学大学院)

佳作(6点/賞金各5万円)

濱田尚樹 (フリーランス)

安田奉文 (ヤスダアーキテクト)

森川啓介 (フリーランス)

山本淳平 (一級建築士事務所デザインブ)

石井孝典 (東京大学大学院) **和田充弘** (千葉大学大学院)

阿部駿也 (法政大学大学院) **高松達弥** (石本建築事務所)



公開審査の様子。

審査委員

古谷誠章 (建築家・早稲田大学教授/審査委員長)

妹島和世 (建築家・妹島和世建築設計事務所代表)

西沢大良 (建築家・西沢大良建築設計事務所代表)

六鹿正治 (建築家・株式会社日本設計 取締役会長)

佐藤英治 (設備設計家・イーエスアソシエイツ代表)

佐伯明 (日本たばこ産業株式会社 代表取締役副社長)

プロポーザル部門ゲスト審査委員

井上弘毅 (住友商事株式会社 常務執行役員 東アジア総代表
中国住友商事グループCEO (前 建設不動産本部長))

主催：日本たばこ産業株式会社
後援：株式会社新建築社
プロポーザル部門協力：住友商事株式会社
株式会社日建設計

作品例部門

最優秀賞(1点/賞金100万円)

原田哲夫 **合田靖** **宮島照久** / 竹中工務店
あべのハルカス SKY SMOKE

優秀賞(1点/賞金50万円)

今中啓太 **北野雅也** **井上泰生** / NTT 都市開発
アーバンネット大手町ビル 共用喫煙室

佳作(2点/賞金各10万円)

茅野秀真 **白井大之** **鈴木健悦** **西大輔**
/ 日建設計

住友商事 錦町ビル ルーフトップリフレッシュガーデン

本多恵三郎 **上野卓史** **内藤衛** / リーフデザインパーク
平野文尉 **稲原攝雄** / 森ビル
アークヒルズ仙石山森タワー リフレッシュスペース

(賞金はすべて税込み)

裏表問題

緩やかにカーブする木の壁で、全体をおおらかに仕切りながら空間をつくっていくことを考えた。連続する壁が既存の柱や壁に寄り添ってできる隙間を、排気設備、風除設備として利用する。裏表が定まらず、閉じることのない境界面は、多様な風景を織り込みながら展開していく。たばこを吸う人も吸わない人もひと続きの風景に溶け込める、そんなパノラマ風景の提案となっている。



左から黒田美知子氏、三木真平氏。

プロポーザル部門 最優秀賞
三木真平 (mikikurota)
黒田美知子 (mikikurota)



平面 縮尺 1/150

上：外観イメージ。
下：内部曲面壁と外側の壁の隙間に給排気の設備を設置し、たばこを吸う人の居場所をつくる。カフェ側にも同様に曲面の壁を立て、たばこを吸う人と吸わない人が共に楽しめる場所をつくる。



壁の中に組み込まれた設備の平面詳細 縮尺 1/15



SMOKERS' STYLE COMPETITION 2013

プロボーザル部門 優秀賞

北潟寛史 (東京大学大学院)

清野新 (東京大学大学院)

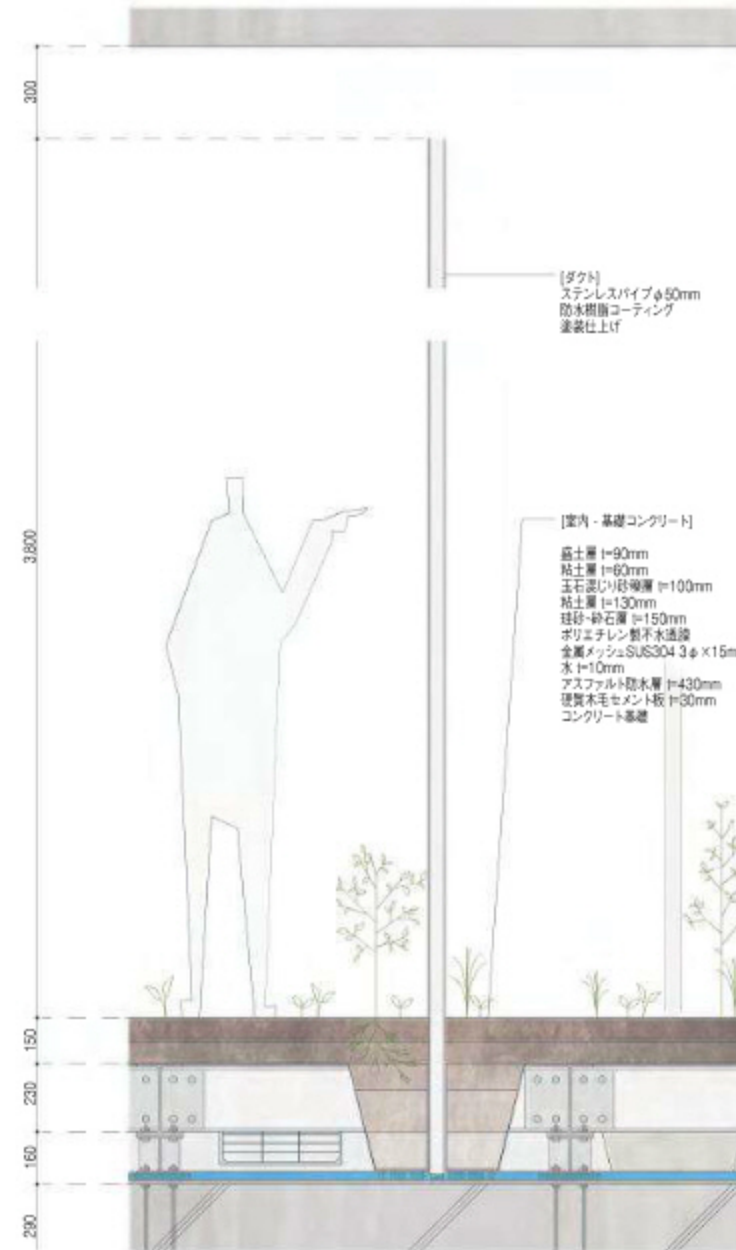
伊藤遼太 (東京大学大学院)



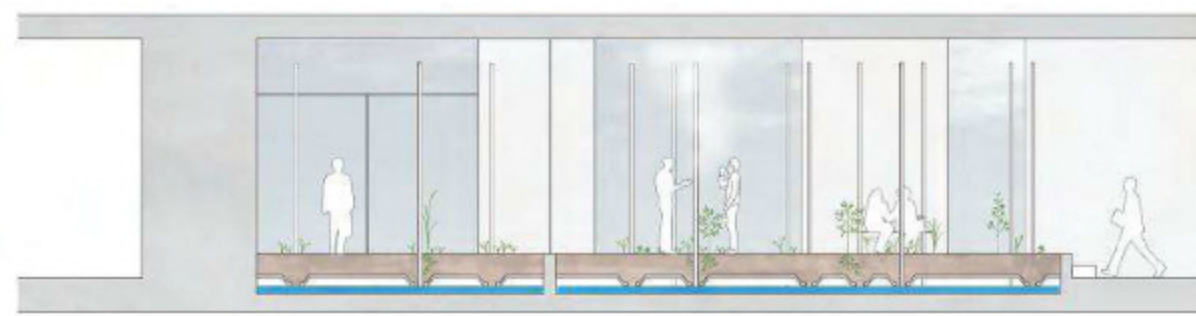
左から伊藤遼太氏、北潟寛史氏、清野新氏。

共生のニフ

喫煙を循環の中のひとつと位置付け、多様な行為を受け入れる透明な空間を設計した。排気を利用して積極的な循環を生み出すダクトを設計。天井付近の排気で煙を床下へ送り、床下の土壌がそれを分解する。ダクトの配置により透明な一室空間の中に、さまざまなグラデーションがかかり、それによってそこにいる人の行為が誘発される。木立の中に場所を見つけるように、喫煙者及び非喫煙者が仕切られることなく分煙が実現され、たばこを吸う人は、まるで新鮮な空気に満ちた木立の中にいるような感覚になるだろう。たばこの香りの後に、土や草のかすかな香りが肺を満たす。ダクトがつくり出す循環が自然な分煙空間を形成し、やがて人びとの行為はこの小さな生態系の中に組み込まれる。



断面詳細 縮尺1/30



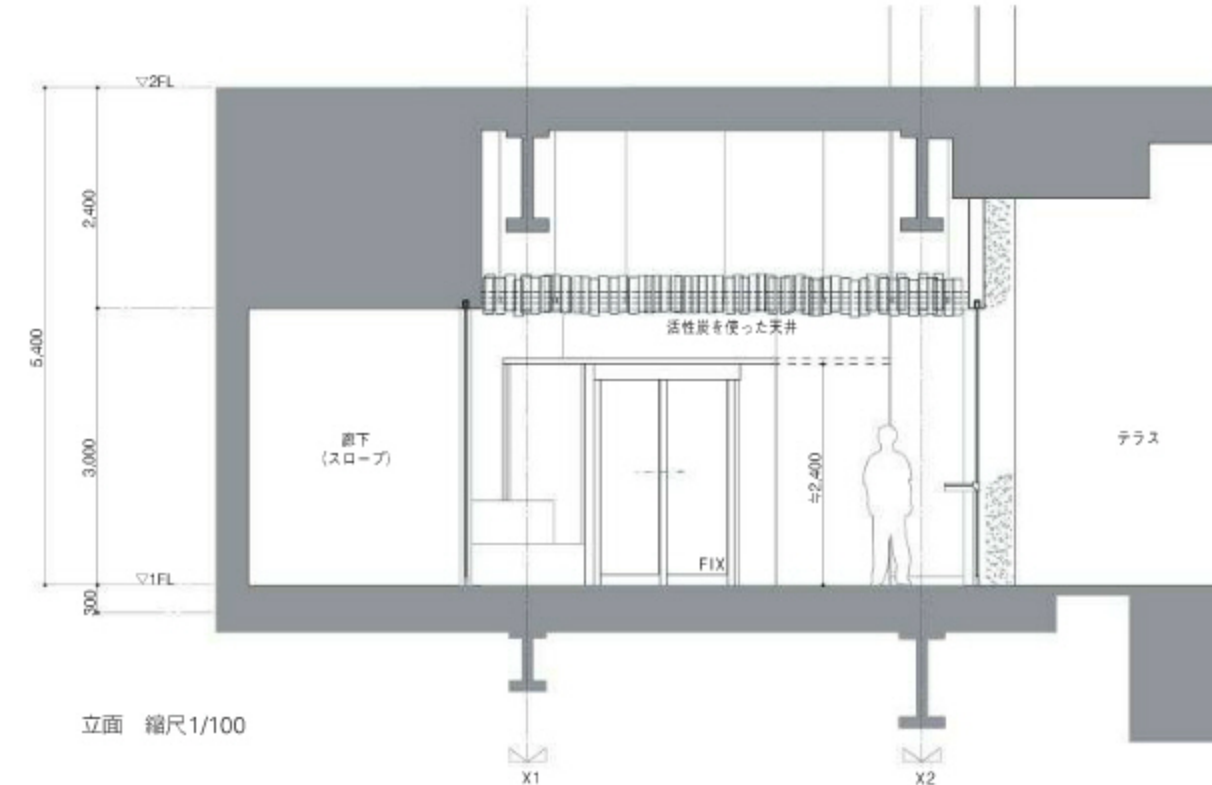
イメージパース。



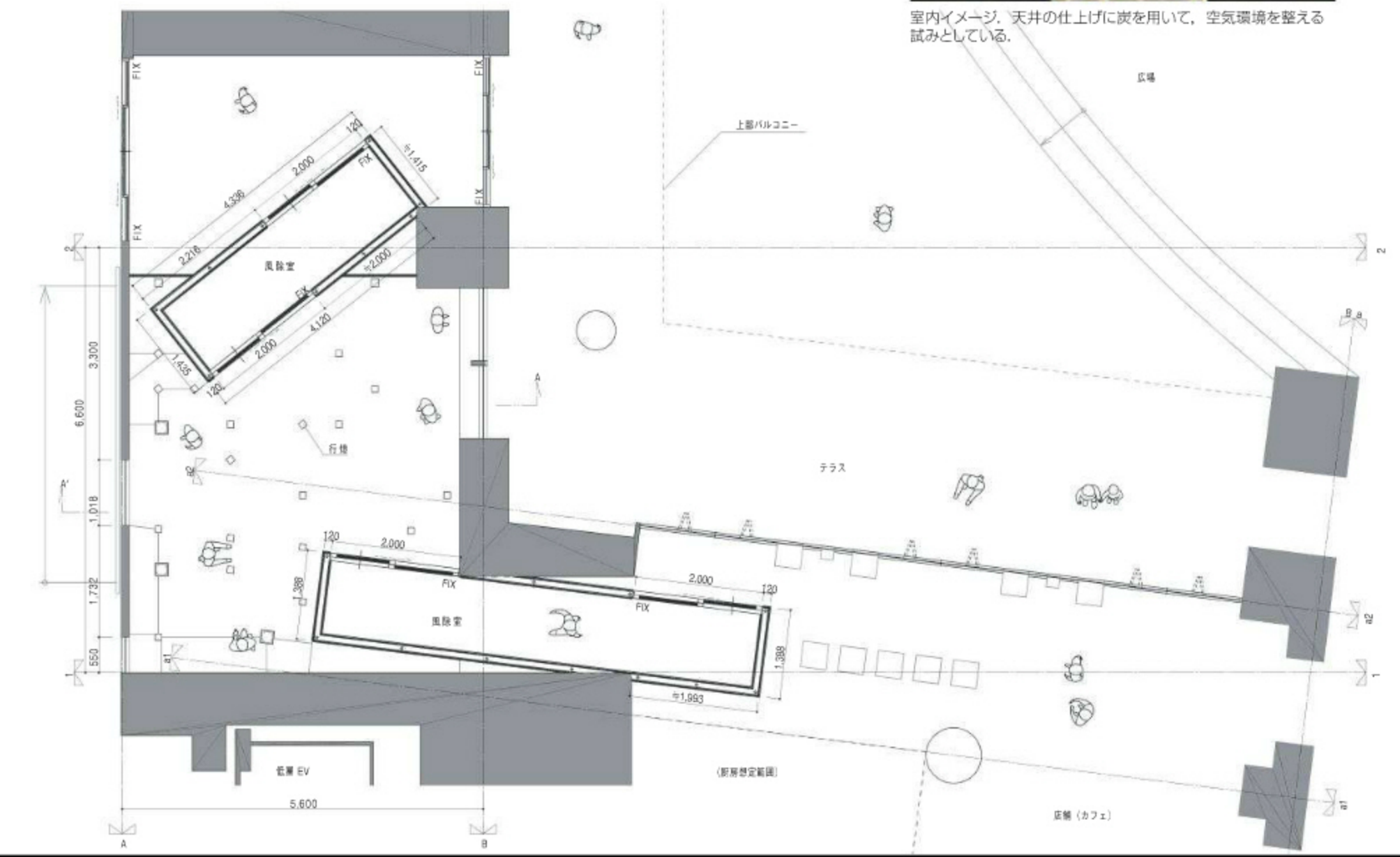
C-space

C-spaceを利用する目的は、「喫煙所」・「休憩室」・「通路」の3つになるのではないかと思う。この3つのうちひとつの機能を削除することにした。それが、「通路」である。計画場所を隠すように配置した風除室は、この空間を遮るように見えるが、和紙を風除室の外壁に使用していることによって、かすかな人影が、外の人びとをこの空間へと引き寄せる。

杭のように照明を配置して人を通りづらくし、可能な限り人が起こす風をなくし、たばこの煙の滞留を抑止する。また、匂いの処理として計画場所の壁、天井には活性炭を使用し、快適な空間を目指した。もし、これらの目的が実現し快適な空間ができれば、はじめに削除した「通路」という機能は、計画場所を利用する人びとによって自然と発生し、本来のパブリックスペースとしての役割が果たされるのだろう。



室内イメージ。天井の仕上に炭を用いて、空気環境を整える試みとしている。



濱田尚樹氏。

プロボーザル部門 佳作

濱田尚樹 (フリーランス)

SMOKERS' STYLE COMPETITION 2013



プロボーザル部門 佳作
安田奉文
(ヤスダアーキテクト)

木質皮膜のパブリックスペース

角材を積み重ねた木質皮膜に包まれるパブリックスペースの提案である。角材が交互に重なり連なり形成される皮膜は、透過性と閉鎖性を併せ持つパブリックスペースを形成する。周りと繋がっているようで木に包まれているような、木に包まれているようで周りと繋がっているような、ほんやりとした空間は、タバコを吸ったり、

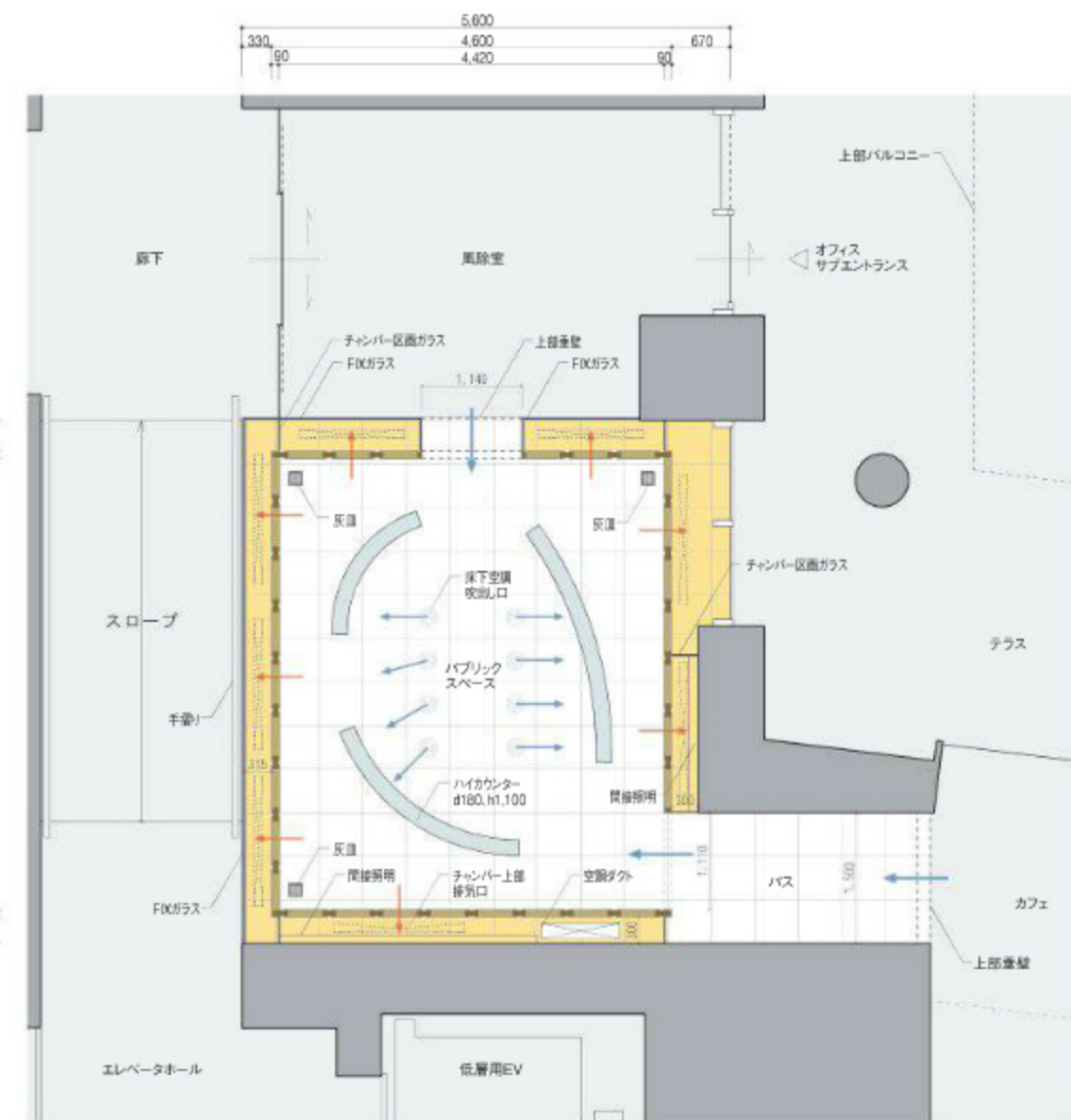
コーヒーを飲んだり、一休みしたり、何気ないわずかなひと時を送ることができるパブリックスペースである。皮膜はスケルトンからオフセットして設置。壁・ガラスと皮膜の間の空間は排気ルートとなる。入口から給気された空気は常に皮膜から排気される気流をつくり、タバコの煙を排出していく。上方に流れてしまっても、皮膜を通過し天井横が煙だまりとして機能する。



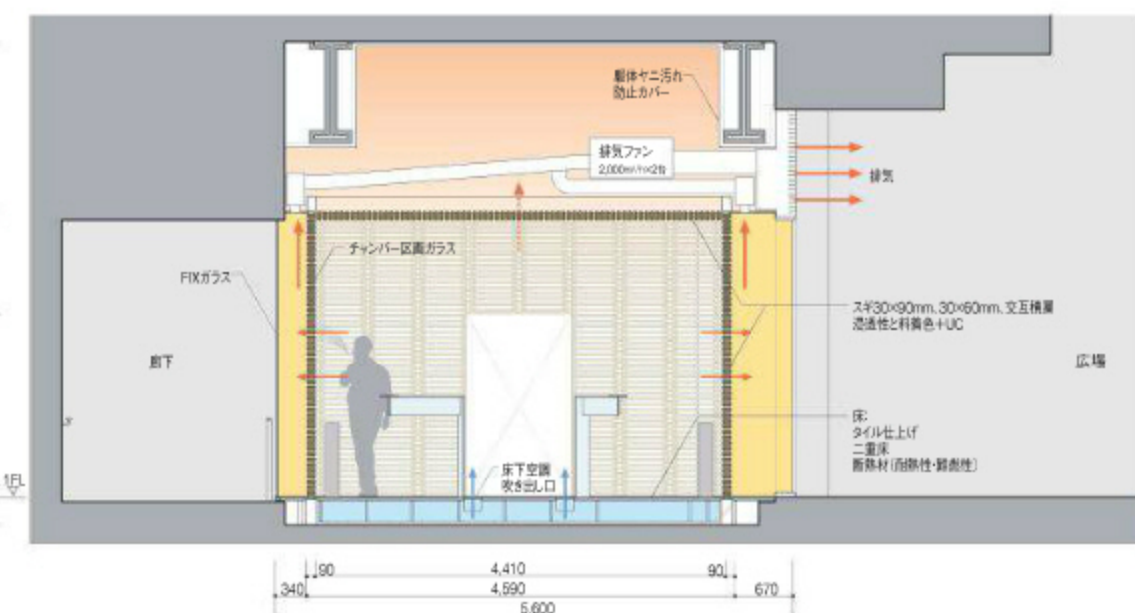
プロボーザル部門 佳作
森川啓介 (フリーランス)

単なる喫煙室でしかないようなあり方では、ビルの下足の公共性の高いこの場所にはそぐわないと感じた。そこで、壁で隔離するわけでも機械音が鳴り響くわけでもない、他の空間と同じような過ごし方ができる、もっと自然なあり方の空間ができないかと考えた。天井面に山と谷のある空間をつくらせている。山と谷により勾配ができる。この勾配に沿って煙は山頂へと流れていく。つまり、煙が上昇して障害物

に沿うという基本的な性質を活かしたきわめて自然な集煙が可能となる。そして、勾配面に孔を設けることで、煙を効率よく排気することができるのである。また、天井高の低い場所では、天井は垂れ壁として機能し、隣室への煙の流出を防ぎ、外部からの煙の目隠しにもなる。単なる喫煙室という枠組みを超えた新しい分煙空間になると考えている。



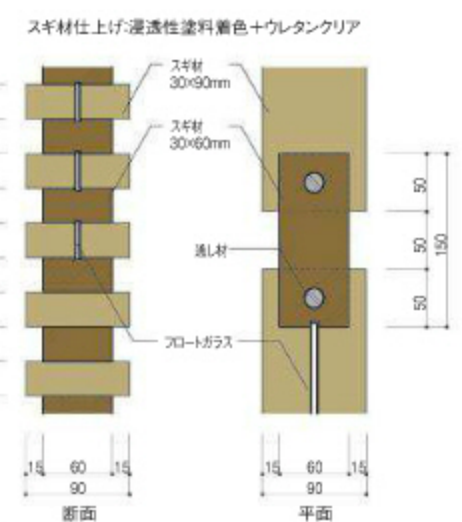
平面詳細 縮尺1/100



断面詳細 縮尺1/100



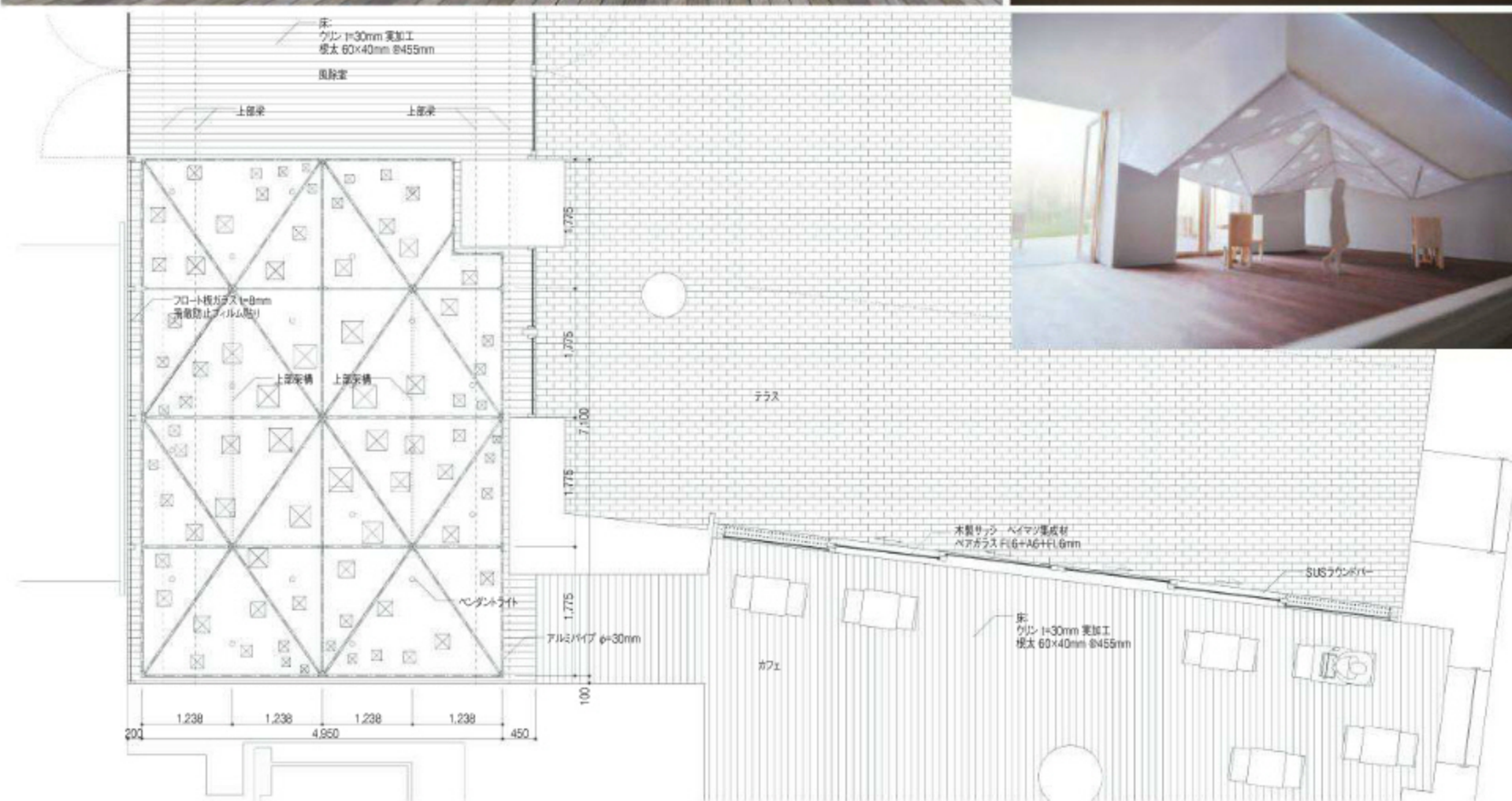
上：模型写真、内部に家具を入れた状態。／中：オフィス廊下から見た外観。／下：内部は木のルーバーを介して光が透過してくるイメージ。



角材積層のディテール 縮尺1/8

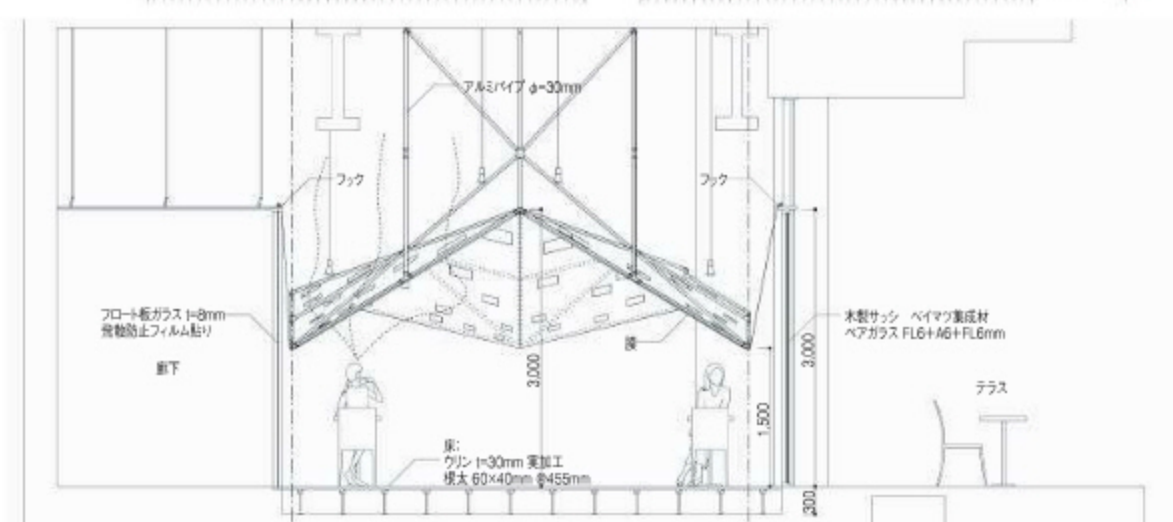


左：1次提出時のイメージパース。／下2点：模型、天井部の膜の勾配を介して、煙の処理が考えられている。



平面 縮尺1/100

断面 縮尺1/100





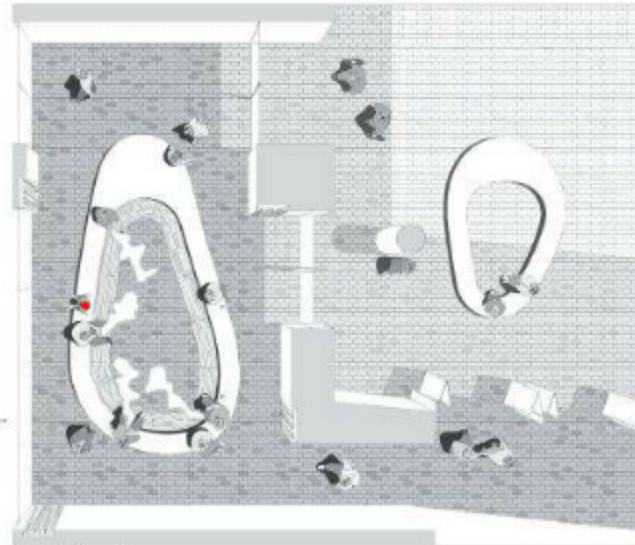
山本淳平氏。

プロボーザル部門 佳作
山本淳平
(一級建築士事務所デザインブ)

ひとつづきの広場、ひとつづきのベンチ

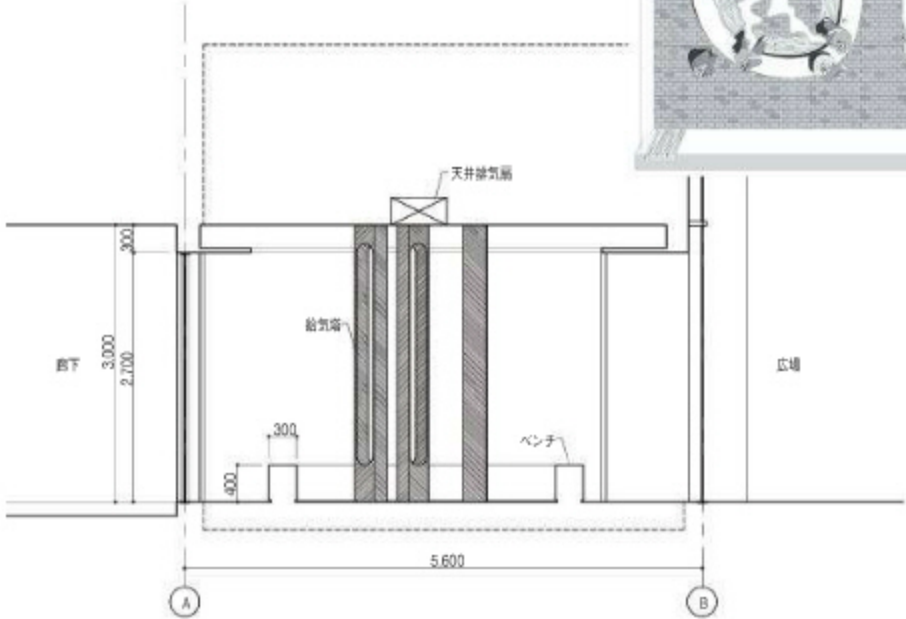
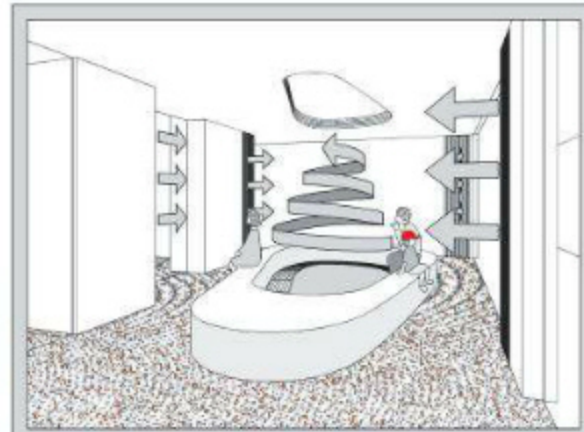
広場と同じ床材が敷き詰められた空間に、大きなひとつづきのベンチを設置する。たばこを吸う人も吸わない人もこのベンチと一緒に利用するが、たばこを吸う人にはベンチの内側に向かって腰掛けてもらう。ベンチの内側に向かって吹き出される煙は竜巻状の気流によって排気されるのでベンチの外側に漏れることはない。たばこを吸わない人はそれぞれの煙に対する許容範囲に応じ

て腰掛ける向きを選択できる。このように座る向きによって煙を分けることで、誰もが一緒にいられる開放的な空間が可能となる。さらに隣接する風除室とカフェ接続部分も同じ床材でオープンに繋げることで、広場とひと続きになっているような印象を与えている。この内のように外のような腰挂で開放的な空間は、たばこを吸わない人にも入りやすいもうひとつの広場となる。



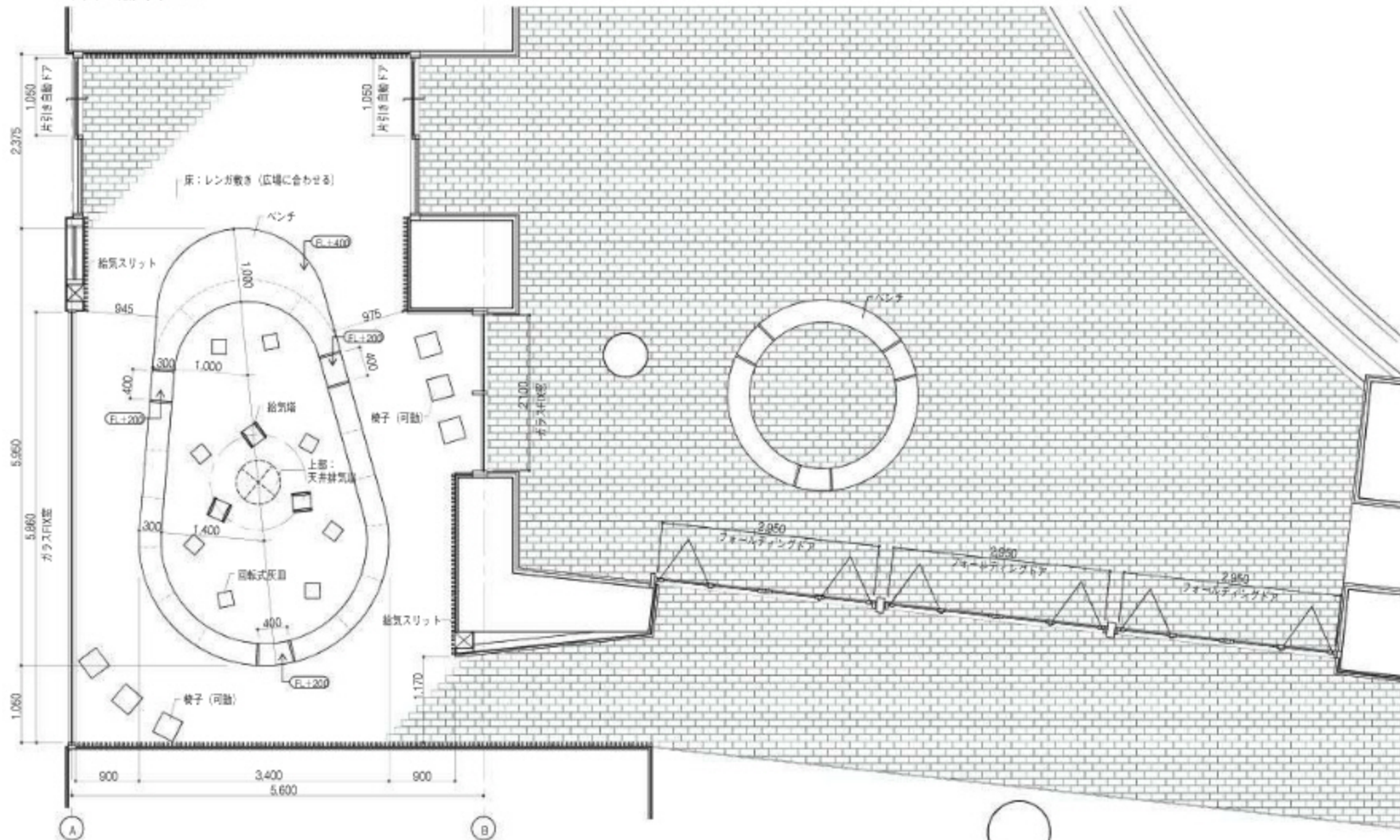
1次提出時のイメージ。トルネードを利用して上昇気流をつくることでの分煙を提案した。

右2点：1次提出時のイメージ。アイデアとして、足下に水を流して、吸い殻などの処理が提案された。審査委員より改良の提案が求められ、左の断面、下記平面の提案となっている。



断面 縮尺1/100

平面 縮尺1/100



帯に寄り添う

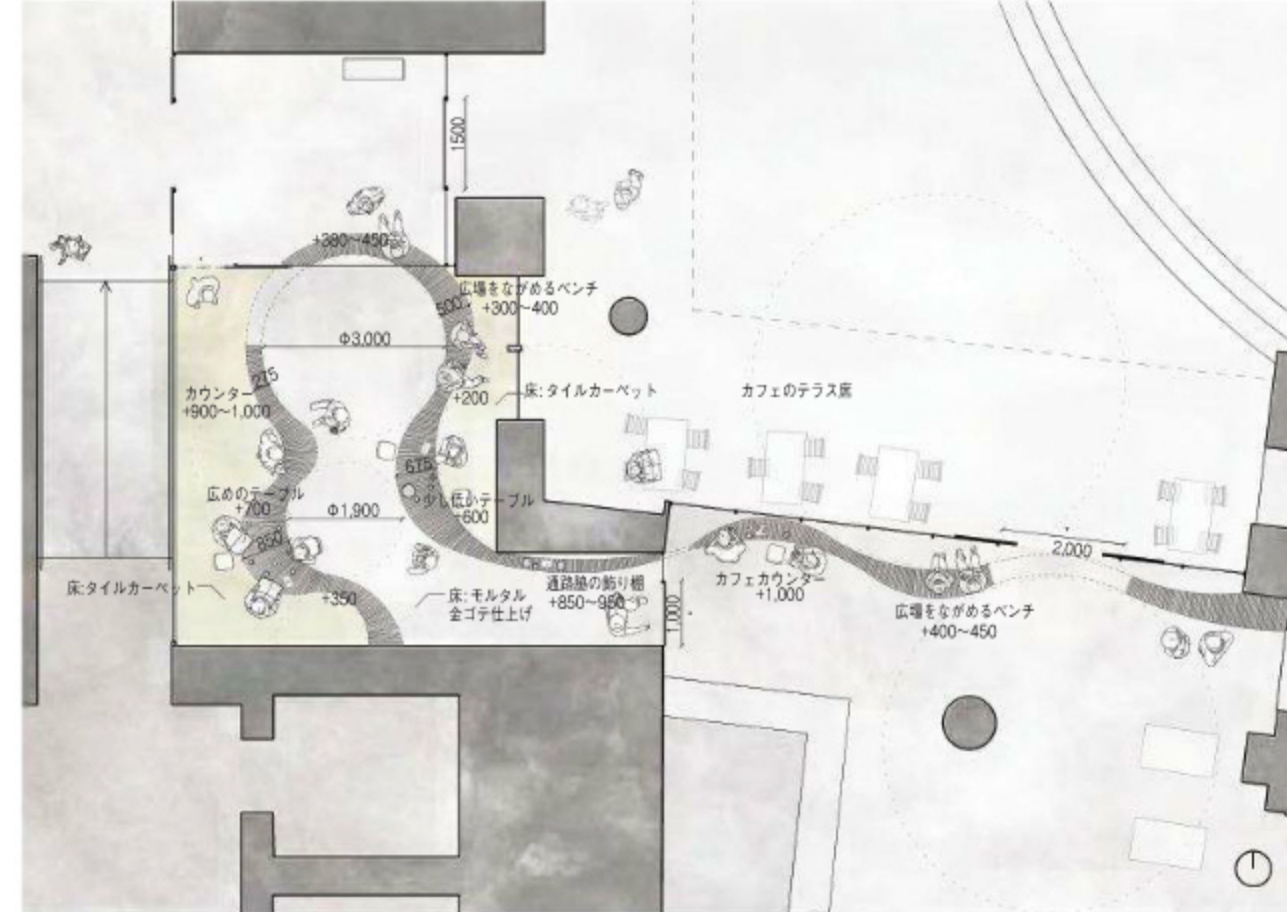
ここに集う人びとのさまざまな行為を受け止める一本の帯。天井と床から立ち上がる緩やかな起伏を持った帯は、人びとの間を縫うように大小さまざまな溜まりをつくりながらカフェまでつづく。荷物を置いて座ったり、少し広いところはテーブルに、時にはまたいだりぐったり。訪れた人びとは上下の帯のすき間に自分の居場所を発見する。合板をすき間をあけて並べることによってつくられる上下の帯は、下側に給気、上側に排気設備を内包

し、帯の間に緩やかな上昇気流を生み出す。帯の間で発生したたばこの煙は上昇気流に乗り、上帯の板のすき間によって排気されていく。上下の帯によってつくられた緩やかな空間は、たばこを吸う人もそうでない人も、同じ時間を共に過ごす場を提供する。

プロボーザル部門 佳作
石井孝典 (東京大学大学院) **和田充弘** (千葉大学大学院)



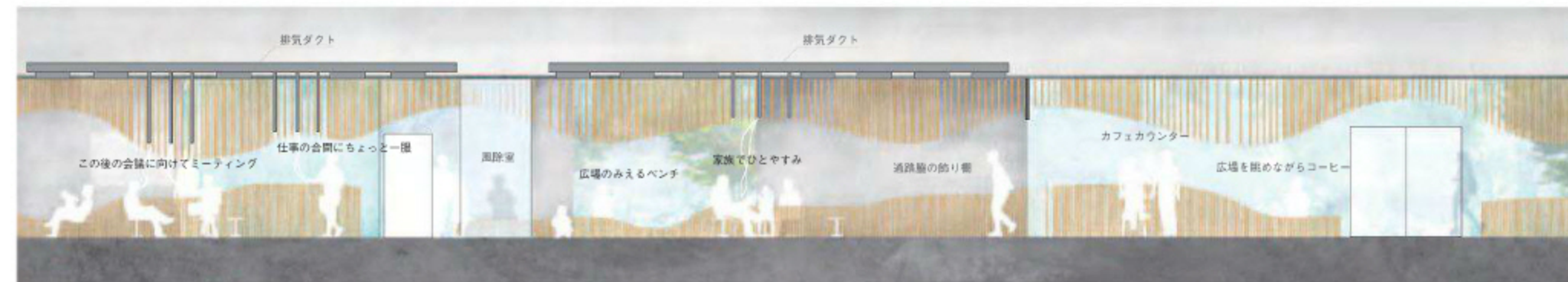
左から石井孝典氏、和田充弘氏。



平面 縮尺1/150



断面 縮尺1/150



内側から見た展開図



上2点：内観。細かいピッチで並べられた木板およびそこに内包された給排気設備が、たばこが吸える場所や、さまざまな人の居場所をつくり出す。



上2点：外から見た時の様子。空間の中に挿入された帯が外の景色を切り取る。下は真上から見たイメージ。厚さがさまざまな曲面の壁のような仕切りで空間を構成している。



左から高松達弥氏、阿部駿也氏。

プロポーザル部門 佳作

阿部駿也

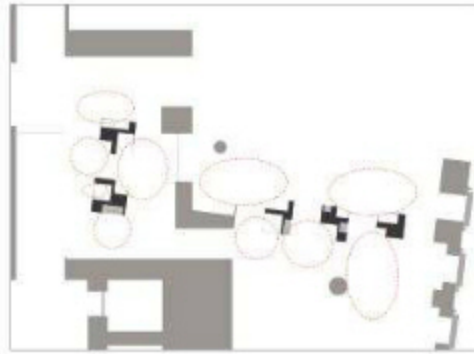
(法政大学大学院)

高松達弥

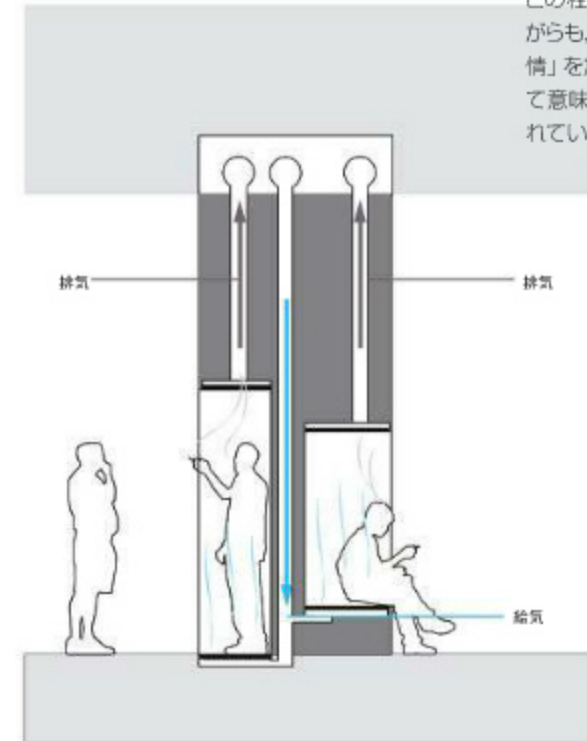
(石本建築事務所)

穿つ痕跡

旧博報堂は風格ある「表情」があった。歴史的価値あるものの継承の仕方は今日の課題でもある。そこで私たちはその「表情」に着目し、新たな価値を添える。今回復元される「表情」のリズムを継承しながら柱を連続させていく。この柱は構造の意味は持っていない。そこで新たに「場を作る」という意味を持たせるために柱を穿つ。この穿った柱に給気と排気の風の流れをつくり煙の道をつくり出す。穿たれた穴は椅子となり、喫煙場所としても機能する。柱は建築内部まで入り込み、緑溢れた外部と内部の境界を曖昧にする。この柱は内外、喫煙者と非喫煙者を曖昧にしながらも、分煙させることが可能となる。今日の「表情」をただ復元するのではなく、新たな境界として意味を与えることで、歴史的価値は受け継がれていく。



穿つことで場をつくる



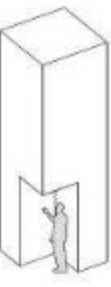
給気と排気の関係

座る



柱の穿ち方

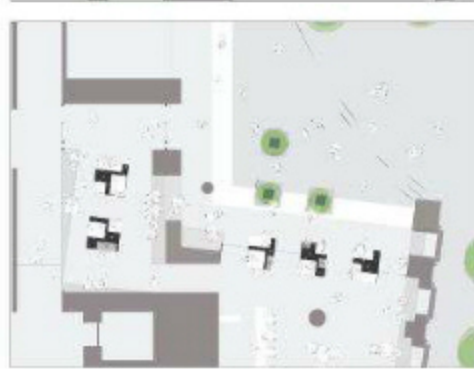
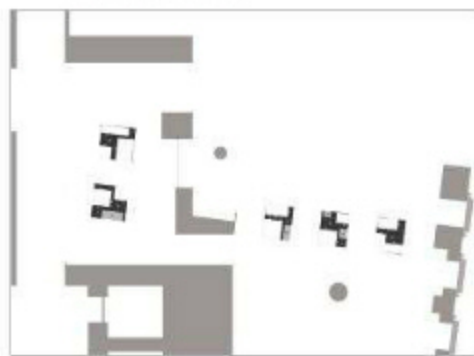
立つ



寄りかかる



設備を柱におさめる



ゆるやかな分煙



上：外部のイメージ。／右上：空間内部、穿たれた柱に人が座ったり、たばこが吸える場所がつけられて、ゆるやかなに分煙がつくれる。／下：広場側から見た外観。

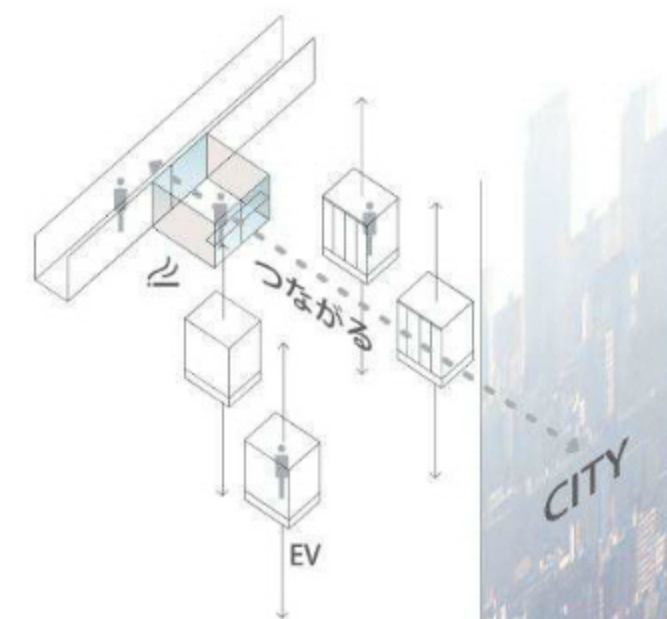


穿たれた柱は、復元保存された「旧博報堂」立面と連続した外観をつくる。

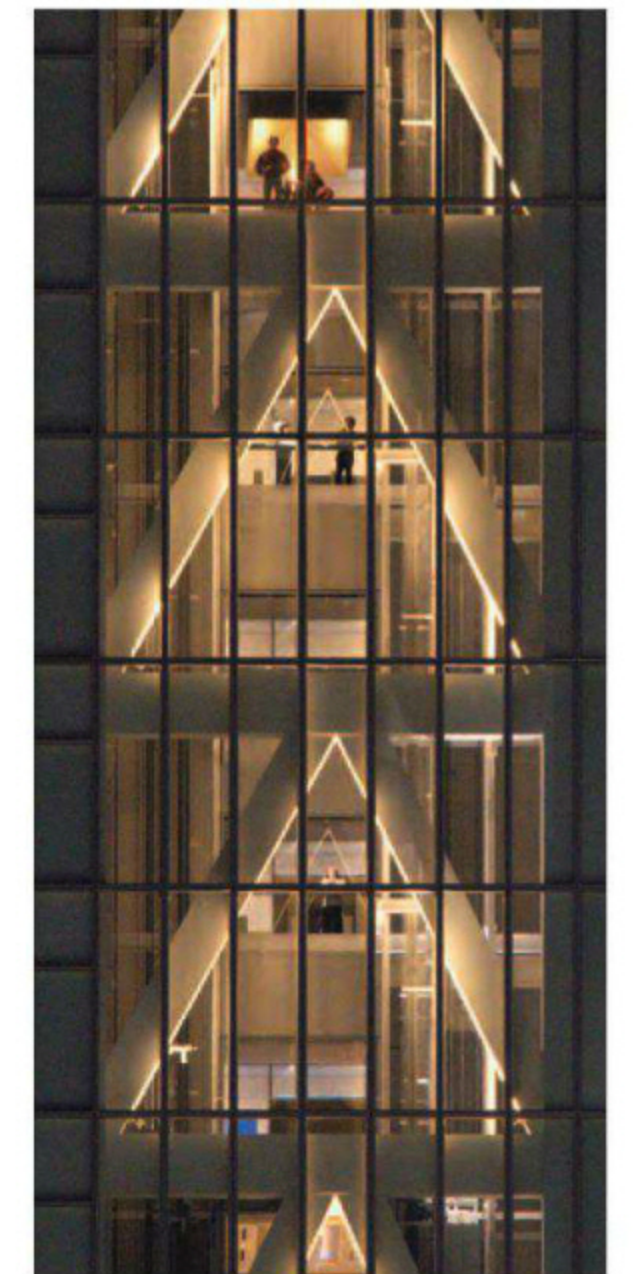
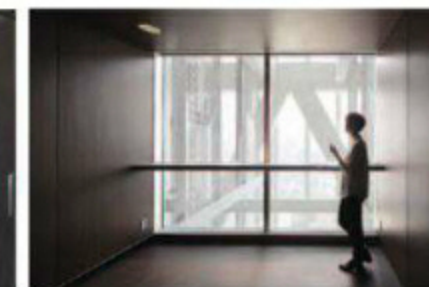


内観。都市風景につながる。

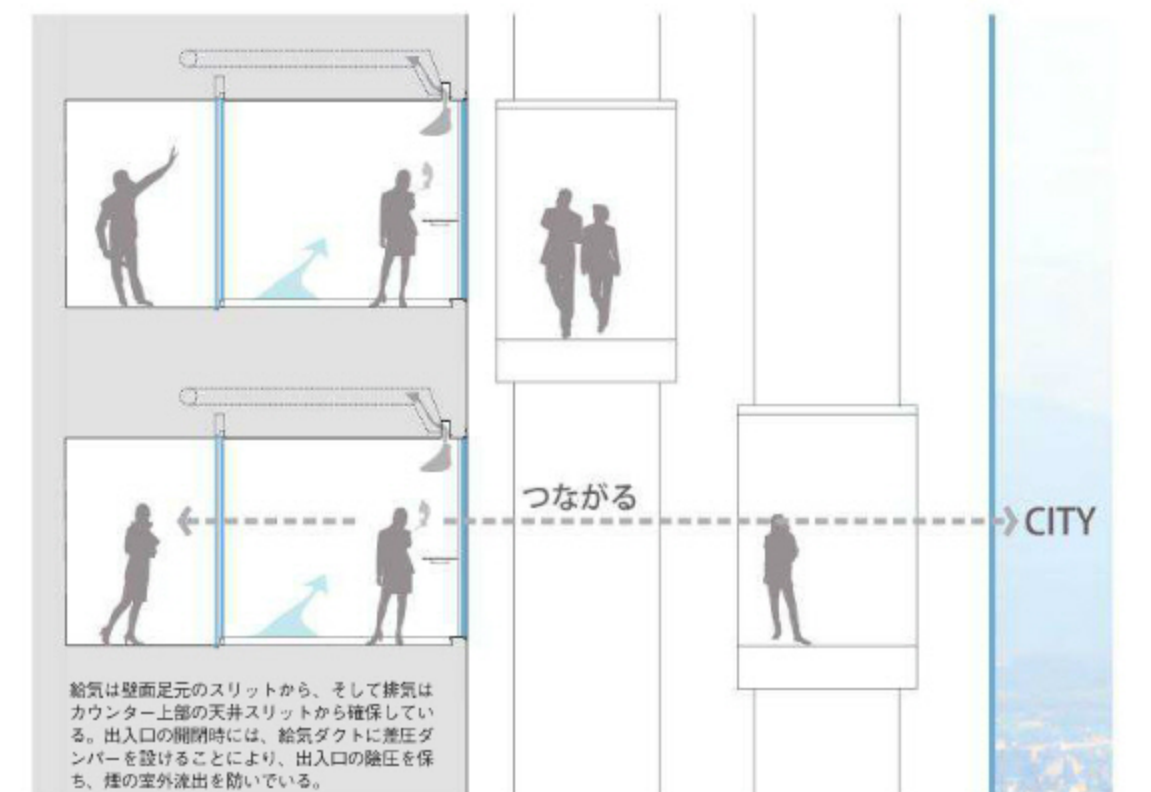
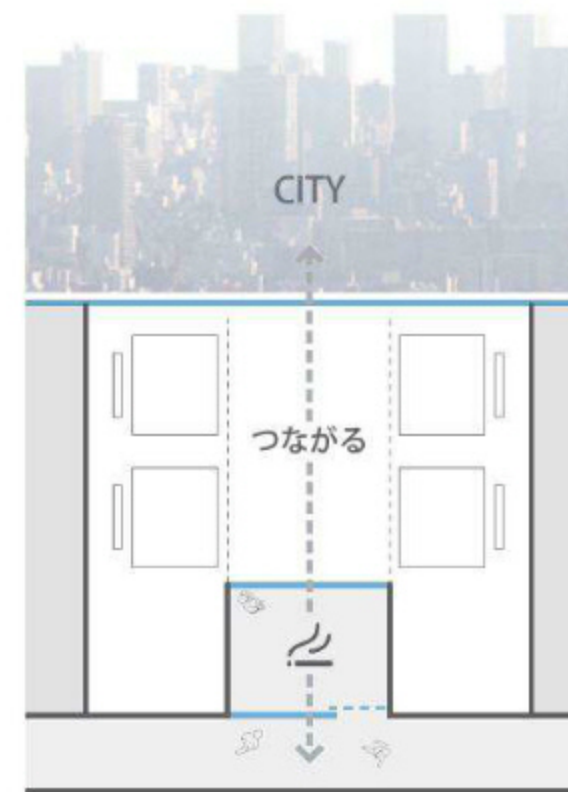
超高層ビルのオフィスで働く人たちのための喫煙室。
高さ100mを超えるエレベータシャフトの吹抜けスペースの向こうに広がる街に開放されている。カウンターに腕をかけるスモーカーたちのシルエットは、透明なガラススキンを通して街に映し出される。上下に行き交うエレベータの光、そして明滅する街の風景は、スモーカーだけでなく、背後のガラススクリーンを歩くワーカーたちにも開かれる。こうして喫煙スペースは、非喫煙スペースと都市をつなぐ。



左3点撮影：Nakamichi Atsushi



夜景。内部の人が浮かび上がる／撮影：Kouta Inokuchi



給気は壁面足元のスリットから、そして排気はカウンター上部の天井スリットから確保している。出入口の開閉時には、給気ダクトに差圧ダンパーを設けることにより、出入口の陰圧を保ち、煙の室外流出を防いでいる。

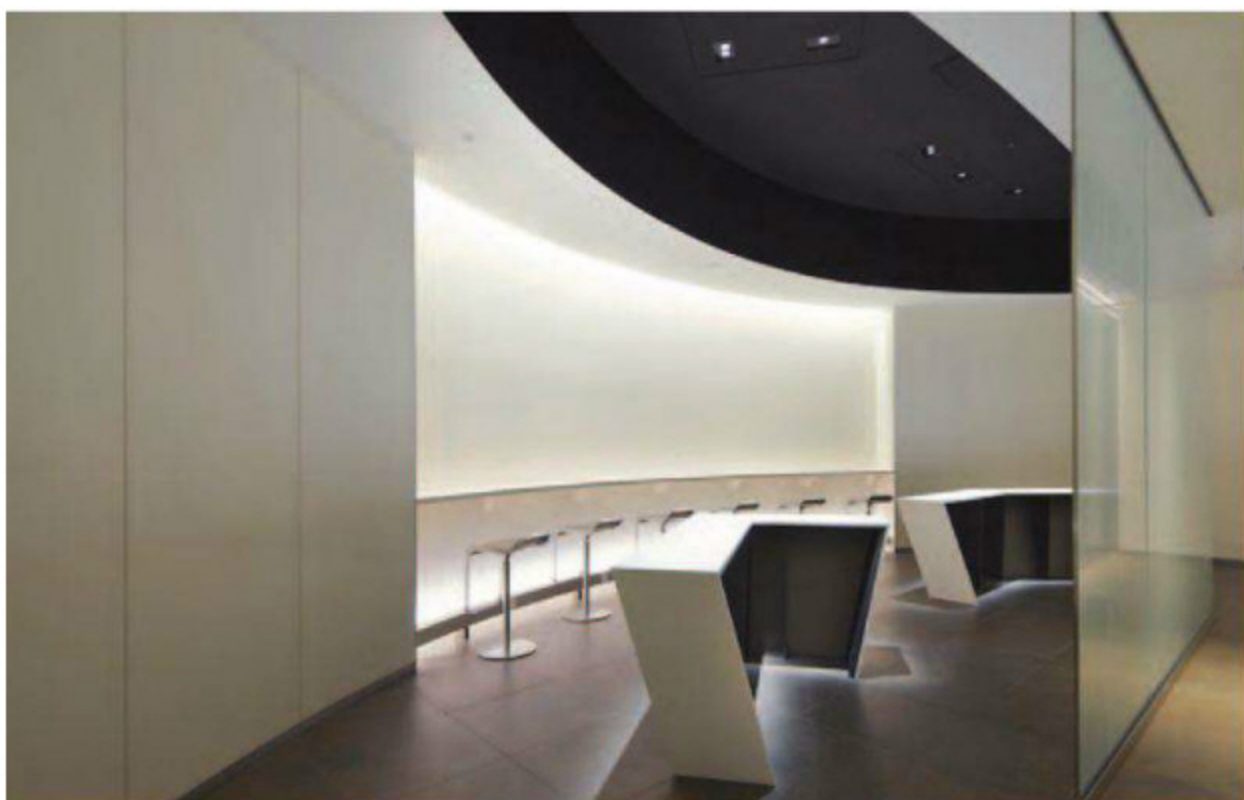
SMOKERS' STYLE COMPETITION 2013



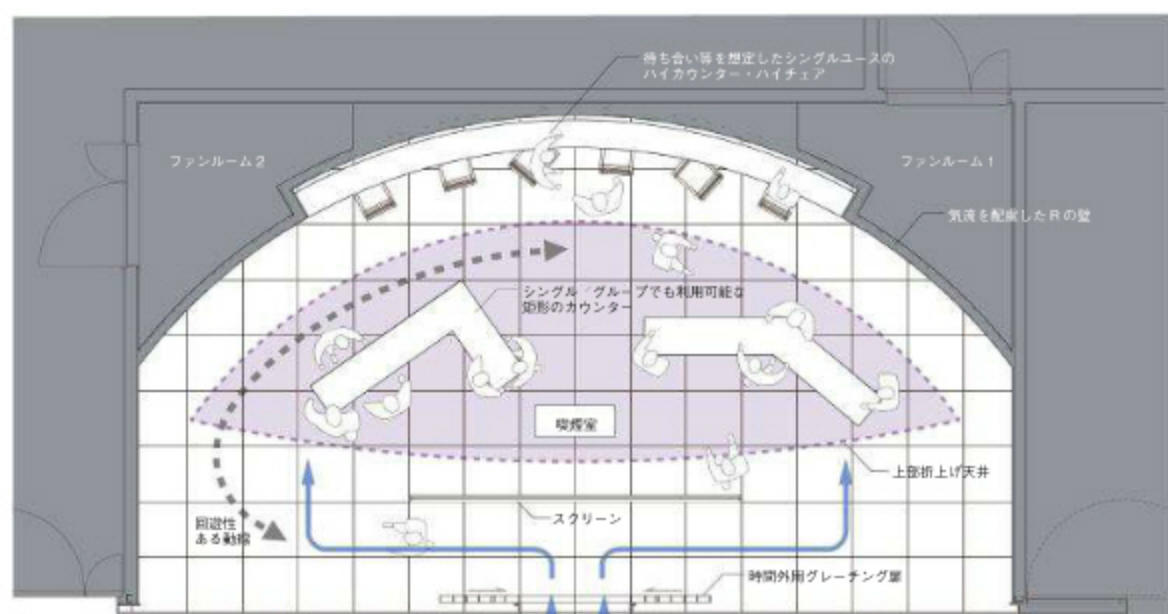
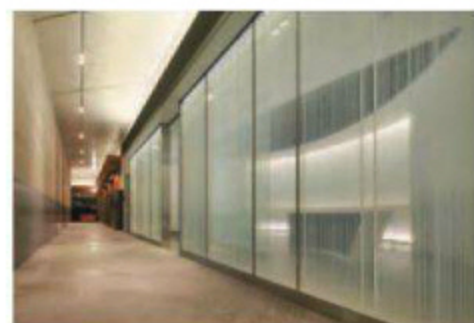
作品例部門 優秀賞

アーバンネット大手町ビル 共用喫煙室

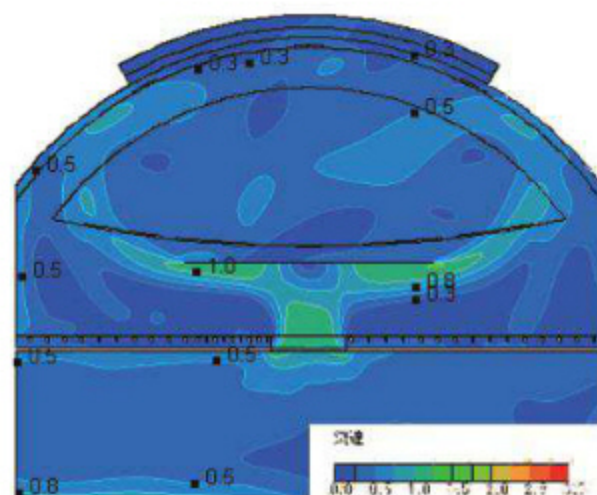
今中啓太 (NTT都市開発) 北野雅也 (NTT都市開発) 井上泰生 (NTT都市開発)



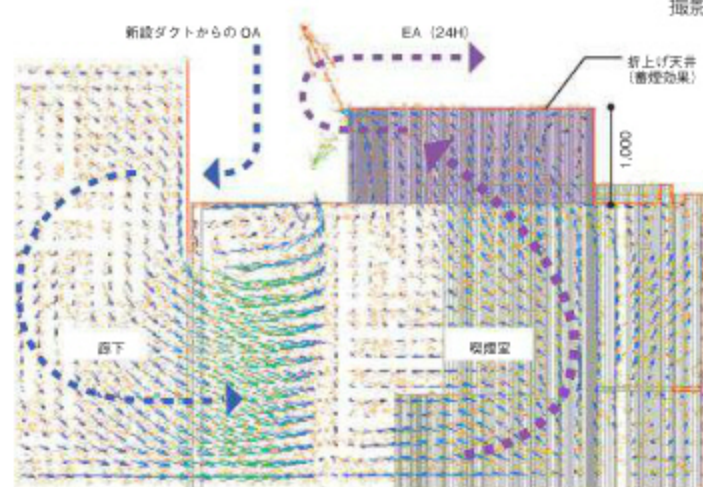
築25年を経たテナントオフィスビルの全館リニューアルの一環として行った喫煙室の改修。
給排気系統の見直し、隣室・廊下への漏気解消・喫煙室内のにおいや汚れなどのテクニカルな更新と共に、喫煙室のイメージを刷新すべく、並びにあるカフェのリニューアルとの調和にも配慮。柔らかな表情の境界面で区切られたモノトーンの室内には特殊な照明効果で演出されたシンプルかつライトウェイトなカウンターやハイチェアを設置。通常のワークスペースとは異なるリフレッシュの場としての演出を行い、喫煙室という機能の延長にある新たな発想、ふとした会話や出会いの場の可能性を高めることをイメージしている。



平面 縮尺 1/100 ドアレス・曲面を用いた室形状。コミュニケーション装置の提案



ドアレス+平均流速1.0m/s
ドアレスによりエアバランスを常に一定とし、煙の流出を防ぐと共に、その流速を入口付近では1.0m/s以上とすることで、利用者の着衣に付着した塵芥を取り除くエアシャワー効果を期待。



排気フード型折り上げ天井
折り上げ天井は排気フードの役割を果たし、においの原因となる粉塵の攪拌を抑え、速やかに排気。室内の快適な環境を実現。



作品例部門 佳作

住友商事 錦町ビル ルーフトップリフレッシュガーデン
茅野秀真 (日建設計) 白井大之 (日建設計) 鈴木健悦 (日建設計) 西大輔 (日建設計)



ルーフトップリフレッシュガーデン平面 縮尺 1/300

賃貸オフィスビルの屋上空間にオフィスワーカーの交流とリフレッシュの場を提供する喫煙スペースを備えた約120m²の魅力ある屋上庭園を設けた。
喫煙スペースは、庭園の多様な緑を眺められるよう、高さ約2mのガラススクリーンで囲み、雨よけの庇を設けている。すべての人が楽しめる場として、庭園にはミニキッチンも配置されている。

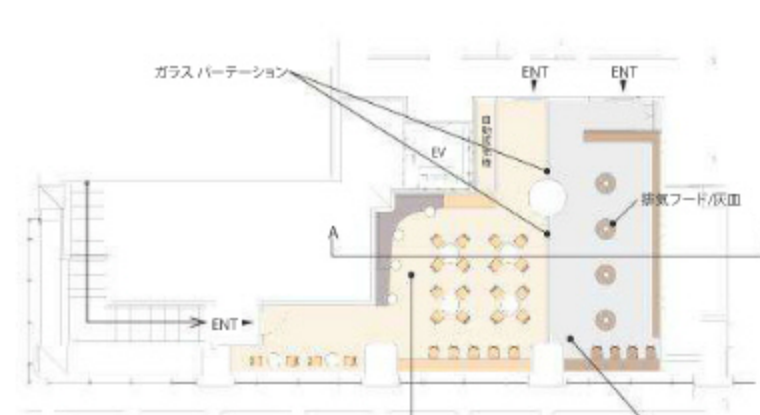


上：ルーフトップリフレッシュガーデンの夜景。
下：右側が喫煙スペース。庇がかかって、たばこを吸わない人の雨宿り空間にもなる。
写真提供：日建設計



作品例部門 佳作

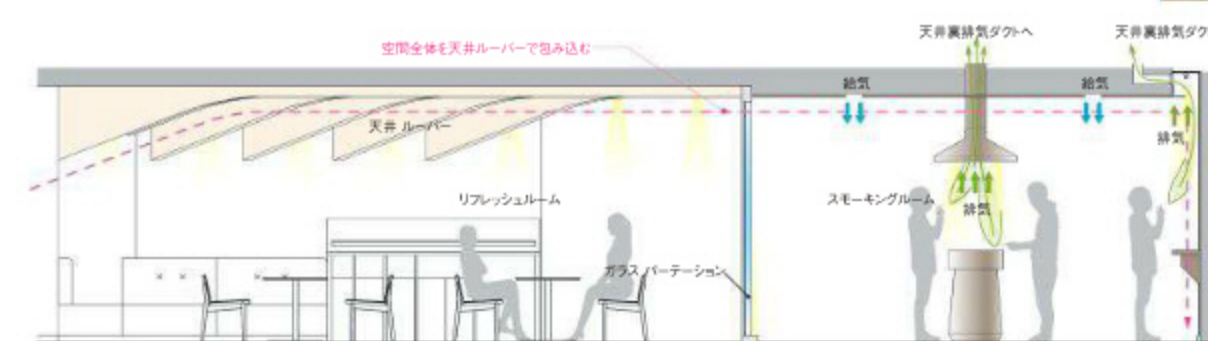
アークヒルズ仙石山森タワー リフレッシュスペース
本多恵三郎 (リーフデザインパーク) 上野卓史 (リーフデザインパーク) 内藤衛 (リーフデザインパーク) 平野文尉 (森ビル) 稲原攝雄 (森ビル)



平面 縮尺 1/400

オフィスや店舗、レジデンス等を有する、地上47階のアークヒルズ仙石山森タワー 高層棟内に設けられたリフレッシュスペース。喫煙者と非喫煙者が一緒に休憩に行く事ができたり、コミュニケーションのきっかけとなる空間。

右：リフレッシュルームからスモークルームを見る。ガラスのパーティションで仕切られてはいるが、奥に気配が感じられる空間がつくられている。／下：スモークルーム内部
写真撮影：リーフデザインパーク



A-A'断面 縮尺 1/100



●プロポーザル部門・審査経過

—— 2次プレゼンテーションを聞かれての皆さんのお考えを聞かせてください。

妹島 それぞれの分煙に対してのアイデアが掘り下げられていて面白いと思いました。中でも私は**三木＋黒田案**の空間に曲面壁を立てる案は実現性があると思いました。提案されたすべての壁を立てるのは難しいかもしれませんが、壁が煙を吸う装置になって、たばこを吸う人と吸わない人が一緒に居られる空間がつかれるように思います。**阿部＋高松案**もそれに似た提案をしています。昔の建物の記憶を継承することからの柱ではなくて、集まる場所としての柱のあり方をもう少し考えた方がよかったかと思います。あと**北潟＋清野＋伊藤案**は、土をもう少し上手に使えば何とかできるように思うのですが、どうでしょうか……。

西沢 僕も**三木＋黒田案**に好感を持ちました。仮に部分的に具現化されたとしても、このアイデアは有効だと思います。入隅のところなどの2、3カ所でたばこを吸えて、あとは通り抜けられる場所にすることもあり得ると思います。もうひとつは、**阿部＋高松案**もよかったです。ただしお店のファサードに喫煙者が群がってしまうので、柱の用途を少し検討する必要があります。

六鹿 私も**三木＋黒田案**を推薦します。壁と手元が近いところで煙を吸ってくると、たばこを吸わない人が横にいてもあまり気にならなそうです。課題があるとすると、それほど大きな空間ではないので、壁を入れ込むと見通しや開放感を確保できるのかということと、風除室本来の機能を果たすものをつくっておかないと、扉の開閉の度に煙が流れ出てしまいます。**阿部＋高松案**も、柱を壁面と同じようにとらえれば、可能性はあると思います。**北潟＋清野＋伊藤案**は議論の余地がありますね。シミュレーションをやったり実験道具を持ってきたり、自分たちで試して、その結果を信じてデザインしていく姿勢はとても共感できました。

佐藤 **森川案**が天井に穴が空いていて空気の流れに無理がなく、面白いと思います。**石井＋和田案**は、断面にアイデアが上手く表現されていて、物の表面に沿っ

て煙が上がっていく効果を狙い、下からだけ空気を吹き出すアイデアは秀逸です。ただ、コスト的なことを考えると難しいですね。煙を強制的に排気していくことと、自然に排気するのとふたつの異なった気流制御を使う難しさがあります。**北潟＋清野＋伊藤案**は、エンジニアとしては是非実現してみたい案です。煙をポジティブに捉えていることが他の案とは違います。実現からいけば分離していますが、魅力的です。

佐伯 私は**森川案**がきちんと煙を分けることができるのなら外への視線の抜けが気持ちよくてよいと思います。**三木＋黒田案**も煙を吸う板が人の居場所をつくって、たばこを吸う人と吸わない人が共存できそうです。**山本案**の煙が渦を巻いて吸われていく案にも魅力を感じました。煙が渦を巻いて吸われるのは技術的に難しいですが、煙が可視化されるとしたら面白いアイデアです(笑)。

井上 **森川案**は実現可能ではありますし、本当に天井に沿って煙が上がっていくのであれば面白い案です。ただ、スケールがよくないと思いました。煙が沿っていく天井が1,500mmしかないと、人がぶつかりますし、快適ではないでしょう。私は、**阿部＋高松案**、**三木＋黒田案**がよいと思いました。両方とも実現可能です。**阿部＋高松案**が提案する歴史的背景はなかなか一般には受け入れられづらいので、柱の機能だけ切り離して提案した方がよいかもしれません。たばこを吸う人と吸わない人がお互いに向き合って座ることができる環境をつくることができたら面白いと思います。**三木＋黒田案**についてはシンプルでよいと思うのですが、壁や床の素材感が重要ですね。**北潟＋清野＋伊藤案**はここでの実現は難しいそうですが、外でたばこを吸うところを植栽と一体としてつくれたら面白そうです。

古谷 今回も実際につくることがひとつのテーマなので、実現可能であることが大切です。前回のSMOKERS' STYLE COMPETITION 2010の具現化した「Café SETSUGEKKA」は、成功例として挙げられていますが、アイデアの段階では現実性はあまりないものでした。ただ、そこから技術者と協働しながら建てた

経緯があって、そういう意味ではこの段階で完成度が高くなくてもよいのです。ただ何か、完成に向かえそうな方向性がほしいと思います。結論からすると皆さんと同じになってしまうのですが、**三木＋黒田案**、**森川案**がよいと思いました。そのふたつは改善は必要でしょうが、実現の可能性があると思います。また、改善の道のが速いのだけでも、面白そうなのが**石井＋和田案**です。天井から吊り下げられている板が、煙を沿わせて吸い込むための装置であるのならば、ゆらゆら揺れる軽いものでもよいのではないのでしょうか。それにまとわりつくように煙りが上がり、その先に排気口がある。下から空調の空気を送り、排気口から空気が抜けるという計画だと面白いです。**阿部＋高松案**は、提案されていた穿つボリュームはいろいろなパターンが可能なのではないのかなと思います。これで皆さんの意見が出そろいました。**三木＋黒田案**が6票、**阿部＋高松案**が4票、**森川案**が3票、**北潟＋清野＋伊藤案**3票、**石井＋和田案**1票です。最優秀案を決めていきたいと思いますが、**三木＋黒田案**に佐藤さん以外の皆さんが投票されています。佐藤さん、ご意見いかがでしょうか？

佐藤 **三木＋黒田案**はミクロ的にそれぞれの板から煙を吸っています。システムとしてマクロとミクロに対応し、もう少し大らかなシステムが織り込まれていたらよかったと思います。実現は可能だと思いますが、私は**石井＋和田案**が空気の流れとしては自然でよいと思います。**西沢** この案は、上のフィンに煙を集めてもらうためには、一種のボラスな吸い込みダクトみたいなものとして設計することになりますよね。わりと難易度が高い気がするのですが……。

妹島 この狭い空間には、この天井からの板と床からの板がちょっと大きすぎる気がしますねか。

古谷 そうですね。捉え方次第なのだと思います。たとえば僕は**濱田案**も考え方を少し変えるとだいぶ面白くなると思います。という風に、それぞれ面白さはあると思うのですが、実現という部分に対して、最も柔軟に対応できそうなアイデアとして、皆さんのお話をうかがっ

審査経過

●作品例部門・審査講評

古谷 最優秀賞の「あべのハルカス SKY SMOKE」は、超高層ビルのシースルーエレベータ近くに簡潔なデザインの喫煙室を縦積みしていて、コンセプトが明快です。

簡単に見えますが、これだけすっきりと喫煙空間を見える場所に配置できたことは、はじめから計画されていることだと思うので、素晴らしいと思います。

佐伯 喫煙空間をフロアの端に配置するのではなく、見晴らしのよいロケーションが確保されていて、かつそこに居る人も風景になっているのが魅力的です。

西沢 喫煙室が各階に配置されているのてたばこを吸いたい時に気軽に立ち寄れます。空間は喫煙者のための場ですが、あえてオフィスコアの抜ける場所に配置され、都市に対して開かれた場となっていることがとてもポジティブな解決になっています。

佐藤 足元から給気して天井から排気する仕組みもシンプルで、無理がなくできています。

妹島 設備ユニットとしても、建築空間としても考えられる。吸っている人も気持ちよさそうに見えます。

六鹿 夜になるとたばこを吸うシーンが、都市風景の一部として現れてくるのもよいですね。

古谷 優秀賞の「アーバンネット大手町ビル 共用喫煙室」は、ビル内のアクセスしやすいところに喫煙室を配置し、非喫煙者にも内部の様子がうかがえるよう配慮しているのが好ましいです。

妹島 喫煙者を隠さない分煙空間になっていますね。

佐伯 インテリアのデザインもきれいです。
佐藤 豊かな空間だと感じられますし、煙の吸い方も合理的です。

六鹿 築25年を経たビルのリニューアルですが、現代のニーズを取り入れながら、見事に分煙空間がつけられています。

西沢 ドアレスで他の空間となるべく分け隔てなくつくり、煙だけをうまく処理する手法が、すこしずつ広がっ

てきている気がします。技術的には難しいことかもしれませんが、汎用性がさらに高まるとよいと思います。

古谷 佳作の「住友商事 錦町ビル ルーフトップリフレッシュガーデン」は、屋上のリフレッシュエリアの一角にガラスで隔てた喫煙空間を設け、視覚的に連続させているところがよかったです。

妹島 屋上での提案はほかにもいくつかあって、今年のひとつの傾向でしたね。

西沢 地上で喫煙者が集まっていると、そこだけ街の中で特殊な場所になってしまいがちですが、屋上だとそうならない気がします。

佐伯 喫煙者と非喫煙者が共に楽しめる空間になっているのではないのでしょうか。

佐藤 与条件として屋上は有利なので、ガラスで区切るだけではない工夫も考えてほしかったです。

六鹿 非喫煙者も屋上に行きたくなる仕掛けがミニキッチンの他にもあるとよいですね。

古谷 佳作の「アークヒルズ仙石山森タワー リフレッシュスペース」は、排気フードがひとつのオブジェのようにも見えてきて面白い空間です。

妹島 オートボックスな手法かもしれませんが、煙が拡散することのない気持ちのよい場所がつけられています。

佐藤 細かい対応をするのではなく、あえて喫煙室にフードを堂々とつくっている、フードはもっと大きくしてもよさそうです。

六鹿 喫煙空間がリフレッシュエリアと一体化してうまく共存できているのではないのでしょうか。

西沢 ガラスパーテーションはスモークではなく、透けていた方がよかったかもしれません。

佐伯 今年もいろいろな方向性で分煙空間が実現し、喫煙者と非喫煙者が共存してコミュニケーションを取れる提案が多く集まっていたと思います。ありがとうございました。(2014年3月10日、日本たばこ産業にて文責：本誌編集部)

SMOKERS' STYLE COMPETITION Trophy —— Eiji Sato



タバコの花 —— ニコチアナ・タバカム

可憐で清楚な美しい花なのに、葉に養分を集めるために、人に愛でられることなく摘みとられてしまう。最後には灼熱の光を放ち微細な紫の粒子となって天に飛ぶ。この可憐で献身的な花をガラス作家の三宅道子さんに作成していただいた、光の入り込む角度により、清純な輝きから豊満で官能的な輝きまで変化する素晴らしい作品となった。赤いリングは至高の輝きを放つタバコの花の最後の姿である。

この作品は賞としてより、真剣にテーマを解いて応募くださった二百数十名の方々の代表として受賞者に受け取っていただいた。(佐藤英治)

作家 三宅道子 Michiko Miyake

香川県出身。カリフォルニア美術工芸大学ガラス科卒業、ロードアイランド・スクールオブデザイン大学院ガラス科卒業。元多摩美術大学ガラス科非常勤講師。日本クラフト展グランプリ受賞、北播磨総合医療センターのガラス瓶とテラゾの壁面製作など国内外で活動中。

新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築
SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010	SHINKENCHIKU:2010
新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築
SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	SHINKENCHIKU:2009	
新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築
SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	SHINKENCHIKU:2008	
新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築	新建築
SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	SHINKENCHIKU:2007	

新建築社の「抜き刷りサービス」が 新建築ON-DEMANDに進化しました！

新建築社では2010年2月より、『新建築』および『新建築住宅特集』を、
作品や記事ごとの小冊子として販売する「新建築ON-DEMAND」を開始いたしました。

この「新建築ON-DEMAND」は、バックナンバーの中のお好きな作品や記事が

いつでもご注文可能となるなど、従来の「抜き刷りサービス」が大きくパワーアップしたものです。^{【※1】}
・

美しいオンデマンド印刷 (POD)^{【※2】}を用い、
特定の記事を50部以上必要とされる方に、リーズナブルな価格でスピーディにお応えします。

読者の皆さまの教材として、また掲載作品に関わられた皆さまのご所蔵用に、

さまざまなかたちでご活用いただける、新しいご提案です。



【※1】 2005年2月号から現在発売中の前号までの『新建築』『新建築住宅特集』が対象となります
1作品もしくは1つの記事に表紙を付けた形式です/体裁は中綴じです/ご注文は1作品・1記事単位で、50部以上より承ります
作品・記事によってはご提供できないものがございます
誠に勝手ながら、「新建築ON-DEMAND」の開始に伴い、従来の「抜き刷りサービス」は廃止させていただきます

【※2】 微妙な色合いは雑誌と異なる場合がございます

写真の「新建築ON-DEMAND」はサンプルです。実際の製品と同じ紙・印刷方法を用いておりますが、掲載作品は実際の製品とは異なります

詳細とご注文方法は、http://bit.ly/sk_ondemand をご覧ください。

DESIGN PRODUCTS

HPL天板とソリッドウッド天板が選択可能に ジャン・ブルーヴェによる「EM Table HPL/Solid Wood」

hhstyle.comはヴィトラ社の「EM Table HPL/Solid Wood」を発売。ジャン・ブルーヴェによって1950年頃に開発され、構造的に力がかかる部分ほど太く、強い形状に設計されている。2013年に新しいバージョンとして発表された「EM Table」は、HPL（強化プラスチック）天板と、無垢材のソリッドウッド天板から選択が可能になった。HPL天板は濃いカラーリングとマットな粉体塗装が特徴で、ソリッドウッド天板はナ

チュラルオーク、スモークドオーク、アメリカンウォールナットから選べる。

hhstyle.com 青山本店
tel. 03-5775-1112
<http://www.hhstyle.com>



写真はHPL天板。サイズ:w1,800 / 2,000 / 2,200 / 2,400 / 2,600xd900xh740mm。価格:271,000～720,000円(税別)。

アルネ・ヤコブセンがデザイン 「GRAND PRIX™」ウッドレグ仕様が復刻

フリッツ・ハンセンの専門店「REPUBLIC OF FRITZ HANSEN STORE AOYAMA / OSAKA」はアルネ・ヤコブセンがデザインした「GRAND PRIX™（グランプリチェア）」ウッドレグ仕様の店舗展示と販売を開始した。1957年のミラノ・トリエンナーレでグランプリを受賞したことからこの名が付いた。セブンチェアやアントチェアなど、ヤコブセ

ンの代表的なプライウッドチェアの中では、この製品のみウッドレグが採用されていた貴重なモデル。

REPUBLIC OF FRITZ HANSEN
STORE AOYAMA
tel.03-6427-6388
<http://www.republicstore-keizo.com>



サイズ:w500xd500xh805xsh465mm。価格:カラードアッシュ（9色）67,000円～、ナチュラルウッド オーク(左写真) /ウォールナット(右写真) 75,000円～(税別)。

深澤直人氏がデザイン アレッシィ「Cha」

アレッシィは深澤直人氏がデザインした「Cha（チャ）」を7月に発売予定。ケトル（やかん）とティーポットの要素を融合させ、茶こしが付属する。内容量900mlの本体はステンレス製で、蓋とハンドルには熱防止のための樹脂加工が施されている。底は強磁性ステンレスで、IHを含むあらゆる熱源に対応。転倒時に湯こぼれがないように、蓋は本体にぴったりはまる設計になっている。

アレッシィショップ青山
tel.03-5770-3500
<http://www.alessi.jp>



サイズ:190x143xh220mm。価格:25,000円(税別)。

フリッツ・ヘニングセンのデザインを復刻 カール・ハンセン&サン「Heritage Chair」

カール・ハンセン&サンはデンマークの家具デザイナー、フリッツ・ヘニングセンが1930年代にデザインし、彼の代表作とも言える「Heritage Chair（ヘリテージチェア）FH419」を復刻して発売した。背やアームレストの優美な曲線は、フランスの帝政様式や17世紀の英国家具から影響を受けており、完成度の高いフォルムと機能を追い求めて

デザインされた。張り地はファブリック（写真）または皮革から、脚はオークまたはウォールナットから選べる。

カール・ハンセン&サン フラッグシップ・ストア
tel.03-5413-5421
<http://www.carlhansen.jp>

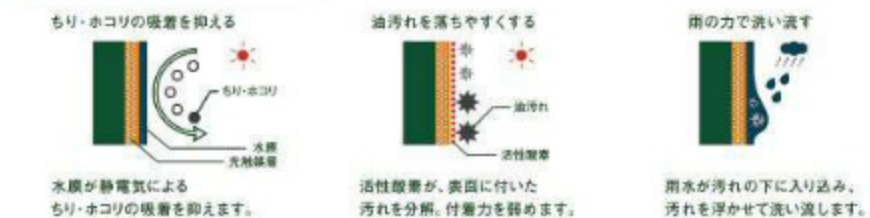


セットで利用できるフットレストもある。サイズ:w760xd950xh1,020xsh410mm。価格:488,000円～(税別)。

施工性が向上した外装用光触媒塗料 「ハイドロテクトカラーコート ECO-HG」

TOTO（株）は外装用の新しい光触媒塗料「ハイドロテクトカラーコート ECO-HG」を発売。同社の光触媒技術「ハイドロテクト」のセルフクリーニング（防汚）効果により、建物のきれいな外観を長く保つことができる。光触媒を含む上塗り塗料を改良したことで、塗装作業は同社従来品より1工程少ない3工程となり、一般塗料並みの施工性を実現した。ホワイトカラーを中心に、艶無しの30色を揃え、平滑仕上げ、さざなみ仕上げ、玉ふり（吹き付けタイル）仕上げなど、定番のテクスチャーが選択できる。

セルフクリーニングのメカニズム



同社従来品より抑えた。アクリルシリコン塗料に近い価格を実現。参考価格（材工設計価格）：2,800円／㎡（300㎡以上、定価代・下地調整代・経費等別途。既存塗膜のある建築系サイディングに既存テクスチャーを生かす仕上げで塗装した場合、税別）。

TOTO（株）
0120-03-1010
<http://www.toto.co.jp>

お手入れ、収納・作業性、デザインがさらに進化 システムキッチン「サンヴァリエ〈アレスタ〉」

（株）LIXILはスタンダードクラスの新たなシステムキッチン「サンヴァリエ〈アレスタ〉」を発売。フードの中に入る油分を約9割ブロックし、ファンの手入れを不要にした「よごれんフード」を新たにラインアップ。汚れの溜まりにくい「くるりん排水口」のごみかごに、さらに抗菌コートを施し、清掃性を向上させた。また、キッチンに入らずにダイニング側からの家事参加をサポートする「対面キッチンユニット サポートカウンタータイプ」を新しく提案した。



45色の扉カラーと、10種類の取手を組み合わせ、多彩な組み合わせが可能。価格：648,000円～（I型、w2,550×d650mm、扉シリーズ：グループ1、税別）。

（株）LIXIL / サンウエーブ
0120-190-521
<http://www.lixil.co.jp>

複数タイプのカギに対応 「スマートドア」が進化した「NEWポケットKey」

YKK AP（株）はリモコン仕様の「ポケットKey」や非接触カードとなる「カードキー／シールキー」など、複数タイプのカギに対応する玄関ドア向け電気錠「NEWポケットKey」を搭載した新築用の「スマートドア ヴェナート」を5月1日に、リフォーム用を6月2日より順次発売する。「NEWポケットKey」では新機能として「おサイフケータイ」や「楽天Edyカード」もカギとして使えるなど「スマートドア」のさらなる進化を図っている。



参考価格：「スマートドア ヴェナート NEWポケットKey」（新築向け）、S04デザイン、D4仕様、片開き363,000円。「リフォームスマートドア ヴェナートRD NEWポケットKey」、S14デザイン、D3仕様、親子611,000円（組立施工費等別途、税別）。

YKK AP（株）
0120-72-4134
<http://www.ykkap.co.jp>

機能面にすぐれ、色鮮やかなファブリック クリエーション パウマン「ヘルスケアコレクション」

スイスのファブリックメーカー、クリエーション パウマンは「ヘルスケアコレクション」を発売。カラーセラピストと連携して、癒しを主眼に置いて色を選んだ。機能面でも繊維内に固着させた銀イオンによる抗菌に加え、防炎、防汚、撥水などの加工が施された商品を取り揃えており、60℃での洗濯も可能。上質で色鮮やかなファブリックは同社の特徴で、本製品はクリニックやリハビリテーションセンター、養護施設、老人介護施設での使用に最適。



写真は重なり合う大きな楕円が描かれたヘルスケアコレクション「ELLIPSO（エリプソ）」生地幅：2,900mm、リピート：タテ3,000×ヨコ2,900mm、価格：22,300円／㎡（税別）。

クリエーション パウマン ジャパン（株）
tel.03-5423-5036
<http://www.creationbaumann.jp>

フルハイトドアに機能性をプラス ペットドア「Full Height Caro」

室内ドア専門メーカーの神谷コーポレーション（株）はフルハイトドアに機能性をプラスしたスタイリッシュなペットドア「Full Height Caro（フルハイトカロ）」シリーズに大型犬用をリリースした。これによりS、M、Lの3サイズ展開となり、猫やチワワなどの小型ペットから、ゴールデンレトリバーや秋田犬などの大型犬に対応する。



神谷コーポレーション（株）
tel.0463-94-6203
<http://www.kamiya-yokohama.co.jp>

ポリカーボネート製でペットにやさしいライトフック（視察窓）は、不要な衝撃には外れるように安全に設計されている。価格は要問い合わせ。

約1,000点収録の壁紙見本帳 サンゲツの「2014-2016 リザーブ 1000」

（株）サンゲツはさまざまなシーンで幅広く使用できる壁紙の新見本帳「2014-2016 リザーブ 1000」を発刊。カラーとテクスチャーにこだわった「織物調」、「石目・塗り調」に加え、トレンドの「木目調」への注目を高める見本帳構成とした。旅先の雰囲気を感じる「リゾート」や新感覚の「カワイイ」などのカテゴリによるアイテム提案も充実。



写真は「カワイイ」スタイル、RE8030・8052の施工例。全点F☆☆☆☆認定品。収録点数：997点。価格帯：1,000円／㎡（施工費別途、税別）。

（株）サンゲツ
tel.052-564-3111
<http://www.sangetsu.co.jp>

鋼管杭トップ・プレートジョイント工法 鉄骨造の柱と杭を一体化する「ECS-TP工法」

（株）三誠は、精緻に計算された上部構造物と不確定要素の多い地中の基礎とをシンプルに、かつ強く接合するトッププレート・ジョイント工法「ECS-TP（エクス・ティーピー）」工法を開発した。独自の「G-ECS PILE」上端にプレートを工場溶接し、直接上部構造物に接続する。コンクリート基礎を排したことで低コスト・短工期を実現し、鉄骨建物に限らず、看板基礎など多様な使用方法が可能。



写真は上部構造物（柱）と基礎の結合部。コンクリート基礎、基礎梁がなく、シンプルな構造。

（株）三誠
tel.03-3639-5226 <http://www.sansei-inc.co.jp>

キャン' エンタープライゼズがセメント2次製品 外装カタログと床カタログを発刊

セメント2次製品の製造・販売を行うキャン' エンタープライゼズ（株）は2014-2015外装カタログ「Can'Brick & Can'Stone」および2014-2015床カタログ「FLOOR TILES」を発刊。前者には実物をリアルに再現し、使い勝手のよい製品を多数掲載。後者にはトラバーゼなどの石材やテラコッタなどの焼き物に似せた製品を掲載している。



写真は「Can'Brick & Can'Stone」A4判、84頁。「FLOOR TILES」はA4判、44頁。

キャン' エンタープライゼズ（株）
tel.044-433-5001
<http://www.can-net.co.jp>

4ジャンルの住宅エクステリアカタログ 四国化成工業が「EXnavi PRO」を発行

四国化成工業（株）は住宅エクステリアの各商品を掲載した4ジャンルの「EXnavi PRO（エクナビ・プロ）」を発行。同社の総合カタログから「門・塀」、「車庫」、「庭」、「外装材・舗装材」の各ジャンルを抜粋した内容で、据付図や価格表など発注に必要な情報はそのまま掲載している。また、A5判の総合カタログをA4判に拡大しているため、文字と写真が見やすい。



四国化成工業（株）
0120-212-459
<http://kenzai-shikoku.co.jp>

カタログはWebからも閲覧できる。写真は「EXnavi PRO 外装材・舗装材」A4判、116頁。

外付で約3倍の断熱効果 オイレスECOの「サンシャディ ライト」

オイレスECO（株）は外付ブラインド「サンシャディ」に、すっきりしたデザインで操作も簡単な「サンシャディ ライト」を発売。窓の外側に太陽輻射熱をカット（外断熱）するため、室内側に設置された一般のブラインド（内断熱）と比べて、約3倍の断熱効果を得ることができる。ルーバー角度の調節によって、外の風や空気を取り入れながら、外からの視線も遮ることができる。

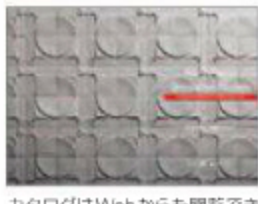


ルーバーは0～90度まで可動。参考価格：187,000円（w1,790×h2,345mm、税別）。*東京理科大学井上研究室にて実測・評価

オイレスECO（株）
tel.03-5435-5464 <http://www.sunshady.com>

施工例を豊富に掲載したカタログ 虎山の「デコラティブ モダンシリーズ Vol.8」

やきものの新しい可能性を追究する（株）虎山（けんざん）はカタログ「デコラティブ モダンシリーズ Vol.8」を発刊。新製品と施工例写真を豊富に掲載しており、色味や素材によりさまざまな表情で建築空間を彩るやきものを楽しめる。やきもののシンプルな立体を連続させ、光や影を効果的に印象付けているのが今回収録した施工例の特徴。



カタログはWebからも閲覧できる。A4判、80頁。

（株）虎山
tel.0572-55-1231
<http://www.kenzan-yakimono.com>

省エネルギー計算サポートソフトウェア 新外皮基準PAL*に対応した「A-repo2」

（株）イズミシステム設計は建築物・住宅の省エネルギー計算サポートソフトウェアの新バージョン「A-repo2」をリリースした。煩雑で分かりづらく、手間がかかるとされる新外皮基準PAL*、設備の一次エネルギー消費量算定等の入力をサポートし、300㎡の住宅から数万㎡の大規模複合ビルまでの省エネルギー措置届出書の作成を完全にサポートする。



（株）イズミシステム設計
tel.03-3868-3126
<http://izumi-system.co.jp>

6月20日注文受付まで、キャンペーン価格350,000円。年間メンテナンス料金45,000円（共に税別）。*左記Web参照

新建築 バックナンバー



12 2013
定価＝本体 1,905 円＋税
表紙＝あいちトリエンナーレ 2013
赤と青の線

●作品16題

紙のカテドラル | Shigeru Ban Architects Europe＋ボランタリー・アーキテツ・ネットワーク (VAN) / Warren and Mahoney
ラクイラ仮設音楽ホール | 坂茂建築設計 Shigeru Ban Architects Europe＋ボランタリー・アーキテツ・ネットワーク (VAN)

京都造形芸術大学 災害支援スタジオ | 坂茂建築設計
イヴェールボスケ | 細部安楽建築設計事務所
セツ浜町立達山保育所 | 高橋一平
豊富町定住支援センター | アトリエブック

構の郭 | 武井誠＋鍋島千恵／TNA
岡山県立大学同窓会館 | 若本弘光＋岡山県立大学若本研究室
サウスウッド | 武松幸治＋E.P.A 環境変換装置建築研究所
豊後高田市図書館 | 益子一彦／三上建築事務所

Silver mountain & Red cliff 洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン・キューブ | k/o design studio＋鹿島建設

●特集：ストラクチャーの再編——既存の構成を変えるつくり方
インタビュー：意味の消去による改築 処女作・散田の家から40数年を経て | 坂本一成

工業部 | 武井誠＋鍋島千恵／TNA
あいちトリエンナーレ2013 赤と青の線 | 青木淳 杉戸洋 (スバイダース)
LOUIS VUITTON MATSUYA GINZA | 青木淳建築計画事務所(外装) Peter Marino Architect イチアンドエイ(内装) LOUIS VUITTON MALLETIER

ハモニカ横丁ミタカ | MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO (協力：芝浦工業大学建築学科原田真宏研究室)

吉祥寺ハモニカ横丁 エプロン | 東京工業大学塚本研究室＋アトリエ・ワン

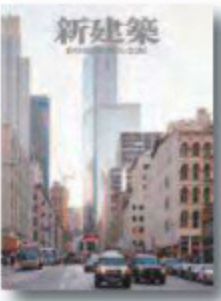
記事：都市の日常にのぞく「揺れる大地」 あいちトリエンナーレ2013レポート | 島田陽

●連載 | 丹下健三生涯100年のメッセージ 第12回(最終回) 日本万国博覧会EXPO'70 (本誌700号)

●NEWS | 黒阿久根市民交流センターの最優秀者に古谷誠章氏が選出／加茂野交流センター建設基本設計の最優先候補者に新居千秋都市建築設計／三春町役場庁舎整備事業設計業務公募型プロポーザルで環境デザイン研究所が最優秀賞に／美波町医療保健センターの設計者に有設計室が選出／横文彦氏が文化功労者に／第57回神奈川建築コンクール入賞作品発表／Build Live Japan2013開催／長谷工コーポレーションが東京都の耐震化アドバイザーに選任／JIAが東京五輪施設に関するアドバイザー機構の要望書を東京都に提出 他

●EXHIBITION | The Great East Japan Earthquake ArchiAid: Rethinking- Reconstruction | 千葉学 Community Week 2013 東京大学、スタンフォード大学、ティロン・マーティ財団による合同ワークショップ | 中村航
木造モダンム展第5回 三里塚教会物語と古村順三展—時代を越えて生き続ける小さな木造教会—/発想の種となるデザイン デザインウィーク@東京2013

●BOOKS | 『a+u』2013年10月臨時増刊『駅まち—体開発—公共交通指向型まちづくりの次なる展開—』書評 | 森俊子
●第48回セントラル硝子国際建築設計競技入賞発表
●月評 | 横河健 桂英昭 大月敏雄 藤原徹平＋上野千鶴子



1 2014
定価＝本体 1,905 円＋税
表紙＝4 ワールド・トレード・センター

●作品17題

4 ワールド・トレード・センター＋51 アスタープレイス＋プロジェクト：新国連ビル | 横総合計画事務所
論文：私とニューヨークそして4 ワールド・トレード・センターへ | 横文彦
ボスボラス海峡横断鉄道プロジェクト | 大成建設共同企業体

瀬戸内海国立公園 宮島弥山展望休憩所 | 三分一博志建築設計事務所(基本デザイン設計) 広島県土木局営繕課(設計)
プロジェクト：(仮称)広島ピースタワー 広島マツダ大手町ビル改修計画 | 三分一博志建築設計事務所
インタビュー：地球の端、動く素材を読む建築 | 三分一博志 Junko Fukutake Hall 岡山大学J-Hall | 妹島和世＋西沢立衛／SANAA

京都造形芸術大学エントランスラウンジ企画展 森の屋根ときのご | 西沢立衛建築設計事務所＋nendo
SunnyHills at Minami-Aoyama | 隈研吾建築都市設計事務所
台湾桃園国際空港第一ターミナル再生＋Omotesando Keyaki bldg. | 園紀彦建築設計事務所

苗栗客家文化園區 台湾客家文化センター | 竹中工務店＋劉培森建築師事務所
セトレマリーナびわ湖 | 芦澤電一建築設計事務所
●特集：キャンパスの再編——個性を生かした大学の更新
東京大学工学部3号館 | 東京大学キャンパス計画室・同施設部 類設計室

同志社大学 良心館 | 同志社大学今出川キャンパス整備設計共同企業体 (東畑建築事務所・類設計室)
大東文化大学東松山キャンパス M-COMMONS | 日本設計
東京工業大学 緑が丘6号館 | 奥山信一研究室＋竹内徹研究室

●+特設計＋総合設備コンサルタント
●新連載 | 都市の再構築——2020年とその先の未来へ | 青山尚 伊藤滋 尾島俊雄 越澤明
●NEWS | 新富山県立近代美術館新築工事基本設計業務プロポーザルで内藤廣建築設計事務所が最優秀者に／浮気保育園舎改築コンペで藤本杜社建築設計事務所案が最優秀作品に／岐阜県北方町新庁舎建築設計プロポーザルで最優秀賞にC+A・武藤圭太郎建築設計共同体 他

●OBITUARY | 追悼 戸田順之助「石橋を叩いて渡る」経営哲学 | 成瀬嘉一
●EXHIBITION | これからの建築理論 Architectural Theory Now 横文彦×磯崎新×原広司 | 川島範久／NUMEN / FOR USE Exhibition 『TAPE TOKYO』／ARCHITECTURE FOR DOGS 犬のための建築展／人間のための建築 建築資料に見る取捨半三／Ninety Nine Failures — The University of Tokyo Digital Fabrication Lab Pavilion 2013／特別講演会「大江宏・考」

●BOOKS | 新建築2013年11月別冊『郊外のサステナビリティ 東急電鉄にみる地域開発とその運営』書評 | 青井哲人／新建築2013年12月別冊『まちをつくるプロセス RIAの手法』書評 | 翼庭伸

●第49回セントラル硝子国際建築設計競技応募要項
●第40回日新工業建築設計競技結果発表
●第3回LIXIL国際大学建築コンペ 竣工レポート
●第4回LIXIL国際大学建築コンペ テーマ会議
●SMOKERS' STYLE SOLUTIONS レポート
●月評 | トム・ヘネガン 大内政男 青井哲人 中島弘貴 (富永美保＋西倉美祝)

【消費税率変更に伴う定価について】

2014年3月31日までに発売された5%税込価格のバックナンバーは、4月1日以降、消費税率引き上げに伴うご負担をいただいております。ご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

2014年4月1日から

定価：2,057円(本体価格1,905円＋消費税8%)

消費税を抜いた雑誌の本体価格そのものに変更はございません。



2 2014
定価＝本体 1,905 円＋税
表紙＝京都の集合住宅 NISHINOYAMA HOUSE

●作品19題

egota house B | アトリエ・アンド・アイ 坂本一成研究室
京都の集合住宅 NISHINOYAMA HOUSE | 妹島和世建築設計事務所
Dragon Court Village | 稲垣淳哉＋佐野哲史＋永井拓生＋堀英祐／Eureka

朱合院 | 浅利幸男／ラプアーキテクチャー
NOIE | YUUA建築設計事務所
西麻布の集合住宅 | SALHAUS
oggi | 山口誠デザイン
月島荘 | 三菱地所設計

下馬の集合住宅 | 小杉栄次郎＋内海彩／KUS＋team Timberize
ソーラータウン府中 | 野沢正光建築工房
●特集：既存への挑戦——リノベーションによる新しい住空間への関わり方
不動産ハウス | 常山未央／mnm

並木橋の連続居 | フジワラテッペイアーキテツツラボ
インタビュー：「住まう力」を増幅する建築のあり方 | 北尾さん一家×藤原徹平
シェアプレイス東神奈川99 | リビタ リライトデベロップメント
skyroom | 成瀬猪熊建築設計事務所

SI REFORM 1 | 木下昌大／KINO architects
カスタマイズURプロジェクト | Open A+R不動産toolbox
京都女子大学×UR 洛西NT団地リノベーションプロジェクト | 京都女子大学生活造形学科＋都市再生機構
慶應義塾大学 日吉寄宿舍南京リノベーション | 三菱地所設計

諏訪2丁目住宅建築計画 | 松田平田設計
●論文 | 関係性のリ・デザイン リノベーションとシェア居住で住宅ストックを活かすための課題と可能性 | 田村誠邦
●特集 | 震災から3年、今だから思うこと 新建築2011年6月号臨時増刊「今、建築について思うこと—3.11を経て—」から今

●連載 | 都市の再構築——2020年とその先の未来へ 第2回都市構造・都市経済・インフラ——2020年以降の都市の姿 | 市川宏雄 森雅志 野田由美子 吉田不義
●NEWS | 内藤廣建築設計事務所が日向市新市庁舎プロポーザルと新徳山駅ビルプロポーザルの最優秀者に／鋸南町都市交流施設公募型プロポーザルでN.A.S.A設計共同体が第1位契約候補者に／手塚建築研究所がニュージールランド Cathedral Grammar School再建の設計者に／安藤忠雄氏がフランス芸術文化勲章のコマンドゥールを受章 他

●EXHIBITION | Japanese Junction 展 | 今村創平／ヒロシマと建築家 東日本大震災復興応援メッセージ | 岡河貴／清水建設作品展 ものづくりの風景／紙と構造 ハンドメイド・ストラクチャ
●COLUMN | メッセージとしての照明デザイン | 押野見邦英

●FOCUS-IN | 感性工学を活用して浴び心地と節水を両立 新しいスタイルのシャワー浴の提案TOTO——エイン・脈動工アイン技術 編集部
●第7回 NISC インバンドデザインコンテスト応募要項
●第4回 LIXIL国際大学建築コンペ 公式facebook連動企画第1回 世界12大学が考える“プロダクティブ・ガーデン——大樹町を五感で味わう空間”

●第27回 建築環境デザインコンペティション入賞発表
●第7回 長谷工住まいのデザイン コンペティション結果発表
●月評 | トム・ヘネガン 大内政男 青井哲人 富永美保 (中島弘貴＋西倉美祝)



3 2014
定価＝本体 1,905 円＋税
表紙＝加須の美容室

●作品16題

●特集：木造の可能性——建築の魅力を引き出す木の使い方
熊本県立球磨工業高等学校 管理棟 | ワークステーション・モードフロントピア・萩湖設計共同体
加須の美容室 | 原田真宏＋原田麻魚／MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO

ピラ仙石原 | 坂茂建築設計
えびの涼風館 新館 | アトリエ9建築研究所＋設計計画研究所
プロジェクト：2015年ミラノ国際博覧会 日本館 | 北川原温 (建築プロデューサー) 石本建築事務所 (設計)

和泉町立三加和小中学校 | 野沢正光建築工房＋一字一級建築士事務所＋UL設計室＋東大森裕子時空間設計室
釜石市半島部全災災害復興公営住宅 大石地区復興公営住宅 | 上関伊・AA特定共同企業体
メゾンドグラムール | 三井ホーム Ren GLAMOROUS (店舗内装)

プロジェクト：赤羽の集合住宅 | 内海彩＋小杉栄次郎／KUS＋team Timberize
尾張大國霊神社御道館 | 木内修建築設計事務所
来迎寺 | 山本想太郎設計アトリエ

記事：木造建築の実験を通して可能性を探る 標準設計手法の確立と普及 | 稲山正弘
プザンソン芸術文化センター＋FRAC マルセイユ | 隈研吾建築都市設計事務所
気仙沼大谷のみんなの家 | Yang Zhao 妹島和世 (アドバイザー) 渡瀬正記 (ローカルアーキテクト)

まなウェルみやぎ | 佐藤総合計画 阿部仁史アトリエ
関・空間設計共同企業体
広州図書館 | 日建設計＋広州市設計院
●特集 | 震災から3年、今だから思うこと 新建築2011年6月号臨時増刊「今、建築について思うこと—3.11を経て—」から今

●連載 | 都市の再構築——2020年とその先の未来へ 第3回：災害から考える都市や地域のあり方 | 牧紀男 室崎益輝 岡田新一
●NEWS | JIA2013年度日本建築大賞に古谷誠章氏と八木佐千子氏の「実践学園中学・高等学校 自由学習館」、新人賞に矢板久明氏・矢板直子氏と長田直之氏、25年賞に竹中工務店らが受賞／aat＋ヨコミソマコト建築設計事務所が釜石市民ホール及び釜石情報交流センター (仮称) 設計業務プロポーザルの最優秀者に選出／山下設計が蘇州独墅湖医院国際設計コンペで1等に当選

●OBITUARY | 追悼 鈴木博之 新しい建築史はつくられたか | 藤森照信／ふたつの「世紀末」の架橋 | 難波和彦
●EXHIBITION | クリスチャン・ボヌフォワ展 | 中山英之／建築輿論 九州×関西 | 川上隆之／AGC studio Exhibition No.9 『STEPS IN THE AIR』展／内藤廣展 アタマの現場 | TORAFU ARCHITECTS 「ここをホッチキスでとめてください。」

●2014年度一般財団法人吉岡文庫育英会奨学生募集要項
●第2回大東建設賃貸住宅コンペ結果発表
●第4回 LIXIL国際大学建築コンペ 公式facebook連動企画第2回 世界12大学が考える“プロダクティブ・ガーデン——大樹町を五感で味わう空間”

●月評 | トム・ヘネガン 大内政男 青井哲人 西倉美祝 (富永美保＋中島弘樹)



4 2014
定価＝本体 1,905 円＋税
表紙＝あべのハルカス

●作品19題

あべのハルカス | 竹中工務店(設計) 竹中工務店＋ベリクラーク ベリ アーキテツツ (外装デザイン)
日本橋再生計画 日本橋室町東地区 | 日本設計 (統括設計) 日本設計 清水建設 (実施設計・工事監理) 園紀彦建築設計事務所 (マスターアーキテクト・デザインアーキテクト)

プロジェクト：日本橋再生計画
院式新館ビル | 野野秀典＋白井大之＋鈴木健児 | 森隆／日建設計
プロジェクト：大手町連鎖型都市再生プロジェクト第3次事業 | 三菱地所
プロジェクト：大手町二丁目地区第一種市街地再開発事業 | 都市再生機構 NTT都市開発

ダイビル本館 | 川島都也＋勝山太郎＋中島上／日建設計
プロジェクト：新宿三井ビルディング海農工研 | KAJIMA DESIGN BWT あすとびあ工場 | 小嶋一浩＋赤松佳珠子／Cat MOZILLA FACTORY SPACE | NOSIGNER

えんがわオフィス | 伊藤統一須磨一清＋坂東幸輔
善根湯×版築プロジェクト 瀬戸内国際芸術祭2013 | 齊藤正×続・塩飽大工衆
モノ：ファクトリー品川ショールーム | 吉岡寛之／iroitoridori 鶴ヶ島太陽光発電所環境教育施設「eコラボるがしま」 | 東洋大学ソーシャルデザインスタジオ＋藤村龍至建築設計事務所

JFEスチール西日本製鉄所 福山本館 | 山下設計＋竹中工務店 甲府市庁舎 | 日本設計・電已・山形・進藤・馬場設計甲府市新庁舎建築設計共同企業体
浅草橋ビル アネックス | みかんぐみサイエンスビルズこまつ | 元倉眞琴／スタジオ建築計画＋伊藤麻理／UAO

新宿労働組合庁舎 | 国土交通省関東地方整備局営繕部 (企画監修) 梓設計 (設計)
●建築論壇 | 環境から建築へ エネナビハウスをきっかけに考える、設備設計のこれまでとこれから | 池田靖史・伊香賀俊治・秋元孝之×川瀬真晴×前真之×田辺新一

●記事 | 都市再編マップ 東京・大塚の再開発プロジェクト
●連載 | これからの建築黎明 第1回「ソフトライト」——技術を結集させたやわらかな光
●連載 | 都市の再構築——2020年とその先の未来へ 第4回：都市におけるビックデータの活用 | 古川久貴 西田亮介 関本義秀 渡邊英徳 西宏章

●NEWS | 坂茂建築設計が富士山世界遺産センター(仮称)設計業務プロポーザルの最優秀者に選出 他
●EXHIBITION | アトリエ・ワン：マイクロ・パブリック・スペース | 谷村仰社／日建設計グループ展 more than creative / トウキョウ建築コレクション2014＋せんだいデザインリーグ 2014卒業設計日本一決定戦 他

●FOCUS-IN | 内装にもキラデコールカラー 屋内木部用水性塗料「キラデコールインテリアファイン」誕生 | 日本エンバロケミカルズ 編集部
●第41回日新工業建築設計競技応募要項
●SMOKERS' STYLE COMPETITION 2013 プロポーザル部門1次審査結果発表

●第4回 LIXIL国際大学建築コンペ 公式facebook連動企画第3回 世界12大学が考える“プロダクティブ・ガーデン——大樹町を五感で味わう空間”
●月評 | トム・ヘネガン 大内政男 青井哲人 富永美保 (西倉美祝＋中島弘樹)



5 2014
定価＝本体 1,905 円＋税
表紙＝上州富岡駅

●作品17題

上州富岡駅 | 武井誠＋鍋島千恵／TNA
東京国際空港(羽田)国際線旅客ターミナル増築 | 梓・安井・PCPJ 東京国際空港国際線旅客ターミナル設計共同企業体 (梓設計 安井建築設計事務所 ベリ クラーク ベリ アーキテツツ ジャパン)

ザ・リッツ・カールトン京都 | 日建設計
ウィーン経済経営大学 | バスアルビテクトール 阿部仁史アトリエ ザハ・ハディドアーキテツツ エストゥディオ カルメン・ビノッシュ ノマドアルキテクトス クラブスタジオ

敦賀駅交流施設 オルパーク | 千葉学建築計画事務所 (デザイン監修) ジェイアール西日本コンサルタンツ (設計)
四万十町本庁舎 | 松田平田設計
AU dormitory 1st phase | 小林一行＋櫻村実美／TERRAIN architects (設計) Plantek Consultants (設計協力)

MaRouの社 長岡造形大学展示館 | 山下秀之＋江尻憲泰
牛窓の食堂「いこい処 美食亭」 | 原田将史／レインボーアーキテツツ (デザイン監修) アイ・デザイン (設計・監理)
逗子市地域活動センター 小坪大谷戸会館 | コンテンポラリーズ

道の駅 なぶら土佐佐賀 | 小川文象／FUTURE STUDIO
ONOMICHI U2 | 谷尻誠・吉田愛／SUPPOSE DESIGN ARCHITECTS
サイクルステーションとりで | 小川達也＋小引寛也／16アーキテツツ＋小石川建築/小石川土木 中村実／オリエンタルコンサルタンツ

日清食品グループ the WAVE | 古谷誠章＋NASCA (デザイン監修) 竹中工務店 (設計)
表参道の立体居 | フジワラテッペイアーキテツツラボ
軀体の窓 | 増田信吾＋大坪克直
辨天堂の新祠 | 石黒由紀建築設計事務所

●建築論壇 | 開かれた公共性 駅をつくるということ | 武井誠
●連載 | 都市の再構築——2020年とその先の未来へ 第5回：まちづくりと新しい都市論 | 初田香成 中島直人 眞野洋介 中井祐

●NEWS | 2014年日本建築学会賞発表——作品賞は「SHARE yaraicho」で篠原聡子氏 他、「明治安田生命新劇場ビル」で菅原二氏、「NBF 大崎ビル(旧ノーニシティ大崎)」で山崎和彦氏 他／坂茂氏が2014年プリツカー賞を受賞／第27回村野藤吾賞に千葉孝子／うめきた2期区域開発に関する民間提案募集における優秀提案決定／平田晃久建築設計事務所の(仮称)太田野北口駅前文化交流施設設計プロポーザルの最優秀者に選出／伊東豊雄氏がトーマス・ジェファソン財団メダルを受賞／佐野正一氏逝去／木密市街地、2020年度までに解消 国交省が首都圏直下地震対策計画 他

●EXHIBITION | 写真からひもとく近現代建築 北九州のディテール展 | 古森弘一／ルドルフ・シュタイナー展 天使の国／A+Sa “Hands-on” Approach展／ブルーノ・タウトの工芸 ～ニッポンに遺したデザイン～／南三陸の今を記憶する 2014.01.01～2014.03.11

●FOCUS-IN | ライフスタイルは変わるか：伊東豊雄 第7回三共リアル建築フォーラム報告 | 編集部
●第28回建築環境デザインコンペティション応募要項
●月評 | トム・ヘネガン 大内政男 青井哲人 中島弘貴 (富永美保＋西倉美祝)

新建築 住宅特集 バックナンバー

2014

1月号

定価＝本体1,905円＋税



【特集】住宅の建ち方

川西の住居／島田陽 批評：門脇耕三 都市にひらいていく家／栗原健太郎＋岩月美穂 批評：五十嵐太郎 石神井公園の住宅／長谷川豪 批評：頼田崇 横浜ホヰズ邸／田中昭成 批評：貝島桃代 ヒュッテ閑馬／上原和 批評：藤木隆男 我孫子の家／堀部安嗣 批評：乾久美子 Bent House／筒井康二 批評：奥山信一 集密の住居／五十嵐淳 GFU／新聞謙一郎 House of Kyoto／満田衛資 批評：畑友洋 袖／川口通正 田尻の家／藤本寿徳 批評：平瀬有人 OZ-HOUSE／向山徹 批評：富森洋一郎

【コラム】私の事務所 飯田善彦

【エッセイ】住宅を読む視線 吉村昭範＋吉村真基

【展覧会】「TOKYO DESIGNERS WEEK 2013」開催 ほか

【活動】ネオビノスタイル 近代建築研究会と共にさまざまな立場から建築を学び伝える 今川忠男

【コンペ】第9回ダイワハウスコンペティション結果発表

2014

2月号

定価＝本体1,905円＋税



【作品】SHIFT／原田真宏＋原田麻魚 G-HOUSE／窪田勝文

阿佐谷の住処／奥山信一

【特集】リノベーション解14題

Fattoria／神家昭雄 煉瓦倉庫の隠れ家―時の継承―／河口佳介 千葉の家／谷尻誠 大野博史 紫竹の住居／小田真平 御所西の町家／森田一弥 ガエまちや／河井敬明 屏風浦の住宅／福田創 シキリの形／青木律典 WEST／刃部寛子＋吉川真理子 RENOVATION M RENOVATION U／武藤圭太郎 屋根型の住宅／富永大毅 世田谷野毛戸建てプロジェクト リノベーション工事／荒木源希＋佐々木高之＋佐々木珠穂 後山山荘―恵竹邸e霧の浦―／前田圭介

【コラム】私の事務所 谷尻誠

【コメント】2013年12月号「住宅白書2013」について 阿部勤

石井智子 東利恵 遠藤政樹 中村拓志 村山徹＋加藤亜矢子

【活動】つくば・おとなりの建築家展 つくばを建築家と家づくりができる街へ 井川一幸

2014

3月号

定価＝本体1,905円＋税



【作品】伊豆の家／萩原剛 大山の小屋／大角雄三 批評：

石井智子 西神野のいえ／赤座伸武 八木の家／谷尻誠 大野博史 批評：長谷川逸子 House Forest／三幣順一 bérét／三宅正浩 石の家／海野健三 かむまた結の家／齋藤史博 Casaさかのうえ／岸本和彦 永山の家／丸山弾 批評：佐藤森 ハコノオウチ 03／石川淳 つつじヶ丘の住宅／松尾直＋松尾由希 白金の家／森清敏＋川村奈津子 Y-HOUSE／田井勝馬

【連載】建築家自邸からの家学び 第14回前編 クレバスの家 真壁智治 法政大学下吹越武人研究室 塩崎太伸 古田陽子 六角鬼丈 六角喜久子 六角美瑠

【コラム】私の事務所 江角俊則

【コメント】2013年12月号「住宅白書2013」について 大西麻貴 藤野高志 久野浩志 荒井清児 山本至 三宅健士朗

【活動】ZA Tokushima House プロジェクト4人の建築家と2人のクリエイターが協働する家づくり

2014

4月号

定価＝本体1,905円＋税



【特集】住宅を支えるつくり手との対話

TH-1／朝倉幸子 深澤工務店／深澤正之 泰進建設／池部泰広 箱屋／松本繁雄 河合建築／河合孝 建築吾原／菅原順二 大同工業／堀口武彦 生田工務店／生田正＋生田美代子

【建築家の現場 10題】鎌倉・T邸／川口通正 山手通りの住宅／三家大地＋森森泰行 アパートメントハウス／河内一泰 鎌倉の分居／若原一貴 彦根の住居／島田陽 花尻の家／神家昭雄 国立の住宅／川辺直哉 等々力の建物／齋藤由和 H小屋／泉幸甫 ワークショップ／川本敦史＋川本まゆみ

【作品】佐藤山荘／浦中徹 Qilin／松島潤平 批評：山崎泰寛 1.8M幅の家／相原まどか＋山崎敏幸 三層に積む／塚田修大

都市のツリーハウス／加藤雅明 キタンジャリ／椎名英三

代々木の家・平塚の家／甲村健一 呼吸する家／彦根アンドレア

【連載】建築家自邸からの家学び 第14回後編 クレバスの家 真壁智治 法政大学下吹越武人研究室 辻琢磨 六角鬼丈 六角喜久子 六角美瑠

2014

5月号

定価＝本体1,905円＋税



【作品】那須のティピ／中村拓志 弟の家／久野浩志

H-house／井上玄 Grass Cave House／塚田真樹子 ツナ／仲條雪＋横関和也 Gear House／藤吉秀樹 aoihana／伊藤孝紀 論考：伊藤孝紀

【特集】なぜプロトタイプか——建築家がつくる量産住宅

タマまちや・タマロツシア／塚本由晴＋貝島桃代 特集論考 1：塚本由晴 casa nord・casa natura／五十嵐淳 casa plus

／吉村靖孝 casa citta／長谷川豪 特集座談会：五十嵐淳×吉村靖孝×長谷川豪×眞木健一 特集論考 2：葛西潔 木箱・

深大寺 56/100／葛西潔 特集論考 3：難波和彦 箱の家 142・箱の家 146・箱の家 147／難波和彦 特集論考 4：松隈洋

特集記事：ゼロ・エネルギー・ハウスの標準化——「エネマネハウス2014」5大学と企業による実証 CITY ECOX／東京大学 慶應型共進

化住宅／慶應義塾大学 母の家2030／芝浦工業大学 ルネ・ハウス／千葉大学 Nobu-Nobi HOUSE／早稲田大学

【コラム】私の事務所 堀尾浩

2014

6月号

定価＝本体1,905円＋税



【特集】密集市街地の住まい

特集論考：北山恒 鳥越の住宅／三浦慎 批評：中川エリカ 六甲道の家／神原節子 批評：青井哲人 s-house／柄沢祐輔

批評：古谷利裕 出町の町家／森田一弥 須栄広長屋／竹原義二＋小池志保子 安藤さんの家／西久保敏人 鹿野の家／大塚聡

【作品】勝田台のいえ／永山祐子 Spiral Window House／竹口健太郎＋山本麻子 調布・角地の住宅 鎌倉・台地の住宅／塩崎太伸 カイツカイブキのある家／神家昭雄

凹と凸／小島光晴 祥雲荘／光嶋裕介

【連載】家をつくる図面 第4回 楊造家の自邸 内藤多仲郎 設計 木子七郎 構造設計 内藤多仲 設計協力 今井兼次

企画・監修 伏見唯＋図面表現懇親会 インタビュー 内藤多四郎 山田眞 聞き手 本橋仁

【コラム】私の事務所 家成俊勝

【エッセイ】住宅を読む視線 徳井正樹

【活動】atD——関西建築家で作るフラットな議論の場 荒谷省午

季刊

THE JAPAN ARCHITECT

ja

バックナンバー

A4変型判／和英併記

バックナンバーのお取り寄せは最寄りの書店へお申し込みください。

下記ウェブサイトからもご注文いただけます。

<http://www.japan-architect.co.jp>

株式会社 新建築社 東京都千代田区豊が関3-2-5 豊が関ビル17階 〒100-6017

tel. 03-6205-4380 fax. 03-6205-4386

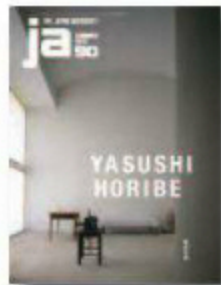


93号 2014 春号

篠原一男

Kazuo Shinohara

本文 144頁 定価本体¥2,381＋税
戦後日本を代表する篠原一男の特集号。処女作から遺作まで全55作品を「新建築」[JA]発表当時の掲載写真、図面、本人の作品解説と共に紹介します。巻頭には、篠原一男とメディアの関係をのったタイムラインも収録。



90号 2013 夏号

堀部安嗣

Yasushi Horibe

本文 152頁 定価本体¥2,381＋税
建築家、堀部安嗣の最新作品集。デビュー作から最新作まで27作品を手書き図面やスケッチと共に見逃します。内藤廣による評論のほか、堀部安嗣による書き下ろしエッセイ5題を収録。



87号 2012 秋号

乾久美子

kumiko inui

本文 144頁 定価本体¥2,381＋税
建築家、乾久美子の初の作品集。デビュー作から現在進行形の最新プロジェクト、コンペティション案を含めた全26作品を収録。膨大なスケッチノートから選りすぐり、リファレンスとスタディの過程を丁寧に紹介しています。



92号 2014 冬号

建築年鑑

World Yearbook 2013

本文 128頁 定価本体¥2,381＋税
今回から世界建築年鑑としてリニューアルしました。日本と海外の建築39作品を掲載。阿部仁史による巻頭エッセイの他、海外建築家のエッセイ2本を収録。世界の多様な流れと日本の建築の可能性をさまざまな側面から見通す1冊です。



89号 2013 春号

木の建築

Wooden Architecture in the Expanded Field

本文 128頁 定価本体¥2,381＋税
最新の木造建築の特集号。建築家が木という素材に現代的なしなやかさを見だし、さまざまな再評価を試みた、23のプロジェクトを掲載。持続可能性、風景の構築、木の素養の拡張など、木造建築の幅を広げる動きをご覧いただけます。

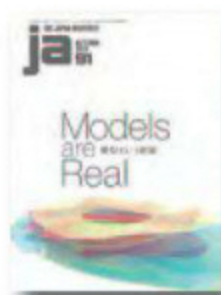


86号 2012 夏号

新世代建築家

からの提起

本文 128頁 定価本体¥2,381＋税
日本の新世代建築家の特集号。26歳から35歳の建築家18組を、完成した建築と進行中のプロジェクトを通して紹介します。彼らの暮らしと働くこだわりと多様な個性をのり、建築のフィールドを拡張する可能性をご覧いただける1冊です。



91号 2013 秋号

模型という建築

Models are Real

本文 128頁 定価本体¥2,381＋税
建築家の構想力が結晶した模型の特集号。素材やスケール、目的もさまざまな47の模型を紹介します。巻頭には1949年以降の模型と建築家を振り返る日本建築小史を掲載。過去から現在まで設計の道具を超える模型の魅力と可能性を探る1冊です。

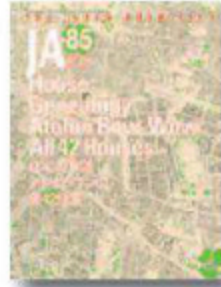


88号 2013 冬号

建築年鑑

Global Perspectives on Japanese Architecture

本文 128頁 定価本体¥2,381＋税
2012年の日本の建築を振り返る34作品と、グローバルに俯瞰するエッセイやインタビューを8本収録。社会や都市の状況などと相関して導かれる現在の日本の建築のキーワードと共に、日本の建築の可能性を見ていただける1冊です。



85号 2012 春号

住宅の系譜

アトリエ・ワンの全42住宅

本文 128頁 定価本体¥2,381＋税
塚本由晴、貝島桃代によるアトリエ・ワンの住宅の特集号。1990年以降最新まで全住宅42作品をすべて掲載。書き下ろしのスケッチは現代の住宅を取り巻くあらゆる環境からの要請をどのようにアイデアに取り込んだか、今一度建築家が自らの建築を検証したものです。

新建築6月号 広告目次

広告掲載企業

あ

浅野金属工業	12
荒川技研工業	7

き

菊水化学工業	表 4
共進金属工業	225

し

シェルター	1
シェルターコンベ告知	16

す

スガツネ工業	2
--------	---

そ

総合資格	表 2
------	-----

た

大光電機（コンベ告知）	18
大日技研工業	6
タキヤ	5

と

東京工営	7
------	---

に

日新工業	10
日本たばこ産業（コンベ結果発表）	194 ~ 207
日本パーツセンター	8

の

ノザワ	225
-----	-----

は

パナソニック	24, 25
--------	--------

ひ

ヒガノ	6
-----	---

ふ

藤森鉄平石	224
-------	-----

み

三井ホームコンポーネント	224
--------------	-----

り

LIXIL 住生活財団（コンベ結果発表）	31 ~ 34
----------------------	---------

わ

YKK AP	表 3
--------	-----

求人広告掲載企業

く

クリーク・アンド・リバー社	224
---------------	-----

ふ

ブランテック総合計画事務所	223
---------------	-----

は

坂茂建築設計	224
--------	-----

新建築社ホームページ <http://www.japan-architect.co.jp>

「新建築」資料請求方法について

個人情報保護法に基づき、読者の皆様の個人情報保護を図るため、「新建築」では新建築社ホームページ上に広告掲載企業を閲覧できるようにし、各企業のホームページをリンクいたしました。資料請求をされる際は、各広告掲載企業へ直接資料請求を行ってください。

定期購読のご案内

新建築社では、毎号読者の皆様へ直接お届けする、便利な年間定期購読のお申し込みを受け付けております。日本全国どこでも、送料無料でお届けします。

定期購読料

2014年4月1日から新税率により、新価格に変更となっております。

新価格*



新建築

毎月1日発売

12冊（1年間）
消費税、送料込

24,684円



住宅特集

毎月19日発売

12冊（1年間）
消費税、送料込

24,684円



ja THE JAPAN ARCHITECT

3、6、9、12月10日発売

4冊（1年間）
消費税、送料込

10,284円

※消費税を抜いた雑誌の本体価格そのものに変更はございません。

■お申し込み方法

〈インターネットでのご注文〉
新建築オンラインショップからクレジットカード決済にてお申し込みができます。
詳細については、下記ホームページをご覧ください。
<http://www.japan-architect.co.jp>

〈FAXでのご注文〉
ホームページからダウンロードした申込書(PDF)で受け付けております。
ご記入の上、弊社年間定期購読係までお送りください。
詳細はホームページをご覧ください。お問い合わせください。

※送料は無料です。
※特別定価の際の差額は弊社で負担いたします。
※臨時増刊、別冊は年間定期購読には含みません。

〈書店でのご注文〉
最寄りの書店にてお申し込みください。
※お申し込み方法は書店によって異なります。書店に直接お尋ねください。
※定期購読の取り扱いを行っていない書店もありますのでご注意ください。

■お願い

□お申し込みの際は、ご希望の購読開始の月号を明記してください。
□複数年でのお申し込みは受け付けておりません。購読のご継続については、弊社より別途ご案内いたします。
□お届け日は、地域によって書店での発売日より遅れることがあります。あらかじめご了承ください。

■個人情報利用目的について

年間定期購読のお申し込みの際に弊社が取得したお客様の個人情報は、定期購読に関する必要な業務(発送、継続のご案内等)の他、新刊や各種イベント(建築セミナー、展示会等)のご案内、また、お客様個人を識別できない統計資料の作成等に使用することがあります。なお、弊社が取得したお客様の個人情報は、弊社の内部資料として厳重に保存、管理し、第三者に提供することはありません。

●お問い合わせ

〒100-6017
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号 霞が関ビルディング17階
株式会社 新建築社
年間定期購読係(平日 9:30~17:30)
TEL: 03-6205-4380 FAX: 03-6205-4386



このごろの建築は、後発開発途上地域に面白い作品が集中している。たとえば、ディエド・フランシス・ケレ、TYINテーネステュエ、ピーター・リッチ、ホルメン・ロイター・サンドマンらの作品は、アフリカ各地に建てられているし、ルーラル・スタジオの作品も米國南部の辺地にある。もちろんそうした——大部分が貧しい者のために建てられる——作品には、多額の予算を投じて売れっ子建築家に設計させた大作よりも、高い志があり、思うに、そうした素朴な建物の方が往々にして優れた建築であったりする。

ル・コルビュジエは1923年刊の『建築をめざして』の中で、よき建築をつくるには、文化的意義のある作品をつくるのと同様に淘汰が必要だと書いている。ちなみにその淘汰とは、「除去であり刈込であり、清掃であり、本質を裸にむき出し、はっきりさせることである」（吉阪隆正訳）。彼の言う「本質」とは、ミニマリズムのことではない。今日ミニマリストと形容されがちな抽象的なホワイトキューブよりも、ル・コルビュジエの建築は、そのフォルムといい質感といいずっと官能的である。むしろ彼に言わせれば、建築にとって最大の難題は、必要なものだけを相手にいかに美と意味を引き出すかという点にある。ウガンダのAU Dormitory 1st phaseは、「本質の建築」の好個の例である。その構内にはひとつとして不要なものがない上に、すべて——全体配置に始まり煉瓦壁に埋め込まれた小さな照明に至るまでのことごとく——が、必要を満たしつつ極力簡潔にデザインされているので、



地元の未熟な作業員でも苦勞なく建てることができる。実際のかつ周到に練られているばかりか、すばらしく美しい。それというのも、軽さと重さ、薄さと厚さの対比の妙があるのと、異素材の組み合わせによってテクスチャーに濃淡が付けられているからだ。この建物には、スウェーデンのシーグルド・レヴェレンツや吉村順三の晩年の作にも似た、人の心を捉えて離さない力強さがある。

上州富岡駅にもやはり異素材が組み合わせられて

るが、ただしその量産煉瓦は、ウガンダの地産の焼成煉瓦のざらついた質感とは異なり、鋼材とのコントラストが目立たない。延床面積からすれば決して広くはない駅舎だが、頭上高くに張り出した鋼製キャノピーが駅前広場の幅いっぱいには伸びて駅舎らしい体裁を整え、さらに足下ではまちまちな高さの煉瓦壁が鉄骨柱に纏わり付くように巡らされて、各種用途に当てられた空間を囲い込みつつ、そのヒューマンスケールの具体性が巨大なキャノピーの抽象性を和らげている。煉瓦は古代から伝わる材料であり、そのディテール（笠石、防湿層、窓台など）にしても、煉瓦の劣化や表面の汚れを防ぐために何千年もかけて編み出されてきたものである。だがそうしたディテールは、煉瓦壁に「昔ながらの」佇まいを帯びさせてしまう。設計者はそれを避けるべく、煉瓦壁をシート状に扱った。しかし、壁天端に笠石がないために、煉瓦壁の耐久性に影響が出る恐れはあるかもしれない。

京都に現代風のイディオムを用いて大型建築をつくるのは、並大抵のことではない。敷地は鴨川のほとりにあり、（条例により）和風の屋根勾配が定められている上、施主がホテルならば古都京都らしい風情でもって宿泊客を迎えなければならない。京都には近代和風建築のまねごとのような建物が溢れているが、しかしザ・リッツ・カールトン京都は、アルミと真鍮とステンレスの外装をまといながらも、伝統建築の現代版としての品位と美しいプロポーションを備えている。設計者はこうした現代的な材を隠そうとすることで、むしろその精巧さを種々のテクスチャーや自然素材と対比させることでファサードに重層性を与え、結果的に京都の古建築が持つ味わいと精神を蘇らせている。

今から2500年前に古代ギリシアの詩人アルキロコスは、こう綴った。「狐は多くのことを知っているが、ハリネズミは大事なことをただひとつ知っている」（狐はあれこれの巧妙な策を講じて身を守るが、ハリネズミは全身を針玉状に丸めて身を守る）。この狐／ハリネズミの例えは、芸術家や思想家、政治家、スポーツ選手、はたまた一般人を分類する際にもよく使われる。元来私の好みは、狐型の建築である。時にはその思想が矛盾していようが、多様な思想によっ

て何重にも理論武装をした建築を、じっくりと読み解いていくのが好きなのだ。だから、ハリネズミ型のミースの作品よりも狐型のル・コルビュジエの作品に惹かれる。

そんな私も、たまに**躯体の窓**のようなデザインを目にすると、うっかり宗旨替えしそうになる。この作品は見事なハリネズミ型である。ただひとつの単純かつ強力な意図によってつくられている点

が、とても素敵だ。AU Dormitory 1st phaseにはテクスチャーの軽妙な変化があったように、この**躯体の窓**にも、既存の重厚な外壁のざらりとした質感に、しなやかなカーテンやサッシの線が錯綜するガラス壁が対置されている。だが千葉とウガンダとは気候が異なる。シングルガラスでは、夏場は熱がこもりそうだし、冬場は結露の問題が生じかねない。たとえばガラス壁を利用して「トロンプ壁^{*}」式に省エネを図る手もあるが、そうはなっていないし、レールの長期耐久性も懸念されるところだが、それでも私はこのデザインの思い切りのよさ、独創性に脱帽する。

（翻訳：土居純）

^{*}外壁の外側をガラスで覆い、そのガラス越しに太陽熱を壁に吸収して蓄熱し、建物内に熱を放出する方式。



今月号では、「駅」に関するさまざまな試みを興味深く見させていただいた。そもそも「駅」は多くの人びとが行き交う、特別な意味を持った空間である。その中でも鉄道の「駅」は、街の顔、都市の玄関口であり、古今東西を問わず数々の名建築を生み出してきた。同時に鉄道の「駅」は、その街で生活する人びとにとってごく日常的に利用する空間であるがゆえに、映画などで数々の「出会いと別れ」のストーリーが描かれ、やはり「駅」の中でも別格の存在である。そして近年、この人びとが自然に集まるというポテンシャルに注目して、鉄道駅をコアとした街づくりが各地で試みられていることはおおいに歓迎すべきことである。



上州富岡駅は富岡製糸場が世界遺産登録を目指すことをきっかけに、私鉄の小さな駅を、街の人、この地を訪れる人びとの新たな交流拠点とすべく計画された建築である。階段状になった煉瓦積み目の壁面が作り出す凹みやコーナー、自然発生的に配置された煉瓦積み目のベンチなどは、人びとがそこに滞留し交わる行為を発生させる。高く持ち上げられたフラットな大屋根は世界遺産を擁する街の新たな構えをつくり出していると同時に、持ち上げることで駅の反対側の景観までも取り込み、駅を挟んだ街を視覚的に連続させる効果を併せ持っている。跨線橋がなく、線路を平面で横断するホームへのアプローチもこの駅の軽やかな存在感に大いに役立っている。駅の煉瓦積み目がそのまま駅前の広場や歩道に展開されていくことで、この駅が心理的にも物理的にも街の中に繋がっていきだろう。富岡市のこれからの街づくりが楽しみである。

敦賀駅交流施設 オルパークは駅に隣接した交流施設として計画された。旧敦賀駅に対する市民の愛着がきわめて強く、煉瓦倉庫を模した案から現在の形に至ったという経緯は、これも「駅」の日常性ゆえと大変興味深く思う。駅前の広場がどのように整備されていくのかは分からないが、街に繋がる駅前広場側と線路側を透明なガラススクリーンとしたことは上州富岡駅の大屋根と同様に、駅の両側

を視覚的に結び付ける手段として正解だと思う。内部のふたつの箱状空間は旧敦賀駅を即座に連想させるとは言い難いが、街づくりのコアとなるこうした交流施設にとって、その形が由来する歴史的背景は大いに意味がある。この箱状の空間は機能的にも有効であり、ボックスを覆う温かみのあるスギ材とそのほかのモノクロームな素材との対比も魅力的である。将来でき上がる新幹線駅との関係が誌面から窺えないのは残念であるが、駅を利用する人びとが大いに行き交い、多くの「出会いと別れ」が生まれることでこの施設の魅力は高まると思う。

四万十町本庁舎も鉄道駅をコアとして計画された交流施設と言ってもよいであろう。駅に隣接して線路敷きを挟んでふたつの庁舎を配置するというユニークな試みは、同時に線路敷きにより分断された中心市街地を解消することが、この街の大きな課題であることを物語っている。ふたつの庁舎が線路敷きを横断する自由通路によって繋がれることで、この課題に対処しようとしているが、この計画で残念なのは、鉄道駅そのものが持つ「日常的に人びとが行き交う空間」というポテンシャルを利用できていないことである。もちろん庁舎にも多くの人が訪れるが、鉄道駅に訪れる人びとの日常性とは異なる。3階レベルを結び自由通路の高さはエレベータが利用できるとはいえ、心理的な距離感も大きい。さまざまな事情があることは理解するが、橋上駅として駅の跨線橋を改装して自由通路が整備できなかったのであろうか。あるいは駅と庁舎の関係をもっと密なものに、いっそ駅の改札を取り込んでしまうようなことができなかったのであろうか。どうしても疑問が残ってしまう。この自由通路がどのように利用されていくのか、今後が気になる。

「道の駅」はその地方の物産や特産物を道行くドライバーに紹介、販売すると同時に街の人びとの交流の場機能を併せ持つ施設として全国に展開されている。その建築も地域の特性を表現したものが多く、道の駅 なぶら土佐佐賀も同様の施設であり地産地消のスギ材三次元トラスと市松状に配されたトップサイドライトと壁の開口部の組み合わせは、軽やかかつリズムカルで快い。道の駅はその性格上、街なかに配置されることはなく、自動車でのアプローチが前提となり、その目的も限定的となるため、鉄道駅とは違い「人びとが日常的に行き交う

空間」とはなり得ないであろう。同じ「駅」でも性格はかなり違ってくる。

一方で「自転車の駅」は交流の場として捉えると街の活性化に繋がる施設として、そのポテンシャルは意外に高いのではないかと思う。サイクルステーションとりでは鉄道駅に隣接する施設であり、ほとんどの人が鉄道駅を訪れる人と同じ目的でアクセスする。ペDESTリアンデッキに繋がる屋上広場や、ピロティ空間、自転車利用者のためのロッカールームやインフォメーションなど、さまざまな仕掛けがあり、日常的に自転車を利用する多くの人にとって、自然に生まれる交流の場として期待ができる。ガラスの搬送シャフトと亜鉛メッキ鋼板の外装、ステンレス鏡面の軒裏など、メカニカルなデザインも成功している。

ONOMICHI U2も「自転車の駅」と捉えることができる。こちらは鉄道駅に隣接はしていないがその代わりに宿泊施設を持ち、街の外から多くのサイクリストを呼び寄せると同時に、街の徒歩圏に位置することにより人びとを日常感覚で呼び込むことができる施設となっている。海沿いの倉庫の改装であるが倉庫の大きな空間を残し、その内側に鉄骨によって新たな場をつくり新旧を対比させた空間は、商業施設としてもハイレベルなデザインに仕上がっている。このようなサイクルステーションは今後、街の活性化施設として大いに役割を果たすであろう。

最後に取り上げる「空の駅」である空港は、上述の「駅」と決定的に違う要素を持つ。それは一方通行の「駅」ということであり、往く人、帰る人が交わらない。これが空港という「駅」に課せられた絶対条件である。人びとの交わりが制限されることで、鉄道駅が持つような、その場の「出会いと別れ」を生む空間の魅力は成り立ちにくい。とはいえ、東京国際空港（羽田）国際線旅客ターミナル増築は、今回の増築で発着枠が3万回へ拡大、直接航空機に搭乗できるスポットが8スポット増強され、これに伴い、旅客ターミナルビルは年間旅客数700万人から1,250万人へと拡張された。アジアの国際拠点空港としての機能が整いつつあり、2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックでは、この「空の駅」を通して世界中から多くの人々が日本を訪れ、各地で「出会いと別れ」が生まれるであろう。この「空の駅」がより広い意味で、世界の人との交流の架け橋になることを期待する。



青井哲人

4月号が「経済×政治」をテーマにした号だったとしたら、5月号は、「公共性」の現代的スペクトラムを考えてみるための事例集と読める一冊だ。だが、筆者が（アジアの友人たちと話している時の感覚と比較して）日頃感じるのは、今日の日本が、経済、政治、権力、公共……といった言葉を日常の中で銜いなく使える国でないらしいということだ。たとえば、「建築の政治性」なんて学生に話をしようものなら、「建築はたしかに政治と関係することが多いけど、建築が政治的だとしたら何だか悲しい」というような、にわかには信じがたい反応が少なからず帰ってくる。政治とは、複数の異なる立場があることを前提にそこに何らかの合意を生み出していくアート（わざ・すべ）のことで、政治的でない方がキレイなんてものではない。「公共性」は逆に漠然と絶対的にキレイなので、これまた会話にならない。実際、たとえば公共空間の「公共性」は、その場を生かしている「経済」（利害を交換する仕組み）とそれに応じた「政治」（異なる立場から合意を立ち上げる術）と無関係にはあり得ない概念である。

表紙を飾った**上州富岡駅**（武井誠＋鍋島千恵／TNA）



は、その構えが何やらあっけらかんとして捉えどころがなく、巻頭の論文（建築論壇）「**開かれた公共性 駅をつくるということ**」も、決して論理的な文章とも感覚に訴える力のある文章とも言えないが、公共空間の政治性をめぐる設計者らの不思議な感性の所在を感じさせるところがある。政治学の斎藤純一は、公共性の主な意味合いを3つに大別する（『公共性』、岩波書店、2000年）。すなわち、（1）official（国家が法や政策を通じて国民に対して行う活動に関わる）、（2）common（特定の誰かではない多くの人びとに共通の価値に関わる）、（3）open（誰もがアクセスを拒まれない空間や情報などに関わる）であるが、ここで興味深くかつ重要なのは、これらが「互いに抗争する関係にもある」ということだ。国家がその活動の透明化を拒むのは（1）と（3）の対立であり、公園を皆のものにするために商行為や球技が禁止されるのは（2）と（3）の対立だ。こうした機

微に対して、空間や技術の形式化の力をどう使うかが問われるだろう。上州富岡駅のプロジェクで設計者らが目指したのは、駅施設から街、さらにはより大きな景観へとシームレスに繋がる連続的な空間の実現である（可能なら地面のレベルがそのままプラットフォームのレベルに一致するような厳密な意味での地平駅が理想だったのではないかと思われる）。ここから迫り出してくる公共性とは、まずopen、すなわち限定のないアクセシビリティを建築化することだったと考えられる。そのために、駅と歩道とで地面の舗装を区別せず、ファサード（たとえばガラス面）を消し、駅名板を極力小さくし……これらを覆う大屋根も（建築的には締まりを失って散漫に失ってしまうのではないかと思われるほどに）十分な高さに持ち上げることで、おそらくその下部に空間領域を定義することを避けようとしている。これらは結局、行政や鉄道会社のofficialな論理が守ろうとする境界線を消すことだ。実際、駅と歩道の間に富岡市と上信電鉄との所有・管理上の境界線が走っていることを踏まえれば、舗装の連続とファサードの消去は設計者らの思想を端的に示すもので、他方の大屋根はできるだけ大きな面的拡がりを持たせたいがゆえに土地の境界線とほぼ輪郭が一致しているのだが、それゆえにこそ十分な高さにまで持ち上げて屋根が管理区分を暗示してしまうことを避けているのだろう。

H・ルフェーブルやD・ハーヴェイらマルクスの流れを汲む空間論者たちは、空間が商品化していく趨勢を論じ、私たちはいかにして資本主義と官僚制が空間にもたらす均質化や分断に対抗し、その裂け目を見付け、そこに自律的な共同性の圏域を開き得るかと問う。しかし、日本の地方中小都市では今や資本や行政による空間的浸食・管理の圧力はなく、むしろ弛緩してぼんやり拡がった空間の上に所有・管理の境界線が怠情に残されている。こうした場所では、支配の及ばぬ余白をいかに守るかというよりも、むしろ他者の流入（ここでは富岡製糸場の世界遺産登録が背景にある）を契機に、あけすけなほどの開放的空間を生み出して人びとを包容してしまう作法が確かに有効かもしれない。また地方では、行政も民間会社も顔の見える地域社会のメンバーとしてcommonの範疇をつくっている面もあり、それらが自身のofficialな外貌を相対化しつつ手を取り合う動きはきっかけさえあれば比較的進みやすいのかもしれない。

ただ、大きな開放的空間がただちに自由な混在と交流を担保するわけではない。あの空間に参加する人びとはその出自や目的や性質によって多様で

あり、その振る舞いにも差異化がある。差異の消去・排除（均質化）を招けば、むしろ異質な人びとの間のcommonな価値としての公共性は崩壊する。大屋根の下に、閉じた「下屋」やいろいろな開放性を持った「場所」が人間的スケールで分節されているのは、差異の併存・許容を意図したものだろう。こうした公共性をめぐる微妙な拮抗に緩やかなプラットフォームを与える役割は、大屋根よりもむしろ地面のシームレスな煉瓦舗装に与えられている。このことは、富岡製糸場の木骨煉瓦造からの連想において開発された、鉄骨の柱に巻き付くような煉瓦の壁がこれと一体化され、さらに人びとの振る舞いの差異を尊重する足回りの家具的な造形にまで連続させられていることから間違いなからう。この「鉄骨煉瓦造」は、構法のシステム性という観点からすれば、テクニク（結構的なもの）とステレオトミー（切石積的なもの）とを相互依存的に同居させ、形式的な純化よりも複合性や曖昧さをもたしている。いずれにせよ全体に独特の無頓着さと繊細さが同居したような不思議な作品であり、周辺環境と合わせて現場で見たいと強く思った。

このほか、**AU dormitory 1st phase**（小林一行＋榎村実美／TERRAIN architects）、**牛窓の食堂「いこい処 美食亭」**（ユージー・技研、原田将史／レインボーアーキテツツ、アイ・デザイン）、**厨子市地域活動センター 小坪大谷戸会館**（コンテボラリーズ）など



に、やはり公共性を空間＋技術の問題に架橋する魅力的なアプローチが見て取れるように思われた。

連載：都市の再構築については、以前の月評（本誌1402掲載）で、新自由主義を歓迎するかのような大御所の都市計画復権宣言ばかりでよいのか？と書いたが、今号は読み応えがあった。とくに、「まちづくり」の語を掘さぶりつつ、そこにとどまる術を見出そうとする真野洋介氏の記事には惹かれた。差異を消す全体化の力に抗しつつ人びとを交わらせ、新たな余地を生み出し、創造的に広げていくような動きをつくるという議論にも、従来のまちづくりが暗黙に寄りかかっていたウェットな公共性のバイアスを解きほぐすような批判的構築力を感じさせる。



西倉美祝
中島弘貴
富永美保

僕は「公共（性）」という言葉がどうもニガテだった。「空間の公共性」を議論したり考えたりすると、いつも場所や地域といったものに縛られてしまう感覚があり、「公共（性）」の議論はどこか、建築の可能性を大きく見落としているように思えたのだ。そんな中、新建築5月号を手にした。誌面の建築物を通して改めて、「建築の公共（性）」を眺めてみると、かつての自分がどれだけ早合点していたかを痛感した。「建築の公共（性）」が持つ可能性はもっと幅広いものだ。それは地域との関係だけで語られるものではない。コンビニのように、場所に無関係な存在であることが逆に公共性をかたちづくる場合もあるし、柱や屋根といった建築の部分が自律して公共性を持つこともある。そもそも、建築が積み上げてきた知見・営み自体も公共（性）と呼べるのかもしれない。今回はそんな「建築の公共」という言葉から発想できる建築の可能性を模索してみた。

上州富岡駅は武井誠さんから直接お話を伺ったこともあり、完成をととても楽しみにしていた。この建築では煉瓦という小さな単位に建築的意図が込められている点に興味を引かれた。ベンチからピロティ構造、さらには舗装まで、煉瓦が色々な役目を担いつつスケールを横断している姿は、思わず触れて遊びたくなるような親しみを建物全体に与えている。煉瓦は持ち運びがしやすく、積んだり加工したりと、誰もが参加できる可能性を想像させてくれるため、建築に携わってない人でも親しみがわきやすいからだろう。今回**上州富岡駅**で使われている煉瓦の大きさ255×122×70mmは、構法的側面やベンチの寸法から逆算して決まっているとのこと。そこから計算できる重さは約4kgと、通常規格（210×100×60mm、2kg強）よりやや大きく少々重いが、女性でも持ち運べくはない、といった規模だ。積木の家（設計：相田武文、本誌7910）にも似た、積木遊びのユーモアとも言えるかもしれない。こうした「素材のモビリティ」が今後、時間を超えて変化・波及していく可能性を与えている。一方で、こうした煉瓦へのこだわりは、建築をデザインする側の「頑張りすぎ」なのかもしれない。僕ら3人の議論においても、特注煉瓦を大小スケールで一貫して利用していることが息苦しさを生んでいるのではという意見が出た。たとえば駅前広場も、この面積（約600m²）があるのなら他の煉瓦や煉瓦以外

の舗装を使う、あるいは外灯やベンチなどといった他のデザイン要素と組み合わせることで、歩く場所やとどまる場所、温かい場所や涼しい場所といったメリハリをつくれるはずだ。街と建築の連続性は単純な視覚の話だけではない。土木でできることや、インテリアでできることを抑圧してしまわないような柔軟な姿勢が、特に今後の街並みのデザインで求められるように思う。

同じ煉瓦建築というだけで単純な比較はできないのだが、**AU dormitory 1st phase**では、ひとつのコンセプトや概念が先行せず、煉瓦が建築的にできることと、空間などの建物全体ができることが上手い具合に分業している姿が印象的だ。煉瓦にできることとしては、現地では莫しいものとされていた煉瓦という素材の魅力を、部外者である日本人の視点から逆輸入し、ひとつひとつ色や形を選別していることや、それに伴って建物に対する施工者の理解が深まること、煉瓦を通したコミュニケーションが発生していること、あるいは煉瓦を含む技術の更新などがなされていることなどがある。空間ができることとして、煉瓦という素材と半ば切り離された構造体によるバーコード状の空間形式がある。とても単純な形式だが、それぞれの場所にさまざまなスケールや開放感、空気環境ができて上っており、シンプルさ故の全体に分かりやすさもある。建築にまつわる各部分・各側面が、それぞれで可能なことをノビノビと達成しつつ、それでいてお互いの可能性を阻害していない、そんな「大らかさ」がある。それは、煉瓦、風土・気候、文化、人びとに対して先入観抜きに体当たりで挑まざるを得なかった状況が可能にしたことなのだろう。材料にできることと、空間にできること、あるいはランドスケープでできること、各分野が無理して役割を担おうとせずに、それぞれのモノの可能性に対して真摯に向き合うことが、デザイナー個人の意図やひとつのプロジェクを越えた大らかさを持つキッカケなのかもしれない。

表参道の立体居では、「偏差のあるスケルトン」を設計する点に興味を持った。特に、スケルトンの偏差をデザインする上で根拠のひとつとしている寸法などに楽しげな「余裕」のようなものがあるのが印象深かった。バルコニーや室内の壁柱の裏側など、住みながら手を加えてみたくなるような余裕が随所にちりばめられている。議論の中でも家具の置き方を色々なパターンで試したくなる平面だという意見が出たが、住まい手が自ら「こんな家具も置けるな」「あんなスペースの分け方もできるな」と住みこなしてみ

特記なき場合、218～221頁の撮影：新建築社写真部

たくさせるこの「余裕」は、ひとつのプロジェクで要求される与件を越えて、まだ見ぬ多くの人びとや状況を巻き込む可能性を持つはずだ。また、こうした愛着を持てるスケルトンの知見が広く蓄積されていけば、スケルトンが並ぶ街の風景も、より生き生きとしたものになりそうだ。

躯体の窓は、ファサードと躯体部分の「緊張感」が面白い作品だ。通常躯体に従属しているはずのファサードが、ここでは自律しており、内側から近付くと外部の要素なのに、外側から近付くと層を横断した構成になっているので内部の要素としても捉えられる。その時の動きや立ち位置によって、境界面であるファサードの意味がフワフワと変化し、いつまでも緊張感の中で漂っている。空間をつくる時に、あえて不安定な箇所、思考し続けなくてはいけけない緊張をつくることで、結果、常に不確定な要素に向き合おうとする姿勢を生む、という公共性もあるのかもしれない。

以前山形県の山寺にて、崖の上にある小さな祠を目にしたことがある。そこに建物があるだけで、空間体験はなくとも、「あの祠からは素晴らしい風景が広がっているのだろうな」という、自己没入的な体験を得た。**辨天宮の新祠**においても、空間体験がないからこそ、この場所の過去と未来に訪れる人や風景はどんなものだろうか、といった想像を働かせるキッカケをつくることができると感じた。この祠では各寸法がゆがめられており（通常の建築をそのまま相似形で縮小した形ではないということ）、また、縁の高さを、視線と外陣の屏の高さが合うように設定している。そうしたスケール設定によって、建築の建つ場所に自己を投影し、環境と一体となる効果を生んでいるように感じた。この祠には切迫した現状の社会事情に応える力は皆無だが、参拝者がその場所の成り立ちや、決して体験することができない遠い未来や過去に思いを馳せる（キッカケをつくる）ことができるとしたら、「自己投影」も忘れてはいけない確かな建築の力だ。

「建築の公共」は楽しく無限だ。建築のことを考える上でどこかに付きまとう言葉だから、逆に堅苦しい定義を伴う必要もなく想像を巡らすことができる。そんな「緩い感じ」が魅力だ。堅苦しい定義自体が思考の停滞を生む、豊かな「建築的投げかけ」かもしれない。

身の回りのことを見つめ、しっかり応えること。そうした「等身大」の考えに現代の可能性を感じています。普段は設計の主体となることが少ない、子どもたちが自分で考えたり、使う人たちや運営者を巻き込んだり、建築をその社会と関連付けることで、これまでと違った連続性を持てるようになると思うからです。今月の幼稚園や保育所、こども園、また病院などはそうした試みをいち早く取り入れた建築のひとつだと思います。共に人口変動、国際化などの大きな問題や、それぞれの地域の課題をかかえてつくられています。だからこそ、より現実的なのだと思います。かつての建築のような派手さはありませんが、そこに現代の潮流が確実に現われているように思います。2020年がそうしたきっかけが広がるチャンスとなることを期待しています。(ss)

保育施設での図面の見せ方はなかなか悩みます。建築全体のプランニングや、周辺とのかかわりを見せたいと思う一方、設計者の方にお話をうかがうと、子どもが手を触れる範囲の仕上げをどうするか、などの細かな点も気になるようです。大小のスケールを横断しながら考えることが、より顕著に現れるのが子どもの建築だと改めて感じます。子どもの空間をどうつくるかということは、どう育てるかを考えることと直結しています。さまざまな試みがなされているのを見るにつけ、子どもの育つ環境を「選ぶ」ことすらままならない。待機児童問題にも思いを馳せざるを得ません。少しずつでも改善するとよいのですが……。(kn)

子どもの施設を訪れると、子どもたちになごみつつも、そのパワーに圧倒されます。京橋こども園(108頁)は、清水建設本社前に、ビルに囲まれて建っていますが、保育室の中に子どもの隠れ場所のような遊び場が随所にあり、子どもたちは自分でお気に入りの場所を見つけて遊んでいました。子どもたちが幼い時の数年間をどういう場所で過ごすことができるのか、つくり手の腕の見せどころだなと感じます。(mido)

美濃保育子育て支援棟(74頁)に取材に行きました。設計者からうかがった「美濃では、都会ではなくってしまった技術や伝統を、さらには人をいかして建築をつくることができる」という言葉が非常に印象的でした。その言葉通りこの建築は美濃にある産業、技術、伝統、人によってつくられています。地域の人が集まるお寺が運営する保育園ということもあって、ここの卒園生や周辺住人はこの保育園と非常に繋がりが強いそうです。建設にあたり、どんな子どものための空間がよいのかみんなで検討し、地域の伝統や技術を活かすワークショップを重ねて建設しました。そのようにつくられた建築、またそこに通う子どもたちは、地域の人に見守られていくのだろうと思います。この場所ならではの保育の場がつけられていました。(ta)

作品・批評募集

[作品]

作品は、建物をはじめとして、まちづくりの計画から古建築の改修まで、「建築」にかかわるすべてを対象とします。氏名・年齢・所属・連絡先を明記の上、下記の資料をe-mailでお送りください(ファイルサイズは3MBまで)。

●写真

建物の外観・内観・ディテールなど。建物の概要が分かるスナップ写真をお送りください。デジタルカメラなどの画像データは、CD-Rなどに保存してプリントアウトを同封してください。

●図面

配置・平面・立面・断面、および主要ディテール等、建物が理解できる内容のものを紙媒体でお送りください。

●建築データ

建物の所在地・主要用途・竣工年・規模・構造・主要外装仕上げ・主要内装仕上げなど。

●設計主旨

建物についての簡単な説明、敷地条件、建主からの要望、その他与えられた諸条件などを含め、建築的にどのような解決策を考え、それを実現したかについてお書きください。

投稿作品の掲載については、掲載を決定した場合のみ、こちらからご連絡します。採否のお問合せには応じかねます。また、お送りいただきました応募資料はご返却いたしませんのでご了承ください。

[宛先] 新建築社 「新建築」編集部

tel. 03-6205-4381 fax. 03-6205-4387

e-mail shinkenchiu@japan-architect.co.jp

Recommend

Competition

コンテスト・設計競技

現在募集中のコンペ

第7回NISCインバッドデザインコンテスト

インバッド・エスガード・インダッパ・ノイラックスを使用した建築物の完成写真によるコンテスト

主催 日鉄住金銅板株式会社

審査員 芦原太郎 青木淳 武田厚

登録締切 6月23日(月)

応募締切 6月30日(月)

<http://www.japan-architect.co.jp/nisc/7th/>

詳細は本誌1404 14頁参照。

第49回セントラル硝子国際建築設計競技

課題 愛されるまちのシンボル

主催 セントラル硝子株式会社

審査員 山本理顕 岡本慶一 芦原太郎 小林照雄

内藤廣 隈研吾 長瀬隆

応募締切 8月4日(月)

日本国内からの送付は当日消印有効。持込み、バイク便不可。

<http://www.cgco.co.jp/kyoug/>

詳細は本誌1401 12-13頁参照。

第41回日新工業建築設計競技

課題 アンダー・ワン・ルーフ

主催 日新工業株式会社

審査員 六鹿正治 北山恒 山梨知彦 乾久美子

長谷川豪 相澤公豊

登録締切 10月1日(水)

作品提出期間 8月25日(月) ~ 10月8日(水) 必着

送付のみ受付。持込み・バイク便は不可。

<http://www.nisshinkogyo.co.jp/>

詳細は本誌1404 12-13頁参照。

第28回建築環境デザインコンペティション

課題 植物的建築

主催 東京ガス株式会社

審査員 古谷誠章 伊香賀俊治 工藤和美 串戸城二

田中孝典 西沢立衛 野原文男 児山靖

登録締切 9月25日(木)

応募締切 10月15日(水) 16時必着

<http://kenchiku.tokyo-gas.co.jp/>

詳細は本誌1405 12頁参照。

プランテック総合計画事務所は

革新し続けるためのプロフェッショナルな人材を募集します。

PLANTEC

saiyou@plantec.co.jp

TEL 03-3237-6857

7F KIDICHO PARK BLDG. 3-6 KIDICHO CHIYODA-KU TOKYO JAPAN TEL +81-3-3237-8140 FAX +81-3-3237-6856

Innovate yourself.

坂茂建築設計

SHIGERU BAN ARCHITECTS

東京・パリ スタッフ募集

実務経験が十分ある方

〒156-0043 世田谷区松原5-2-4
Tel: 03-3324-6760

応募方法、詳細はHPをご覧ください
www.ShigeruBanArchitects.com



Architect Agency

あなたが設計するのは世界です。 Try Architectural Design of the World.

私たち C&R グループは、世界でも高く評価されている日本の建築士の方々に、日本はもとより海外でも幅広く活躍できる場をプロデュースしたいと新たに建築エージェンシー事業を開始いたしました。建築業界に精通した専任エージェンツが、海外3拠点・国内10拠点のネットワークを活かし、日本および海外の設計案件のご紹介、コンペ情報の提供、さらに転職支援をはじめ、建設会社や設計事務所への派遣など、

一級建築士としてのフィールドを広げるサポートをします。

■エントリー・お問い合わせは

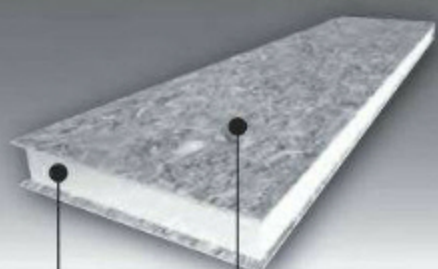
<http://www.arc-agency.jp/>

フリーコール 0800-919-0018

〒102-0083 東京都千代田区麹町2丁目10-9 C&Rグループビル 株式会社クリーク・アンド・リバー社 建築エージェンシー事業部

ダブルシールドパネル

大規模建築の屋根下地を施工効率良く実現します。



EPS
(発泡成形ポリスチレン)
幅: 1.82m以下
長さ: 6.0m以下
厚み: 4インチ (113mm)
: 6インチ (164mm)
: 8インチ (208mm)

OSB
(オリエントド・ストランド・ボード)

卓越した構造強度・優れた断熱性能・工期短縮

●断熱材 (EPS) を構造用面材 (OSB) ではさみこんだサンドイッチパネル。●指定建築材料として第37条大臣認定取得済み。●曲げ強度があり水平スパン約5mまで中間支持不要 (6インチパネルの場合)、シンプルな架工により屋根勾配を生かした豊かな空間提案が可能。●断熱材に隙間が発生しにくく、安定した断熱性能を発揮。●大型プレカットパネルで施工効率が良い。●防耐火認定対応済み。

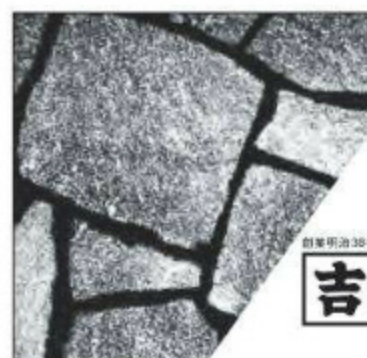


〒103-0022 東京都中央区日本橋室町3-2-8
三信室町ビル5階
TEL 03-3242-3134 担当: 三野・山口

<http://www.mhc.co.jp>

省エネルギーにて地球環境保全に貢献

三井ホーム・コンポネント



自然からの贈りもの……

鉄平石

販売・施工

藤森鉄平石株式会社

〒392-0004 長野県諏訪市諏訪1丁目13-8
TEL 0266(52)0255(代) FAX 0266(52)5579
URL <http://www.tepppei.co.jp>

広告の掲載についてのお問い合わせは下記まで

株式会社 新建築社 広告部
tel. 03-6205-4382
e-mail ad@japan-architect.co.jp

新建築 住宅特集 **ja**

ASLOC

素材の持つ美しさに魅せるアスロックだからできる表現です。



お待たせしました！ 「グリッドデザインシリーズ」 工場2色塗装、完成！

アスロックデザインパネル

新柄登場

ランビック900▲

《主な特長》

- 工場塗装 (2色・単色) 対応可能
- ナチュラル対応可能
- 新柄「ミクティル」 「ランビック900」登場

▲ミクティル

「グリッドデザインシリーズ」の特長を最も際立たせる工場2色塗装は、タイルでは表現できない規則性のある不規則な意匠が表現できます。塗料には、無機と有機をハイブリッドした「カラーセラム」を使用しています。また、表面デザインについても、従来品の「ランディル」に加え、「ミクティル」と「ランビック900」の新柄を加え、より選択肢が拡充しました。

やすらぎと安心の創造

本社 〒650-0035 神戸市中央区浪花町15番地 TEL 078-333-4111

<http://www.nozawa-kobe.co.jp>

不燃建材のリーダー
株式会社 **ノザワ**

美観と耐久性を兼ね備えたステンレス製品

STAINLESS

— ステンレス製便器・洗面器 —

<p>ステンレス製ペット便器 PT-0002型</p>	<p>上給水型 No. K-2001</p>	<p>水洗式洋式大便秘器 YD-6005型DX</p>	<p>コンパクト型小便秘器 No. 8817</p>
<p>水洗式洋式大便秘器 No. YD-6005型</p>	<p>身障者用対応洗面器 C1102型</p>		

ステンレス製大便秘器は陶器と同じ流線型を持っているため水の流れが良く、もしストラップでつまりが生じても点検口から異物を簡単に取り出せます。しかも、1.5mmのステンレス鋼を使用、ハンマーで叩いても割れない強さと美しさで永くご使用頂けます。



製造・発売元

共進金属工業株式会社

本社・工場/〒547-0006 大阪市平野区加美正覚寺4丁目6番21号
TEL (06) 6791-5516 (代) FAX (06) 6791-0100
URL: <http://www.kyosin-kk.co.jp>

新建築 2014年7月別冊

2014年6月18日発売

定価 1,000円 (本体 926円)

A5判 カラー 144頁

団地の ゆるさが 都市を 変える。

発行：株式会社新建築社
〒100-6017
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング 17 階
tel. 03-6205-4380 (代表)
fax. 03-6205-4387
e-mail business@japan-architect.co.jp
<http://www.japan-architect.co.jp>

団地再生

にとどまらず、
ま ち

まさに 都市の再生 と言ってよい

「プロジェクトのコンセプトが曖昧だと0点！」
から始まった「ルネッサンスin洋光台」の挑戦
「ゆるくてかわいくてさりげない団地」

隈 研 吾
佐藤可士和
上野千鶴子
大月敏雄
広井良典
信時正人
地域の活性化の
核として「団地再生」
を考える

RENAISSANCE in
洋光台

その開放感が、都市の一日を変えていく。



軽快な意匠と、明快な機能を両立する

SYSTEMA

あふれる透明感と開放感を実現しながらも、高い機能性をもった「SYSTEMA」。
スリムなフレームや隠しかまちにより生み出される、風景と一体化した空間。
均整のとれたその軽快な意匠の裏には、自然換気や安全性など、
室内環境をより快適にするための明快な機能がしっかりと備わっています。
「SYSTEMA」は、これからのビル建築を先取りし、進化しつづけます。

Window

SYSTEMA 310
SYSTEMA 710
SYSTEMA 31 NEW

Entrance

SYSTEMA 510e
SYSTEMA 520e

Curtainwall

SYSTEMA 920lc
SYSTEMA 921lc
SYSTEMA 922lc

YKK AP株式会社

<http://www.ykkap.co.jp/search-b/>

YKK
AP

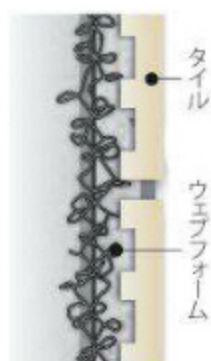
タイル建築の創造性を助け、安全で快適な価値ある暮らしを提供します。

KIKUSUI
TILE
STYLE



【粘り勝ち】

- ① 繊維シートがモルタルと絡み、粘る力で剥落を防ぐ。
- ② 気候変化、荷重、振動など、外部環境から躯体を守る。
- ③ 安全性の飛躍的な向上により、タイル建築の可能性が広がる。



タイルの剥落を防止する「ウェブフォーム工法」。工期も短縮。

「ウェブフォーム工法」は型枠に立体編目繊維シートを貼付けコンクリートを打設することで、毛羽立った繊維シートがモルタル面と連結しタイルの剥落を防止します。また、下地調整の工程が省けるため工期が短縮でき、型枠の転用回数が増やせるので廃棄物削減にもなります。

〈効果を発揮する実用例〉

- 大型タイルの施工
- 高層建築(100m超)のタイル張り
- 工期が短い建築物
- 高圧水洗が難しい建築物
- 振動が絶えない場所での建築物

kikusui

菊水化学工業株式会社 愛知県名古屋市中区丸の内3丁目21番25号 清風ビル TEL052-300-2222(代表)

<http://www.kikusui-chem.co.jp/>

